
新約FateZero

plan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新約FateZero

【Nコード】

N3208T

【作者名】

plan

【あらすじ】

Fate/Zero の再構成SS。

ドラマのためなら原作を殺すのがFate/Zeroのローガン。だけど、ドラマよりも原作との繋がりを優先した二次創作があってもいいじゃないかということ。

無慈悲な王のセイバー。機械と称される切嗣。五次の性格のギル。橙子さんが語った魔術師像に近い時臣。そして、勘違いを多用しない言峰を書きたい。それだけで書くSSです。

処女作のため、誤字脱字、間違った用法などが多く、急な加筆修

正を加えることが多々ありますが、内容に影響はありません。多分。

プロローグ 一日目・夜 - 英霊召喚 -

中心を大河に両断された冬木市は、いつもと変わらぬ闇の中、何一つとして不自然な様相も見せず、ただ月あかりに照らされ続けていた。

見上げれば、空には夜景に負けじと輝く星の数々。

二月に入ると言うにも関わらず、冬木の街は秋の中頃ほどの気候を保っていた。寒くなる時はそうとうに冷え込むのだが、普段の冬木市は総じて温暖であった。

極東の片田舎、地方都市にすぎないその街が、一部の人種にとっては重要な意味を持つことを知る者は少なかった。

その『一部の人種』が何を行おうとも、街の住民には直接関係があるわけではない。住民たちは何ら異変を感じることもなく、普段と変わらない平穏な日常を謳歌していた。

例えば、この日に限って行方不明者の数が多かったとか。

例えば、そんな島国になど訪れないはずの者たちが、怪しげな儀式を行っていたとか。

例えば、人知れず魑魅魍魎が蠢き、街中を駆けずり回っていたのだとか。

仮にそんな非日常が存在したのだとしても、多くの人間がそれを知ることなく一日を過ごしたのなら、それは確かな平常であったのだ。

冬木は大橋を挟んで、西が開発途上の新都、東はどこか時の流れに忘れ去られた感のある町、深山町に分けられる。

時刻は午前二時。

若者溢れる新都の喧騒から離れ、深山町は夜の漆黒と静寂に支配されつつあった。

深山町の丘の上に建つその武家屋敷は、つい先日まで無人の屋敷だった。

時代の節目をまたいでいると思しい、古色蒼然たる曰くありげな木造の家屋。冬木の街を俯瞰できる高所に位置しながら、周囲の民家でそれも適わないその物件にわざわざ移住する者もなく、主なき庭は手入れもされず荒れ放題だった。

今宵、なにかが違ったのだとしたら、この武家屋敷の中だろう。

住み手もないまま、長期にわたって放置されていたその屋敷はしかし、いつの間にかやらの人の気配を漂わせていた。

魔を扱う者が見たのなら、今夜は特にその周囲の魔素が濃いことに気がついたはずだ。

武家屋敷の庭の片隅には古びた土蔵が存在する。もう何年も使用していないのであるうその姿は、歴史を感じさせる屋敷を、さらに古めかしく思わせた。

土蔵の中には男が一人。年季の入ったスーツと古びたコートに身を包んだ、二十代後半から三十代前半といった風体。

男はひたすら何かを地面に書き記していた。

一見すると記号を組み合わせた図形のように思えるソレは、俗に魔法陣と呼ばれるものだ。そんなものを必要とするのは、妄想をこじらせ過ぎた奇人か、未だ虚構と現実の区別もつかない幼い子供か。

あるいは物語に登場するような魔法使いか。

そう、彼は魔の技を用いて世界の真理に肉薄する者。この冬木と
いう土地の価値を、正しく理解できる人種。

魔術師。

それが男の 衛宮切嗣の、真の姿であった。

やがて作業が完了したのか、彼は石畳の床に書き終えた魔法陣の
出来を確認する。

男に達成感が満たされたような様子もなかった。暗がりの中、男
は冬の寒さを気にすることもなく、なにを懸想しているのか、男は
自らが書き記したその陣の前にしばらくたたずんでいた。

彼という存在は、まるで風に揺られる道端の草のようであった。

不意に男は魔法陣に手をかざす。

それに呼応したのか、水銀で描かれた魔法陣は、かがり火のよう
に鈍く輝き始める。

衛宮切嗣は、今まさに魔術まじゅつを執り行おうとしていた。

「 告げる。汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に」

男が朗々と唱える言葉は呪いだった。

魔術という、一つの現象を形成するための記号でしかない言葉の
羅列は、しかし確かに摩耗しかけた男の心にかつての火を点す呪い
だった。

言葉に反応するかのように、魔法陣が輝きを増す。

強く、激しく。それはまるで踊る様に。男の言葉と共に、徐々に
光が力を増していく。

男スターが発する詠唱は、真の奇跡を成すべき儀式の一端。選ばれし魔マ

術師たちにもみ許された魔術だった。

それは過去との契約。それは未来を賭けた血の誓い。魂を代価にカードを引き、手にした剣に己が命運を預ける、戦いの前奏。

あらかじめ傷をつけておいた掌から、赤い滴が落ちる。一滴の血液は、それ自体が魔力の溶けた溶液だ。

たった一滴の赤い水。それが水銀で描かれた魔法陣のカタチに沿うように広がり、彼が求めた術式を形作る。まるで蠢くように、赤い蛇は円を描きだす。

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」
声は時空の彼方に向けられたモノ。暗くなる視界を気に留めることはない。

大気より取り込んだ魔力に蹂躪される彼の肉体は、人であるための機能を忘れ、幽体と物質を繋ぐための回路となる。

英霊の召喚。それが彼が今行おうとしている神秘の答えであった。彼は己が身を 正確には、己が保持する聖遺物を媒介に、かつて偉業を成し遂げた英雄を現世に呼び出そうとしていた。

男の額から流れる汗は、人ならざる術を用いるがゆえのもの。世界に働きかけ、世界と同化する、魔術師ならではの代償だ。その反動は決して小さくない。額に角が生えるような感覚と、背に翼が生えるような錯覚を、肌^{いたみ}に鱗が生えるかのような快楽を、彼は今体験している。

男は雇い主から無敵と見込まれた魔術師だった。その実力を発揮するため、可能な限りで最強の手駒を彼は今呼び出そうとしていた。引くべきカードは剣。この儀式において、最優と称される従者^{サブオーダー}。

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者」

逃れようのない苦痛の一切を無視して詠唱を続ける。

その皮肉な文言に男はなにを思うのか。その響きはまるで、男の持つ歪みと矛盾を表しているかのようだ。

彼は悪となることで、中立を保つ。

中庸となり、秩序を守る者ではない。善となり、混沌を作る者でもない。

ただ、全ての人々に救いをもたらさんがために。

それこそが彼の歪み。彼がこの儀式に至った理由。

魔法陣が強く発光する。待ち望んだナニカを祝福するため、かつてないほどの光を見せる。

最後の言霊が終る。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ

詞を結ぶと同時に、ついに魔法陣はこの世ならざる場所と繋がり、^{コトバ}男は奇跡に至る。

術者の血を吸った呪いは、まるで生命を得たかのように歓喜の咆哮を上げた。

魔法陣を中心に、周囲の魔力が集められ、収束する魔力が人の形を作りだす。目も開けられぬほどの威風と閃光を纏って、伝説の幻影がそこに召喚される。

これこそが過去の英雄の再現か。男が衝撃を受けるのも束の間、魔力の収束が終わり、そこには一人の少女が立っていた。

伝説に語り継がれる英雄が、魔術師の前に示現した。

青い装束に身を包んだ、白銀の鎧の女剣士。見る者を圧倒する威圧感。その姿は少女でしかないはずなのに、秘めた力はあらゆる者を上回っていた。

男は一目で直感する。これこそが最優と称されるサーヴァントの姿であることを。

「サーヴァント・セイバー。召喚に従い参上した」

土蔵の中に響きわたる力強いその発声は、それだけで高い魔力が込められていることがわかる。

その佇まいは、どこか王侯貴族の気品を感じさせた。

いや、声だけではない。ただそこに存在しているというだけで、強力な魔力を感じ取れる。切嗣は少女のステータスを正確に読みとっていた。もし彼女が全ての力を解放すれば、暴風を思わせる力を見せることだろう。

霊長を越えた霊長、かつては人の身でありながら人を越えた者。

人々の夢のカタチとして精霊へと昇華せし英雄たち。その中でとりわけ根強くその伝説を残した者。

それこそが目の前に立つ少女の正体である。

この時、衛宮切嗣は自身が最高のカードを引いたことを確信した。魔術師はこの戦いを勝ち抜くための、強力な道具を手に入れたのだ。

「問おう。貴方が私のマスターか」

その問いに、切嗣は首肯することで答える。

これは確認ではなく契約。

ラインは確実に繋がっていた。今更確かめることなど何もない。

彼らに必要なだったのは結びつきをより強くするための誓い。

綺麗ごとの口約束ではない。魔術師にとって契約は、決して破却すること適わぬ鎖であり、七人の騎士に選ばれた者としては、背くことあたわぬ絶対の約定である。

自らの心に定めたソレは戦いの根幹となり、自分自身を裏切らぬ限り、己を奮い立たせる力となる。

「セイバーの名に懸け、誓いを受ける」

青き騎士は主に応える。その言霊に想いを乗せて。

「これより我が剣は貴方と共にあり、我が運命は貴方と共にある。

ここに、契約は完了した」

そう、契約は完了した。

暗闇の中から全てが始まったのだ。

これから先、なにがあるかと、彼と彼女は必ず勝利を掴むだろう。

この召喚をもって運命の夜は決した。

魔術師は無敵のまま、その従者は最強のまま、此度の聖杯戦争は幕を閉じる。

されど。

その終わりが、彼らの望んだ結末となるかは、また別の話。

それは奇跡を求める物語。

とある少年の願いが始まる以前の物語。

真に語られるべき運命の前座にすぎない前哨戦。

定められた終幕を。絶望に至る結末を。

挫折も、後悔も、全ては本当の始まりのために。

だから、神域の奇跡に臨む者よ。

どうかその絶望に、幸多からんことを。

プロローグ 一日目・夜 - 英霊召喚 - (後書き)

マシンな切嗣、冷酷なセイバー。どうあがいたって、俺たちはそんな二人を見ることはできねえ。

だったら、自分で書いて満足するしかないじゃないか……！ という発想。

みなさんFate/stay nightをやったことがある前提で書いてますので、とりあえず聖杯戦争の説明とかサーヴァントの説明とか、そういうのは飛ばします。

処女作ですのでドラマはあまり期待しないでください。

衛宮切嗣。

いかなる組織にも所属しないフリーランスの魔術師。

ある時を境に公の舞台から姿を消すまで、その名を知らない魔術師はほとんどいなかった。

切嗣は冷酷無情の暗殺者として名を馳せた魔術師であり、戦場を荒らす冷酷非情な傭兵であった。

成し遂げた仕事は数知れない。道を外した同胞を狙うこともあった。彼の手にかけた者は、両手の指で数えることができなほどだ。

一度誰かを標的と定めれば、容赦などすることがない。

彼の行動に慈悲は存在しなかった。周りの犠牲など顧みず、敵の家族を人質にし、無関係な命を囮に使用する。目的のためなら手段を選ばない彼の行為は、常人の感覚からすればまさに“悪”と呼ばれるものである。

加えて、男は自分の命にまるで無頓着だった。彼が暗殺を実行する際、自分自身を利用したことは一度や二度ではない。自ら囮となることもあったし、自爆テロじみた殺しも何度があった。

己の命を一切厭わない。せいぜい目的を果たす手段の一つとしか見ていない。そんな同胞狩りを、彼は幾度となく続けたのだ。

単純に結果だけを見るなら 彼は最も効率のよい方法を選んだだけ。犠牲も過程も、全てがたった一人の「標的」を討ち果たすためだけのものだった。

魔術師としてそれは正しい。自身の命すら使い捨ての道具と割り切り、目指すモノのために効率的な手段を取るその在り方は、まさに魔術師そのものだ。

だがこの男が目指す“何か”はいったいなんだったのか。自分を犠牲にしてもやり遂げる、命がけの行為のその報酬いみはなんなのか、誰にもわからなかった。

金銭目的にしては酷薄すぎる。魔術を昇華させる意図も見えない。研鑽目的にしては軽率すぎる。真理を探究する姿勢にも思えない。命をないがしろにするだけの理由が、彼には見当たらなかったのだ。

彼は殺しに貴賤を求めず、報酬や難易度に差別もしなかった。安価であろうが危険な仕事だろうが、おかまいなしだった。

この異常な魔人を恐れた者は決して少なくない。彼は魔術師であるがゆえに魔術師の弱点をよく知り、それを利用することで幾人もの同業者を屠った。

冷酷にして命知らずな、正体不明の魔術師マジック殺し。意味するところは感情を持たない殺人機械。それが衛宮切嗣に与えられた評価であり蔑称であり、同時に最大の畏怖であった。

切嗣の心は理解されなかった。
切嗣自身、他人の理解を求めなかった。
それゆえに彼は誰にも愛されることがなかった。

男がそのような行動をとる真相は、誰しもが一度は夢みる正義のためだった。

誰も知らなかったことだが、彼は少年のような心の持ち主だった。正義を信じ、理想に燃える男だった。

誰よりも現実主義者でありながら、どんな人間よりも理想論者。リアリスト
それが非情の暗殺者の正体だった。ロマンチスト

少しでも彼を知る者がそれを聞いたなら笑い飛ばしたことだろう。“そんなはずはない。あの男は救いを求める手さえ撥ね退けた。地を這う虫けらをなんの関心もなく踏みつぶせるのと同じように、命乞いの声にも興味なく、殺すべき存在に刃を突き立てた。そのような男が理想を夢みるロマンチストであるはずがない”と。

そう、彼は多くの人間を切り捨てた。多くの願いを踏みにじった。たった一人の人間を殺すために、何十人も犠牲を容認した。

衛宮切嗣という男は、殺し屋モドキの大量殺人者である。
しかし、それこそが彼が護るべき“正義”だったのだ。

どんな幸福にも代価となる犠牲があることを、どんな少年も大人になるまでに弁える。だから、より多く確実に世界から嘆きの声を減らそうと思うなら、取るべき道は一つだけ。切嗣は、その道を歩むことを心に誓ったのだ。

それはつまり、多数を生かすため少数を殺し、死にゆく者を少し

でも減らそうとする考え方。

犠牲を最小限に抑えるため最低限の生贄を用意する。誰かが涙を流すなら、その悲哀が広がる前に手段を選ばず速やかに原因を排除する。

それが彼の選んだ正義であり、彼の理想を実現させうる唯一の方法だった。

切嗣は正義の体現者たるべく、悪を成す者となったのだ。

命に差異を見出すことなく、性別も人種も、年齢さえ問うことはなく、命の量を量ることでした。彼の正義を問うことはできなかった。

愛する者を守りたい。それは人類誰もが共通して持っている願望だ。

家族、妻子、親友、恋人、自分自身。愛の深い人物ならば、親族関係にすらない、単なる隣人さえも。

切嗣は愛する誰かを守るかのように、全ての人々を守ろうとした。

切嗣はきつと、

自らを懸けて誰か一人を愛するように、

自らを懸けて全ての人間を愛したのだ。

その葛藤がいかに愚かな傲慢であるかは語るまでもない。どれだけ巧く犠牲を抑えようと、救われるのは非業など知り知らぬ第三者。本当に報われるべき者たちは、天に呪いの言葉を吐き捨て散りゆくのみ。

人を救うことを願う者は救いを望む声を見捨てられない。なぜなら、

被害者はいつだって無関係なその他大勢だ。

本当に人々を想う心があるのなら、そのような手段を取ることにはできない。正義を志す者が、救われるべき存在を救わないなど、そんな在り方は破綻しているのだ。

その方法で多くの命を救ってきた。現実は無情で、目の前の誰かを救うことなどできないから、そんな役目を選びとった。心近しい誰かを救うためでもなく、守るべき責務を守るでもなく、顔を見たこともない、ただ大勢の人々の幸福を、知らない誰かを犠牲にすることで護り抜いた。

友情をその手で穢したことがあった。

恋を語る誰かの生を、その手で散らせたこともあった。

愛おしい命ひとつと、見も知らぬ他人の無数の命を前にしても、彼が過つことはない。誰かを愛し、それでも“命”が等価であるなら、平等に命を尊び、平等に諦める。

その果てに切嗣の心の渇きが満たされたことは、ただの一度でもあったのだろうか。

誰もが幸福であってほしいという願いに自分自身は含まれない。初めから度外視された存在は、救われるべき対象に入っていないかった。

大切な人、護るべき者、愛したはずの女性をも、彼は捨てなければならなかった。

愛する人々の笑顔が見たいと願った男は、愛する人々の笑顔を奪い取ることでは、それを叶えることができなかった。

切嗣の行いは自ら願いの否定だ。彼が守り続けたのは、己が掲げる正義のみ。

自身の理想を守るために、自身の情念を殺し続けるなど、そんな生き方に一体どれほどの価値がある。

それでは誰も救えない。否、もとより誰を救うべきかも定まらない。

その手で世界中遍く人々を救うことができたとしても、切嗣ひとりだけは救われることはない。そう初めから定められているのと同じこと。

全てを救うなど誰にもできない。救われぬ命は必ず存在し、必ずどこかで矛盾と破綻が発生する。ならば自分が傷ついても構わないと願った。自分を犠牲とすることで皆が笑えるなら、それでもいいのだと、彼は意地を張り続けた。

その矛盾　　その間違いこそが、男の歪みであった。

男は幾度となく理想に裏切られてきた。

だが絶望などしなかった。いや、絶望に屈することはしなかった。……人の心を麻痺させることで、なにもかもを投げ出したくなるほどの苦悩を耐えたのだ。

彼は矛盾を飲み込み込みながら歩き続けた。苦しみを抱えながら、前に進んだ。

不幸なのは彼が人間であったこと。

笑顔を尊び涙を嫌う彼は、人間らしい人間だったのに、そんな当たり前を捨て去り、人として最も大切なものを犠牲とすることで、鋼の心を手に入れた。人の心を不要と見なすことが、千心万苦に耐える唯一の方法であった。

それもとうに摩耗した。人の器に鉄の心が収まらない。生身の両

足では鉄の重みに耐えきれない。彼は誰かを守るとき、その代償に誰かを見捨て、自分を殺し続ける宿業を背負い続けた。そのつど彼は自身の愚かさを再確認しなければならなかった。

もはや強迫観念にも似た義務感も手伝っていたのかも知れない。かつての誓いに、心が囚われていただけかもしれない。けれど、その行為が無価値であっても、そこにはなにか意味があつてほしいと憂い、前のめりに倒れるために足を動かした。

涙を流してしまえば楽になる。だが一度でも感情が堰を切つてしまえば、溢れ出る哀傷を抑える術を永遠に失うから、泣くことだけはしなかった。

鉄の心の底に蟠るサビ。

矛盾と相対するたびにすり減つていく魂。
命を顧みぬ行為は、疲労という泥を肉体に集積させる。

それでも、容赦なく足を止めようとする全てを封殺した。
胸を穿つ全てを振り切つて、切嗣は夢見たモノを追い求めた。
絶望に嘆く心も捨て、希望を感じる心も捨て、ただひたすらに走り続けた。

例え叶わずとも辿りつけずとも、立ち止まらなければいつかソコに近づくことができると思つて信じて。

切嗣が願うものは、願ったものはただ一つ。
皆が笑つて過ごせる世界。

彼はただ、それだけを。

もつじき男は一つの答えに到達する。

運命の時は近づいていた。彼は再び銃を手に、己の正義と対面することになる。

聖杯戦争。

あらゆる願いを叶えるとされる万能の釜、聖杯の所有者を決める大儀式。

およそ2000年の月日を経て、なお現代に伝わる魔術師たちの執念。

それは選ばれた魔術師による争奪戦。七人の魔術師が七つの剣をそれぞれ手に取り競い合う。

衛宮切嗣もまた、選ばれし者の一人として参加した。

何時ものように愛を捨て、家族を捨て、大切なハズのナニカをすべて振りきって、儀式の地へと赴いた。人であることをやめた男が、人並みの幸福を大切にするはずはなかった。

永劫の罪人たる彼にソレは許されない。

それでも、切嗣は決して怯まない。

引き返す道などありはしない。

死にゆくその時まで、男は己の信念を貫き通す。

00 幕間 - 正義の味方 - (後書き)

切嗣の説明回。原作言峰が言う通りの鉄の心、機械に徹すること
で最強であり続けた男になるようにします。

基本的に「人間的感情」や「愛」は不要と切り捨てた男です。
愛を知って弱くなったとか、正義の味方としては息子より格下と
かのヒューマンドラマは期待しないでください。

設定と謝罪

ちょっと補足説明を入れます。

この作品はFate/stay night、Fate/Zero両作品のネタバレを含みます。

オリキャラなどおらず、登場キャラクタークターはそのままですが、原作組みの性格は、五次での説明を基準にしますんで、Zeroとは性格が異なります。私オリジナルの第四次聖杯戦争だと思ってくれたほうがいいかもしれません。

Zeroで魅力的だったキャラクターの性格を変えるなんて許せない！とおっしゃる方は見ないほうが無難です。

四次からのキャラの大半は性格そのままですが、それだとZeroの焼き直しにしかないなので、そういうキャラクターたちは出番が極端に少なくなります。

基本的に五次の要素優先ですが、アイリスフィールの存在や、鶴野の負傷など、Zeroで増えた要素なども絡める予定です。Zeroをなぞる話になっていくため、非常にこじつけ臭く無茶なストーリー展開になると思います。

無理矢理な理屈が出てきてもZeroとの差別化のためなんです。……そういうことにしといて。

つまらなかつたり違和感あつたとしても、所詮はド素人の趣味作

品だと、生ぬるい目でスルーしてやってください。

更新は遅いと思われませんが、最低でも完結はさせたいです。

あと文章が恐ろしくクドい上に、陰湿なストーリーになることは間違いないので、そういうのが苦手な方はここでやめることをオススメします。少なくとも楽しい話にはならないと思われま

以下キャラ設定。

衛宮切嗣

いかなる葛藤にも動じない鉄の意志。

必要なことだけを考え、戦場では舞弥を完全にコマとして扱い、家族も切り捨ててきた男。

妻子に対して愛はあるものの、自分の願いと天秤にかけて、現在進行形で家族を切り捨てています。本作切嗣は家族を想い返すシーンはほとんどないと思つて下さい。

基本的には死に怯えたり泣いたりすることは無いです。五次での人物評が過剰評価にはならないよう、Stay/night本編中に語られた切嗣像になるべく近づけますので、どっちかと言うとエミヤに近いかもしれません。

言峰の「切嗣とセイバーのコンビは強力だった」という言葉を、神父の勘違いではなく真実の評価にしたいところ。彼の最強さが、誇りにこだわる魔術師の馬鹿さ加減に頼ったモノ、ということは無

いようにしてあげたい。

自分が傷つこうと、皆が笑えればそれでいいと思っている男なので、他人に文句言うことはあんまりありません。
己の願いは愚者の夢でしかないと知ってはいるものの、諦めることができずにいる男です。

聖杯戦争を過ごしていく中、ある人物への同族嫌悪から、たまに感情を見せる感じに書きたいと思ってます。

言峰綺礼

曰く、Zeroの言峰は過去の記憶 特に嫁さんの死を捻じ曲げて語っておられたそうですが、本作の言峰は、妻の死を無価値にしてまで自らの醜悪さを否定してたZeroとは異なり、己の歪みを認めてはいるが受け入れられずにいる男となります。

遠坂時臣

目的を最後まで遂行しようとする強い意思力を持った男。

本作時臣は貴族主義者ではあるものの、貴族の価値観と魔術師の価値観をごっちゃにすることはないです。機械オンチなため、自ら手を出すことは非常に少ないが、科学技術を軽視することなく利用します。

基本的な性格は変わりませんが、橙子さんや凜、死徒になった魔術師などの言葉を基準に、私が思う「きのこ世界の標準的魔術師」を描きたいと思います。なので娘の幸福は願っているものの、雁夜と相対した時の対応がちょっと変わります。

凜のように、魔術とか別に大したもんじゃないと理解した上で魔術師続けてる男です。

セイバー

Zeroとの相違がおそらく一番多くなるキャラです。

具体的に言いますと、

- ・ヒーロー的な王様とかではない。
 - ・王としての正しさの基準が「戦場の華であること」ではなく、「少数を切り捨てても多数を生かすこと」
 - ・より王の時代に近い四次なので、やたらと感情に素直ということはなく、原作よりも人間味を出さないようにする。
 - ・猪突猛進なところはあるが、それは「自分が最強だ」と思い込んでいるためではなく、「自分の身がどうなるかと勝利を掴めればいい」と考えているため。
 - ・当初の設定どおり、イスカンダルとはライバルとなる。
 - ・聖杯への願いは、自分の正しさに固執するモノでなく、自らを勘定に入れられない歪みから。
 - ・デートなんて知りません。
- などなど、色々な差異が出てくると思われます。

イメージとしてはstay/night本編の黒セイバーに近い

かと。人間味が減りますが、その上で挫折が書けたらいいなと思っ
てます。

「原作をやり直してセイバーが救われるところを見たくなくなるような
物語」を目指し、「士郎のご飯を美味しく食べさせたくなくなるセイバ
ー」を描いたというZeroとは大幅に掛け離れます。

ギルガメッシュ

みんな大好き英雄王。

私が受けた五次ギルガメッシュの印象そのままです。出来
得る限り私の理想は盛り込まず、かつこよく書いてあげたい。

あとイスカンドルの王道を認めるようなことはまずないと思われ
ます。基本的に王さまたちは互いを認めても王道は全否定です。

バーサーカー

漆黒の狂戦士。いつたい正体は何者なんだ……！

無窮の武錬という心技体合一のスキルを持っているので、心が弱
いキャラにはせず、心が強いキャラとなる予定です。そのため、聖
杯戦争に参加した理由も変化します。でも彼の起源である「傍迷惑」
は変わりません。今私が考えている彼の参加理由が、非常に傍迷惑

なモノですから。

一番オリキャラ臭いことになることが予想されるキャラです。

あとはランサーの忠誠心が微妙に上がったり、ウェイバーのイスカンドルへの対応が微妙に変わったたりするかもしれない。

一応理由はありますが、私の理解力不足のせいだと思ってください。

最後に謝罪をば。

「九割の人に非難されても、一割の支持が得られればいいや」くらいのノリで続けるつもりですが、小心者かつ打たれ弱い私のチキンハートは、ちょっと批判されただけで折れる可能性があるので、感想などを見ない場合がほとんどだと思われまます。

感想を開こうとすると動機が激しくなるガラスの作者なんで、そのあたり、広いお心で許して下さいをお願いします。

聖杯戦争とは聖杯に選ばれし七人の魔術師による争奪戦。冬木の街ですでに三度にわたって行われた、『聖杯』を得るための儀式である。

かつて神の子の血を受けた杯の贗作。あらゆる願いを叶える力を持った最高位の魔術礼装。すべての者を満たすことが可能な願望機。それこそが、この戦争で勝者が手にする賞与だった。

聖杯は自らを得るに相応しい者を選定する。その力を参加者に分け与え、七人の魔術師にそれぞれ過去の英雄を使い魔として宛てがい、マスターたちはソレを使役し競い合う。

勝者の使い魔を除く、全ての英霊がこの世から消えたとき、聖杯は自身を手にするに相応しき持ち主を得るのだ。

そう、これは儀式の名を借りた文字通りの殺し合い。戦争の名を冠する以上、戦いは避け得ない定めである。敗者に未来など存在しない。命を賭した戦いならば敗者の末路は決まっている。

ゆえに参加者は自らの命など、とくに思惑の外にある。勝利を掴めるならば命などいらぬ。栄誉のためならば体などいらぬ。既に一度死を迎えた英雄たちは生に執着せず、ただ己が未練に固執し、魔道を極めんとする異常者^{マスター}たちは、自分の後継などいくらでもいると達観している。

大なり小なり、そういつた気概を持つのが魔術師であり、英雄である。そんな彼らの在り方を、今宵、如実に顕す者たちがいた。

選ばれしマスターが剣の英霊を召喚したその時、生い茂る木の葉の中から土蔵を見つめる一対の視線があった。

闇に浮かぶ白き髑髏の面。視線は闇に溶け込むように黒く、その存在をまるで感じさせない。細身ながらに筋肉質なその体。黒い肌は、墨を全身に浸したような、という形容詞が似合うだろう。

さしずめ悪魔か死神か。幽鬼の如き魔を想わせる異形。その風貌は明らかに常軌を逸している。

まさに影。そう呼ぶになんの疑問も抱かせぬその男は、しかし確かにそこに存在していた。

アサシンのサーヴァント 此度の聖杯戦争において“暗殺者”の役割を与えられた英霊である。

気配を消しつつも霊体化を解いた彼は、ひときわ高い木の陰に身を潜め、その武家屋敷を観察していた。実体であってもその黒い姿は、夜の闇に溶け込んでいた。

彼はマスターから斥候の任を負わされた使い魔である。そもアサシンのサーヴァントは戦闘に秀でたクラスではない。ある特定の英霊ハサン・サッパの称号を襲名したいずれか一人が召喚されるこのクラスは、文字通りの暗殺者なのだ。

サーヴァントは互いにサーヴァントの気配を察知する能力を持つ

ているため、サーヴァントを偵察に遣うのはあまり効果的な方法とは言えない。

だが隠密行動に優れるアサシンは別だった。彼らはクラス別のスキルとして、魔力と気配を殺すことが可能な『気配遮断』の能力を有していた。

気配を完全に断ってしまえば、どんな優れた英霊も彼らを感知することはできない。例え同じ部屋の中にいようと、アサシンが攻撃に移らない限り、誰も彼らを見つけることは不可能なのだ。

この場にアサシンが居合わせたのは偶然であった。彼はマスターの意向に従い、いつものように霊脈に沿って冬木の街に駆けまわっていた。アサシンは偵察と探索のため、斥候として各所を渡り歩いていたサーヴァントだった。

しかし町を歩き回ったところで、そう簡単に敵マスターが見つかるはずもない。なんらかの罠を使っていれば、誘いに乗ったマスターかサーヴァントが釣れたかもしれない。だが彼らアサシンの利点を考えるなら、罠だろうとなんだろうと、おいそれと姿を晒すわけにも、痕跡を残すわけにもいかなかった。

恐らくは彼のマスターも、そのことを解かっていたのだろう。たしかにアサシンに偵察を命じたが、その命令も「敵を見つけ次第報告しろ」「発見した敵マスターを監視し続ける」という、おざなりなものだ。さして期待したようでもなく、さほど労力を割いていたようには思えない。

この時点でアサシンの陣営は、既に三人の敵マスターの所在を確認していたのだから、これ以上はそうたやすくマスターが見つかるはずもないと思えば、期待が薄いのも当然と言えば当然ではあった。

アサシンは僅かなり魔術の痕跡か、斥候の使い魔でも見つければそれでよいと思っていた。聖杯戦争さなかのタイミングで魔術を使う者がいるとすれば、聖杯戦争と無関係ではあるまい。姿を隠すことに感けて、時間を徒に浪費し、聖杯召喚の期を逃す愚かなマスターがいるはずもないのだから、なんらかの動きを見せるマスターが必ずいることは間違いない、と。

と言うよりも、そのくらいしかマスター探しの目安がなかった。マスター同士、正体を判別することができわけではなく、捜すとしたらお互いの魔力を探る以外にない。

高レベルの魔術師ならば、魔力殺しの礼装を有する者もあり、気配を消しさる魔術を心得ている者もいる。小さいとはいえ、一都市の広さの中、あてもなく捜し歩いたところで、魔術師が簡単に見つけられるはずもないのだ。

そう痕跡を残すような軽率なマスターがいるはずもないことはアサシンもわかっていた。これまでに見つかった敵マスターの中にも、たしかに素人同然の魔術師はいたが、少なくとも彼らは魔術の隠匿を心掛けていた。

まさか、まさか、こつも簡単に敵マスターを見つけることができるとは、夢にも思っていなかった。

その召喚はあまりにも無防備なモノだった。

いつもの巡回ルートを通過する際、たまたま不自然な魔力の流れを感じたアサシンは、その中心点である屋敷をしばらく監視することにした。

中を詳しく探索しなかったのは用心してのことである。万が一ここがマスターの根城だった場合、霊体化を解除するトラップが仕掛けられていないとも限らないからだ。

……よもやそんな軽い警戒心が功を奏しようとは。

しばらくすると、アサシンは土蔵でサーヴァントの召喚が行われたことを感知した。

それ自体、驚くべきことではあった。しかし、ことは更にアサシンの予想を上回ることとなる。

あろうことが、マスターらしい男とサーヴァントと思しき女騎士が、連れ立って出てきたではないか。

土蔵から出てきた二人は、辺りを警戒するでもなく屋敷の中に入っていた。

これにはアサシンも呆れを通り越して感心する他になかった。よほどの自信家なのか、はたまた好奇に駆られ不用意に聖杯戦争に参加した愚者か。どちらにせよこうまで派手に英霊を召喚するマスターがいようとは。

敵の女騎士がどれほどのものかはわからない。風体からセイバーかランサーと推測できるが、既にランサーは確認していたため、恐らくはセイバーのクラスに該当する英霊だろう。

サーヴァント中最強とされるそのクラスは、全能力が高いものしか当てはまらず、高い対魔力を有する『三騎士』に属するサーヴァントでもある。

キャスターと最弱の座を分けるアサシンでは、太刀打ちできないことは自明の理。だが、そのマスターは彼が見る限りマヌケでしか

ない。ならばマスターは容易く殺すことができる。三騎士の一角を
使役するマスターを排除できれば、今後の戦いが有利になる。

そう判断したアサシンは、主にマスター発見の報告をすると共に、
敵の暗殺を提案することにした。

敵がいかに強力な戦士であろうと、主が弱点なら、隙を狙うのは
暗殺者の常道だ。

セイバーのマスターを発見したが、殺すことは容易と思われる。
徒に慎重となる必要はない。そう、アサシンからの進言を受けたマ
スターは、アツサリとマスター暗殺に同意した。

アサシン 襲名したハサン以外の名をザイドという は自
信家であった。状況の有利も手伝ってか、今宵の自分には万に一つ
の失敗もありえぬと信じ切っていた。

敵サーヴァントを抑えなければマスターの暗殺など無謀だ。敵マ
スターを殺すことができたところで、このアサシンは騎士に斬られ
死ぬことになる。

アサシンも彼の主も、そのことをもちろん知っている。だと言っ
たのに、両者ともソレをまるで気に留めていなかった。

なぜなら、そんなことは予定の内の一つでしかなかったからだ。
アサシンは主のため、そして自分の願いのために捨て石になる覚
悟はできていた。

ここで彼が殺されたところでなんの問題もない。それがこのアサ
シンの強みなのだから、その利点を活かさない手はない。

ザイドもそれを理解しているからこそ、この一見すると軽はず

みにも思える暗殺を実行する決意をしたのだ。

アサシンはこのマスターならば上等な仕掛けなど用意していただろうと踏んでいた。例えどんな罠があろうとも、簡単にはひっかからない自信があったが。

通常、魔術師の工房には様々なトラップが仕掛けられているのが常識である。魔術の学徒である彼らは、研究成果を他人に見せびらかすことはないのだから、招かれざる客の来訪を警戒するのは至極当然のこと。ましてや今は命をかけた戦いの最中である。

魔力を備えた人間 否、例え魔力を感知させない相手だろうと自身の聖域に踏みこんだ者に対して容赦はしない。来るものは拒み、入ってしまったら出ることも許さないのが、魔術師の拠点だ。

しかし物事には例外が常に存在する。それがアサシンの気配遮断だった。

魔力、物理を問わず、どんな罠も侵入者を察知しなくては、その効果が発揮されることはない。存在濃度を限りなくゼロ近くにまで抑え、影の如き行動を可能とするアサシンの手にかかっては、数多くの罠が無力と化す。

その身を焼きつくす業火を起こす魔術が用意されていたとしても、作動させなければなんの意味もないのである。

黒い異形は霊体になると瞬時に屋敷の屋根に飛び移る。

アサシンの予想通り、霊体化解除に類する備えはない。いや、それどころかまともな罠は、ほとんど仕掛けられていない。せいぜいが敷地内に入る時に気がついた侵入者探知の結界のみ。だが、それも気配を完璧に殺したアサシンには通用しなかった。

やはりとんだ素人か。

暗殺者は一人ほくそ笑む。

霊体を消滅させる類の仕掛けでもあれば、実体化して解除に挑まなくてはならないところだった。そうなれば暗殺を断念し、様子見に徹さなければならなかっただろう。

どこに見張りがいるともわからないのだ。敵の拠点で、暗殺前

どころか進入前から、ご丁寧に姿を晒す愚かな暗殺者など存在しない。そんな不自然を許すアサシンは存在しない。

つくづく敵マスターの素人ぶりがありがたかった。

屋根から屋敷の内部に侵入し、標的を探し出す。天井に張り付いたままヤモリのごとく移動する異形の影は、それだけで怖気を掻き立てられる。目視可能であったなら、夜毎の悪夢にうなされそうな姿だ。

そして、ついに彼は居間と思しき部屋の中で、先ほどのマスターとサーヴァントを見つけ出した。

どうやら敵魔術師は自身のサーヴァントを傍に置き、常に護衛をさせる腹づもりらしい。しかし女騎士……いや、あえて少女と呼ぼう。サーヴァントの少女は白銀の甲冑こそ纏ってはいるが、それ以外まったく武装をしていなかった。

そのサーヴァントはあまりに若かった。年端も行かぬその娘を女騎士と呼ぶのは、ザイドには抵抗がある。

あるいは、魔術や宝具で外見を若く見せている英霊なのかもしれないが、あいにくアサシンが知る限り、そのような騎士など聞いたことがない。不老の法を持つ女騎士なら、それなりに有名なはずだ。

英霊は生前の全盛期の姿で呼び出される。つまりは、この姿こそが眼下のサーヴァントの全盛期なのだろう。

確かに感じ取れる魔力量は膨大だ。魔力感知に疎いザイドにすら、その小柄な姿に畏怖と戦慄を覚えたほどだ。

だが、小娘の頃がもつとも戦いに秀でているなどと、それだけでこの騎士の底が知れようというもの。強力な力を持っていても、それを活かし切る戦いも知らず散った戦士なのだろう。

マスターがマスターなら召喚されたサーヴァントもサーヴァントか。どちらも警戒すべき存在ではない。これならば他のアサシンに先を越されることもない。

このまま仕留められると見たアサシンは、両者に気取られぬよう慎重に男の真上に移動する。

ザイドは己が短剣ダークを構え、攻撃の態勢に入る。

狙うは敵マスターの首。殺すと決めれば殺気を抑える術などない。殺意を消したまま敵を殺すなど、少なくともザイドはそんな方法は知らない。攻勢に入ったことで気配遮断のスキルが大幅に精度を落とす。

「　　っ！　何者　！」

これに気がつかない英霊はいない。セイバーと思しき騎士は即座に反応し、アサシンの居場所を突き止める。彼女の能力が優れていることは間違いない。わずか一瞬でアサシンの存在を捉えたその反撃能力は誉めるべき点だ。

だが、それでも遅い。真の暗殺者とは、その存在が敵に気付かれる前に殺しを行うもの。すでに必殺の短剣は標的の首筋を狙い放た

れていた。

今更侵入者に気がついたところで、武装をしていない彼女ではわずかに対応が遅れてしまっただろう。

武器も構えぬ己が浅慮を恥じるがいい。髑髏の面の下に嘲笑が浮かぶのも当然だ。どこの英霊かは知らないが己の能力を過信したか、騎士は護衛の身でありながら、その意識があまりに低かった。

それは秒にも満たない刹那の間。誰もアサシンの勝利を疑うまい。魔術師ではこの一撃に対応しきれない。現に騎士の主は動くどころか反応すらできずにいる。

悲しいことに、頭上に敵サーヴァントがいることにさえ気がついてはいないのだ。魔術師は何が起こったのかもわからぬまま、哀れにも、この戦争で最初の脱落者となるのだらう。

短剣が首に突き刺さるその瞬間。

殺^とった。そう、アサシンが確信した時だ。投擲された短剣が標的の首に突き刺さる直前、背筋を走る悪寒と共に、一陣の風が部屋を駆けた。

いや、そのあまりのスピードに、アサシンは風が吹いたと錯覚した。

見えない“何か”が短剣^{ダーク}を弾く。剣士にはあり得ない速度、あり得ない動きで騎士が駆け、両の手で支える“何か”で暗殺者の武器を叩き落としたのだ。

それが、女騎士の宝具^{ぶき}だと、アサシン気がつくのにその時間はかからなかった。

風を纏った、恐らくは剣。どんな形状の武器か、目の前にあると言うのに判別ができない。

なぜ確証が持てないかと言えば　巻きつくような風に覆われたソレは、文字通り見えない武器だったからだ。

アサシンの驚愕を誰が知ろう。確実に仕留めたはずの一撃は防がれ、かすかな間を開けることさえなく、騎士は侵入者目掛けて跳躍する。

「はああっ！」

少女の気合がアサシンの耳に届いたとき、既に風の刃はアサシンの胸を二つに割かんと迫っていた。

戦闘に入るため実体となっていたアサシンは、とっさに身を守ることには成功したものの、勢いのまま弾き飛ばされ簡単に床に叩きつけられる。

その、あまりの力。畳敷きの床が衝撃で破壊され、地にめり込んだアサシンは起き上がることもできない。苦悶の声を上げなかった自分をアサシンは誉めたかった。

その程度で済んだことは僥倖だったとしか言いようがない。ザイドは肌で感じていた。騎士の真の実力が、こんなものではないことを。

果たして己の能力を過信していたのはどちらだったのか。暗殺者は地に伏し、その頭上の剣士は見えざる刃を敵に突きつける。

勝者と敗者。この場にいる者をその二種類に分けるならば、どちらが敗者でどちらが勝者かなど火を見るよりも明らかだった。

「今の一撃は見事だった。暗殺者アサシンの名に恥じぬ業だワザ」

鈴のような声を聞く。それは勝者の余裕から発せられるモノではなく、純粹なる敬意からの言葉。

その称賛は意味を持った言語としてアサシンの耳に届かなかった。今の彼はそれどころの状態にない。その声音さえも、今は悪夢に等しい。

暗殺者は自分を殺すであろう相手から、眼を逸らすことができないでいた。相手が美しければ美しいほど、この敵との差が覆しようのないものであることを自覚せねばならなかった。

「だが、我がマスターを狙ったことは見過ごせることではない」
言われるまでもないことだ。

彼らは戦争のただ中にいる。敵に組み敷かれ捕らわれるということとは、つまり死が確定したということ。

アサシンはやっと自分の勘違いに気がついた。

男は騎士を護衛になど使う気はなかったのだ。彼の役割は蠟燭の炎。そして、女騎士の本当の役目は、群がる虫を叩き落とすこと。彼らは警戒を怠ったのではなく、単に必要ななかっただけ。

何故その可能性に思い当らなかったのだろう。使い魔を囮に使うでもなく、罠をしかけているわけでもない。その身、その命をもつて敵を誘き寄せ、そんな無謀ともとれる戦術を使うマスターに。

どれほどの覚悟があるのか。魔術師もサーヴァントも、自分たちの力量に絶対の自信があるのではない。意味するところは一つ。この二人は単に、自分たちの命すら使い捨ての道具としか捉えていないという事実。

いや、覚悟ですらない。自分自身すら道具であることを、彼らは

当然のこととして受け入れている。

いったいどんな闇を抱え持っていると言っのか、彼らは死ぬことをまったく恐れていなかった。

この夜の戦いにおいて、恐らくは最強であろう組み合わせ。

誰よりも魔術師らしい魔術師と、誰よりもサーヴァントらしいサーヴァント。

山の翁は初めて理解する。華の香に誘われ、まんまと罠にハマったマヌケな虫虻、それが自分だったということに。

少女の涼やかな瞳には、醜態を晒す侵入者の姿が映っているかどうかも怪しい。

「最後だ。速やかに逃げ。アサシンのサーヴァントよ」

言葉に慈悲はなく憐憫の欠片もない。騎士は無情に見えざる剣を振り上げる。その傍らには、自分が殺されかけたことにも今起きていることにも、まるで無関心な素振りで煙草をふかす魔術師の男。

剣がその身を貫くまでのわずかの間、最後にザイドが思うことは一つ。

他のアサシンを出し抜くことができなかつたという無念。

そして仲間に対する祈り。

どうか、自分以外のハサンは、この敵と戦う不幸がないことを。

この夜。現代に蘇った、ザイドと呼ばれる暗殺者は、再び現世から姿を消すことになった。

01 一日目・夜 - ラフレシア - (後書き)

うちのアサシンもっといいい使い方してやれよ。とも思いましたが、私の頭ではコレが限界。

剣組みは人間味がなくなると思われます。

協力して最後まで勝ち残ったと、堂々と言えるようなコンビにしたいところ。

それと、本作の切嗣は狙撃などはあまり使わず、自らを囷とします。その理由については、そのうち作中で説明します。

「どうやらアサシンが倒されたようです。これから私は、予定通り父の教会へと向かいます」

言峰綺礼は、それがなんでもないことであるかのように口にした。

黒い法衣に身を包んだ彼は、自身の魔術の師 遠坂時臣に、ただ己がサーヴァントが消失した事実を告げる。

綺礼は未だ暖かい紅茶を飲み干すと、コト、と微かに音をたて、ティーカップをテーブルに置いた。

冬木の街の東側、深山町はかつて、外国からの移住者を多数受け入れた名残から、今でも多くの洋館が立ち並ぶ番地がある。遠坂邸は冬木の街のはずれ、深山の高台に聳える洋館であった。

歴史ある古い建物は、貴族の住まう高貴な館を思わせる。それもそのはず、持ち主である遠坂の祖先は貴族だったのだから。

リビングに置かれたテーブルに、向かい合うようにして男が二人座っている。

一見するとただの友人同士の茶会ようにも見えるが、この場に流れる和やかとは言えない空気は、そんなものではないことを物語っている。

彼らは平穏とは遠い位置に存在する、魔術師の師弟だった。

一人は武骨な巖のような男、言峰綺礼であり、もう一人は余裕の

表情を浮かべる男である。

言峰綺礼が神に仕える身であることは、彼の姿を見れば誰しもすぐに思い至る。しかし彼が纏った空気はそのような聖職に従事する者のモノではない。少しでも感覚の鋭い者なら、彼の不吉さにすぐ気がつくことだろう。

さもありません。彼は聖堂教会によって聖杯戦争の参加を命じられた魔術師だ。彼が魔術師であることが、漂う異質な気配を彩る全てであると断言はできないが、その一端を担っていることは間違いない。

厳密に言えば彼は魔術を学んだだけの『魔術使い』なのだが、あの儀式の参加者としての資格はそれで十分だった。

ある儀式 それは聖杯戦争。

この師弟は、両者とも聖杯戦争への参加を表明した者。既に己のサーヴァントを召喚し、戦に勝利するための策謀を巡らせ続けるマスターであった。

綺礼の先ほどの宣告は、聖杯戦争の参加資格を失ったことと同義。敗北を宣言したも同然。にも関わらず、軽く目を閉じる綺礼の顔にはなんの感情も浮かんでいない。

事実、彼はマスターでありながら、自身のサーヴァントの消滅に対し、焦燥も屈辱も憐憫も何一つとして感じていなかった。

綺礼の向かいに座っていた男が口を開く。

「ふむ。予想よりも早かったか……。まあ、想定通りに動いてくれるはずもないが」

優雅な仕草で両手を組む男。見る者を全てを魅了する妖しい魅力があった。

ダンディズムに溢れる、という言葉が似合うだろうか。滑らかな、だがよく通る声音はこの男の人柄をよく表わしていた。この男の柔和な笑みが、刃の煌めきと同義であることを綺礼は知っている。

立ち居振る舞い美しき彼こそが、この遠坂邸の主・遠坂時臣だった。歴史ある遠坂家の現当主であり、魔術協会からの信頼も厚い実力者であり、貴族の意識と魔術師の矜持を持ち合わせた男。そして聖杯戦争の監督役に、勝者たるべしと見込まれた参加者^{マスター}である。

綺礼は監督役の息子としてではなく、この聖杯戦争の参加者として、二、三の確認と、師に宣戦布告を行うために遠坂邸に訪れていた。

いかにかつての師弟であろうと戦いに差し挟む情などない。魔と業が交錯する戦いに赴く前に、果たさねばならぬ礼儀を彼らは交わっていたのだ。

ということに表向きはなっているが、実際はそんなことはない。二人は 正確には時臣と、綺礼の父である璃正が 影で結託し、遠坂に勝利を齎そうと画策していた。

仮に師弟が殺し合うことが普通であったとしても、二人の繋がりを疑う者がまったくいないなど、そんな都合の良い展開はありえない。

二人の師弟関係は簡単に調べられる。そうとわかれば自ずと彼らに結託の疑いがかかるのは道理。例え同盟関係になかったとしても、疑念は免れないだろう。

時臣と綺礼が敵対しようと同盟を組もうと、どちらにせよ周囲から向けられる視線は同じモノなのだ。ならばあえて敵対する意味も

あるまい。それよりも表向きは敵対し、水面下で 例え見え透いていようともし 手を組んでいたほうがいい。

これはあくまで形式上の体裁だ。見抜けないマヌケがいるわけもない。子供の演ずる喜劇と大差ない茶番である。

こんなバレバレの三文芝居を、よくもまあ演じる気になったものだ、そう思いながらも綺礼は口を挟むことはしなかった。

何事も体裁に則った上で勝利を掴む。それが貴族としての誇りを重んじ、常に優雅たろうとする時臣のやり方である。時臣もわかっていたいながら、こんな華のない会合を催したのだ。

綺礼は三年という付き合いから師の性格を学んでいた。魔術師としては損な性格だと時臣も自覚しているようだが、そういった心の贅肉を護り抜いた上で勝利するのが彼だということを綺礼は理解していた。

「セイバー発見に伴い、ランサー、ライダー、バーサーカーを見張るアサシンたちに攻撃を命じました。 結果は、まあ、予想通りというところですよ」

「仕方あるまい。英霊を側に置きながら、アサシンの戦闘力で殺せるマスターなどたかが知れている。あわよくば、とも思ったが、やはり期待通りにはいかなかったな。死んだ者たちの代わりに、新たなアサシンを張りつけておいてくれ」

期待が外れたと口にするにも関わらず、時臣は余裕の表情を絶やささない。そんな時臣の所作は一つ一つが雅やかなもので、高貴な血筋を感じさせる。

聞く者が聞けば不可解な会話であると気がついただろう。二人は

アサシンの死そのものが彼らの望みであったかのように語り、敵に破れることが必定であったかの如く話を進めている。その内容は数多くのアサシンが存在していることを前提しているものだった。

「アサシンには敵の攻撃をさせる際、他のマスターの監視は最大限に注意させました。そもそも、どのマスターも襲撃者の相手をしていたのでから、アサシンが自分以外の誰かに敗れる瞬間を見たマスターは誰もいないでしょう。こちらの狙い通り、自らのサーヴァントがアサシンを撃破する姿は見たでしょうが」

「ならば幾人かのマスターに『自分がアサシンを倒した』と思いつませることができたはずだ。リスクいな選択ではあったが、君が召喚したアサシンの宝具を考えるなら今はこれでいい」

アサシンのマスターたる言峰綺礼も、敗者として扱われるだろう。そう繋げる時臣の言葉の直後、部屋の影から声がある。

「なるほど。狙いは敵を殺すことではなく、我らを殺させることですか」

部屋の片隅の暗がりから、湧いて出たように黒衣の女性が現れる。抑えきれぬ殺気と怒気を孕ませて、その声は綺礼の背後に立った。

小柄で柔らかかな体格を包む漆黒のローブと、その顔に填められた髑髏の仮面。その装束はまさしくアサシンと呼ばれるサーヴァント、ハサン・サツバー八特有のものであった。

本来ならあり得ない人物の登場に、しかし綺礼も時臣も眉一つ動かさなかった。彼女の存在をまるで不思議とは思っていないようだ。

「不服かアサシン？ お前たちは自らの特性を理解し、受け入れていると思っていたが」

「……惜しむ命ではございませんが、徒に消費されたのでは、散っていった同胞たちが報われません」

サーヴァントを失ったはずの言峰綺礼の筋張った手の甲には、依然、未使用の令呪が残されたままだ。これはアサシンが消滅していないことを示す、なによりの証左である。

だが アサシンが死んでいないとすれば、先ほどの女の発言と矛盾する。

アサシンが消滅したというのは真実であり、また、偽りでもあったのだ。

「すまん。お前の宝具の特性を考えるならば、これは必要なことだった。アサシンというサーヴァントは気づかれぬ間に殺し、誰に知られるでもなく敗れるクラスだ。これも勝利に必要な手順と思ってくれ」

綺礼の言葉にアサシンは不承不承といった調子で頷く。だが仮面マスクの下に宿る殺気は衰えない。その心事は他ならぬ、綺礼の盟主たる時臣に向けられていた。

弟子のサーヴァントを斥候に使わせたのは時臣だ。彼はアサシンの能力を知るや、アサシンと共闘するのではなく、アサシンを利用することを考えた。（もつとも、時臣が召喚したサーヴァントは、どんな相手とも共闘などするわけがないのだが）

女は二人の会話から、真にアサシンに死を命じた者が誰であったか察したのである。

「我らハサンはすでに私心を滅しております。影となった我らに、どうして主が頭を下げる必要がございますでしょうか」

口ではそう言っているが、時臣を決して許さぬとその気配が物語っていた。

「しょせん取り立てて得手の無い者らを失ったところで、我らの総体には然したる影響もございません。が、惜しくもない四本とは言葉、損失は損失でございます。無益な犠牲であったとは思いたくありません。」

嫌味たらしく憎々しげな口調は、内心の大いなる不満を隠そうともしないものであった。暗殺失敗の体を装うため、リアリティを追及してアサシンには何も知らせていなかったのだから、怒りも無理からぬと思い、綺礼も特に諫めることはしなかった。

暗殺者として仕事を成し遂げた上で死ぬならばいいが、単に“捨てられるためだけに捨てられた”のでは、不満を持たないわけもない。

アサシンは闇に溶け込むように姿を消した。霊体となったのだろう。もうこれでアサシンを探し出す事は、マスターである綺礼以外には不可能だ。

そんな弟子とそのサーヴァントの様子を意に捉えることもなく、時臣はマイペースに自分の話を進める。

「キャスターが未だ召喚されていないのは僥倖だった。神秘が生きる時代の魔術師たちならば、こちらの狙いを看過しかねないからな」
時臣の言葉に、綺礼も頷く。

「しかし……、キャスターがおらずとも、敵に手を組まれてもすれば、これが狂言であると悟られかねません。こちらの思惑が露呈してしまうのでは？」

師には師の考えがある。それを知りながらも、しかし綺礼は疑問を口にする。

「ほう。では君は、気配遮断に長けた彼のサーヴァントが、ご丁寧にも敵にやられる様を他の者に晒し、無様に消えるほうが自然だと、そう言うのかね？」

「……………」

「意地の悪い質問だったかな。まあ君の疑問も、もつともだ。とは言え、交渉、結託、どんな形だろうと自分が倒したサーヴァントを敵に伝えはしないさ。消去法で自分のサーヴァントも見極められるからな。例え、互いの持ち札を全て見せ合う状況になったとして、後に戦うこととなる相手からの情報に、どれほどの信憑性があると思うね」

アサシンの死はどうあっても無駄にならない。どんなカタチになろうと、敵の疑心を煽り牽制の役割を果たすだけと、時臣は軽く言っただけ。

「そして例え見破られたとしても、しょせんは策の一つが半減するだけだ。ならば、そんな瑣末事を気にしても仕方あるまい」と、時臣はそう締めくくった。

残ったアサシンは時臣の考えを大いに不満に思うことだろうが、綺礼はともかく時臣はそのことにまったく危険視していなかった。弟子の従者の心中をどうでもいいと判断したわけではなく、単に見落としていただけなのだろう。遠坂時臣という男は時折とんでもなく抜けている。

搦め手などではなく、アサシンを最後の切り札として温存しておくという選択もあったのだが、この男にそのような考えはないのだろう。アサシンを使い捨てる発想は、時臣の高慢な性格もさること

ながら、彼が召喚したアーチャーがあまりにも強力であったことに起因している。

あまりに有能であるが故の油断。それが時臣の弱点だ。他者を過小評価しがちな彼は、アサシンの死を軽い保険程度にしか捉えていなかった。

剛胆というべきか、傲慢というべきか。時折この師匠にはついていけない時がある綺礼であった。

と、綺礼が師に気づかれぬよう、そんなことを考えたその時だ。小さな書類棚の上から電子音が鳴り響いた。音の発生源はガリガリと更なる異音を立てて、長めの印刷用紙を吐きだした。

高級感溢れ、それなりの年月を感じさせるリビングとは、不釣り合いに設置されたファクシミリである。綺礼が遠坂に弟子入りした初日、時臣に頼まれて購入したものだ。

「 ちょうどいい。アレを取ってきてくれないか？ 」

男は優雅な佇まいのまま綺礼に命令する。言われるまでもなくそのつもりだった。綺礼が弟子になってからというもの、この屋敷に来るたび、機械関連の操作はもっぱら綺礼の役目である。

魔術師が機械を使うものか、などと思う者がいるかもしれないが、別段珍しいことではない。大局以外では魔力を節約するのが魔術師たちの通例だった。

術式を行うための魔力も、一人の魔術師が使える総量は限られている。実用性で言ってしまうえば、魔術ほど効率の悪い異能はない。現在においては、魔術のほとんどが科学で代用可能である。

そのため好き好んで魔力を無駄遣いする馬鹿がいないのは当然で

エネルギー

あり、便利なら近代文明を利用することなど、当たり前のことだった。

貴族主義を体现したような遠坂時臣ではあったが、しかし魔術師を至高な存在だとは思っていない。魔術というものの自体、魔術師にとっては目的ではなく、真理に至る手段であり研究対象。魔術は等価交換によって成り立つ“現象”でしかない。ソレを扱う自分を誇ることはあれ、使えない者を見下すことはしなかった。

例えばフィクションに登場する魔法使いなどは、普通の人々と違うということに鼻にかけ、自分たちを格上だと認識している話もある。人間が使えない異能の力こそ、科学技術などより遙かに優れており、それを有する我らこそ天に選ばれし者だと思ひ込む話は多いが、魔術師にそういった思想はなかった。

一般人と違うことを矜持とする者は非常に少ない。より才を持つ者を尊び、派閥同士競い合うことはあれ、それも結果が出なければなんの意味もないものであることを彼らは知っていた。

彼らはなにも魔術を便利な力とは思っていない。未だ解明され切っていない学問として捉えている。

魔術は秘匿すべし　それが魔術師に共通する認識であり、大原則だ。その理由はいくつかあるが、最も大きい理由は、魔術を知る者は少ない方がいいという都合からだ。

魔術とは世界の理に肉薄し、条理の流れに自らの意志を混ぜ込む外法である。それは年端のゆかぬ子供たちが夢に見るような、都合の良い超能力の類ではない。魔術の基本は等価交換。数が定められているモノを皆で分け合つては、力が弱るのは道理ゆえ、彼ら魔術師は一子相伝を選択する。

さらに、魔術を志すならば、その両手は確実に血に濡れる。魔は魔を呼び、それと対峙しようと思えば犠牲を容認しなければならなくなる。「幸福になりたければ魔術を学ぶより学校にでも行け」とは、とある魔術師が若くして口にした言葉であった。

かように隠顕かつ不便な力を、イコール上に立つ者の力であるなどと、誰がそんな勘違いを犯そうか。

押し並べて魔術師はその存在を隠し、社会の影に住まう者である。少し考えればわかることだが、世間一般の常識からは外れ、人の道理とは異なる価値観に生きる彼らが、魔術を貴族の証であると声高に叫ぶ愚を犯すことはほとんどない。

もしそんな愚か者がいるとしたら、まず間違いなく同胞には認められず、蔑視の対象となることだろう。

魔術師の最終的な目的は心理への到達に他ならない。人間として生まれた意味を知るといふ、俗物的な欲求もない。彼ら魔道の学徒は、ただ純粹に真理というものがどんなカタチをしているのかを知りたがる集合体だ。自己を透明にし、自我だけを保った者たち永遠に報われない群体を、世界は魔術師と呼ぶのである。

幾年もの歳月を重ねた家柄であれば、もちろん貴族としての家格を備えることもあるのだが、貴族であることと魔術師であることは、別の所に位置する矜持である。

時臣もまた、常識的な魔術師の定義から逸脱することはなかった。いかに貴族的な考えを持つが、それと魔術師であり続けることは無関係だと理解していた。

決して魔術的思想と貴族意識を混同させる愚は彼にないのだ。魔術師であることを尊びこそすれど、魔術師と一般人を比較して優越に浸ることはなかった。彼が誇りとするものは、己が成した実績とそれを成し得た実力、それを可能とした努力の日々だ。

……そう、他のどんな魔術師が“特別であることが特別だ”という勘違いをしたとしても、普遍的魔術師として完成している遠坂時臣は、そんな間違いを犯さない。

彼が機械を弄らないのは、科学知識を下等と軽視していたからではなく、雑務に手を汚すことは上に立つ者がやるべきではないと考えているためだ。

生粋の貴族である時臣は機器類を扱うことを雑事と捉え、ファクシミリから流れ出る用紙を手取る作業ごときは、弟子がやるべきことだと考えていた。

話は逸れるが、彼が機械類に触れないことには、もう一つの理由がある。それは遠坂時臣が重度の機械オンチだということだ。

元々魔術とは過去へと向かう学問であるためか、未来へ向かおうとする化学技術とは相性が悪い。時臣もまた　いや、むしろ普遍的な魔術師以上に　文明の利器との相性は、良好と呼び難いものがあつた。

悲しいかな、テレビのリモコンですら彼の手にかかればスクラップとなることもある。

時臣が近代知識を上手く利用できたなら、彼の研究は早期に完成していたことだろう。もしかすれば自身の研究を更に発展させてい

たかもしれない。まこと人生とはままならないものである。

プリントされた用紙には、聖杯戦争に参加したと思しき魔術師たちの名前が記されていた。

時臣が聖杯戦争に参加した魔術師たちの情報を、間諜に探らせたのである。

戦いが本格的に始まるよりも以前に、いくらかの情報は得ていたが、それでも決定的な情報が揃わなかった“ある魔術師”の再調査を依頼したものだ。

その魔術師の名は衛宮切嗣。

九年ほど前に、アインツベルンに婿入りした魔術師であった。

ついでに、新たに判明したウェイバー・ベルベットという魔術師の調査も共に送られてきたのだが、どうやら遠坂時臣の関心は、そんなオマケにはないようだった。

「導師。この男が此度の“聖杯の守手”なのですか？」

好奇心と、今後のための情報把握として綺礼は問いかける。

聖杯戦争を可能としたのは始まりの三家。

聖杯召喚を行うための土地を用意したのが遠坂であり、英霊を従えるシステムを用意したのがマキリであり、そして聖杯の器を用意するのは、高度な錬金技術を有するアインツベルンの役目であった。

聖杯とはカタチのない霊的存在。それを現世に召喚し、力を世に留めるための『器』を用意することができるのは、『ラインの黄金』

を有するアインツベルンだけであった。戦いの賞与となる聖杯の器はアインツベルンに連なる者が冬木の地に運ぶことになっている。

アインツベルンに連なる聖杯の守り手。それが衛宮切嗣なのか。そう思案する言峰であったが、しかし時臣は首を横に振る。

「恐らくは別の誰かが聖杯を運び込む手筈になっているだろう。衛宮切嗣は単に戦闘技術で劣るアインツベルンの代理人だよ。アインツベルンは、間違ってもこの男には聖杯を掴ませない」

師の言葉に首をかしげる綺礼に、時臣は構うことなく続ける。

「なぜなら、この男は魔術師ではない。アインツベルンは、この男を信用などしてはいないだろう」

そんな奇妙なことを、当然のように断言した。

綺礼の混乱は増すばかりだ。聖杯戦争は魔術師の素養がない者は参加できない。マスターを選出するのは聖杯の意志そのものだと時臣に聞いている。聖杯の召喚者となりうるのは魔術の知識を持った者だけだと。

師は自身の言葉を覆すと言うのか？ 腑に落ちないと言いたげな弟子に、時臣は教示する。

「魔術師とはもはや人ではない。神秘の秘奥とは一代では辿り着けない高みゆえ、我々は研鑽の全てを次代へと引き継いでいく。その過程においては、我が子の肉体すら改造し、その家系に相応しい魔術師へと作り変えていくことも辞さないものだ」

その声は平坦で、普段、綺礼に師として接する時と何も変わらなかった。

「それを、後継たる者がどう捉えるかは関係ない。魔術師の家系である以上、魔術に染まるのは生まれる以前から定められること

だ。言ってしまったえば、魔術師とは『個人』を指す言葉ではなく、『一族そのもの』を指す言葉だと思ってくれてもいい。魔術師の家系に生まれる者は、すべからず生涯を研鑽に捧げる義務を負っている。

もはや後継者個人の責任ではないのだよ」

時臣は一旦言葉を区切る。冷めた紅茶を、不愉快そうな顔で口に運ぶ。横顔に浮かんでいたのは、明らかかな怒り、そして侮蔑であった。

平坦であつたはずの声は、徐々に熱を帯びていく。

「だが、この男にはその“責”がない。この衛宮切嗣という男は、明らかに真理を探究する以外の目的で動いている。人の身では至れぬ最奥を求めた、魔術師の責務を全て捨て去っている。両立させているならまだいい、だが、どんな目的にせよ、魔術師としての己れに背き、秘すべき魔術を用いて個の願望を優先させようなどと。

この男は魔術師ではない。私はこのような者を魔道の担い手とは認めないし、千年の歴史を誇るアインツベルンも同じ考えだろう」

一族の命題を無にし、先代の意思を無にするその行為への憤怒。全ての責任を投げ出した、衛宮切嗣への憎悪。

優雅な姿勢を常とする遠坂時臣にあつて珍しいことだが、彼は一人の『人間』に対して嫌悪感を露わにしていた。

綺礼も初めて耳にする時臣の怒りであつた。普段、それなりに綺礼への信頼が厚い時臣ではあるが、やはり聖杯を得るために必要な『道具』として弟子を見ているためか、彼に対しこのように魔術師観を語ることはない。心情を見せることを優雅でないとしているのか、あまり負の感情を露呈することがなかった。

それを たった一人の男の存在が、彼の殻に傷をつけた。普段見せない遠坂時臣の本音を、衛宮切嗣という男は引き出したのだ。

次に綺礼の方を向いたとき、時臣の目に先ほどまでの嫌悪と憤怒は、もはや宿ってはいなかった。

「さて、冬木の管理者として、敗者を放っておくわけにもいかない。教会まで君を送って行こう。ああ、それからこの資料は君も目を通しておいてくれ。私が見つかったことに、君の眼なら気がつくかもしれないからな」

資料をまとめて綺礼に渡した。

綺礼は師に随い遠坂邸を後にする。

師にここまで語らせた、衛宮切嗣という男を気に留めながら。

切嗣の情報に気を取られ、ウェイバーというマスターの情報をまったく見ていなかったことに時臣が気がつくのは、それからしばらく経つてのことであった。

02 一日目・深夜 - 魔術師二人 - (後書き)

ただの説明回でした。まるで動きませんね。
次回からは色々動かしたいです。

時臣が大分イメージ違ってしまったかもしれません。

ドラマのため人間的だったZeroと違い、本作の魔術師像は、
空の境界やFateなどの説明をベースにさせていただいておりま
す。

「大局でもない限り魔力は節約する」「科学技術の方が便利」「
魔術師はもう人間ではない」などといった発言を参考にさせていた
だきました。

少なくとも、魔術師的価値観≡貴族主義 ではありません。

……まあ、彼がウツカリしてることは変わらないんですが。

言峰綺礼は他人の痛みが理解できない男だった。

痛いという『感覚』がわからないのではなく、他人が痛みを感じる『状況』が理解できなかった。

例えば犬や猫といった小動物が車に轢かれ、苦しみ悶え息絶える様を見た時、誰しもその痛ましさに目を背けるだろう。

綺礼にそのような感性は無かった。そういつたとき彼の胸に去来するものは死に対する嫌悪や悲哀ではなく、『愉悦』や『快樂』と呼ぶに等しいものであった。

綺礼は人の言う『幸福』が判らなかつた。彼が美しいと感じることができるものは、蝶ではなく蛾であり、薔薇ではなく毒草であり、善ではなく悪だった。信頼されることに嘔吐し、人の笑顔に不快感を覚えた。

常人が心の平穏として尊ぶモノを前にしても、彼は少しも安らぎを感じる事ができなかった。

自分は歪んでいる。綺礼が己を自覚するまで、さして時間はかからなかつた。

綺礼の感性は常軌を逸するものであった。彼は破綻者だった。モラルを重んじる綺礼にとっての喜びは、決して本人が望むものではなかつた。それゆえ、彼は生きる希望を見出すことができなかった。

彼にとっての唯一の娯楽、それは他人の苦しみに他ならない。

聡い少年は若くして自らの罪を理解し愕然とする。父の影響が早くから道徳に励み、神の信仰にその身を捧げた少年は、神の教義に反する己に絶望した。

彼の青春は常に己の歪みとの戦いだった。自身が他者と乖離していると知ってからは、それを克服しようと青春を費やした。己の不実は、未だ悟りを開けぬ未熟のせいだと、救いを求め続けたのだ。

だが数年を経ても望みは叶わない。いくら自分をいじめ抜こうと、いくら神の教えに従事しようと、彼はついに人並みの幸福を得ることなどできなかつた。自覚できぬほどに愚かであればと自らを嘆いたこともあつた。

やはりこの身は生きるに値しないと、そう結論づけたことすらあつたのだ。

もし彼が享樂に身を委ねることができたなら、何かしらの犯罪者となつていたか、類稀なる狂人として歴史にその名を刻みこんだのかも知れない。

……間違ゆがみいに気がつかぬまま、自らの感性赴くままに、自分なりの価値観に生きてさえいれば、綺礼はきつと幸福だつたのだろう。

だが、不幸にも彼は良識を護ろうとすることができない人間だつた。隣人の幸福を願い、神の教えを善とし、他者を貶めることを悪と断ずることができ、まさに聖職者たるに相応しい人物であつた。

だからこそ彼の絶望の深さは計り知れない。世界が穢れるほどに満たされる己の本性を、憎悪しなかつたはずがない。彼は自らの欠陥を埋めるべく努力し、そのたびに埋めようのない己の不実を認識

してゆく。

人々が生まれながらに持っているモノを持っていないと言つのなら、それは欠点ではなく欠陥である。つまり生涯をかけても変えられない。元より初めから持ち得ぬモノならば、治すという発想自体が間違いだ。いくら望もうとも、決して得られるものではないのだから。

そうと確信した時、綺礼は神の教えに背を向けた。結局、信仰を捨てることはできなかったが、神の教えでは自分を救うことができないのだと涙を呑み込んだ。

ただ一人。

たった一人、綺礼の憤怒を理解できた女すら、綺礼の悲しみを埋めることはできなかった。

彼の苦しみは長く続いた。いや、今なお綺礼は苦悩し続けている。生きることが許されぬ存在は、今も答えを模索している。

『人間らしさ』への渴望を振り切れぬまま、自分が生まれてきた意味の答えを、彼は探し続けていた。

綺礼は敗者として冬木教会に保護を求め、監督者・言峰璃正に保護される身となった。

むろん体裁としての話であり、彼のサーヴァントであるアサシンは未だ現界したままだ。これで彼は狙われ難い立場のまま、師・時臣をフォローすることができる。

誰にも疑われてはいないと楽観することはできないが、多少は敵の目を逃れて行動することができるだろう。

自室としてあてがわれた部屋の扉を開けた時、彼は違和感に気がついた。質素に徹しているはずの私室は、いつものように上質で華やかな雰囲気に変貌していた。

まるでどこかの宮廷の二画にでも紛れ込んだかのような錯覚を覚える。そんなあり得ない変化にも慣れたもので、最初の頃は戸惑いもしたが、今では違和感に眉根をしかめることもなくなった。

同じ空間だと言うのに、綺礼が一人にいるときはまるで世界が違う。やはり部屋というものは、使う人間次第で如何様にも姿を変えろということか。多くを学んできたつもりで綺礼であったが、未だ知らぬモノもある己を再確認した。

「来ていたのか、アーチャー」

不敵な笑みと共に、高価な酒をまた一つ開ける青年に、綺礼は呆れたように声をかける。

人間とは異質なその気配は、王族としての気品を惜しげもなく晒すものであった。彼が英霊であることは疑う余地もない。これほどの存在感を持った者が、たかだか人間であるなど誰も思うまい。

同盟関係にあるアーチャーのサーヴァント。

綺礼の師・時臣のサーヴァントでありながら、仮初としてすらマスターを敬うことのないこの英霊は、なにがお気に召したのかは知らないが、召喚されて以来なぜか綺礼の部屋に入り浸ることが多か

った。

綺礼の部屋にも我がもの顔で居座り続けるアーチャーの傲慢さは、その契約者である時臣をも凌駕していると言う他にない。

弓兵のクラスとして召喚されたこの男は、真実の意味で弓使いではない。恐らくは彼の戦術ゆえに、投擲を得手とするクラスが該当したのであろう。

彼の正体は英雄王ギルガメッシュ。古代メソポタミアに君臨したとされる半神の王。最も古き伝承を起源とする彼は、すべての伝説の大本となったともされる英雄の中の英雄だ。

本来ならば飾り気のない部屋には、まるで新種のインテリアかなにかのように、そこいら中に蓋の開いたボトルが転がっていた。

綺礼には極上の美酒を溜め込む癖がある。かつては酒という甘美な毒薬に身を浸すことで、人間性を得られるのではないかと期待したこともあったのだ。

結局、集めることに悦びを覚えるほどの味覚にこそ出会うことはなかったが、多少は舌を楽しませてくれる酒精の数々に今でも心を慰めることがままあった。

テーブルの上にずらりと並べられた酒瓶の列を見たところ、アーチャーは綺礼のコレクションをかなり堪能したらしい。綺礼の私室も、ずいぶんと好き勝手に蹂躪されたものだ。主を護衛するアサシンも、最初は警戒を隠そうとしていなかったが、この唯我独尊の英雄王が単に『酒蔵』を欲しているのだと察すると、まったく気に留めなくなった。

グラスを傾ける姿は優雅なモノで、どれほど酒を喰らおうが、こ

の男には贅沢などという言葉は似合わない。財の限りを尽くすことが当然のことであるかのようだ。

……いや、この男には「限りある財」などという言葉すら、そぐわないようにも思える。まるで使いきれぬほどの宝を抱えることが、彼にとっての当然であるかのような。

「それで、なにか進展でもあったのか？」

英雄は勝手に部屋を荒らしたことに何ら悪びれた素振りを見せるでもなく、主語を抜かして質問をしてくる。最古の王というだけあって、アーチャーは常に高姿勢だ。それが彼にとっての自然体だった。

「セイバーの召喚を確認した。同時に、キャスターを除く全陣営にアサシンを殺させた。これで多少は、敵の目を誤魔化すことができるだろう」

律儀に返答する綺礼に、しかしアーチャーは礼を述べるでもなく、ただ「ほう」とだけ漏らす。

凡百の民が王に尽くすことは、彼にとってみれば至極当たり前の奉仕。この程度のことを労う発想は、彼の中には無いのだろう。

魔力提供さえ当然の奉仕と考えるこの男からすれば、マスターというものは寄生動物も同然だ。現界する上で、現世との接点と霊体を補うための魔力がどうあっても必要となるからこそ、マスターという存在を容認している。魔術師を主と仰ぐことを良しとして、人間の使い魔となったわけではないのだ。

時臣もサーヴァントの意識は理解している。が、それで構わないと思っっているのだろう。綺礼が知る限り、師が英雄王を諫める気配

を見せたことはない。むしろ呆れたように苦笑しながらも、自らのサーヴァントを自慢する師匠の姿を綺礼は何度か見たことがある。

師にとってアーチャーはまさしく王たるに相応しい英霊であった。サーヴァント戦力かつ生贄でしかないはずのアーチャーを、尊ぶべき存在として敬意を払っているほどだ。主従が逆転したかのような彼らの関係であつたが、最後に笑う者が自分であると理解している時臣は、この『偉大なる道具』の尊大すぎる態度を容認していた。

コトミネ。お前はまるで、死んでいるかのような男だな。初めて会った時、青年にそんな言葉を投げかけられたことを思い出した。あの時は面食らってしまったって返答することもできなかったが、もし今同じことを言われたら、自嘲気味に返答することができ

る。

「……当然だな。私には、生きる意味もなく、聖杯に託す願いもない。そんな男が生きているように見えるはずもない」

それを口に出さなかつたのは、僅かに残った意地なのか。

「そういえば、お前に聞くのを忘れていたな」

綺礼は前々から聞こうと思っていた質問を、さも今しがたまで忘れていたかのように問う。

酒肴を楽しんでいた黄金の王は、紅玉の双眸を綺礼に向けた。

「ギルガメッシュ。お前は何を望む？ かつてこの世の全てを治めたお前が、聖杯に何を願おうというのだ」

それは当然と言えば当然の疑問である。

一度はすべてを得た者。死に至ることを恐れ、不死を求め 結局、最後は不老不死すら手放した男。そんな英雄が、今更いつたい

なにを望んで戦いに臨もうと言うのか。

薄く笑ったアーチャーから返ってきたのは、奇妙な問いであった。
「コトミネよ。お前は聖杯とはなにか知っているな」

アーチャーが言うのは、此度の儀式で奪い合う報酬とは異なる、
神の杯のことだ。かつて神の子の血を受けた杯。神職を志した者な
らば、当然それを知らぬはずがない。

はぐらかすつもりかと一瞬思ったが、これが単なる前置きである
ことを察した綺礼は軽く頷く。

「この聖杯戦争で奪いあうものは別物だ。願望機としての力を持つ
たモノに、その名を冠したにすぎん」

聖杯とは伝承によってカタチを変える。かのアーサー王伝説にお
いては、それは杯に限らず、皿や石、あるいは形を持たない栄光を
指してそう呼ぶことさえあった。

それは真実の姿を思い描くことすら罪深い聖遺物。およそ多くの
聖職者が求めてやまぬ“神の杯”を、神の教えに反する魔術師たち
が、こんな極東の島国で奪い合いをすることなど不可能だ。聖杯と
呼ばれるモノが伝承に残ったソレではなく、“万能の釜”の模造品
であることはサーヴァントとて承知のことだ。

サーヴァントは願望機を得る機会として、使い魔に身を落とす召
喚を承諾する。英霊たちにとって聖杯戦争とは、人間を超えた者が
魔術師の奴隷と成り果ててまで、悲願を達成するための手段として
利用するもの。サーヴァントが求めているのは願望機としての力だ
けで、力さえあれば聖杯の真偽など関係がないのだ。

ただ一人、この男を除いては。

「我がそんな贗作モノを欲する道理はない。我が求める宝オレは原点オリジナルだけだ。その後には派生し、流転した完成品は、世に伝わるべき物だからな。トキオミがそれを望むと言うなら、忠誠心に免じ手を貸してやらんでもないが」

サーヴァントは、聖杯奪取に命をかけることを条件に召喚される存在。だというのに、彼はそんな契約など意に介していないかのようだ。時臣に義理立てするだけの意志は見えるが、青年の発言の中にはマスターと共通するはずの“聖杯入手という目的”が無かった。

綺礼は得心がいったと頷いた。

「つまるところお前は、たかだか願望機になど興味がないというわけか」

アーチャーは当然だとばかりに酒を呷る。

なるほど、確かに本来の意味での聖杯も、宝と呼び称するシロモノではない。その偽物ともなれば、英雄王にとっては粗悪品以外の何物でもないだろう。

「しかしそれでは余計にわからんな。なぜこの召喚に応じたのだ？」
「なに、見聞録というやつだ。我オレはすべてを治めた者。その我オレが現世を知らぬとあっては、民草が世に迷うからな。治めたモノがどうかたちを変えるのか、知っておかねばなるまい」

……つまりこの男は現世……見たさにサーヴァントの縛りを受け入れたということなのか。サーヴァントの契約は、かつての自意識を保つたまま現界できる。アーチャーの言葉が真実ならば、契約を受け入れた理由は単に都合がよかったからということなのか。

呆れるべきか驚愕すべきか、どう反応すればいいかわからない綺

礼を見やり、アーチャーのサーヴァントは愉快そうに嗤った。

「……羨ましいな、英雄の王よ。オマエは現世を愛するためならば、その身を貶めることも厭わないと言っワケだ」

嗜好に素直でいられることが羨ましいと、綺礼はこぼす。

「私が愛でることができるモノは人の業だけだ。我ながら醜悪とは理解しているが、それでもこの性分は変えられん」

治したくとも治せなかった 綺礼がそんな悔恨と嫌悪が入り混じった独白を他人に漏らすのは、これが初めてのことだった。別段、秘密にしていたわけでもないが、聞かれることがなかったので敢えて明かすことがなかったのだ。

それがどうして、今回に限っては自分から吐き出したのか、綺礼本人にもわからなかった。

そんな綺礼に、アーチャーはなんでもないことのように告げる。「けっこうなことではないか。己を嫌悪せざるにいられる者がどこにいる。だが、お前のように自らの欠陥を克服しようと努める雑種など、そうはいない。お前の醜悪さを疎んじる心は、すなわち世を顧みる高潔さと同義であろう」

綺礼は目を丸くする。まさかこの男からそんな言葉が出てくるとはまったく思っていなかった。

英雄はグラスをテーブルに置き立ちあがる。もはや綺礼のことなど彼の頭の中にはない。

「この時代、完成したとまではいかぬようだが、なかなかどうして面白い。あと五 いや、十年ほどは見物したいところだな。

ああ、その手段としてならば、聖杯の力で受肉するというのも悪く

はないか。治める価値があるならば、再び世に君臨することも考えておくとしよう」

そう言い残して黄金の甲冑は霊体となり姿を消した。言葉は独り言であるらしく、綺礼の視線など意に介さなかった。

静かになった私室で綺礼は息を吐き出した。台風一過と呼ぶほどのことでもないが、どうもあの英霊と席を同じくするのは疲れる。

……しかし、アーチャーの願いは予想外であった。使い魔サヴァントに身をやつしてまで、現世に蘇った理由が、ただ見たかつたからだと言うのだ。まったく、傍若無人と言うべきか、器が大きいと言うべきか。綺礼はソファに座り込んで息を吐いた。

たかだか願望機。そうと口にしたのは自分であつたが、しかし聖杯は侮ることができない宝具であることも知っている。英霊なる存在を現代に召喚する力など、巨大な魔力の塊として見ても規格外なものだ。もしも勝者が私欲の限りを尽くしたなら、どれほどの被害が出るか想像もつかない。

例えば綺礼が勝利者となつて聖杯を手にした場合、一体どれほどの犠牲が生まれるか。

そんな悪魔の誘惑めいた幻想を、一瞬でも想像した自分を綺礼は恥じた。

世を愛していなければ己の穢れを憎むまいという、先の英雄王の言葉に綺礼は頭を横に振るしかない。この身が世界を愛していると云うなら、世界の穢れを望むこの性はどう説明すると言つのか。

とにかく今は余分なことを考えず、聖堂教会の意志を完遂することをのみ考えるべきだ。遠坂時臣が勝利者となつてくれれば、聖杯

によって一般人に被害が出ることはない。師を勝者とすることが彼の役目だった。

そのためにも、敵の情報はなるべく頭に入れておいたほうがいい。綺礼は師の言いつけ通り、渡された資料に目を通すべく鞆を開け、衛宮切嗣の資料を見返した。いくつもの資料の中からまずソレを手にとったのは、意図したわけではなく単純に偶然である。

読み進めていくうちに、師がなぜあれほどまで切嗣に嫌悪の感情を見せたのか理解していく。

なるほど、衛宮切嗣はずいぶんと魔術を軽んじている。弟子に軽々しく「嫌なら魔術を捨てても構わない」とでも言い出しそうなほどだ。魔術とは一族の重みだと語った時臣にしてみれば、この男は忌むべき裏切り者でしかないだろう。

報告に記された情報が全て事実だとすると、切嗣の半生は、およそ常識という範疇にあてはめるならば、不可解なモノであった。

表向きの彼は、一言で言うなら傭兵だった。あらゆる戦場に現れるは、戦いが激化する前にこれを鎮めることを生業とした。戦地へ赴くたび死にかけることなど、日常茶飯事だった。

それはいい。それだけならば、まだまともな傭兵だ。

彼は普通とは違った。切嗣はより危険な役目を自ら率先して引き受ける異常さがあった。

戦争には必ず二つの勢力が存在する。互いの正義、互いの欲望、互いの理念と悪性に対立するからこそ、争いという穢れが生まれる。傭兵ならば、そのどちらかに加担するのが普通である。どのような目的であれスポンサーは必ず必要だ。

切嗣は誰の味方もしなかった。彼はどの勢力にもつかず、ただひたすらに争いが激化する戦場を駆け巡る。

それは誰の目にも異様な姿だった。

彼が手にしたものはいったいなんだったのか。あらゆる犠牲を払い、自身を含めたあらゆる死を容認し、しかしなんのために命を賭すのかもわからない。

その在り方を不気味に思わない者などない。衛宮切嗣という男の行動は、リスクとリターンがまるで釣り合わなかった。

まるで死に場を求めるように、彼はあらゆる戦場に現れ、狙った獲物を殺しつくした。

信仰もくてきの無い殉教者　そう彼を評したのは、一体誰だったのか。資料の片隅に刻まれたその渾名を、恐らく綺礼は忘れないだろう。

常識とズレた思考形態を持つ魔術師の目的が明々白白である場合は少ない。根源に至ることを至上の命題とすることは共通しても、そこに至るまでのアプローチは千差万別だからだ。

かつて異端狩りとして、幾人もの魔術師を狩った綺礼は、彼らの行動は常人にとって解かり難いことが多いことを知っている。そんな経験と照らし合わせて見ても、衛宮切嗣の行動は異常だったと言っ他になかった。

彼の行いは大勢の敵を生み出すほどに苛烈であった。聖堂教会、魔術協会の両組織は、彼を一級の危険人物に指定したほどだ。

何を目的とするかもわからない人外の力。魔術を軽んじる姿勢。それが危険視されないわけもなかった。

その衛宮切嗣が、古き貴族であり錬金術師の家系であるアインツベルンに招き入れられたのは、もう十年近く前のことだ。

恐らくは聖杯戦争のための戦力として、アインツベルンは彼を引き入れたのだろう。それ自体アインツベルンには屈辱だったはずだが、既に三度の敗北を越えてきた彼らとしては、背に腹が代えられなかったに違いない。

そうして、切嗣は魔術師たちの世界から姿を消した。聖杯戦争の準備のためか、それだけの時間をかけなくては雇い主アインツベルンの信用を得られなかったのかは定かでないが、それ以降、切嗣はほとんどの活動を停止してしまった。

口の端にのぼらなくなった彼のことを、長い間記憶しておくことは不可能だ。多くの魔術師たちに恐れられた彼は、いつしか多くの魔術師たちに忘れ去られていった。

衛宮切嗣という男の情報はそれだけだった。

わかったのは、彼の半生が壮絶極まりないものであったこと。そして、切嗣は普通の人間とは異なる精神構造をしているであろうという、憶測のみ。

それは

まるで言峰綺礼のように

「ふむ」

切嗣の経歴は綺礼に非常によく似ていた。

理由も見せず、ひたすら自分をいじめ抜くかのような生き方。狂

ったようなその意識。まさに瓜二つであつたと言つていい。

違ったのは周りの理解だけ。理由を語らないことこそ共通していたが、綺礼は信仰の道を歩んだがゆえに善人と見られ、切嗣は外れた道を歩むがゆえに悪人と見られた。

二人を分けるモノはその一点だった。

綺礼は普通の人間というものの心がわからない。先天的に欠損を抱えた異常者が、健常者の気持ちを正確に把握できるわけがなかった。だが 欠落した魂を持つ者であるがゆえに、この欠陥だらけの人生を歩む男の心情が理解できた。

恐らくは、本人よりもより正確に。

過程の果てに結果が得られる。過程を見てその者が理解できないと言うなら、過程ではなく結果を見ればいい。

衛宮切嗣が関わった争いは全て沈静化し、彼が狙った魔術師は、そつとうの人間に犠牲を強いていた。

仮に、切嗣が戦う理由が戦いの中ではなく戦いの外にあつたとしたら。

「もしこの男の目的が、戦いを早期に終わらせることで、犠牲を少なくすることにあるのだとしたら」

……辻褄は、合う。

少々強引だが、彼の行動の動機、その説明ができてしまう。

だが、ここまで命を燃やし、ここまで滅私することが、はたして人間に可能だろうか。自身の私欲を満たすでもなく、課せられた責務を全うするでもなく、ただ人を救い続けることが本当にできるだろうか。

それはまるで冷徹な殺戮機械である。人間を救うために人間を犠牲にし、矛盾を押し生きているなど人であれば耐えられない。

なんの根拠もなく、なんの確証もない。どころか、さらなる矛盾を呼び起こす妄想じみた推測。それでも綺礼は断定する。

この男の望みは世界の変革だ。

破綻した理想は綺礼と同じくするモノであり、だが、致命的に同朋ではなかった。男には初めから傷しか存在しておらず、だからこそ一つも傷を負わない。

つまりは 彼も綺礼と同じ破綻者だ。そう、綺礼は直感していた。

もし、綺礼の仮定が的を射ていたとすれば。

「信仰もくてきがないなどと、とんでもない。この男は誰よりも、世界かみに仕える者として完成している」

そう、恐らくは自分よりも。

口元に浮かんだのは笑みなのか。綺礼は愉快でたまらなかった。どうしてこんなにも笑いがこみ上げてくるのか自分でもわからなかったが、とにかくこの男のことを考えれば考えるほど愉快になった。

これほど愉快なのは、初めて自身の歪みを受け入れたあの日の絶望以来 いや、もしかすればその時以上の愉悦ではないか？

この感覚は、そう、ある女に目の前で死なれた時に芽生えた感情、その時に覚えた嫌悪。綺礼が自らに抱いた感覚に似ているのではないか。

言峰綺礼は笑いを噛み殺すことができずにいた。笑いなどという行為自体、彼にとっては珍しいことだ。慣れない行為ゆえに止めることができなかった。

いや、恐らく綺礼は喜んでいるのだろう。喜びを感じるからこそ、笑いが止められないのだ。

そうと気がついた綺礼は今度こそ声をあげて笑った。防音設備の行き届いた彼の私室は、外に声を漏らすことはなかった。

衛宮切嗣は、全てを得るために、人としての全てを捨てたのだ。綺礼が心底求めたモノを、不要なモノとして捨て去ったのだ。

知ってしまった以上は感情を抑えることができなかった。人としての全てを得ようとして、何も得られなかった綺礼とは違う。正反対でありながら同一。綺礼と同じ異端の存在でありながら、まったく逆方向に歪んでいる男の存在を。

……その激情はどれほどのものか。綺礼が懐いた渴望のすべてを否定した男の存在を、どうして赦すことができるだろうか。

まだ見ぬ相手との邂逅を想像するだけでこれほど心躍るなど、綺礼にとって生まれて初めての経験だった。

「今日という善き日に。この出会いを用意してくださった、我が主に最大の感謝を」

その口は三日月のようにカタチつりあがり、憎悪の笑みを浮かべたまま、綺礼は腕の令呪に想いを馳せる。

妻を失った時、治癒魔術を学びたいと思い、魔術に理解のあった

父の紹介で時臣の弟子となって　それから僅か数ヶ月で現れた令呪の兆し。この呪いが綺礼の身に刻まれなければ、衛宮切嗣を知ることなどなかっただろう。ともすれば、これは聖杯が綺礼のために演出した舞台なのではないかと思えるほどだ。

三年も昔のことを思い出す。あの日、綺礼の腕を見た時臣は慌てるでもなく「ソレは聖痕だ」と言った。今にして思えば、遠坂に連なる者として綺礼が令呪を得ることを、時臣は見越していたのだらう。

願いを持たぬ筈の自分が、何故これほど早期に聖杯に選ばれたのか。そう悩んだ時もあったが、今となってはどうでもよい。

確かにコレは聖痕だと、綺礼は今まさに確信していた。

綺礼は英雄王に蹂躪されることのなかった年若いワインを開けると、グラスに注ぎ、一人静かに祝杯を挙げた。

「聖杯は私の物だ。自らの持ち物を取りに来て何が悪い？」

「ふざけたことを。貴方はそのような英霊ではない」

という五次の会話から、少なくともセイバーはギルから「聖杯は私のだ」等の発言を聞いたことはないと推測し、ギル様の聖杯戦争参加理由をこうしてみました。

本作言峰は自分の歪みは判ってるけどイマイチ割り切れてない男として書きます。

なんか切嗣への理解力がスゲエことになってますが、私ごときでは「互いに同類を無視できなかった」なんて関係はこのくらいしか書けないのです。

小鳥の鳴き声に目を覚ますなど、切嗣には何年ぶりのことだろう。戦いからしばらく離れ、アインツベルンの城で過ごしていたころも、小鳥の囀りをついぞ聞いた覚えがない。

それは分厚い外壁が外界の音を遮断していた結果なのだが、あの閉鎖的な城であれば小鳥が寄り付かなかったとしても不思議ではないかと、切嗣は起きがけの回らぬ頭で考える。

朝の到来を告げるかのように太陽の光が瞼を差す。廊下側から差し込んだ朝の太陽光は、真昼のように暑いものではないが、その眩しさは変わりが無い。布団も敷かず柱を背もたれにして、畳に座りこむようにして眠っていた切嗣はようやくやく目を開く。

衛宮切嗣にとっての聖杯戦争初日は、抜けきらない倦怠感と共に始まった。

ぼうつとする頭を押さえるよう、気だるげに額に手を当てる。起きてしまえば、後は即座に行動を開始することができる彼だが、今日はどうも勝手が違うようだ。

本人もいつもとは違う自分の体に多少戸惑っていた。まるで全身の血圧が、一晩で平常以下にも下がったように感じられるのだから無理もない。

この不調の原因ならばハッキリとしていた。英霊召喚の反動である。

さしもの百戦錬磨の傭兵も、強大な魔術の代償には耐えきれなかつたらしい。ある程度の睡眠で済ませるつもりが、深く熟睡してしまっていたようだ。

およそ優秀な魔術師であれば、ここまで疲労に支配されることはなかつただろう。男は自身の未熟さを反省する。すでに完成された切嗣であったが、目指すモノのため、どこまでも自分を責め立てるその姿勢は、永遠に変えようがないものだ。

いまだ完全な覚醒に至らぬ頭に、どう喝を入れたものかと逡巡する。

と、

「おはようございます。マスター」

凜とした声が切嗣の耳に届く。まるで冷水を浴びたかのように男の意識は眠りから目を覚ます。

傍らには座して主の起床を待っていたらしい従者の姿。アサシンを難なく倒したとは信じがたい、少女の姿の英霊がそこにいた。

襲撃者を撃退したときの白銀の鎧は未だ健在。これがこの国の礼節と捉えているのか、正座する姿が妙にサマになっているのが印象的だった。

彼女は主の命を守るため、常に切嗣の近くにいるつもりのような特になんの命令もしていないのだから、そのような行動を取るのも当然だろう。その程度は戦士として当然の心構えだ。

切嗣はセイバーの言葉に返答などしない。彼はイチイチ挨拶を交わすような関係を、サーヴァントに求めているわけではない。

まるで無視するかのように、自身のコンディションを確かめるよう頭の中を整理する。

そんな主の態度を少女は気にしていないようだった。彼女が挨拶をしたのは単に礼儀として行っただけだろう。マスターが自分をどう思っているかと、自分は自分として、彼の従者として振る舞うだけ。セイバーの意図は分かりやすいほど明確だった。

「改めて、名乗らせていただきます」

少女は片膝をつき、臣下の礼にのっとり宣誓する。

「我が真名はアーサー、クラスはセイバー。この聖杯戦争で御身を護る役割を与えられた者。聖杯を手にするまで貴方の剣となり、立ちほだかる敵を討ち滅ぼしましょう」

誓いとは騎士にとって絶対のもの。

契約とは魔術師にとって絶対のもの。

約定を守り抜き、必ず果たさんという覚悟と決意を告げる行為。

このサーヴァントは聖杯戦争に参加する騎士としての想いを、未だ名も知らぬマスターに委ねたのだ。

が、それにすら切嗣は応じなかった。従者の覚悟に報いるつもりなど毛頭ないようだ。

答える必要もないと切嗣は考えているのだろう。彼にとってサーヴァントは勝つための道具だ。慣れ合い、友情を育むために英霊を召喚したのではない。それ以外の立場で触れあうことなど、彼の頭には入っていない。

それは悪しき貴族主義のように、あくまで主の下僕に過ぎない道具同然の存在と見下しているというワケではなく、単に戦う武器以外の用途など興味がないだけの話。

彼が欲しているのは、ただ必要な時に手を取り合うだけの協定関係。切嗣は沈黙することでそれを示して見せた。今後のことを考えた上での対応だった。

共に手を取り戦う以上、人間としての信頼関係を築き上げることが勝利のために必要なモノと考える者もいるだろう。

切嗣はそうは考えない。彼にとって重要なのは、戦力としての性能である。彼にしてみれば人間としての機能など二の次　むしろ余分なモノでしかなかった。

主と臣。繋がりはどうあれ、そんな関係は彼には必要がないのだ。

これが日常の中であつたなら彼もここまで徹底してはいない。基本的にフェミニニストである切嗣は、セイバーを女性として扱い、人間としてのコミュニケーションも取つたことだろう。だが今は戦いの真っ只中　。そういった場合、人並みのつき合い方などは求めないのが切嗣だ。

そんな切嗣の在り方は、少女にとつても望ましいものだった。

主にあえて語る気はないし、わざわざ話す必要もないので伝えていないが、生前の彼女は人間としての情を一切捨てさつた王であり、自らをも手段の一つと見た騎士だ。

命を惜しむ心など少女はとうに捨てている。サーヴァントは戦うための道具と割り切っているセイバーは、マスターの態度を不当なモノとは思っていない。むしろ、いまさら人として扱われたところで、きまり悪さを感じるだけだろう。

礼節も弁えてはいるが、それとこれとは別の話。いざ戦時となれば戦士として冷酷に振る舞い、敵を討つためならどんな危険な状況にも斬り込んでいく覚悟があつた。実力を過信するからではなく、

首一つになろうと勝利を得れば良いと考えているためだ。

彼女にとって切嗣の在り様は、共に戦う相棒として理想的だったと言っている。セイバーもまた、切嗣とは目的を果たすための要因としてだけ接するつもりであった。主従として忠誠の契りを果たそうと、そこに人の情を絡ませるつもりはなかったのだ。

衛宮切嗣はセイバーと近しい属性を持っているわけではなさそうだが、戦略的な相性で言えば彼女に最も相応しいマスターだ。両者とも感情的に契約者と接するつもりはなかったのだ。

この先も恐らく特に会話もない関係が続くのだろうが、それで少女は構わなかったし、切嗣もそんなことは気にも留めていない。図らずも即席コンビの在り方は上手く噛み合っていた。

切嗣は手元にあつた携帯食料を口の中に放り込み、噛み砕いて飲み込むと、立ちあがって外へと向かう。未だ回復しきっていない身でありながら、彼はすぐにでも戦いに赴くつもりなのだ。

もしもこれが未熟なマスターの行動ならば、セイバーは彼を止めただろう。しかし切嗣は、少なくともセイバーの見る限り優秀なマスターだ。なにも無謀から動こうとしているわけではあるまい。

彼は自分の体を気遣うつもりがないだけのこと。

昨夜の時点で、マスターが多忙を極めていることはセイバーも知っている。切嗣は召喚による疲労を気に留めることなく、セイバーには理解不能な機械類の数々を相手に睨めつを続けていたのだから、気がつかないことはあり得ない。何度も体を休めるよう主に声をかけたのだが、まったく聞こうとはしなかった。

このマスターは効率を最優先している。

我が身を顧みずに、否、我が身すら道具とすることで、戦いに勝ち残ろうとしているだけの話。

そうと気がついて以降、セイバーはマスターへの忠告をやめた。蛮勇や無謀ならば口を酸っぱくして注意するところだが、戦略として主がその身を気にせぬというなら、それに従った上で あるいは主の思惑さえ超えて、マスターを護りきるのが彼女の役目である。

セイバーから見た主は、まさに“魔術師”だった。

探究者としての姿を見ていないが、少なくとも彼は合理主義者であり、勝利以外に関心を見せる様子が無かった。英霊であるサーヴァントすら、礼装と同じようなモノと捉えているようだ。

召喚当初、アーサー王である彼女が女性であったことに大いに驚いていたようだが、そのときもせいぜい僅かに目を丸くしたくらいで、驚嘆を露骨に晒すようなことはしなかった。

目的以外に興味はなく、躊躇いも揺らぐような脆さも無い。それが、今のセイバーの眼に映るマスターの人物像だった。

これから共に戦っていけば、少しは違った姿も見られるのだろうか。そんな他愛ないことを考えるセイバーを一瞥することなく、切嗣は玄関先に歩いていく。

行くぞ、と、一声かけることもしないのは、そんなことをしなくてもサーヴァントが主の傍を離れることがないことを理解しているからだ。従者を道具とするマスターの徹底ぶりにやや呆れながらも、しかしそのまま彼を外に出すわけにはいかない少女は、いまだ名乗ることもない主に話しかける。

「マスター。外に行くことは止めません。しかし、その前に伝えなければならぬことがありますので聞いてほしい」

切嗣は振り返って、背後の英霊の顔を見る。

この時代にはあまりにも不釣り合いな騎士甲冑を纏う彼女を、このまま連れて歩くのは憚れる。切嗣は当然、少女が霊体化をするものだと考えていた。そうすれば魔力を抑え、姿を隠すことができるのだから、それを忘れる英霊はおるまいと思っていた。

だが思い返してみれば、切嗣の従者は昨夜から霊体となる気配がまったくなくない。

「私は正規の英霊たちと違い、いまだ英霊になりきってはいません。詳しい説明は省きますが、特殊な契約を世界と結んでいる。サーヴァントとしての縛りこそ他の英霊たちと変わりませんが、私はいまだ肉を持った身なのです」

つまり、それはどういう意味か。

切嗣はこの時点でなにか嫌な予感がしていた。こんな時は戦場で培った第六感がうらめしい。

剣のサーヴァントは予感を裏切ってはくれず、やや申し訳なさそうな顔で話を簡潔に纏めてくれた。

「率直に言いますと私は霊体になれない。陰ながら貴方を護衛することは、私には不可能です」

実にシンプル。

予想だにしていなかった問題との直面に、切嗣は思わずうなづきました。

例えば、狙撃という手段は魔術師に対して有効か否か。

効率的に人を殺そうと考えるなら、往きつく手段は結局のところ『暗殺』である。

とりわけ、敵の意識の隙をつき、相手が身構えるよりも早く斃そうと考えるのであれば、『狙撃』ほど優秀な殺傷方法は存在しないだろう。

では相手が人ならざる術を用い、人ならざる条理に生きる魔術師であった場合、果たしてその手段が通用するのか。

放たれた銀の弾丸は、本当に魔を打ち滅ぼすことができるのだろうか。

結論から言うとソレは是だ。

なぜなら魔術師は基本的に戦闘者ではなく、ただの学徒に過ぎないからだ。

つまり彼らが日常の中で戦や暗殺に備えることなど、ほとんどないのだ。

いかに身を護る術を学び、敵を殺す術を知ろうとも、しよせんは戦場に立ったことのない素人。鋭いナイフや強力な銃弾といった攻撃方法も、魔術の力で対処することは可能だが、不意を打たれては、それも難しいということだ。

まずもって普通の魔術師は命を狙われる理由が無い。よしんばあったとしても、あまりに道を外れ聖堂教会の『異端狩り』に狙われるか、協会の規定に大きく逆らった場合ぐらいなもの。

危険に対する防衛意識は一般人とそう大差ないのが魔術師の普通だった。出し惜しみ主義の彼らにあって、常日頃から暗殺を警戒するような立場の魔術師は稀有な存在と言える。

では　そこに聖杯戦争という前提を加えればどうなるだろう。

むろん、答えは是から否に変わる。

儀式とは言え“戦争”の名を冠している。いかに素人と言えど、最初から“戦い”に赴いていることを意識すれば、誰しも警戒を強めるのは当然だ。

魔術の研鑽に没頭するあまり近代機器に疎い彼らは、優秀な武器の類が新規に開発されようとも、その存在を一般人以上に知らない。そういうことに関しては、そこいらの軍事オタクのほうがよほど詳しいものだ。

が、それはあくまで興味の薄い知識に対し“疎い”というだけであって、何の魔力を感知もさせない数百メートル先から攻撃を受ける可能性を考慮に入れないという意味ではない。

魔術師は決して馬鹿ではない。彼らとて遠距離から狙われることがあるなど百も承知。ましてや魔術師カセラの扱う礼装の中には、魔力殺しや気配遮断のマジックアイテムも存在しているのだから、予め戦いが行われると理解していれば、それを忘れて魔力の気配感知にのみ集中する者はいないだろう。

仮に、それらを下賤な手法として見下し、魔術による正々堂々とした決闘こそが英傑にあるべき姿とする者も、今回だけは敵の不意打ちを警戒せざるを得ないと断言できる。

アーチャー、アサシンが存在するからだ。

普段は不意の襲撃を恐れぬ者たちも、さすがにこの中で警戒を怠

ることはない。

遠距離攻撃に秀でるアーチャーのクラス、気配遮断を有するアサシンのクラス。人よりも高い処にまで昇華した彼らが、一体どのような暗殺技術ほくを以って襲ってくるのかは見当もつかない。なにも知らず巻き込まれた素人ならばともかく、聖杯戦争の知識を持って参戦した者たちが、物陰からの攻撃を警戒しないハズはなかった。

そして魔術師の警戒が薄いものであったとしても 英霊たちが控えている以上、マスターの暗殺は容易に行えるものではなかった。実のところ、切嗣も英霊の能力を舐めていた部分がある。だが昨夜の攻防と、従者のステータスを見て以来、その考えは改めることにしていた。

英霊たちが側に張りついているならスナイプは防がれる。例えば切嗣の手駒となったセイバーほどのステータスならば、四キロ先から二秒かからず飛んでくる矢も防ぐ。それだけの身体能力を持たない英霊とて、戦場に生きた英雄である以上、狙撃手の存在を忘れることはない。

むしろ個人が所有しうる範囲の武器で狙撃など行つては、自分の居場所を教える結果にしかならないだろう。もしも隠れて攻撃することを選択するなら、それは避けなくてはならない。

成功したところで、その手が使えるのは一度か二度。見られる可能性を考えればそれ以上は望めなかった。せつかく用意したワルサー狙撃銃であったが、メインではなく補助として活用することになるだろう。

とどのつまり、より高い暗殺能力を持つ英霊たちが参戦すること

が判りきっている戦いで、人の手による『暗殺』を選択するのは下の下。敵が無防備であることを前提に戦略を立てるのは、それこそ莫迦のすることだ。

そこまで思考した辺りで、切嗣は煙草の煙を吐き出した。

切嗣はセイバーの普段着を用意するため、駅前の女性服専門店にまで赴いた。従者が霊体となれないのならば、こういった出費も致し方なかった。

本来なら既にこの地に滞在している切嗣の相棒たる女性に服を取ってこさせるのだが、あいにくと彼女は彼女で忙しい。切嗣の指示を実行すべく分刻みのスケジュールで奔走しているため、余計な用事で呼びつけることはできなかったのである。

とすれば、この程度の問題は切嗣自身で解決するしかない。

ちなみに、騎士甲冑のまま街をうろつくわけにはいかないため、ここまでセイバーには切嗣の予備の服を着せてきた。

明らかにサイズが合わない背広に無理やり身を包んだ金髪の少女が、コートを羽織ったうだつの上がらないサラリーマン風の男と共にある姿は、それはそれで目立ってしまったのだがやむをえまい。

女性店員に「似合うモノを何着か適当に見繕ってくれ」と頼んだので、切嗣は外でこうして待っている。女性モノの服になど、とんと疎い彼は、一般的な女性の服を選ぶことも面倒だったのである。

セイバーが女性店員の着せ替え人形になっている間、切嗣は店の外で煙草をふかしていた。セイバーの容姿が気に入られたらしく、

そうとうに時間がかかっている。

いや、女の買物というものはこんなものだ。時間がかからないほうがおかしい。

そんな益体のないことを考え続ける頭を、強引に戦士のモノに戻しつつ煙を吐き出した。

切嗣が熟思しているのは、今後の戦い おもにマスターたちの殺し方についてだった。すでにいくつかの算段は立てていたが、最終確認とばかりに、頭の中で整理させていた。

聖杯戦争の性質上、今後はマスター対マスター、サーヴァント対サーヴァントという、一対一×2のカタチが多くなることは予想できた。

サーヴァントが敵サーヴァントを抑え、マスターが敵マスターを討つ。それこそが聖杯戦争の定石だからだ。

英霊を使役する者同士では、これ以外の戦い方は存在しないのだ。サーヴァントを無視してマスターを狙おうと、サーヴァントに阻まれることは自明の理。英霊エンレイの動きを手持ちの英霊ユウレイで抑えなければ、どんな状況でも後手に回することは間違いない。

倒しやすさで言えば、英霊よりも魔術師の方が下しやすいことは言うまでもない。競争相手を生かしておく意味もないのだから、早急に敵マスターを排除することは重要だ。

だが、それに頼り切るのは些か浅慮と言える。いかにマスターを排除しようと、残ったサーヴァントがまた新たなマスターを得てしまつては意味がない。魔術師などに頼らず、別の方法で魔力を得て生き延びようとする者もいるかもしれない。

仮定の話を広げるならば、異常な単独行動能力や、それに類する宝具を持つ英霊が存在しないとは限らない。生き延びたサーヴァントが主の仇を討とんと執念を燃やすことも、あり得ないことではないのだ。

むしろ、マスターを殺せばサーヴァントも倒しやすくなるし、再契約の危険はマスター側にもあるのだから、マスターも斃せねばならないことに変わりはない。だが、マスターを殺せば済むというのは、あまりに素人すぎる考えだ。

確実な勝利を望むならば、どうあってもサーヴァントは消し去らねばならない。最優先で排除すべきはマスターよりもサーヴァントなのだ。

それは保険などではなく勝利への最低条件。

そも聖杯とは霊長^{えいれい}最強の魂を吸収し、濾過した魂を純粋な“力”に還元することで、初めて本来の機能を発揮する。願望機として機能させるにも、最低で英霊5人分以上の魂が必要となる。

聖杯戦争の秘中の秘ゆえ、外来の参加者とサーヴァントはそのことを知らないが、アインツベルンによって聖杯の知識を与えられた切嗣はそのことを知っている。

そう、すべての敵を倒さなければ聖杯戦争は終わらない。敵を殺しつくすために切嗣は冬木に送り込まれたのだ。

サーヴァントと戦うのはサーヴァントの役目。霊体であるカレラにダメージを与えられるのは、同じ霊体か魔術だけであり、人より一段上の存在に昇華した英雄たちと戦うことができるのは、同じく人々に祀り上げられた存在だけ。

必要なのは、最強の魔術師^{マスター}殺しと、最強の英霊^{サーヴァント}殺し。

全てのマスターを根絶やしにし、全てのサーヴァントを駆逐する、最強の組み合わせ。

切嗣は今回あえて定石を外れるつもりはなかった。

彼の基本戦術は相手の隙をつくものだが、相手の戦力が読み切れぬ今の段階では奇策を講じるどころではなかった。敵を確認しなければ何も始まらない。今の時点では、迎撃と速攻に徹するつもりでいた。

ハッキリ言ってしまったって、戦闘となれば魔術師はそこまで脅威ではない。彼らが戦ごとに関して素人であることは前述した通りだ。

かつて魔術が『魔法』と呼ばれていた時代ならばいざ知らず、現代における殺し合いは、魔術より銃でも使った方がよほど効率的だ。

しかし英霊たちの実力はおよそ人間という括りで考えるならば規格外のモノであり、定石を守らねば勝つことは難しい。

それを覆す状況があるとしたら、主従共に立ち向かわねば勝てない英霊が顕れた場合だが、切嗣のサーヴァントを超える英霊など、それこそ大英霊クラスだろう。

切嗣は懐にしまい込んだキャラレコに手を伸ばす。

自らの戦力をたしかめるように、コートの上から撫でるように軽く触れ、たしかにそこに存在することを確認する。

セイバーは戦力としては申し分ない。能力といい、宝具といい、“真っ向勝負”を前提としたかのような性能は、あまり切嗣の望むところではなかったが、白兵戦においてアレ以上のサーヴァントなど、そうはおるまい。

ならばセイバーを運用していく上での切嗣の役割は、セイバーが敵サーヴァントと“真っ向勝負”ができる状況を作り出すことだ。

まさか霊体化できないとは予想外だったが、前途多難と嘆くほどのことでもない。それならそれでいくらでも手の打ちようはあるし、そもそも切嗣は姿を隠す気などない。

常に敵の奇襲を警戒することは精神を削る行為であるが、切嗣はその程度で疲弊するほどヤワではない。彼は一週間以上眠らずに精神を張り巡らせたことさえある。相棒もなく、切嗣一人で息を張り詰め続けたその時に比べれば、背中を預けることができる盾が存在する今の状況など苦痛の内にも入らない。

そしてそれは彼の従者も同様だ。

見た目が少女ではあるが、アレでも幾多の戦場を駆け抜けた戦士英雄である以上、その程度で根を上げるような無様は晒すまい。

セイバーは考えていた以上に切嗣と相性がいいのかもしれない。騎士というものは、どいつもこいつも正々堂々とする戦いを誉れとするものだと切嗣は思っていたのだが、どうもセイバーにその傾向は見られない。胸中ではそう考えているのかもしれないが、少なくとも不意打ちや多対一の状況も良しとする節がある。

少女は戦いに綺麗事を差し挟む気配を見せない。今まで切嗣が想像していた騎士像とセイバーの食い違いは、彼女が特別なのか、それとも切嗣がこれまで偏見を持っていただけなのか。

切嗣が思いだすのは、昨夜のことだ。

“マスターが私を信頼できず、更なる力を求めるのであれば従います。ですが、剣を持たぬ人間に傷を負わせることは私にはできない。その時は私に踏み入る代償に、その手の証を一つ頂くことになります”

アサシンを撃退した後、自分について必要最低限の説明を終えたセイバーが、最後にと加えた言葉である。

それは、武器も構えぬ敵を攻撃するのは嫌だ、などと言っているわけではなく、無関係の人間を襲い、魂喰いを行うことは許容できぬという発言であった。

英霊たちは霊体である以上、他者の魂を喰らうことで戦力を補うことが可能だ。

だが好き好んでそこまでする英霊は少ない。拒むのも当然と言えば当然。それは自身の霊格を貶める行為に他ならないのだし、人食いを良しとする者は普通いない。

そこまで望むのならば令呪を使え。道具であることは受け入れているが、譲れない一線も存在する。そう、彼女は告げたのだ。

逆を言えば、それ以外なら令呪なしでも受け入れると宣言したのと変わらない。例えばマスターに体を求められたなら（切嗣にそんな気はないが）簡単に応じることだろう。

彼女は自分のことを戦士という用途で見ている。自分のことを一個の人間として見ていない。女であることも二の次なのだ。

先手は打たれてしまったが、元より切嗣はセイバーに魂喰いなどさせるつもりはなかった。剣の英霊のステータスはどれも一級品だ。今のところ、わざわざセイバーの戦力を底上げする必要はなかった。

それでも戦略上必要なら、どんなことでもさせるつもりではいた。それを拒まないと言うなら、セイバーは切嗣にとっては最高の武器として機能する。それは衛宮切嗣という『暗殺者』にとって、従者に求める最低限の条件だった。

だが。

衛宮切嗣という、なんの装飾もない『一人の人間』にとっては、セイバーの在り方は不愉快極まりないものであった。

顔や態度にこそ出さないが、正義の味方を目指しただけあって切嗣はお人よしだ。皆が幸せであつて欲しいと考える切嗣にとって、自分の幸福を捨てた者というのは、どうにも見ていて胸糞が悪かった。

自己の傷を顧みず敵を討ち、護ると決めたモノを護る。それがセイバーの基本思想だ。生来のモノか、国一つを任されたが為の生き方は定かでないが、切嗣はそれを受け入れた少女も、生前に一国の重みを背負わせた騎士たちも気に入らなかつた。

セイバーは自己犠牲の塊なのだ和理解した時、自分のことは棚上げにして、切嗣は従者への怒りを募らせた。

イラ立ちを抑えるように、火のついた煙草を足で踏み消す。人通りが少なかつたのか、都合のよいことにマナーを注意する者はいなかつた。

同族嫌悪と呼ぶに相応しいその感情は、しかし時を重ねることに消えていくのだろう。

切嗣は魔術師殺しとして完成している。そのような人間的感情にいつまでも囚われ続けることはあり得ない。

ガラスの向こうで、従者が着替えを終えたことを察した切嗣は、支払いを済ませるべく店の中へと入っていった。

04 二日目・朝 - 剣の主従1 - (後書き)

またも説明回。

いつたい何時になつたら話が進むんだこの作品。

切嗣が夜毎に自分の命を釣り餌に使つてたことを匂わせる発言が原作にあつたため、本作はそういう話でいきます。理屈はこじつけなんでツツコまない方向で。

セイバーの考え方はstay/night本編中の本人の台詞、「サーヴァントは戦いの道具である」「サーヴァントは傷を負うモノであり、それを恐れて戦いを避けるのは許さない」などの発言を参考にさせていただいております。

さらに原作での彼女の歪みに合わせたキャラとなります。

あとタイトルで二日目とか言ってますけど、実は日付変わってないので厳密には一日目ですが、夜朝で一日として数えるモノと思つてスルーしてください。

人影はただ酒を飲み干すことに夢中になっていた。

本人としては問題のない量の酒をたしなんでいるだけだったのだが、異様に早いペースでグラスを空けていくその姿は、傍から見れば自棄酒以外のなにものでもなかった。

普段なら彼の体を案じた使用人が部屋の外から事務的に声をかけるところだが、暇を与えられた使用人たちは早々に陰気な屋敷から避難していたので、彼を止める者は誰もいない。

例え誰に静止されたところで、心身ともに疲労しきった彼は聞く耳を持たなかっただろう。

彼の一人息子である慎二は遊学という体で国外に出した。人影を除けば、あと屋敷に残っているのは彼の父だけだが、今はどこかに出かけているのか気配はなかった。

わずらわしいモノは一切ない。自分の城の中、人影はやつと訪れた自分だけの時間に没頭していた。

夜の闇が刻一刻と深まっていくのが、なぜか今宵の彼には目を瞑っていても感じ取ることができた。ただでさえ全体的に暗澹とした薄暗い間桐邸まきしやの中、机上の明りしか点いていないその一室は、さらに陰鬱とした雰囲気を出している。

男の瞳には、お世辞にも生気が宿っているとは言えず、死んだ魚の目とも言うってしまうのが相応しい。間桐の血族の男たちが総じて陰気であることを思えば、それも不思議ではないことなのか。

間桐鶴野^{ひやくや}は今日も酒びたりだった。

静まり返った暗闇の中、おぞましい人外の異能を持つ者たちが身の毛もよだつような殺し合いを演じている。そのことをなるべく意識しないよう、私室に籠り切った鶴野は酒瓶を呷り続けた。

鶴野はかつて聖杯戦争の基盤を敷いた“始まりの三家”の一角である間桐の後継者だった。間桐の実権は彼の父が全て握っていたのだが、それでも彼が今代の当主という立場であることには変わりない。

……そう、当主は自分であり、遠坂から譲り受けた小娘を次代の器として教育するという、重要な役目を担っているのも自分なのだ。父である間桐臓硯の言うとおりにしているのだから、自分が間桐の正当だ。

彼は一人、そんなやり場のない感情を持って余っていた。

由緒正しい間桐家の家督を継いだ嫡男である彼は、本来であれば今回の聖杯戦争に当事者の一人として参加するはずだった。彼は魔術基盤としてこそ落ちこぼれてはいたが、それでも時が迫れば、間桐の血筋として令呪を授かっていたであろう男だった。

それが責務を果たすことなく、こうして酒に飲まれる自分を享受していられるのは、弟の雁夜のおかげだった。

兄に代わり自分が今回の儀式に臨むと、そう口にした雁夜に対し、最初に抱いたモノは疑問だったように鶴野は思う。

長らく間桐家と断絶状態にあった雁夜がなぜ今になって戻ってきたのか。

まっとうな人間としての生を望むことができた弟が、どうして今になって人知を越えた殺し合いに参加しようなどと考えたのか。

兄を見捨て家を出ていった弟に、いまさら兄を助けようなどという殊勝な心掛けがあったわけでもあるまい。鶴野には雁夜の翻意が理解できない。理由を知りたいとも思わない。

が、雁夜が自分の代わりにあんな姿になってくれたことは、いくら感謝しても足りるまい。

弟はまさしく鏡だ。歯車がなにか違っていれば、あのように改造されたのは鶴野の方だったかもしれないのだ。

自分が弟のような醜く狂おしい姿にされていたのかと思うと、考えるだけでゾットとする。間桐家の現当主という立場にいる鶴野ではあるが、間桐ソウケンの黒幕の気まぐれで玩具にされたとしても、彼には逆らうだけの力も勇気もありはしない。

化け物のようにされた弟も気味が悪かったが、その従者はそれ以上だ。雁夜が召喚し、契約した英霊の姿は、思い出すだけで寒気がする。いかに魔術師として凡才以下の鶴野であっても、アレがどれほど強力な霊体が判別できないほど無能ではない。周囲の者を震え上がらせる威圧感もさることながら、あの狂気を連想させる漆黒が、本当に英雄と称せられた存在なのか疑わずにはいられなかった。

急造のマスターである雁夜のサーヴァントでさえアレなのだ。他の英霊がどれほどのモノかなどとは、想像もしたくない。あんなモノがあと六体もこの街をうろつき、今なお死肉を喰らい合っているとするならば、今の冬木は真正銘の魔界だろう。

恐怖を知るまっとうな人間ならば、正気でいられるはずがなかった。

参加者たちが平静な精神を保っているとは到底思えなかった。鶴野はこんな戦いに好き好んで参加するような趣味はない。殺し合い

など御免だし、微々たる魔術回路しか持たぬ彼が怪物たちと争うなど、自殺行為に等しいものだ。

もし、自らすすんでこの戦に関わろうとする者がいるとしたら、それはきつとまともではない。

自ら死地に赴くなど、人間の意識ではない。

渦中にいるであろう雁夜とて、鶴野にしてみれば狂気を患った愚人である。感謝の意はあれ同情するつもりは欠片もなかった。勘当され間桐とは無関係となった雁夜が、なんの栄光を夢見て戻ってきたのかは知らないが、そんな相手にかける情けがあるうハズがなかった。

自分の方が人間的だ。こうやって泥酔に甘んじている自分は、恥じ入ることなど一切ない。人間として当然過ぎる態度でいるだけだ。そも自分には当主という立場を守る義務があり、命を軽んじることはできないのだ。弟のような奇人こそ、忌むべき逸脱者なのだ。

自らに言い聞かせ、弟を嘲りながら、また一口、鶴野は胃の中に酒精を蓄積させる。

鶴野が戦いに背を向け、アルコールという安易な逃げ道に走ったのは、仕方のない事だったのかもしれない。

確かに鶴野も魔術師にカテゴライズされる男である。しかし彼の思考は、魔術師としてはあまりにも未成熟だった。

自己を透明化し、目的のため意識を世界の外へと向ける、魔術師ならば当然の意識を彼は持ち合わせていない。

人の身をより高みへ昇華させんという渴望は、鶴野には持ち得ないモノ。いまだ人間らしい考え方を持つ鶴野にとって、魔術師たちの理念は理解の外にあるものだったのだ。

魔道の力とは、選ばれし者が持つべき異能であり、魔術師とはそれを繰る者だ。

思考の根本にそのような選民的思想を持つ彼が、魔の業ワザを使い非道に手を染めなかったのは、単に師の教育不足のおかげである。

弟にすら才能で劣る彼に父も期待が薄かったと見え、せいぜい助手として機能する程度の知識しか与えてはいない。その程度の力しか持たない鶴野が、あえて道を踏み外そうと考えることはなかったのだ。臙硯に命じられた以上の行動を、彼がすすんで起こしたことはなかった。

魔術とは上に立つ者の力であると思いついて鶴野は、それを使いこなす才と知識が足りない己を卑下している。

それゆえこの男の劣等感は、ただの落ちこぼれである以上に重かった。影の党首である臙硯の傀儡と成り果てた自分を、心の奥底でどれほど蔑んだのかもわからない。

かつて聖杯を求めて久遠の探究に乗り出した偉大なる血脈の末裔を自負する鶴野ではあるが、真実そのことに誇りを抱いているわけではなかった。才もなく、己が使い物にもならないことを自覚している彼にとっては、それは自分を保つ唯一のアイデンティティだったのだ。

自虐的な想いが、思考を捻じ曲げ、矜持を曇らせる。

自身こそ間桐の正道を歩んでいると、間桐の相談役は今回の聖杯戦争で様子見を決め込んでいたのに、勝手に場をかき回した雁夜の方が道を外れているのだと。

そうやって自己を正当化させなければ、彼の精神は今以上に疲弊していたことだろう。

冬木の霊脈は間桐の血脈には馴染まなかったらしく、代を重ねるごとに間桐の血筋は魔術師として劣化している。鶴野の息子は、とうとう魔術師の素養である魔術回路を一切持たず生まれてきた。まっとうな後継者を残すことさえ、鶴野にはできなかつたのだ。

未だその手を血に濡らしたことの無い鶴野は、本当の意味で自身が背負う責の重みを知らない。名目上は間桐の当主という立場にありながら、結局のところ、鶴野もしょせんは父臓硯の道具の一つにすぎなかつた。

魔道の担い手としても、道具としても半端な自分。自立することさえできず、犬として飼われ続けることさえ不相応。そんな人生に一体どんな誇りを抱けばいいと言うのか。

酒に耽溺する以外、彼のよりどころはなかつたのだ。

聖杯奪取という義務を果たせぬ自分から、聖杯戦争に参加する資格すらない自分から逃げていた。

……己が非才を知りながら、そのことを意識しないよう生物の本能を言い訳にして。

鶴野はグイとグラスの中身を体に流し込む。

もう何杯目を喰らったのかもわからなかつた。普段ならこれだけ飲めば酔い潰れて眠ってしまうと言つのに、今日に限ってなぜ眠りに入り込むことができないでいるのか。

早く昏睡に落ちてまどろみの中に身を沈め、夜明けまで睡眠という安息に心を癒したい。イライラとしながら、鶴野は新たに酒を注ぎつとし。

轟音と地鳴りと、頭の中に鳴り響く鐘の音にそれを阻まれた。

衝撃に鶴野の腕はテーブル上のワインクーラーをぶちまけてしまふ。なにが起こったのかすぐに察することはできなかった。

頭に響く音の正体は、間桐邸宅にしかけられた警鐘であった。魔力を有した侵入者を探知すると、臓硯や鶴野といった間桐の血族のみそれを知らせる魔術的な警告である。

それは、何者かが正面切って間桐の屋敷に押し入ったことを示すものだった。

これが起動することは、鶴野が生きている間にはありえないだろうと思っていた。敵対者の本拠地に真正面から突入してくる馬鹿など本来いるはずもなく、仮にいたとしても、至る所に仕掛けられた屋敷の魔術に侵入を阻まれてはいるはずなのだ。

いったい何者がこんな真似をしたというのか。鶴野はパニックに陥った頭でそのことを必死に考えた。そんなことよりも、状況の把握や相手の確認、または逃げ出すなど、いくらでもすることがありそうだが、そんな余裕は今の彼にありはしなかった。

そして私室の扉が乱暴に開かれる。

侵入者と思しき影が二つ、鶴野の部屋に入ってくる。

ソレは凶悪な怪物を連想させた。

不気味な男が前を歩き、その後ろには、付き従うように可憐な少女が歩いている。それだけでしかなかったのに、何故か鶴野には、二人の姿が大鎌を振り上げた死神に見えた。

汚れも皺も顧みずに着古したコート。手入れの足りない無精髭。風体だけを見比べるならば、この部屋の主よりもなお、場末の飲み屋で酔い潰れる酔漢に見えるだろう。

しかしその鋭い眼光がそんな印象を裏切っていた。アレが殺人者の目というものなのか。鶴野はその男の眼力だけで委縮していた。

傍らに控える小柄な少女は、カジュアルな服装である。着飾ることより機能性を優先したように見受けるが、それでも可愛らしく纏まっているのは、服を選んだ者の趣味が多分に反映されているのだろう。

そんな少女が無表情に男に従う異様な様は、何故かひどく自然な姿に見えた。

あらゆる意味で全く不釣り合いなこの二人が警報を作動させたことに鶴野はすぐ思い至る。間桐邸を襲撃した手下人、衛宮切嗣とセイバーのサーヴァント。彼らが最も危険なマスターと使い魔であるということ、不幸にも間桐鶴野は知らなかった。

間桐の屋敷に突入する決断をしたのは、もちろん切嗣であった。

魔術師の拠点にトラップが仕掛けられていることなど先刻承知。確実なのは一つ一つを除去していくことだが、それは悪戯に時を使うだけであり、相手に侵入を知らせてしまう危険があった。

間桐ほどの工房ともなれば、安全に侵入するだけで半年の時を費やすだろう。魔術師殺したる切嗣の技量をもってしても、下手をすれば半日以上の時を費やす。

どれほど静かに解体作業を行おうと、結界の突破に時間をかけていては、いずればれる。自分の拠点に踏み込まれてまったく気がつかないマヌケは存在しない。そんなお粗末な仕掛けでは、なにも仕

掛けられていないに等しいのだ。

故に、どうせ襲撃が露呈するならばと、正面きつての突入を試みたのだ。

なにも無謀から行動したわけではなく、切嗣には切嗣なりの算段があった。

幸いにしてセイバーの対魔力はAランク。これは現代の魔術師ではともすれば神代の魔術師ですらセイバーを傷つけることができないことを意味する数値であった。

過去の聖杯戦争で神代レベルの魔術師が召喚された記録はなく、また、これほどの対魔力保持者を殺すことができる魔術師は現代に存在しない。

冬木市中から魔力を集めればその限りではないが、今のところその気配もなく、そんなことを誰にも気づかれないよう短期間で行うのは、『魔法使い』クラスの術者でも無理な話だ。

現時点で、魔術師がこの盾を突破することは不可能。事実、ここに到達するまでにいくつかの魔術トラップを起動させたが、少女の身に届くモノは一つもありはしなかった。

重ねて、切嗣にはセイバー召喚のおり触媒とした“切り札”がある。セイバーとの契約がある限り、“それ”を持つ切嗣は傷を負ってもすぐ回復する。

ならば守りに徹する戦いを行う必要はなかった。

対魔術師戦において、今の二人は最強の組み合わせ。戦いを早期に終結させようと思うなら、それを利用しない手はなかった。

元より命など勘定に入っていないのだから、最強の盾を構え、最強の鎧を持つ以上、護りを気にするつもりは毛頭なかった。

なにも知らされずに敵の本拠地までつき合わされたセイバーであったが、その程度のことには不満を感じることもなく、むしろ主の盾となるのはサーヴァントの本懐であるとして切嗣につき従った。

こうして結界を突破した二人だったが、屋敷内からはマスターないしサーヴァントの気配を感じる事ができなかった。ここ何日か、間桐邸には何の動きも見られないという『相棒』の報告から、間桐のマスターは護りを固めると見たのだが、当てが外れてしまったらしい。

だが悲嘆することはない。間桐邸に押し掛けたのは、僅かでもマスターがいる可能性を潰していくため。いないと言うのであれば、行き掛けの駄賃に情報を収集するまでのこと。

切嗣は目を白黒させた鶴野に向き合う。

「……間桐雁夜はどこにいる？」

その瞬間、鶴野は正気に戻った。今代の間桐のマスターの名を男が口にしたのと同時に、弾けたように動き出していた。

目の前にいるのが聖杯を欲し、間桐の悲願を阻まんとする敵であると確信した鶴野の取るべき行動は決まっていた。

敵だと認識した後の鶴野の反応は早かった。一工程の呪いシングルアクションをぶつけようと、目にも止まらぬ速さで右手を動かす。

酒に吞まれていようと、即座の判断が鈍るほど耄碌してはいない。間桐の悲願を弟に押しつけた身であったが、間桐の当主としての自責の想いが恐怖心に打ち勝ったのだ。

どちらにせよ間桐の陣営と見做されている以上、鶴野が無事でいられる保証はないのだから、自衛の意味でも抗戦は必要だった。

それは間桐鶴野の生涯において、最高の魔術であった。

火事場の馬鹿力と言い換えてもよかった。敵勢力の脅威による瞬間の緊張感が彼の力を引き出したのだ。さしずめ、窮地に追い込まれた鼠が猫に噛みつくかのように。

だが哀れにもソレを許す者はこの場に存在しなかった。

コート of 魔術師の後ろから、神風が飛び出してくる。少女の姿をした金の風は、あろうことか鶴野の魔術を弾き、その手に握った何かを振りかざす。

目に見えぬ刃は、無情に間桐鶴野の右手を斬り落とした。

「あえ？」

呆けたような反応。

手首から上が消滅したという事実は一瞬彼の思考を鈍らせた。体の一部が欠損したことを、すぐに受け止められなかった。

あまりに鋭い切れ味であったためか、鶴野にはいったい何が起ったか察することができなかった。一拍の間を置いて切られた手首から血が流れ、同時に、かつて味わったことのない激痛が鶴野に伝わっていく。

「ギ、つあ、あああああああああ！？」

遅れた絶叫は痛みからきたものではなく、言い知れぬ恐怖と、理解できない現実に叩きこまれたショックから上がったもの。

脈絡もなく身体の一部を失うなど、そんな損失を受け入れられる
『人間』がいるはずもないのだ。

「あああ、手が、私の手がああ!!」

半狂乱となった鶴野は手首を抑え、聞くに堪えない金切り声で無
様に腕を振り回す。

「ああ、すまない。僕の従者は敵意に敏感でね。その腕では痛
いだろう?」

まったく詫びれる様子もなく、敵魔術師を殺さぬよう片手で従者
を制しながら、切嗣は斬られた手首に手を伸ばす。

泣き叫ぶ鶴野は、近づいてくる男に委縮する余裕はなかった。痛
みに気を取られ、切嗣に気がついてもないのかもしれない。

男が手首に触れたその瞬間、鶴野から痛みが消滅した。

なんらかの魔術を使ったことは明白であった。

ただし、それは一時的に鶴野から痛覚を奪ったにすぎない。切ら
れた腕が再生したわけではなく、流れ出る血が止まったわけでもな
いので、このまま放置すれば命にも関わるだろう。

鶴野は歯を鳴らしながら震えた。涙目でハアハアと荒い息を吐き
続ける。眼前の男が自身の死だということを、心の底から思い知ら
されたのだ。

「すぐに治療をしたほうがいい。綺麗に切れてるから、ある程度く
つつけることはできるだろう。僕としてもそれを邪魔したくはない
から正直に答えてくれないか。間桐雁夜はどこにいる?」

鶴野がなにも知らないであろうことは予想済み　むしろこの様
子では知らない可能性のほうが高い　だが、切嗣は再び鶴野に問
いかける。

優しく語りかけるような口調は、あくまでも相手に冷静さを取り戻させるためのもの。理性を取り戻した敵が反撃に転じては困るが、少しでも正確な情報を掴むためには、その程度の危険を気にしてはいられなかった。

「聖杯戦争を終わらせる。そのために手っ取り早く敵の居場所を知りたいだけなんだ。協力してくれ」

「し、ししし知らない知らない！ 私は知らないいいいい！！」

ガクガクと痙攣するように首を左右に振る鶴野は、恐怖から逃げ出したい一心だった。

これは演技でできるものではない。彼は本当になにも知らないのであるうことを、切嗣も長年培った直感から察していた。

間桐鶴野の心はもう完全に折れている。どういう事情か切嗣は知るよしもないが、鶴野はずっと以前から自らを限界直前まで追い詰めていたのだろう。結果として切嗣が彼を崩壊させる最後の一手となったらしい。

今の彼は臓硯を裏切ることさえ躊躇するまい。こうなってしまう人間は真実しか語らない。鶴野は間桐のマスターの居場所も、裏で操る臓硯の所在も本当に“知らない”のだろう。

が、それを簡単に信じるほど切嗣は甘くなかった。

魔術師は魔術的に別の人格を作り出す事ができる者もいる。

意図的に自身の記憶を封印できる者もいる。

脳の片隅、思い出せないほどの僅かな領域に、なにか重要なことを記録しているかもしれない。

それがわからぬ衛宮切嗣ではない。伊達に何十年と魔術師殺しをやってきたわけではない。切嗣の経験の中には、恐怖に震え、すすり泣くように嗚咽を漏らす男が、疑似人格で表面だけそう見せかけた殺人鬼だったこともある。敵が魔術師の端くれである以上、容赦をすることなど許されなかった。

戦いとなった場合、魔術を志す者たちは自身の命を守ること最優先とする。命を惜しむからではない。死んでしまっただけはもう魔術の研究ができなくなるからだ。

魔術師というものは、戦いよりも護りが得手であることのほうが基本だ。相手を殺すことよりも“死なないこと”に長けている場合が多いのである。彼らの厄介なところは、その“生き汚さ”なのだ。

片手を切断された程度の出血で命を落とす魔術師は少ない。徹底している者ならば、コレを命の危機として本性を晒すような、そんな無様もない。演技とは思えぬこの狼狽が、疑似人格による見せかけのモノでない保証はないのだ。

後ずさり、襲撃者から距離を取ろうとする男が、そんな『徹底した者』であるとは切嗣には思えなかったが……、念には念だ。切嗣は鶴野から可能な限りの情報を引き出すことにした。

仮になにか知っていたとしても、大した情報など得られないだろうが、今のところ無策に敵を探し回るアテもないので仕方がなかった。

強引に記憶を引き出す術、拷問で真実を吐かせる手段、敵の魔術的処置を打ち消す方法を切嗣は知り過ぎるほどに知っている。それ

をこの場で放出させるだけだ。

まず、死なぬよう止血をしてから、敵の魔術回路に流れる魔力全てを落す作業を開始する。切嗣は鶴野の頭を鷲掴みにすると、そのまま無理やり自身の魔力を流し込む。

「
つつつ!!?」

鶴野は声にならない悲鳴を上げた。

体には一切傷をつけず、強引に魔術回路内の魔力を洗い流す作業は、時に拷問術としても機能する。

他人の魔力など異物でしかない。それを本人の意志に関係なく注ぐとどうなるか。直接体中の血管に毒液を注入された場合、どんな苦痛を味わうことになるのか、それを鶴野は身を以って体験させられた。

鶴野には何が起こっているのか、何故こんなことになっているのかもわかるまい。わずかな情報でも知っていればそれでいいとばかりに、切嗣は拷問を続けた。

あえて命を奪うことはないだろうが、一生のトラウマは残ることになるかもしれない。

薄暗い部屋の中、部屋の主の声なき悲鳴が延々と響き続けた。

魔術の鍛錬は常に痛みを伴うため、苦痛に慣れている魔術師は多いのだが、鶴野は中途半端に魔術の痛みと接してきた代償として、その行為に耐えきること、壊れることもできず、気を失うまで苦痛を味わうこととなった。

従者はその光景を見守っていた。

拷問などセイバーの望むことではなかったが、主がソレを選んだ以上は仕方がない。望む、望まないではなく、必要と割り切っていた。敵に対して容赦のない彼女は、敵と認識した時点で鶴野に情けをかけるつもりはなかった。

敵が反撃の意思を見せた場合に備え、そして何者かが救援に現れた場合に備えて、この場で演ぜられる陰惨な拷問劇をただ見つめていた。

そして、この光景を見守る者はもう一人いた。

切嗣もセイバーも、部屋の主であるはずの鶴野すら気がつかなかったが、音もなく身を潜めた侵入者がもう一人存在した。

黒衣を纏う白い髑髏の面。影の英霊、アサシンのサーヴァントである。

昨夜、セイバーが斬り捨てたハサンとはまた違うハサンであった。

襲撃者二人がこの場を立ち去るまで、アサシンはサーヴァントの霊感すら欺く気配遮断の能力を駆使し、この状況を主に伝えるべく観察し続けた。

05 二日目・夜 - 蟲籠 - (後書き)

鶴野さんイジメの回。

切嗣が間桐に攻め込む話を書いたころと思っただけです。この作品は今後もこんな雰囲気だと思われまますので、陰湿な話が嫌いな方はバックお勧め。

くだいようですが理屈はこじつけです。

敵サーヴァントや人質ならぬ聖杯質がいるかもしれないトコに、単身突入する切嗣という展開に説得力与えるのは私には無理でした。

最後に拷問入れた理由？ せっかく間桐邸侵入したのに、手ぶらで帰るのはもつたいねえなーと思っただけですよ。

「人情が無い二人」を表現するための犠牲となった鶴野さんに黙祷（死んでねえ）

アサシンの死という事実疑いを持つ者がいた。

あっさり暗殺者が敗退したことを、そのまま受け入れることができない男がいた。

他にもない、アサシンを倒したサーヴァント・セイバーの主、衛宮切嗣その人である。

冬木市新都。

今また大規模な再開発の波に晒される地区の一画、オフィス街としての様相を彩りつつあるビル群の中、切嗣はセイバーを連れて『相棒』が滞在するホテルを目指す。

昼間から冬木市内を徘徊する切嗣であったが、しかし今の彼の目的はマスター探しや霊脈の確認ではなかった。そういった現地に赴かなくてはできないことも、このついでに行うつもりではあったが、主目的は別のところにあった。

「……まだ何匹か張りついているな」

ふと、切嗣が虚空に向けて唐突に言う。

言葉は誰に向けたのでもない単なる独り言だった。そうと知るセイバーではあったが、主に同意するように頷き、「倒しますか？」と問いかけた。

男は口での返答はしなかった。不自然に見えぬよう大通りの裏手へと回り込むことで従者に答える。

少し入り組んだ道を歩き、路地裏の奥へと向かう。そして完全に気がなくなつた瞬間、従者は一呼吸で十数メートルもの距離を移動したかと思えば、見えぬ剣を閃かせた。

セイバーが構えを解くのに遅れて、体を二つに分断された小鳥が二羽、音もなく地面に落ちる。街中でもさほど不自然がないはずの小鳥の死骸は、不気味なことに地面に溶けて消えてゆく。

敵マスターのモノであろう、使い魔であった。

魔術師が使用する中ではポピュラーな部類の使い魔は、哀れ真つ二つに体を斬り裂かれ、いくつかの残骸を残して溶けて消滅する。

たった今倒した小鳥は、使い魔としての質も配置の仕方、どちらもお粗末なものでしかなかった。ここに至るまで二人はいくつもの使い魔を排除してきて、その中でレベルが低い使い魔が何体かいたが、恐らくは、同一マスターによるものだろう。

これは素人が放つたものだ。主従の思考は、共に同じ答えを導きだす。

多くの魔術師を殺してきた切嗣も、生前に宮廷魔術師の上等すぎる魔術を何度か見ていたセイバーも、容易くその結論に辿り着いた。

昨夜の間桐邸襲撃は結局のところ無駄足に終わってしまったが、元より、そこまでの成果は期待していなかった。拠点が判明しているマスターが誰とも手を組まずに引きこもっては、例えどれほどの防壁を用意しようと、いずれ同盟を組んだ敵に攻め込まれる可能性を高めるだけ。それゆえに敵が間桐邸にいる可能性は五分以下と見

ていたのだ。

間桐邸の魔術結界は切嗣とセイバーに完全に破壊され、もはや長期にわたる修復作業を行わない限り、魔術師の拠点として使用することは不可能と化した。これで間桐のマスターは本来の工房に逃げ込むことができない。少なくとも敵マスターを一人、籠城することも回復に専念することもできぬ状態にただけ良しとした。

切嗣の関心は副次的な効果のほうにある。それが今の小鳥たちを初めとする敵マスターの監視であった。

間桐邸から引き揚げたあと、二人を見つめる視線がどこから湧いてきたことは言うまでもない。サーヴァント連れで派手に踏み込んだ段階で、敵に衛宮切嗣というマスターの存在を教えてしまったことになるのだから当然だ。

間桐邸を襲撃したマスターの姿は、間桐を見張る者たちに漏れなく目撃されたのだろう。

予想通り少々うるさい蠅が何匹か纏わりつくことになった。諸手を挙げて喜ぶことなど、できない筈の状況だったが、釣り餌となることを目的とする切嗣としては、むしろ望ましい結果だった。

むろん、こちらの情報をむざむざ与えるつもりはなかった。狙いは注目を集めることであって、必要以上の情報を開示することではないのだ。挑発と牽制、直接こちらに出向かざるを得ない状況にすることで敵をあぶり出すという意図もあり、切嗣は寄りつく敵を全て排除した。

魔術師の性質と、敵を見張ることが可能なギリギリの距離というモノを熟知している切嗣は、敵がどう使い魔を運用してくるか完全

に読み切っている。

これまでに魔術師と戦い続けた経験則からの観察眼は、英霊以上に素早く敵使い魔の位置を割り出すことが可能だった。

男は敵の使い魔を撃ち落とし、セイバーに斬り捨てさせた。セイバーを使うとき指で軽く示すだけであつたが、その指示の正確さたるや、最優と称せられるセイバーをして驚嘆させるものであつた。

切嗣は使い魔の残骸から敵が得意とする魔術系統、熟練度合いを見抜くことができる。高レベルの魔術師ならば造作もないその作業を彼は行うことができた。魔術師殺しとしての鍛錬を重ねてきた彼はそういつた研究も怠つてはおらず、科学技術と組み合わせることでソレを成功させていたのだ。

監視を送れば送るほど敵は切嗣に情報を漏らすことになるのである。

敵マスターもそのことに気がついたのか、これ以上は魔力の無駄と判断したのか、使い魔の数自体は減っていたのだが、しつこい者も中にはいたということだ。

ようやく敵の目がなくなつたことを確認し、改めて目的の場所を目指す。複雑な道にやや難儀しながら表通りに出ると、二人はようやく目的のホテルに到達する。

それは切嗣の相棒 久宇舞弥が、今の時点での拠点として滞在するホテルだった。

ビジネスホテルに毛の生えた程度の安宿であつたが、隠れ家としてはそれで十分。利用客の幅が広いホテルほど、『敵』の目を欺くに適した宿はなかつた。

セイバーは外に待機させ、切嗣は勝手知つたる風を装つて中に入

り、迷うことなく『相棒』が逗留する703号室の扉の前に立つ。

切嗣が敵使い魔を完全に排した理由の一つがコレだった。いずれ引き払う予定の一次的な基地とは言え、敵をここまで同行させるわけにはいかない。

取り決め通りのリズムでノックをすると、待ち構えていたかのようになり、扉が開かれ、色白で端正な美人が切嗣を室内に迎え入れた。

余計な挨拶など一切なかった。魔術師殺しとその部下の再会は、僅かに視線を交わすだけで終了した。

久宇舞弥との関係は、一般の常識で当てはめるならば“弟子”ということになるが、魔術師の世界で言うなら“使い魔”とも呼ぶ方が正しいのだろう。

魔術を探究の対象ではなく手段として習得してきた切嗣は、己の研鑽を託す相手として舞弥を育てたわけではなく、戦闘手段の一つとして機能させるため己の知識を余すところなく叩きこんだにすぎない。そんな相手を弟子と呼べるはずもなかった。

「それで、調査結果は？」

開口一番、男は相棒に問いかける。主語を抜かした問いであったが、女はその意味を聞き返すこともない。長年の付き合いから切嗣が欲する情報を即座に理解し、舞弥は用意してあった回答を切嗣に提示する。

「脱落者の名は言峰綺礼。聖堂教会から派遣されたと思われる、監督役の息子でした。十中八九、彼がアサシンのマスターでしょう」

冷たい声は感情を含むことなく、作業を進めるかのように淡々と内容だけを伝えた。

とりわけ低級な使い魔の操作において才能を示した彼女に、切嗣は斥候や偵察を任せることが多い。今回も例に漏れることなく、女には聖杯戦争での調査の一切を命じてあった。

舞弥からの報告を聞いた切嗣は一言、やはりかと呟いた。

「遠坂時臣の動きは？」

「依然、変わりありません。彼は異様なほど、普段通りの生活を送っています」

打てば響くような返答。女の言葉に淀みはない。

今のところ最大の障害として切嗣が注意していたのは遠坂の陣営だった。

冬木の地に居を構える魔術師の家系は二つ。一つが遠坂であり、一つが昨夜襲撃した間桐である。

間桐邸に攻め込んだのは、間桐の相談役が不在だったということが大きい。なぜ席を外していたのか不明だが、あの老人がいるのではないのでは襲撃の成功率もずいぶん違うのだ。

いかに強固な防壁を敷こうとも、落ちぶれた間桐の一族が相談役なしに切嗣に対抗することは不可能と見た。マスターとなった間桐雁夜にしても、本来なら家を捨てた落伍者だという舞弥の情報を鑑み、警戒するような相手でもないと判断した。

魔術の鍛錬は痛みを伴い、時間をかけるモノ。戦場の感覚とて、一朝一夕の修業で培うことのできるものではない。数年前まで間桐とは無縁に過ごしていた、急ごしらえの魔術師モドキがそこまで脅威となるとは見ていなかった。だからこそその襲撃だったのだ。

遠坂を相手にする場合そのような楽観はできなかった。その歴史は二百年と、魔術師としては若い一族でありながら、名門として称えられる強豪である。

聖杯戦争を熟知し、間桐のように衰退することなく冬木に君臨し続けた魔術師。特に今代当主の遠坂時臣は手強い相手と見て間違いなかった。

時臣の行動には不可解な点が多かった。

家族こそ妻の実家に預けていたようだが、彼自身は敵への警戒を見せなかった。サーヴァントを連れることもなく外を出歩き、敵の見張りも完全に放置していた。

遠坂・間桐両家を見張っていた舞弥の言では、無防備のまま弟子の教会入りに付き添ったことまでであつたらしい。敵であつても放っておくことのできないお人好しであるという、事前調査による時臣の人物像通りだった。

ならばそこに不自然は無い。遠坂の当主は自然体だ。

それゆえに不自然極まりなかった。時臣は敵の存在など意に介さぬかのように、実に優雅に、聖杯戦争以前からの生活を続けている。マヌケとしか言えない行動は、しかし逆に不気味だった。聖杯戦争の定石を知り尽くしているはずの遠坂の行動だからこそ奇怪であった。

仮に切嗣と同じように、その身を賭して敵を釣ろうとしているのだとしても度が過ぎている。皆、同じ心境なのか、隙だらけの時臣に攻撃等を仕掛けた者は誰もいない。

正直、そんな馬鹿げた行動を取られた方が厄介だった。魔術師のすることには意味がある。一見して無駄だらけに見える場合であつ

ても必ずなんらかの理由を含む。それは効率を重視する彼らの習性であり、変えようのない習慣だ。

ならば遠坂時臣も例外ではない筈。

意図が読めぬ以上、うかつに手を出すわけにはいかなかった。

予め相手が取るであろう戦術の予想と対抗策は、数年も前から打ち立てていた。スタンダードな方策ならば対応可能な策を用意してあったし、護りを固められたところで、時間はかかるが魔術師の拠点など『魔術師殺し』は如何様にも突破できる。

セイバーという盾とも武器ともなる高火力の装備を有する切嗣ならば、力尽くでも十分な勝機がある。

既に定石が出来上がった戦いならば、敵への対策も自ずと決まってくる。もちろん歴戦の傭兵は、それらを破壊する術をいくつも準備しておいた。

だが定石を覆す莫迦げた行動が、切嗣の算段を狂わせた。

下準備も強力な武器も、時臣の前では無意味だった。これまで幾度となく魔術師の思考を先読みしてきた切嗣だが、時臣の狙いを読みきることができなかった。難敵は早めに排除したかったのだが、今できることは警戒と監視に留める以外なかったのだ。今回の報告で、遠坂への警戒心は更に強くなったと言えるよう。

そして、遠坂を警戒する理由は、もう一つ。

言峰綺礼。

アサシンのマスターと思われる男こそ、遠坂を最大の障害と認識する最大の理由だった。

遠坂時臣と言峰綺礼が同盟を組んでいることは間違いなかった。

時臣が言峰を庇ったからではない。舞弥でなければ見つけることができなかつただろうが、以前からの調査で、彼らの結託を示唆する状況証拠がいくつか出てきたからだ。

だからアサシンは　　と言うか、言峰は遠坂の味方であると予想していた。

切嗣にとっては遠坂時臣などよりも、言峰綺礼のほうが要注意人物だった。

敗北者として聖杯戦争の監督役の保護下に置かれた綺礼であったが、しかし切嗣はそのこと自体に不信を抱いていた。

衛宮切嗣にとっての一日目　　言峰綺礼にとってはわずか数日で、敵の一人が早々に敗退したということが、切嗣には納得できなかった。

「　　アサシンが死んだこの展開、どう考える？」

「ありえないと言いつけることではありません。が、都合がいいようにも思えます」

問いに舞弥は即答で応じた。

つねに現実在即した舞弥は、時として切嗣以上に的確かつ容赦のない判断を下すことができる女だ。切嗣は舞弥の意見を尊重することが多い。

その回答は、ほとんどが切嗣の懸念と合致するものだった。

「こちらが誘いをかけたとは言え警戒心が薄い。ステイタスの高いサーヴァントなら、こちらの召喚直後の油断を狙ってくるのも理解できますが、アサシンの戦闘力はサーヴァント中で下位の部類です。先走った可能性も考えられますが、序盤の時点から策もなく強硬手段に及ぶほど、アサシンが功を焦り、命を軽視した理由がわかりま

せん」

アサシンを倒した時、たしかな感触を覚えた。アサシンのサーヴァントが消滅した瞬間を、その目でハッキリと目撃した。

ならばその死を疑う余地などない。どれほど強力な敵であろうと散る時はあつけなく死ぬものだ。油断や慢心から敗北を喫することもある。この展開も出来すぎと呼ぶほどのことでもない。

だが、どうにも府に落ちない。

アサシンの暗殺は確かに高度なモノであった。宝具を使う気配こそなかったが、敵の技量は確かに暗殺者として人を超えた力量であった。実際、従者が反応するまで切嗣は気がつかなかったし、気配を殺され続けていれば、セイバーをもつてしても見つけることはできなかつただろう。セイバーがいなければ切嗣の命はなかつたはずだ。

そう、サーヴァントがいなければ、だ。

敵があまりにもサーヴァントの存在を度外視していたことが気になつた。

セイバーを舐めてかかつた可能性は否定できない。そう見えるように切嗣は行動していたのだから、敵を誘う策が成功したことに手ごたえを感じるべきなのかもしれない。

が、どうあがこうと、ハサンではセイバーのクラスに太刀打ちできないことを思えば、そんな短絡的に考えることはできなかった。

あの時、例え暗殺に成功していたとしても、すぐ傍らの剣士に返り討ちにされる程度は予想がつきそうなものだ。

それは命を二の次とした切嗣とは違う。アサシンの行動は、まるで一人一殺を旨としていたかのようなだった。もしこの直感が正しい

のなら、言峰とアサシンは残り五組の敵がいるにも関わらず、そのような無謀を犯したということになる。

不信感を抱くな、という方が無理な話。仮に、偶然アサシンが消滅するところを目撃したとしても、同じような死に様であれば同じ疑いを覚えたことだろう。

アサシンを殺させる。 。それこそが敵の狙いだっただとしたら？
……そんな不信がついて回った。

そして アサシンが言峰のサーヴァントであるということを知った時、その疑念は確信に変わっていた。

切嗣はアインツベルンの城にいたところから、聖杯戦争に参加すると思しき魔術師の情報を集めている。その頃から、言峰綺礼の名は要注意人物として記憶していた。

それは元・代行者という戦闘経歴もさることながら、この男の“あり方”が非常に気になったためだ。

切嗣が見る限り、言峰綺礼という男は空虚な男だった。

いくつもの修練を積み、他人の何十倍もの鍛錬を重ね、一つの分野において凡人が習得できる範囲をマスターすると、それまでに培ったモノに未練もなく別のジャンルに乗り換える。

己が成した功績に、後ろ髪を引かれることなく別れを告げる。誰よりも努力する道を選んでおきながら、その成果を投げ出すように新しい苦行に手を染める。

結果だけを見るならば 男の生き方は、あまりにも無意味だった。

言峰の憔悴は切嗣にも覚えがあった。彼の葛藤は、結果を求め、何も得られなかった切嗣と非常に近い位置にいた。だから判った。男が自分と同じだと気づいたから、彼の空洞も理解できてしまった。この男は自分とは真逆の歪みに苦しみ苛まれているということが。

だから、この男の目的は苦行そのものだったのだ。自らを痛めつけることで、なんらかの穢れを落とそうとした。

贖うことなどできぬと知りながらも、自らを罪人と律するからこそ望まぬ道を歩んだ者。

……そんな言峰の“在り方”は、切嗣の苦悩と瓜二つであった。

世界の変革を求めて奔走した衛宮切嗣とは異なり、言峰綺礼の人生は決して世界を相手にしたものではない。

似通ってはいるが根本が違う。彼は己を変えようと努力し、奮起した男であったのだ。

切嗣の行為が外に向けてのモノならば、言峰の行為は内に向けたモノだ。世界の平穏を願い、あり得ない結末を求めた男とは正反對の生き方。

言峰は未だに結果を掴めてはいないだけで、“何か”を得ようと幾重もの遍歴を経たニンゲンなのだ。

奇妙な確信があった。会ったこともない、本人を確認したこともすらなかつたというのに、切嗣には男の歪みが断言できた。

彼が懐いたモノは『自己の変革』だったのだと。

なんの情熱も明確なる目的もなく、言峰が自分を虐め抜くことができたのは、己を憎み切っていたからだ。

つまり 彼は自らを律するだけの良識と、許容しきれぬほどの歪みを抱えている。

目的の前に人道など無価値とし、ソレを捨て去った切嗣とは違う。人としての価値を目的とし、ソレを得ようともがき苦しんでいる。切嗣が作爲的な悪人なら、言峰綺礼は作爲的な善人だ。瞼を閉じれば、いまだ見ぬ筈の男の姿が見えてくるかのようだった。

「言峰綺礼について、さらに可能な限りの情報データを集めました。以前お渡しした情報と合わせて判断を」

切嗣の憂愁を知ってか知らずか、舞弥は書類の束を切嗣に手渡した。

以前より言峰を危険と見ていた切嗣は、舞弥に言峰の身边調査を命じていた。敵の背景を知ることが、時として相手を出し抜く武器と成りうるからだ。

パラパラと流し見るように目を通し、切嗣は言峰への感傷を深めていく。

より強く聖杯を求める者が優先してマスターに選抜されるというなら、この男も聖杯に選ばれるだけの理由があったということだ。彼の望みは救済への祈りだ。ここまで根が深いとあっては当人すら気がついていない可能性もあるが、男は誰よりも救われることを望んでいる。

……そう考えた時、何故か切嗣の胸中に苦々しい嫌悪が込み上げたが、切嗣はソレを黙殺した。

言峰が聖杯に求める救済とは一体何なのか。

未だに己の変革を求めて聖杯を欲したのか？

それとも怒りと憎しみ、その心の底に溜まった絶望で、せいはい世界

を満たすことを無意識のうちに願ったのか？

当初はアサシンの死に、なんらかしらの宝具が絡んでいるのではないかと踏んでいた。死することで発動する類の力か、英霊を相手にしても死を偽装することが可能な能力を備えているのではないかと推測していた。

だがそんな疑念も、もはや必要が無い。

この男ならばやる。アサシンがどのような能力を持つサーヴァントであったとしても関係ない。おそらくは強力無比な宝具を持つ者だったとしても、これまでに築いてきたモノと同様、簡単に切り捨てることだろう。

策でなく、ただの愚であっても変わらない。アサシンが生きていようがいまいが、そんなことはお構いなしに言峰はいつか切嗣の前に立ちほだかる。どうしてか、そんな結論が彼の中にあっただ。

言峰を早急に排除することが当面の目標となった。

敵が本当に敗者だったとしても、マスター復帰の憂いを断つことに繋がるならばそれで良い。

だが、教会は聖杯戦争の監督責任を負うだけあって、マスターたちによる干渉は禁じられている。余計なペナルティを避けねばならない以上、難癖をつけられるような行動は控えなければならなかった。

教会にギリギリの距離での監視を放ち、言峰綺礼の底を探ることも考えたが、そんなことをしては彼の目をこちらに向ける結果となるだけだ。

こちらが、少なくともマスターの一人が、敗退を疑っている

ことを知らせるうま味はどこにもない。

手を打つ前に教会に逃げ込まれたのは痛かった。これでは手の下しようがない。

余分を切り捨てたはずの自分が『個人』に執着している。そんな有り得ない状況に気がつくことなく、切嗣は焦燥を募らせる。

この男だけはどうあっても排除しなければならない。この男にだけは、どうあっても聖杯は渡せない。

それが、今の切嗣の思考を支配する感情だった。

切嗣は幾つかの確認と情報交換を済ませると、部下に労いの言葉をかけることもなく無言で部屋を出る。ホテルの外で従者と合流し、切何事もなかったかのような足取りで、人々の喧騒に溢れ返る新都の街並みの中に溶け込んでいく。

彼の相貌は、新都に赴く以前とは少しばかり違っていた。

全てを捨てても何も得られなかった哀れなる『同類』への憐憫と嫌悪に苛まれ、微妙に顔が強張っていたことに、つき合い短いセイバーは気がつくことが無かった。

無理もない。切嗣自身さえ、己の心中に憎悪が渦巻いている理由がわからなかったのだから。

「……言峰、綺礼。この男は危険だ。早々に討ち取らなければ」
呟いたその言葉は、果たして意識して漏れ出たモノだったのだろうか。

機械に徹する主が、たった一人の敵に露骨な敵意を向けていたこと、従者は驚きを隠せなかったという。

06 三日目・昼 - 無意味 - (後書き)

辻褄合わせがひどいッス。

あーバトル書きたい。

切嗣の言峰に対する理解力がなにやらハンパネエことになってます。

互いに同類を警戒してた感じになるよう、勝手な期待を押し付けてたとか、理解できない相手に怯えてたという部分は削ります。

時臣をお人好しにしましたが、凜の父親っぽくしたかっただけです。

あくまで「魔術師としては人がいい」というだけで、冷酷なところも多分書きます。

ソレは鋼と鋼がぶつかり合うことで発生する音に他ならなかった。

新都海浜公園の東側に隣接する形で広がるのは、無味乾燥としたプレハブ倉庫が延々と連なる倉庫街。東側の工業地帯を新都から隔てる壁の役割を担う区画は、夜ともなれば人通りも絶え、まばらな街灯が無益にアスファルトの路面を照らしている。

そんな武骨かつ空虚なる景観を、見るも無残な姿に変えていく轟音の元は、圧倒的な力の本流であった。

大型車両の行き来を前提とした幅広い四車線の道路を中心に、強力なハリケーンとしか思えぬほどの力が二つ、覇を競うようにして容赦なく周囲を蹂躪してゆく。

その破壊的な魔力が荒れ狂う暴風を起こし、風景を容易く削り取る。

その脅威的な力の余波で、倉庫の外装となるトタン材の壁面に大きな穴が穿たれる。態様は既に惨事も同然だった。

この崩壊が、戦士が白兵戦を演ずる衝撃によって巻き起こされるものなどと、いったい誰が想像し得るだろうか。

それはヒトによる戦闘だった。自然災害か、あるいは大規模な戦闘でなければ起こりえぬ乱暴な解体作業は、二つのヒトガタによって引き起こされたものであった。彼らは背景を巻き添えに、人々の

想像でしか成しえない筈の武を披露し続けていた。

走り、腕を振るい、飛び交い、相克し合う二つの影。交わるたびに鈍い音を辺りに響かせる。片方が空振り、空を斬る一撃の風圧によって街灯が割れた。

生物と言うには、その動きはこの世界の物理法則を無視している。もし一般人がこの有り様を目撃したとしても、何が起っているか把握することは適うまい。せいぜいが、常人では認識できぬほどのナニカが起こっている程度の理解であろう。

踏み込みですら路面を砕き、クレーターののような痕を作るその戦いは、まさしく神話・伝承の再演である。切り結ぶ両者がサーヴァントであることは疑いようもなかった。このようなことができるのは、人間を超越した者たちでなくば有り得ない。

聖杯戦争。幻想の中だけに存在するはずの英霊たちを使役する、この儀式の真骨頂であった。伝説に名を残す英雄同士の戦いは、ただの前時代的な一対一の鏖迫り合いであっても、そこに費やされる熱量が桁違いなのだ。

狂獣と徒花。英霊は、その在り方こそ違えど、どちらとも強力な英雄である。

数日前、アサシンを撃退した英霊が二人。今こうして武を競い合っていた。

惜しいというなら、これを見守る観客が誰一人として姿を現さないということか。魔術師ともなれば、動体視力を『強化』することで彼らの戦いを把握することも不可能ではない。サーヴァントの戦いなら、主たるマスターたちが何らかの魔術を介して傍観している

ことは確実である。

しかし己の保身ゆえか、はたまた策の一環か、両マスターは敵対者に自らの姿を晒さぬよう隠れ潜んでいるようだ。間近で人世の極限に位置する戦いを見定める機会があるというのに、ソレを遠目に見物するだけに留めているのが本当に惜しい。

片や軽装の槍騎士、片や甲冑の黒騎士。二つの影は幾度となく刃を交えては離れ、また切り結ぶ。常人には視認すら不可能な速度で行われる攻防を前に、大気も興奮し唸り声を上げる。

破壊力、威圧感ともに異常と呼ぶに他ならぬ戦いである。それを担う二人の踊り手もまた、戦士としては異常であった。

軽装の戦士は、両手にそれぞれ携えた二つの刃を繰る槍兵であった。

癖のある長い髪を全て後ろに撫でつけた端正な男は、身の丈を上回る二メートル余りの長竿を右手に持ち、左にはソレより三割ほど短い拵えの短槍を構え、あろうことか、その二つの武器を同時に用いて敵と渡り合っていた。

“槍”というモノは両手で扱うことが常識の武器である。そのリーチと重量は短剣などとは比べ物にならず、片手で御することが如何に難しいか、議論するまでもない。

しかもそれを二本などと、可能、不可能以前に、長すぎる得物同士が互いの邪魔をしてしまう可能性すらある。誰もやろうとは思わない。

この英霊はそんな条理に囚われることがなかった。

彼は二槍を己の手足の延長であるかのように操っていた。

槍の使い手が繰り出す一撃は、片腕一本でありながら、両腕で扱った場合と遜色ない速度と重みがある。普通の槍使いには成しえない戦技を彼は使いこなしていた。

片腕だけで操作される英霊の長竿は、槍術本来の動きとは異なり、変幻自在で奇抜な拳動を繰り返す。予期せぬ角度から奇襲を仕掛けてくる槍の動きは、通常の戦闘ではお目にかかることはないモノだ。

槍をまるで翼を広げるようにののように大きく掲げるその構えは、敵に流儀を読ませることがない。我に戦士の常道など通用せずと高らかに謳い上げるかのごとく、男は長短の翼を以って黒い騎士と対峙していた。

これほどに槍を自在に振り回すサーヴァントであるならば、そのクラスはランサーに相違ない。中には複数のクラスに該当する英霊もいるが、こうして卓越した槍技を見せつける以上、彼が槍使いであることは疑いようもないだろう。

色気が漂う美しき容貌。穏やかな憂いを秘めた眼差しの下で、なおも艶やかに存在を主張する一粒の泣き黒子。呪符に覆われ銘も読めないとは言え、二つ槍を自在に振るう騎士ともなれば、理解できる者はすぐに“彼”であると気づく。

その真名をディルムッド・オディナ。フィアナ騎士団の一員であり、呪われた美貌に人生を狂わされた悲劇の騎士。

すべての魔力を消し去る破魔の紅薔薇ゲイ・ジャルケ、癒す事あたわぬ傷を与えらる必滅の黄薔薇ゲイ・ボウという宝具を有する英雄である。

対して漆黒のサーヴァントだが、彼のクラスがバーサーカーであることは傍目からも見て取れた。明らかに理性を失った立ち振

る舞い。獣の如きその咆哮。顔を完全に覆ったヘルムからわずかに覗く、狂える者特有の眼光は、真似しようとしても真似できない。

だが一体“何者”であるのか。既にデイルムツドと何度も衝突を繰り返したそのサーヴァントは、素性を明らかにするような手がかりを一切見せはしなかった。甲冑に全身を包み、面構えどころか性別さえもハッキリとはしない。

特徴もない没個性の甲冑という風体から、騎士であると推測はできたが、それだけだ。

バーサーカーはその姿かたちすら曖昧だった。闇色の甲冑はたしかにそこに存在すると言うのに、見れば見るほどに細部がぼやけ不鮮明となってゆく。

ランサーがいくら目を凝らして観察しようとも、バーサーカーの容姿は正確に捉えられなかった。焦点のずれた映写のように、甲冑の輪郭は霞み、ぶれてしまう。どうやらある種の幻覚か呪いのようだ。英霊たるデイルムツドにまで影響することを考慮すれば恐らくは宝具の類だろう。

槍兵の定石を裏切り、特徴的でありすぎるランサーよりも個人的でありながら、漆黒の英霊は他のサーヴァントとは段違いの隠匿能力で正体を隠していた。

「……貴公。いったい何者だ？」

攻め手を休め、敵がバーサーカーと判明して以来、交わすこと適わぬと諦めていた問答をランサーは試みる。無駄な行為でしかないのだが、この場に他の英霊がいれば同じことを問うたかもしれない。

質問は敵の正体がわからないから出てきたワケではなかった。戦

士としての異様を晒すランサーにさえ疑問を抱かせるほど、バーサーカーの戦い方が異常だったのである。

バーサーカーは当然答えず、敵を喰い殺さんと猛進する。

デイルムツドは己の俊敏さを活かし、柄から穂先まで朱色に統一された左の槍で攻撃を受け流す。いなしたにも拘わらず、強力すぎる攻撃に槍が軋み、敵の『武器』が悲鳴を上げる。

力任せとしか思えないその一撃はしかし、次の攻撃への伏線だった。バーサーカーは閃光の速度で、槍と剣の隙間を縫うように、ランサーの顔面に腕を伸ばす。指先が爪のように鋭い手甲は、敵の美貌を抉らんと迫る。

ランサーは首を僅かに逸らし、最小の動きでソレをかわす。この攻撃をかわすことができただけでも、十分賞賛に値する。コンマ1秒でも遅れていれば、少なくとも片方の目玉をやられていた。

槍兵はそのまま、黄に染まった右の槍でバーサーカーの腕を斬り落としかかる。だがリーチの長い得物より早く、バーサーカーの足がランサーを蹴り飛ばす。腹部へのダメージを悟ったランサーは、腹筋に意識を集中させ、さらに魔力を集中させることで、なんとかその一撃の被害を最小限にした。

「ぐうっ！」

呻き、腹を抑えるランサー。敵の一撃はそれこそ鋼鉄をも砕きかねない一撃だった。もし守りが間に合わず、まともに喰らってればどうなっていたか。

狂戦士の猛攻は止まらない。瞬時に後退したランサーに肉薄し、雄叫びを上げて剣を自在に振り回す。

「――！！」

息をもつかせぬ連続攻撃。そのすべてが急所を狙う必殺の一撃だ。二槍で受け続けるも、この攻撃はいつまでも防ぐことはできない。

暴風のように滅多打ちにされては、さしものランサーも態勢を立て直すことができない。

ランサーの表情には、隠し切れない憔悴が浮かび上がっていた。

ランサーのマスターはアサシンを倒した。少なくともランサーのマスターはそう確信していた。ことで自信をつけていた。

槍兵の主はただでさえプライド高い魔術師であった。最初に敵サーヴァントを倒したのは自分であるという成果が更に自尊心を拡大させた。

自分は聖杯戦争の勝者として十分な資格を持つ者。そんな自負を持つ者に、結果が上乘せされたのだ。ここで止まる理由はランサーの主には無かった。主は自身の護りを十二分に固めると、ランサーを斥候に出したのである。

主は己が陣地に引きこもり、従者を通して敵の動向を見守る腹積もりであった。

従者に直接指示を与えられる位置を確保しないなど、主の性格を考えれば消極的と言える方針の理由は、ランサーにも察しがついた。

本人も無自覚なのだろうが、ランサーのマスターは、先日、間桐邸を襲撃した敵を恐れている。

序盤は情報収集という当然の鉄則を裏切り、凶悪な突破力を皆に

見せつけた最強の敵に恐怖している。

それゆえ ランサーとしては悲しいことに、未だ信頼しえぬ^{サー}亡霊などと行動を共にするくらいなら、自らが完璧に仕上げた工房にて構えるほうがマシだとしていたのだ。

主は冬木に同行した、戦闘力を持たぬ婚約者を護るためだと言っていたが、それもきつと本音だろう。強力すぎる敵を目撃したせいで、婚約者を護るナイトは自分でなければならないと、より強く考えてしまったのだ。

主は冬木の人間ではない。冬木の土地の魔力は主の肌に関わらない。強力な工房が敗れた以上、簡易的な拠点では、いくら護りを固めたところで無駄なのだが、過剰なまでに自分の才を誇る主は恐怖心よりも矜持が勝つ^またらしく、己の工房が破られるワケもないとタカをくくっていた。

サーヴァントが現世を跋扈する聖杯戦争において、傍らにサーヴァントを潜ませないことは愚策と考えるランサーだったが、主を立てることを至上の命題とする彼は主の判断に逆らうことはできなかつた。

……そもそも、令呪という絶対命令権をマスターが有している以上、逆らえるサーヴァントなど滅多に存在しない。美貌の騎士を己の婚約者から引き離す主の思惑に従い、ランサーは単身、夜の街へ繰り出したのである。

そして索敵は功を奏し、偶然、ランサーは敵マスターの一人を発見するに至った。

逃げ腰な態度からすると戦うつもりはなかったようだが、時間稼

ぎのつもりなのか敵マスターはバーサーカーを放ち、姿を眩ませたのであった。

戦闘に突入して、既に四半刻がすぎようとしていた。

デイルムツドは魔貌をしかめた。もう十数合と打ちあったにも関わらず、敵の武器が未だ砕けぬことに疑問を抱いていた。

英雄が扱う武具が英雄の火勢に耐えられぬわけもない。そんなことはランサーも知っている。知っているからこそ、敵の武器がいまだに健在であることが不思議でならなかった。

漆黒の戦士が扱う『得物』は見るからに宝具ではなかった。

いや、武器ですらありはしなかった。

英霊がその手に持つモノは、なんと近場から拾い上げたと思えない、ただの鉄パイプだった。

宝具として名高いゲイ・ジャルグ、ゲイ・ボウと、その場から調達した鉄屑を比べるなら、武器としてどちらが上か問うまでもない。そんなものでデイルムツドと打ち合うなど馬鹿げている。

にも関わらず、鉄パイプはここまで耐え切った。曲がりはしたが、折れることもなく形を保ち続けていた。二つの魔槍と拮抗しうるだけの強度を備えているとしたら、それは英霊の宝具しか考えられないと言っのにだ。

バーサーカーが手にした鉄パイプは、黒く染まっていた。葉脈のような黒い筋が幾重にも絡みつき、今もじわじわと広がりながら浸蝕していく。起源はバーサーカーの両手であった。黒く籠手に掴ま

れた場所から、鉄パイプはバーサーカーに染め上げられていた。

戦況を変えるべく、強引に槍での足払いを仕掛けるランサー。二つ槍の動きに対応しきれず、バーサーカーは倒れ込む。

倒れる勢いを利用して砕かれたアスファルトの破片を拾ったバーサーカーは、ソレをランサーに向かって投げつける。本来であれば、石つぶてなど最速の英霊は苦もなく回避できるが、その投石は質が違っていた。

銃弾と紛うスピードで飛来する破片は三つ。うち、二つまでは黄色の槍で防ぐも、至近距離で放たれた攻撃に長竿では完全に対処できず、最後の一つは頬をかすめていく。

輝く貌から一筋の鮮血が流れる。ごくごく僅かな傷は、瞬時にランサー自身の治癒能力で消滅するも、コレが意味するところを思い、バーサーカーに対する警戒を深める。

投石一つとつてさえ、脅威的な威力と速度を見せたバーサーカーの底力は恐ろしいモノではある。だが問題はソコではない。驚くべきはサーヴァントに傷を負わせたという、その一点だ。

神秘はより高位の神秘でなければ倒せない。霊体のサーヴァントを殺めることができるモノは、高位の魔術が同じく霊格を備えた武器だけだ。だと言うのに、ただの石ころがランサーに届いたのである。

今の飛礫ひでりは黒騎士がその場にあつたものを用いただけで、もちろんサーヴァントが所有する武器というわけではない。避ける必要さえも皆無の悪あがきと大差がない。

では、何故 そんな攻撃がデイルムツドの美貌を傷つけることができたと言うのか。

答えは一つ、漆黒の騎士が手に取り構えたモノは、なんであれ彼の宝具としての属性が付与されるということだった。

それこそがバーサーカーの宝具なのだ。宝具とは形ある武器としてのモノばかりではない。時には英霊自身の『逸話』が“特殊能力”として発現されるタイプも存在する。バーサーカーの宝具は、その類の能力だった。

最大の異常は、ソレを完全に活かし切るバーサーカーの戦闘技術だった。

バーサーカーのクラスは、全ステータスを底上げする代償として理性を剥奪するクラスである。技能を活かすこともできず、ただ力任せに暴れるのがバーサーカーの特徴だ。

如何なる能力を持っていようと、それを全て発揮する戦いをする狂戦士などいるはずがない。が、漆黒の騎士は理性なき姿を晒しながらも周到さを失うことがなく、技術に依る戦いを披露していた。動くモノに反応するだけの狂い人でありながら、フレイントを見切り、槍の動きに翻弄されることもない。

それでもバーサーカー特有の隙として、防御がおろそかになることがある。防戦一方のデイルムツドも、狂戦士としては余りに小さい合間を狙ってバーサーカー撃破を試みる。

バーサーカーは体を斜めに倒し、すんでのところで槍をかわす。避けると同時に、その体勢から返しの一撃を相手に見舞う。人間のカタチを保っている以上は無理があると思えないその一撃は、

しかし神速を以ってランサーの頭部を狙う。

「チィッ！」

舌を打ちつつ間一髪で一撃を防ぐランサー。彼の反射速度がなければ、とうに頭蓋を砕かれていたことは想像に難くない。

いい加減、ひしゃげた鉄パイプを投げ捨て、黒いサーヴァントが次に武器としたのは、路端から力尽くで引き抜いた道路標識。例によってバーサーカーの宝具と化しているソレは、ランサーの槍でなければ止めることができないだろう。

武装の優位さで語るなら、ただの一刀を振るうだけのバーサーカーよりもデイルムツドのほうが圧倒的に有利だった。両手武器の中でも最高のリーチを誇る槍の重量を、片手武器も同然のスピードと柔軟さで駆使する彼である。しかも長短二本の槍を併用して間合いの遠近にも対応している。

宝具の属性を備えたとは言え、たかがアルミ合金の塊ごときを振りかざすバーサーカーにデイルムツドが遅れを取る道理はない。それを補って余りある敵の技量が異常であった。

鉄パイプがここまでカタチを維持続けたのは、敵の能力の恩恵だけではない。バーサーカーは打ち合う瞬間に微妙な力加減を行うことで、武器の強度を保ち続けたのである。ランサーが内心で冷や汗をかくのも当然だった。

サーヴァントとは過去の英雄だ。こと戦いに関しては超一流と言っている。

眼前の騎士も超一流の戦士であったことは間違いない。最速のク拉斯たるランサーの攻撃を最小の動きで避け、同時に、敵に攻撃を

加えることができるギリギリのタイミングを見極めるなど、セイバーにも該当する者の動きだ。

だが、バーサーカーがそんな戦いを演ずるわけがない。

本能に従い力任せに攻撃するようでありながら、その実、攻撃が全て次に繋がる布石であり、繰り出す技の一つ一つが洗練されているなどと、目の前のサーヴァントは狂戦士にしては、あまりにも技が卓越しすぎている。

戦闘経験豊富なデイルムツドをして、攻め切ることのできない最大の理由がそこにある。手にしたあらゆる武器を宝具とし、狂う者でありながら戦士としての技量を保っているとは、あまりに奇怪。

それも英雄デイルムツド・オディナと並ぶか、それ以上の実力者。敵のサーヴァントは得体が知れないにもほどがある。

内心の不安を拭うように、ランサーは両の槍で挟み込むように刺突を加える。

最速の英霊の突きは稲妻にも等しい。二本の槍による挟撃は、さすがに黒騎士も背後に飛んで避けるしかない。

躲す、という行為自体がバーサーカーとしては異質なものだ。敵は、バーサーカーとしての隙らしきモノを見せる以上に、防御の姿勢をも見せる。この冷静な戦いを見せる英霊は、本当にバーサーカーなのか？ デイルムツドの疑念は増していくばかりだった。

偽装かとも考えたが、英雄としての誇りを重視する英霊ならば好んでケダモノのフリをすることはないし、慣れぬ獣の振る舞いをしては己の戦い方を崩すだけであり、戦術としても逆にマイナスだ。

立ち居振る舞いはバーサーカーでしか有り得ないと言うのに、そ

の戦術はバーサーカーでは有り得ないとは、一体どういふことなのか。

「……！」

思考に落ちかけたディルムツドをバーサーカーの雄叫びが現実に戻す。獣は槍よりもリーチの長い得物を軽々と振り回しながら迫ってくる。

横薙ぎの一撃をランサーは跳躍して躲す。標識は武器として使うにはあまりにも長すぎる。返しが遅いと判断しての回避だった。

正しいハズの判断は裏目に出た。バーサーカーはランサー以上に定石に反する。最初からフェイントが狙いだったのか、標識の軌道は直角に曲がり、そのまま上空に飛んだランサーを襲う。

予想外にすぎる攻撃。ランサーの戦闘経験は、しかしバーサーカーの狙いの上をいった。

「侮るな！ 狂戦士！」

これを受けては最速の英霊の名が廃る。ランサーは自分を追う敵の武器の軌道を完璧に見極め、宝具と化した標識を足場になると、更に高く跳躍した。

槍騎士は宙を舞い、長い距離を滑空すると、くるりと一回転してバーサーカーの背後に着地する。

今の攻防、逃げ場のない空中に飛んだランサーに対し、バーサーカーは手に持つ標識（めいし）を敵に投げつけることも可能だった。あらゆるモノを武器とし、使い捨てにすることができるのが黒いサーヴァントの特徴であり、狂獣ならば敵を仕留めるに武器は選ばないだろう。

バーサーカーは狂ってなお戦士の勘を働かせた。

ランサーは例え空中でもその程度の攻撃をかわすことは可能だと、バーサーカーは見抜いていたのだ。

もしも武器を捨てていれば、その隙間を縫ってランサーの二槍が黒騎士に迫っただろう。それを、恐らくこのサーヴァントは本能で察知したのだ。

凶獣はゆらりとランサーに向き直ると、ゆっくりと歩を進める。

誰しも幽鬼を連想せずにはいられない。夢でも見ているかのよう
に定まらぬ足取りは常軌を逸していると思えない。狂戦士以外
の可能性を考えた自分をランサーは責めたかった。この敵は、間違
いなくバーサーカーだ。

異様に過ぎるどころではなかった。ランサーは、なんの齒ごたえ
もなかった初戦とはまるでレベルが異なる強敵との戦いに焦燥を禁
じえなかった。

ランサーはほとんど敏捷性だけでバーサーカーと戦っていた。率
直に言つて、筋力も耐久も、ランサーは目の前の敵に及ばない。戦
技こそ互角ではあったが、狂化されているためか地力には埋めよう
のない差があった。少しでも反応が遅れてしまえば、それが致命傷
となりかねない。

総合的な戦闘力ではバーサーカーが上回っているのである。これ
までランサーが敵と互角の戦いを演じていたのは“心眼”と呼ばれ
るスキルがあつてこそだ。戦闘経験から最適な戦術を見つけ出すそ
の力が、難敵との戦いを可能としていた。

だが、それも所詮は一時しのぎでしかなかった。能力が底上げさ

れようと、理性がないからこそ突破口が掴みやすい狂戦士バーサーカーにあつて、黒い騎士は例外だった。

これを相手にする限りこのままではジリ貧だ。ランサーは今宵、その姿を消失させるかもしれない。

されど消滅を恐れ、自分より強い相手に背を向けるのは英雄ではない。

英雄の戦いとは、常に己より強き者との戦い。この程度の窮地などランサーは既に経験済みである。

敵が異様で、例え自分以上の力を持つていようと、ランサーは敵に背を向けるわけにはいかなかった。騎士にとって自身の恥はそのまま主君の恥である。

聖杯戦争も序盤の内からランサーが敗北するなどあつてはならない。強大な敵を前に尻尾を巻いて逃げだすなど、それこそ言語道断だ。

バーサーカーはその正体も読めず、奥になにを隠しているかわかったものではない。ここで倒してしまわなければ、いずれ主を脅かす障害となる。主君を思えばこそ、ランサーはこの敵から逃げるわけにはいかなかった。

たしかに敵は凶獣だ。それでも人の姿をしている以上、いくらでも戦いようはある。いかにデイルムツドを上回る能力を持つていようと、それだけだ。ランサーはここまでの戦闘から敵の動きを把握しつつあつた。

頭さえ潰されなければ戦える。心の臓を掴まなければ戦える。腹をえぐられる程度の傷を覚悟すれば倒せない敵ではない。

デイルムツドにはまだ勝算がある。

手にしたモノを己の武器とするバーサーカーの能力。それは魔力を帯びた手で握ってこそ発揮されるものと見て間違いはない。つまり腕か、その魔力を封じてしまえば、敵の能力は使えないということだ。

デイルムツドの策は自らの宝具^{ぶき}、破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}を用いてバーサーカーの両腕を封じることだった。宝具の使用は主に制限されていたが、本来の能力を発揮すれば、バーサーカーを倒し切る自信がある。そのための方策はいくつも用意してあった。

破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}。彼が左手に持つ赤き槍。武器としての精度も際立つ槍の真価は、魔力の流れを断つことにある。ランサー自慢の魔槍は、宝具として格別の破壊力を誇るわけではないが、その名の通り魔力を無力化する力を有していた。

通常の武器なら例えランサーの手の中にある武器であっても、狂戦士の支配下に置かれてしまう。おそらくは敵の能力^{ちから}を越える霊格^{レイク}の武器でない限り、宝具として例外はないだろう。

だが破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}は別だ。呪いの槍はランサーの手の中にある限り、敵の魔力を根こそぎ削り取る力を持つ。この槍ならば、万が一敵の腕に捕らわれたとて、バーサーカーの支配を受けることはあるまい。

いかな能力を持つが、朱の魔槍の前には無関係なのだ。黒騎士が槍を支配するより先に破魔の紅薔薇^{ゲイ・ジャルケ}は敵の魔力を抉り取る。英霊の实体を維持するにも魔力を必要とする聖杯戦争で、これほど凶悪な武器はなかった。

もしそれでバーサーカーの能力を封じられれば良し。仮に一瞬腕を抑えただけでも、敵を追撃する方策は考えている。

いくらでも手はあった。最悪、自らの片腕を文字通り切り捨てることにはなるが、その程度でこの猛獣を退治できるなら安いもの。

ランサーはその“心眼”スキルから、既に数パターンの必勝法を見つけ出していた。最適な戦略と勝利への流れを導き出すその能力は、ランサーを裏切りはしない。今まではバーサーカーの異常さに目を曇らせていたが、それもここまで。本領を發揮したディルムツドならば、見事この窮地を脱して見せよう。

ランサーは宝具の使用を主に進言しようとし。

「そこまでだ、ランサー。今すぐ戦闘を停止し、私の下に戻ってこい」

先に、主からの帰還命令を聞いて、己の耳を疑った。

「主ッ！？ なにを……！」

ランサーの頭に直接語りかける冷淡なその声は、確かにランサーのマスターのものだ。敵の手による幻惑でも幻聴でもなんでもない。それを理解するも、ランサーはこの命令をにわかには受け入れられなかった。

ランサーには勝機があると言っのに、槍兵の担い手は退却するよう命じたのだ。

主の性格ならば、この場での撤退などは、まず有り得ない。何故そのような指示を下したのか。まさか、彼のマスターは魔槍の使い

手ではバーサーカーに勝てぬと判断したのか？

虚空に放つように声を張り上げる。

「お待ち下さい！ 主よ、私はまだ ！」

全てを出し切っていないと、そうマスターに告げるよりも早く、苦々しい声がランサーに命令する。

『こちらに敵が現れた。どうやら間桐を襲撃したマスターとサーヴアントだ』

それを聞いてランサーの表情が強張った。

『貴様の遊びに、これ以上付き合うつもりはない。貴様などでもコマは必要だ。早急に戻れ』

遊びと、主のため命を賭する覚悟を以って臨んだ戦いをそのように断じられ、魔槍の使い手は胸を痛める。

言い訳はできなかった。確かに初戦以上に手応えある相手に、戦士としての喜びを見出しつつあった。全力で戦った結果だと訴えたところで、理性なき相手も仕留められぬと自ら認めるも同義である。

一対一の戦いで、敵を倒し切れぬは己の責である。ゆえに、何一つ反論をすることは許されなかった。

ギリ、と。敵に背を向けねばならぬ己の不甲斐なさに歯噛みしながら、コマと呼ばれた槍兵は内心の痛みを押し殺す。

扱われ方に多少の不満はあった。けれどランサーは不服を唱えることはない。生粋の騎士として主に仕えることを誓ったランサーは、主からどのような暴言を受けようとも受け入れるつもりであった。

「……しかし主よ。ここからでは御身の下まで、幾許か時間が必要かと思われます」

こうとなつては、敵を倉庫街まで追い込んだのは失策かと己を叱咤しながら、ランサーは主に進言する。

マスターは舌を打ち、露骨な不満を言葉に含ませる。

『ならば致し方あるまい。令呪を以つて敵の前に貴様を召喚する。ただし敵サーヴァントとマスターを分断するだけだ。客人を無碍に追い払つたりはするなよ』

「承知いたしました。襲撃者^{マスター}を貴方の下まで追い込めば宜しいのですね？」

『貴様がさつさとバーサーカーを倒し、我が許に戻つてさえいれば、令呪を無駄に消費せずに済んだのだがな』

冷やかな声が脳裏に木霊する。たかが狂える亡霊をも倒せぬならばそれまでと、軽蔑の歎声が聞こえてくるようだ。

……そう、ケダモノ風情に苦戦するようならば、策を練り直す必要があると主は嘲っている。マスターは自己に対しては過大な自信を見せる魔術師だが、ランサーの上等な力量は全く評価していなかった。

撤退の命には、バーサーカーへの対策を討ち立てる意図もあつた。一つの考え方としては正しい判断だ。この状況を見ているだろう敵マスターにディルムツドの対策をされることは確実だが、敵の従者がバーサーカーである以上、サーヴァントとの連携は望めない。

策を用意し、それを機能させることができるとすれば、それはランサーの陣営だ。ランサーの“切り札”を温存したまま先へ進もうと思つたら、ここは一旦退くことも決して間違ひではなかった。

それでもバーサーカーは早めに倒しておかねばならない。例えば宝具を晒し、その力を晒してでも。槍の担い手は培ってきた経験と、戦士としての直感からそう考えていた。ここであの敵を倒しておかなければ、それは致命的なミスとなり確実に足元を掬うと確信していた。

だが それは自身の失態により、もはや適わない。ランサーはそのように己を律する。出来得るならば、先にバーサーカーを倒してから襲撃者との戦いに臨みたかったが、そんな時間的余裕もなかった。

未来への憂いと、主に迫る目前の脅威。天秤にかけるなら、優先して排除すべきは後者である。デイルムッドは主に対し絶対の忠誠を誓ったサーヴァント。主の危機に、呑気に敵サーヴァントとじゃれ合うわけにはいかないのだ。

時を置かずに、主から命令の言葉が紡がれた。

令呪。術者と従者の魔力さえ足りるならば、『魔法』に等しい事象も可能とする、サーヴァントを統べる絶対命令によってランサーは空間を跳躍する。

命が下される直前、それよりも一瞬早く、ランサーは敵を睨みつける。

「いずれ決着はつけるぞ！ バーサーカー！」

残す捨て台詞に覇気はない。敗走を強いられた戦士の胸中では、闘志という炎が無念さにくすぶり続けていた。

ややあって、ランサーの姿は完全に消えてなくなった。霊体と化したわけではなく、文字通りどこかへと『瞬間移動』させられた。

バーサーカーはもちろん敵の言葉に答えなかった。

理性なき狂者が他人の言葉を解するわけもない。声音の意味を理
解できようはずもない。

漆黒の騎士は去りゆくランサーを見つめ、やがて槍兵の姿が
見えなくなった時、ゆっくりと闇に消えていった。

後に残るのは、戦いの爪痕が幾重にも見られるかつての戦場のみ。
無残にも殺し合いの場となった倉庫街は、まるで怪物が全てを食
い荒らしたかのように、痛ましい姿を晒していた。

そして、この場にアサシンと呼ばれるサーヴァントがいたこ
とには、やはり最後まで誰も気がつくことがなかった。

07 四日目・夜 - 魔貌と漆黒 - (後書き)

書く予定はなかったのに、いつの間にか書いてしまっていたイケメンバトル。(片っぱい兜で顔を覆ってるけど)
急に書きたくなっただけです。

決着つけたかったんですが、どっちも今死なれると困るんで半端に終わらせました。

ホントはもっとランサーに不本意な引き揚げ方させるつもりでしたが、ランサーのマスターなら横槍でも入らない限り、ここで撤退は選ばないだろう と思ってこうなりました。

少々流れが強引ですがキニシナイ。

デイルさんがZeroより従順になってる気がしてもキニシナイ。

冷たい鏡を見ているとセイバーは思った。

“彼”の姿は自分と酷似していた。それゆえに、そんなことを考えてしまったのか。

鏡に映る己の姿は、何故か酷く疲れて悲しいモノに見えた。

彼女が生きたのは戦乱の時代だった。

発端は一つの帝国の終焉である。数多くの異教徒の侵攻に曝された帝国は、戦いに備え、その島国から守りの兵力を剥いでしまった。

帝国の庇護を失い、独立せざるを得なくなった島国は、時をかけずに様々な小王国に分かれてしまう。

部族間の内紛と、侵攻への怯え。

後に“夜のように暗い日々”と呼ばれる、長い、戦いの時代の始まりだった。

そんなとき、王の世継ぎとなる者としてアーサーアルトリアは世に生を受けた。

魔術師マーリンが予言した、王の後継者の誕生の日。王は我が子を祝福し、同時に、待ち望んだハズの子が女兒であると知り、酷く落胆する。

王の器を備えた子であっても、男子でない者を後継ぎにすること

はできないからだ。

我が子の性別を嘆いた王は娘を家臣の一人に預け、城から遠ざけた。予言の日まで城から離れることこそが王の証であると確信し、魔術師はむしろこれを喜んだ。

素朴で聡明な老騎士の下、少女はその跡取りとして成長する。少女は努力を惜しまなかった。老騎士が見守るまでもなく、彼女は誰よりも強くあるろうと鍛錬の日々を重ねていった。

その気概は己の宿命を知っていたからこそ。

崩壊し、死にゆくだけの国を救う者が王であるならば。誰に言われるでもなく、そのために剣を振るうと誓ったのだ。

国は乱世に疲弊し、民は新たな王を必要としていた。蛮族の侵攻を恐れる民が求めたモノは強き王であり、戦場を駆ける騎士たちが従うモノは優れた統率者だけである。

そんな、人々が望む『理想の王』であろうとしたのが彼女だった。

生まれる以前より王として生きること定められていた少女は、王が誰よりも多くのニンゲンをクロスものだと思っていた。そこそ幼い頃は夜毎に命を奪う意味を想い、震え続けたほどだ。

だからだろう。

王とは人ではない。

人間の感情を持っていては人間は守れない。

予言の日を迎え、王の証を立てて以降、そんな誓いを厳格に守り

続ける王となつたのは。

戦乱は長く続く。

戦いを引き起こすのは容易いが、収めることは非常に困難だ。度重なる問題を解決できなければ滅びは免れぬ。

多くの敵、多くの民が死んでいく中、少女は誰よりも上手く『王』をこなしていった。

一を切り捨てても、十を守る。それが王の出した結論であり、当時において、国が生き延びるには最善の道だった。

しかし公平無私と自らを律するには人の心が邪魔となる。少女は王となる代償として、最も大切なモノを捨てたのだ。

人間というモノはどこまでも醜悪で残虐になれる存在だ。女を犯し、子供を殺し、飢えを凌げなければ飢民からも略奪をする。ソレを彼女はよく見知っている。特に乱世であるならば、ソレはどこまでも加速する。

戦場を駆ける騎士も例外ではない。かつての騎士というものは、心構えよりも実力が認められた者たちが任じられるモノである。制御しなければ、暴力集団と大差がない。いや、存在が認められていただけに、単なる暴徒よりも厄介なモノであった。

道徳的な騎士道概念が完全には確立していなかった当時、血みどろの戦場と敵味方問わぬ略奪行為の悲惨さは少女も両の眼で見定めてきた。民を想うならその鎮圧を最優先としなくてはならず、皆の力を過たぬよう統率するには正しき理が必要だった。

護るためには正しき秩序を敷かねばならなかった。

国が生きるか死ぬかの瀬戸際では、結果を出すことが何よりも優先された。

その為であるならば　アルトリアは、己を捨てることも厭わなかったのだ。

国を負うということは、そこに生きる人々を負うということ。

その華奢な両肩に圧しかかる『国』という重責が、そのまま『命』の重みだとする少女は、決して過つことがなかった。

……過つことなど、できなかった。

敗北が許されぬ王は、戦となれば打てる限りのあらゆる手段を尽くした。

防戦のため、囿に村を焼き払ったこともある。代償に王の剣を失ったが、勝利のため戦士としての誇りを貶めたことさえあった。

敵対者の処遇を感情的に決めたこともない。どれほど憎い敵であっても、政治的な理由から生かさねばならぬ相手には恩赦を与えたい、哀れなる事情ゆえ王に仇なすしかなかった者も、殺すと決めれば容赦することがなかった。

選択に迷いはなかった。迷いを見せれば配下は動揺する。即座の決断が必要とされる乱世で、迷う余裕など彼女にはなかった。

そこに苦悩があったことを知るのは、義兄や魔術師といった極々僅かな側近だけである。

戦とは即ち個と個の戦いではなく、軍と軍の戦いだ。乱世の中、多くの民を生かし、より確実に敵を叩くには、冷徹なる決断が必要だった。国を生かすためには取捨選択は当然で、民を生かすためには感情に流されぬことは必然だった。

全ては人々が望む『完璧なる王』で在り続けるため必要な手順であった。一度も振り返ることなく、一度も誓いを穢すことはない。選定の剣を引き抜いた少女は、いつか平和な国とすることを心に誓い、王の責務を全うした。

一寸の狂いもなく国を計り、寸分の過ちもなく人を罰する姿に、感傷が介在する余地はなかった。王の下す判断は常に正しかった。戦乱渦巻く当時において、常勝の王はどんな時も最善の策を打ちだしてきた。

だが、それでも。

アーサー王は、人の気持ちが分からない

人としての感情を捨てた王に、そんな言葉を漏らす者がいたのは必定であった。

王として完璧であれば完璧であるほどに、疑問を抱く者が現れないはずはなかったのだ。

それでも誓いは揺るがなかった。なんの不満も持たれない統治など本来有り得るモノではない。王は反感も受け入れ、統治の一部として組みこんだ。

見目麗しく騎士たちの誉れであった王は、そうして孤立していった。

そんなことは瑣末事だった。離れられ、恐れられ、裏切られようとも彼女の心は変わらなかった。

是非もない。選定の剣を抜き放った瞬間に、彼女は感情を捨てたのだから。

硬く、冷たい、ハガネノチカイ。

それが　彼女の主となった男と重なってしまった。

少女のマスターは目的以外への関心を見せない。唯一、とある敵に対して警戒を見せたが、それだけだった。

残忍というわけではないし、殺人鬼というわけでもなかったが、必要とあれば文字通りどんなことでも行うことだろう。

徹底して興味の対象以外に視線を向けることがない、完成され過ぎた男。

召喚から既に三日が経過しているというのに、セイバーはマスターから言葉をかけられた覚えがなかった。

それは単に必要なからだ。マスターは効率的に敵を叩き、少女は主につき従う。言葉という余分を交わす意味が無かった。

彼は人間らしい姿、人間の感情など見せることがない。機械に徹する冷徹な主。

その姿はかつての少女と似通ったモノであった。

違うのは単に、どちらがよりえげつないかということだけ。

より善に近い行いをしてきたのはどちらで、より悪に近い行いをしてきたのはどちらなのか、二人を分かちモノはそれだけであった。

彼は彼女よりも汚い。暗殺者は少女よりも数段階は優れた効率を求めている。勝利のためなら人質も取るだろうし、敗北を避けるためなら他人の意志も踏みつけることは、数日のつき合いしかない少

女にも容易く想像できることだ。

他人を蹴落としてでも勝利を掴む切嗣と、他人の力を越えて勝利を掴むセイバーは、確かに戦いのステージそのものが違う。

だが、いざ戦いを前にすれば情を捨て去ることができる姿勢は、どちらも大して変わりがないものだ。

もちろんアルトリアは敵の大切な人間を盾にするような手段を用いたことはない。敵の誇りを貶めるような戦い方をしたことも、自ら裏切りを行ったこともない。勝利以上に誇りが優先される戦いがあることも知っているし、それを経験したこともある。

ソレを好まなかったという理由もあるが、立場上、あまり『汚い戦法』を選ぶわけにはいかなかったという部分も大きい。

敗北が許されなかったのと同じように、人々の上に立つ者として、敵の魂を穢す醜い姿を晒すこともできなかったのだ。

的確に相手の弱所を見抜き、ソコを突いて勝つための策を巡らせることはあつたが、それは戦いに挑む者としての礼儀であり断じて卑怯な手段などではない。

敵の誇りを真っ向から受け、それでもなお勝利を可能とするのが竜の化身たる騎士王であり、それこそが人々が求めた『王』の姿だ。

それゆえに少女は『非道』を行うことはあれ『外道』に堕ちたこととはない。『冷酷』にはなるが『卑劣』にはならない。その強大無比な力で敵の意志を砕くことはあっても、敵の意志を利用したことはなかった。

彼女の主にその制約はない。その分、彼は誰よりも汚くあることができる。

多人数を相手にしてきたアルトリアよりも個を相手にする彼の方が汚い手が上手いのは当然だ。

少女は許容し切れぬ命令であっても、令呪を以って外道に墮ちよと命ぜられれば従うつもりではある。その時、マスターは令呪行使になんの躊躇もないであろうことは予想するまでもない。

属性に差異が出るほどに異なる王と魔術師の在り方であったが、正反対のようできて、その実、同一のものであった。やり方が多少違っただけで、やってきたことは両者とも変わらないのだ。

己の真実を他人に明かさぬという点などは、完全に一致するものでもあった。王は国よりも人を愛していた事実を誰に明かすことはなかった。文字通り鉄で身を覆い、生涯、性別と共に心の奥底にあるものを封印し続けた。

それはマスターも同じだ。

少女は主の願いを知らない。主は、心の奥底になにを抱えているのか見せようとはしない。他者の理解など初めから得ようとは思っていないのだ。それ故にどこまでも冷たくなれるし、どこまでも己の意志を貫くことができる。

だから、少女は考えてしまった

エミヤキリツグ。

ついに自ら名乗ることをしなかった彼女のマスター。

自分の眼に映る彼の姿……それこそが、臣下が見てきた己の姿ではないか　と。

高級ホテル・冬木ハイアットの斜向かいに位置する、未だ建設中の高層ビルの上階。

地上150メートルの高さを誇る冬木ハイアット最上階の一室を、どこよりも隣接した位置から見張ることのできるポジションで、切嗣は煙草の紙箱を取りだしつつ、外からは見られぬように標的の居場所を確認していた。

傍らには二人の女性が控えていた。

ライフルを構え、スコープを覗きこむ舞弥と、主と同じように斜向かいのビルを睨みつけるセイバーである。

舞弥が構えるのはフルサーWA2000セミオートマチック狙撃銃。本来ならば切嗣が使う予定であったソレは、今現在は舞弥の手の中にある。切嗣の補助に徹する化粧気のない美貌は、ホテルから出てくる宿泊客の中に敵が紛れ込むという、低い可能性に狙いを定めていた。

切嗣はチラリとセイバーを見やる。

少女が身に纏う衣服はこれまでの女モノの洋装とは異なり、濃紺のドレスシャツにネクタイ、フレンチ・コンチネンタル風のダークスーツという取り揃え。もはや完璧な男装であった。

ソレらは彼女の体格に合わせるなら本来はオーダーメイドにしなければならず、そんな暇のなかった今はサイズが近いモノを着せているだけで、完全に少女の体に合っていると言うわけではない。そ

れでもセイバーは問題なく着こなしていた。

些か幅の広いスーツは、生前は男として過ごしたセイバーにとって、むしろ今までの少女らしい服装に比べれば違和感がないらしい。ややサイズの合わない装いが、さらに彼女の浮世離れた雰囲気を引き立てている。

男装の麗人、といった倒錯的な美しさはないが、凜とした美貌は傍目には絶世の美少年としか言いようのない姿であった。

場所が高級ホテルだけに、こういった格好のほう都合がよいと考えたのだが、どうやら判断は間違っていたようだ。

そんな主の考えなど知るわけもなく、セイバーは自分に視線を向ける切嗣に平坦な口調で報告する。

「最上階からはサーヴァントの気配も、視線も感じられません。アーチャーによる狙撃などは考えずともよいでしょう」

「たしかですか？ セイバー」

スコープから目を離さず舞弥が問い、セイバーは舞弥に頷いた。

「私の感知能力は高いものではありません。襲撃に備えるとしても、せいぜいが半径200メートルで、相手がなんらかの能力を行使している場合に限りです。ですが、一か所に向けて感知を働かせるなら別です。この距離であの高さなら、アーチャーが狙いを定めているかは判別できます」

言葉を発する間も少女は『目標』から目を逸らすことが無かった。意識を集中させているなよりの証左であろう。

サーヴァント感知。サーヴァントにそれぞれ備わった能力を使い、これから戦場と化す敵の拠点碧色の双眸で静かに観察し続けた。

少女が見つめる以外の場所に伏兵が潜んでいる可能性もあったが、今警戒すべき相手が^{クラス}なんであるかを理解する三人は、そんな判りきったことに敢えて触れることがなかった。

先手必勝は戦いの条理である。

こちらの情報を与える前に敵を討つことは誰しも考えることだ。逆に、情報を与えてしまい警戒されていようと、備える暇を与えなければ不利もフォロウすることができる。

敵の裏をかき、相手の隙を狙うのが本来の切嗣のスタイル。それはセオリーが定まった戦いでこそ生きるもの。

情報収集が基本となる聖杯戦争の序盤で、間桐邸を強襲したのはそのためだった。

皆が先ず情報集めに奮闘すると思いついでいる最中であれば、いきなりの敵襲が行われることを予想し得る者は少ない。

つまり奇襲への警戒が最も薄い序盤の段階が、奇襲に最も適している。

……皮肉にも、セイバー召喚直後に^{アサシン}言峰綺礼に襲撃されたことで得た確信でもあった。

外に気を取られ、内への警戒が薄いうちに叩いておく。これ以上の情報が望めず、攻めるに十分と認めるだけの判断材料が揃っていたからこそその決断だった。

正体の判らぬマスターが二人ほどいるが、それらを引きずり出すためにも、派手なパフォーマンスが彼には必要だった。

遙かに以前から情報収集をしていた切嗣は、間桐に襲撃した時点

で、正体が判っているマスターたちの居場所は把握していた。遠坂は言わずもがな。教会に匿われた今となっては無駄となったが、言峰も遠坂や教会との関係から根城はとうに突き止めていた。

そして、居場所のわかっている最後の一人 “神童” ことケイネス・エルメロイ・アーチボルトの拠点がここ、冬木ハイアット・ホテル客室最上階。貸し切られた32階のフロア全だが、敵マスターの居城であった。

その拠点が高級ホテルであると知って以降、切嗣はケイネスを言峰綺礼とは違った意味で注目している。

切嗣は機会あらばケイネスを早めに叩くことを決めていた。

本来、こんなところに工房を構えたところで聖杯戦争ではマイナスにかなりえない。

敵の侵入経路を『下』に限定し奇襲を妨げることはできるが、言ってしまうばソレだけだ。空中に逃げ場はなく、霊脈の流れも工房を組むにあまり適していないレベル。とてもではないが拠点に向いていない。

第一、建物の高所に位置するのでは、苦勞して作った工房も足場を崩され簡単に破壊されてしまう。高所に居を構えるならば足場の注意を怠ることはないだろうが、その対策に魔力や資金を割いては割に合わないはずだ。

敵のサーヴァントがアーチャーであれば、高所から近寄る者を撃ち抜く狙いを予想できる。

この戦場は狙撃手以外には不向きだ。

しかし舞弥による監視とセイバーの発言で、これまた可能性は無くなってしまうた。

ならば何故ホテル最上階などという、拠点として非効率的な場所を根城に選んだのか？

あるとすれば　　ここが敵サーヴァントの餌さ場という可能性。

魂喰い。あまり効率的でないが、安全に人々の魂を喰らい、サーヴァントを強化するために敵のマスターはここを滞在場所に選んだのだ。切嗣は最終的にそう結論を下した。

ホテルという空間は、互いに興味を持たない多数の人間が同じ建物の中に密集する場所だ。ここならば餌も豊富で、外部に死の情報を漏らさなければ、監督役に見咎められる危険も減らすことができる。

むろん従業員に怪しまれることは間違いない。幻術や暗示の類でごまかすにも限度がある。聖杯戦争の間くらいなら騙し通すこともきるが、どうにも非効率だ。理由の候補としては考え難いことではある。

それでも敵が高級ホテルを工房に選んだ理由など、それくらいしか思い当たらない。

逃げ場の確保も難しく、アーチャーの気配もない。魔術的観点から見ても冬木ハイアット最上階を拠点とした理由が見つからない以上、それ以外には考えられない。

そして、もし予想が的を射ているなら、早いうちにコレを討たねばより強力な敵となる。

攻め入ることは当然ながら危険も大きい。だが切嗣は『早急に敵を討つこと』を最優先とした。相手は魔術師の総本山、時計塔で神童と称された厄介な男。ソレを早めに倒すと決めていた。

敵が工房に引きこもったことは好都合であった。

切嗣による間桐邸の襲撃。それを目撃した敵が取るべき道は、そう多くはない。結託か、護りを強化するか。はたまた、いつ襲われるともわからぬ拠点を破棄し、新たな隠れ家を探すのか。

それらも切嗣の計算に入っていた。最優先すべきは、敵に同盟を組む暇を与えないこと。恐怖に駆られ、焦りを見せれるなら隙を突くだけ。動かず護りを固めるならば逆に攻め易い。

そう、切嗣は敵の行動も全て見越していた。

間桐邸襲撃から一日時間を置いたのは、ケイネスの対応を見るためだった。すぐにでも目立たぬ場所に移動する、あるいは別の対処を打ってくる素早い相手ならば、より警戒と観察が必要だったかもしれない。

だが やはりと言うか、時計塔の魔術師は、護り以外の動きを見せなかった。

学者畑の魔術師ながら少々危険な礼装をコレクションしているらしい。それでも全てを総合して切嗣には届かない。行動の鈍さと事前情報から、敵の戦闘レベルを判断し、今まさに攻め入る時を見計らっている状態だった。

「宿泊客の避難を確認しだい突入する。舞弥、火の方はどうなっている？」

煙草を一本消費した切嗣は部下に呼びかける。

「予定通りです。小火程度ホヤのものではありますが、火元を分散させますので、消化にはしばらくかかります」

……それはホテルに火を放ち、現在進行形で人払いをしていると

いうことであつた。

戦うにあたって、どうあつても一般人は邪魔となる。敵の餌さにさせるわけにもいかない。だからこそその計らいである。

横で聞いているセイバーも、特に異を挟むことはない。下手をすれば大勢の人間を炎の犠牲にする可能性を孕んでいたが、感情を揺らがせうるたえる様子もなく、剣の英霊は黙つてホテルを見つめていた。

宿泊客を巻き込んだのは主ではなく、敵魔術師だと少女は理解していた。

マスターの滞在地が戦場となることは判りきつたこと。理解した上でホテルを根城にしたのは敵側だ。敵はホテルの客を巻き込むことに容赦などない。既にホテルの客は護ることのできない存在となつているのだ。

彼女とて“魂喰い”の可能性は考えていた。敵の力の増大を思えば、建物を焼き払うことに憂いを覚えるより、目の前の被害者を抑えるほうが良い。

生前、主と似たような策を講じたこともある少女は、切嗣の行いを抗議する気もなかった。

それが主の方針であるのなら従うだけ。礼節を弁え、主の意志を代行する最高の騎士は、基本的に絶対服従の姿勢を崩さない。

彼女がもし主に反旗を翻す事があるとしたら、戦うための剣ではないサーヴァントの身をマスターが案じ、戦いを拒んだ場合ぐらいいなものだ。

切嗣は舞弥に向き直る。

「突入後、三十分経って僕が戻つてこなかった場合は、ホテルに仕

掛けた爆薬を使え。敵マスターは倒せないまでもホテルからは逃がさない。場合によっては、君がマスターを引き継ぐんだ」
まるで何時もの用事を言いつけるかのように彼は告げた。

それは命と引き換えにしても敵を倒すという、切嗣の鉄の意思を証明するものである。

彼は暗に自身が死ぬ可能性を示していた。

冬木市に既存の建造物で、魔術師が根城に選びそうなものは、可能性の高低に関係なく、すべて切嗣の破壊対象としてリストアップされている。この冬木ハイアットもその一つだった。

建設図面は取り寄せてあったし、爆発物も最適なポイントに設置してある。準備は既に整っていた。やろうと思えば、いつでも敵マスターを瓦礫の下敷きにすることができる状態だった。

が、切嗣はソレを躊躇した。敵は堂々、本名で最上階全フロアを貸し切り、宿泊している。戦争に赴いていながらそこまでやるということは、己の正体が割れることも承知だろう。

であれば当然、不意打ちへの用意は万全と考えていい。

高所に追い込んだ末に追い打ちを實行できる状況であれば、切嗣とて迷いなく決断した。だが、戦争と知りながらそんなところを陣取っているなら、対策アリと想定するべきだ。

ただ魔術を学ぶことに従事してきた魔術師たちが不意打ちに強いはずもないが、護る側というのは、えてして予測し得るあらゆる攻撃に備えているもの。今が戦時である以上、敵の強襲を想像し得ぬ底抜けの莫迦などいるわけがない。

加えて英霊の存在も気にかかる。彼らはマスターを護るために命を賭す。身を呈して主をかばう者もいよう。英霊としての誇りを重んじるタイプなら、特にその傾向は強い。標的から規格外の使い魔を引き離さない限り、相手に確実な死を与えることは難しい。

切嗣のように、英霊によって不死に近い力を得ているケースもありうる。そこまで疑ってはキリがないが、最低限サーヴァントをどにかしなれば話になるまい。標的が目に入らぬ距離で後先考えず足場を崩せば死体確認の術もないのだ。

結局、確実さを求めるなら、直接敵を仕留めるのが一番良いと言っこと。

敵の策に乗り、敵の懐に入ることにはなるが、正面から攻め入るしか道は無かった。

ゆえに用意したC4プラスチック爆弾は保険とし、自ら打って出る選択をした。

セイバーと敵サーヴァントを戦わせ、自分は敵の魔術師を仕留める。状況次第では差し違えることになるが、常に想定していた“死”の予定が早まるだけだ。

もしも彼が死ねば、切嗣を通して現世との接点を得ているセイバーも、時を置かずして消滅するしかない。そんな愚を犯すくらいなら少女は新たなマスターを探す。そのとき彼女は、サーヴァントを二体抱えることになる既存のマスターたちよりも、身軽で、見知った相手である舞弥を主とするはずだ。

男がそう考えていることを居合わせた二人の女性は瞬時に読みとった。

それは魔術師を殺すためだけに機械と成り果てた『魔術師殺し』

だからこそできる決断なのかもしれない。

「マスター、それは覚悟ですか。それとも、単なる蛮勇ですか」
軽率な発言をしたマスターに対し、セイバーは静かに、胸中の憤りを外に見せることなく詰問する。

従者も主の考えが理解できないわけではなかった。主にとっては全てが勝利のための手段であることはわかっている。

蛮勇などであるはずがない。自分の命など、従者や相棒と同じように、使い捨ての道具としか捉えていないのだ。

万が一に切嗣が死去した場合、確かにセイバーは次のマスターとして、切嗣の意思を継ぐ者であろう舞弥を選ぶ他にない。令呪も持たぬ身ではあるが、魔術師ならばサーヴァントが限界するための依り代となることは可能である。

切嗣の目的などセイバーは知らなかったが、少なくとも私欲を尽くす人間ではないことを理解している。その後継であれば、余所の誰とも知れぬマスターと契約を交わすよりは良いと心得ていた。

魔術の行使ができる者なら、勝ち残りさえすれば聖杯を使用することもできるだろう。

舞弥をマスターの予備として見ることは、何も間違った選択ではない。サーヴァントは主の選り好みができる立場にはない。次なるマスター候補を見定める機会を得たセイバーは、他と比べて恵まれていると言っている。

ただ、セイバーにはそれが許せない。

今の彼女は一人の魔術師を主と頂く騎士である。現行の主を差し置き新たなマスターを値踏みすることなど、彼女にはできるはずが

なかったのだ。

セイバーは切嗣の従者となることを誓った。この戦いの間だけの忠誠とはいえ、確かにそこには譲れない誓いがあった。マスターの死を看過するなどあつてはならぬ。従者には、その身を賭しても切嗣を守らねばならない義と責がある。

ゆえにマスターに軽々しく“死”を口にしてほしくない。それが彼女の本心であった。

自己を捨てるような考え方を改めてほしかったのか、自身の言葉を少しでも主に届けたかったのかは、少女にもわからない。

「私が貴方を護り、必ずや勝利に導きます。ですから、どうかそのようなことは考えないでください」

それでも、その懇願は彼女の真摯な想いから出たものだった。

切嗣はついに従者の戯言などに耳を貸すことがなかった。魔術師は自身の腕時計を軽く見ると、傍らの従者に目もくれず、時間をかけ育て上げた相棒パートナーに指示を出す。

「突入する。あとの判断は任せる」

最低限のことのみ告げると切嗣は単身ホテルに歩を進める。敵を屠るため、そして依り代マスターを守るため、己のサーヴァントは必ずついてくると微塵も疑わず。

従者を信頼したわけではなく、セイバーが聖杯の恩恵を得るために選ばなければならぬ行動を切嗣は計算に入れていた。

セイバーは軽い溜息をつく。

この主には敵わない。漏れだした吐息からは、そんな言葉が

混じっているかのようだった。

少女はマスターの後を追おうとし、

「セイバー」

背後から、予想外の声を聞いた。

それが寡黙な美女から出てきたモノだとは、一瞬信じられなかった。なんらかの確認以外で舞弥から話しかけられたのは、これが初めてのことだったからだ。

「彼を　切嗣を、お願いします」

鋭利な美貌を崩すことなく舞弥はセイバーに依頼する。発せられた声音に普段と異なる熱が籠っていることを、セイバーはすぐに察した。その言葉だけで全ての想いが伝わった気がした。

セイバーはマスターと名前の交換すらしていない。

騎士としても王としても、名も知らぬ相手と共にあるなど気持ちの良いものではなかったが、互いに裏切ることでできない契約ゆえ、関係ないと割り切っていた。

だから彼女が主の名を知ったのは、舞弥と切嗣の会話を横で聞いていた時だ。

自らに向け彼の名前が告げられたのも、コレが初めてのことであった。

マスターと同じく、ただ道具に徹する女が僅かに見せた感情。その意味を受け止め、セイバーは力強い口調で舞弥に約束する。

「心得ています。彼は私のマスターだ。マスターの……キリツグの身は、必ず」

気のせいだったかも知れないが、常に無表情だった舞弥の顔は、ほんの少しだけ綻んだように見えた。

新たな誓いを胸に秘め、セイバーは振り返ることのないマスターの後を追い、戦場へと向かった。

主従は人気のなくなったホテルの中、もはや使う者が誰もいない非常階段を突き進んだ。

途中、未だ点呼の取れない最後の宿泊者を探し求め右往左往する従業員に、全員が脱出したと暗示をかけつつ、慎重に、しかし早急に歩を進める。

十五階に到着。

外の喧騒が些か大きくなったようだ。しかし、それ以外に変わった様子は見られない。常人なら疲れ始める頃だろうが、さすがにくつもの戦場を経験した彼らはそんな素振りも見せなかった。

炎を横切りながらも速度を緩めることなく、二人は最上階を目指す。

二十階に到達した。

もうそろそろ何らかのアクションがあっというところだ。それでも何も起こらない。

正面から侵入した相手に対し、敵が取る戦術は予め予測していたが、沈黙を保たれては少し不気味だ。警戒心を高め、用心しながら階段を駆け上がる。

二十五階と二十六階を繋ぐ非常階段に差し掛かって　ここで二人は急く足を止めた。

異常を感じ取った二人は、階段から離れ、ホテルとしてはやや広い通路に出る。

剣を振るには十二分の広さを確保し、彼らは異変を見届ける。

手も届きそうなほど近接した空間、その魔力が濃度を増していく。勘の鋭い者なら魔道と関わりが無くとも違和感を察知できるレベルで、周囲の雰囲気の変化してゆく。

来る。

主従はそれぞれの経験から、これから起こるであろう事態を察し、身構えた。

瞬間の閃光。

顔を伏せることもなく、目を焼かれるほどではない光を凝視する。襲撃者二人の目の前でヒトガタが完成した。

「悪いが侵入者よ。ここから先へ進みたいなら、俺を倒してからにしてみらおう」

紅と黄の二槍を携えたサーヴァント。憂いを秘めた美貌の騎士が、戦意も露わにそこに立っていた。

それがランサーと呼ばれるクラスであると、セイバーは即座に理解する。

槍を持っているから、という単純な理由ではない。いつでもこちらの相手をする目で訴える敵サーヴァントとの距離。その間合いが槍使いのものだったからだ。

「……マスターは先に。私が彼を喰い止めます」

自身の役割を弁えるセイバーは、己が主の前に出た。少女は瞬時に魔力で編んだ鎧を着込み、見えぬ剣を手に槍の英霊と向かい合う。

サーヴァントの間で空気が張り詰める。

戦場の緊迫感。素人がこの場に居合わせたなら、殺気の余波だけで意識を失おう。

その間、切嗣はあっさりと、敵を阻みに現れたはずのランサーの横を通過した。

ランサーは通さざるをえなかった。

彼は既にセイバーと対峙している。その状態で余所に意識を回してしまえば、次の瞬間にもその首は剣の英霊によって斬り落とされるからだ。

「良いのか槍使い。私のマスターが先に進んだぞ」

手が出せないとわかっていながらセイバーが言う。露骨な挑発に、ランサーは双槍を構えつつ返答する。

「数合で貴様を倒し、すぐ後を追えば問題はないぞ剣の英霊」

見えぬ刃を従えるセイバーのクラスを看破し、獰猛に笑いながら、ランサーは敵が挑みかかる瞬間を待っていた。

彼が主から賜った命令は敵サーヴァントの足止めである。睨み合いを続けるだけで主命を果たすことができるランサーはしかし、それで終わるつもりはなかった。

彼は敵を打ち果たし、即座に敵マスターを討ちにゆくつもりだった。

むろん、そんなことをしては、敵を倒すのは己と息巻く主からの非難は免れないが、それでも万一を考え、主の存命を最優先として

いた。

「……正気ですかランサー。この狭い室内で、槍兵である貴方が剣士である私と戦うと？」

やや素に戻った口調。セイバーは敵がランサーであると知って、敵魔術師の真意が判らなくなり、少しばかり困惑した。

従者の戦力も活かさず、こんな戦いに繰り出す敵マスターの愚考がわからなかった。

防戦に追い込んだのがこちらとはいえ、ここを根城にしていたのは敵の方だ。こんな事態になることくらい予想して然るべきであったはず。その思惑が推し量れない。

問いにランサーは顔をしかめた。対峙する者ですら見落としてしまいそうなほどに僅かな表情の変化だった。

敵に言われるまでもなく、己の長所が活かせぬことは承知。それでも主には逆らえぬ。そんな葛藤が見え隠れしていた。

言わぬが花。そんな事柄だったことに気づき、セイバーは無粋なことを問うた己に苦笑する。

この場を戦いの舞台に選んだことは敢えて問うまい。我らは剣となり戦うだけ。そう思い直し、刃を握る手に力を込める。

不本意な戦いではある。彼女とて戦士の端くれだ。どうせ戦うのであれば、全力の相手と戦技を競い合うことが望ましかったが……、この場が用意されたと言うなら流れに身を委ねるのみ。

「いいでしょう。ならば、その槍ごと貴方を叩き斬るまで。貴方はここで果てる、ランサー！」

セイバーが一息に距離を詰め、予期していたランサーは敵を近づ

けまいと魔槍を奔らせる。

唸りを上げる剣と槍。

今宵また、現世に蘇った英霊二人の激突が始まった。

ホテル壊して、ケイネス探し出してズドンと撃ち抜いて終了。

なんてアツサリ終わらせようかと思ったりもしましたが、それじや物語としてあんまりなんでホテル攻防戦の開始です。

セイバーから見た切嗣は、書くならもつと先のつもりだったんですが、なんか筆が勝手に動いてました。

私なりにですが「Fate/stay night」で語られる王・アルトリア」をそのまま書いたつもりです。

Zeroのセイバーとちがーうとか伝承のアーサー王とちがーうとか言わんといて。

「アーサー王は、人の気持ち分からない」

ドラマのために原作を殺すZeroでは「他人の心が分かってない王様」に対するものとして扱われる言葉ですが、

原作では「アイツ人間の感情無いんじゃないの?」みたいな意味合いで使われてましたので、本作のアーサー王はそういう方向です。

仮に「他人を理解できない王」への言葉で、セイバーもソレを四次で泣くほど痛感したのだとすると、

五次でその言葉を「心を見せない王」への非難として記憶してたことに酷い矛盾が生じますので。

四次の経験で「人の感情を見せない王」の殻に罅が入って、五次開始時点から多少は情を見せるようになってたんだと、そんな話に

なるようにしたいと思っています。

非常階段を上りきった切嗣は、いきなりの洗礼を浴びることになった。

三十二階に到達した切嗣を出迎えたのは、迫りくる魔獣の群れだった。翼の生えた猫や、巨大な四肢を持った猿が計十四体。大型の野犬ほどのサイズのケダモノが侵入者に一斉に牙を向いた。

魔獣としては小型の彼らは簡易に作り出された使い魔だろう。見た目ほどの脅威ではない。とは言え、強力な使い魔であることに変わりはない。まずは小手調べと敵の声が聞こえてくるかのようであった。

そんなものは予測の範疇とばかりに切嗣は全てを撃ち殺した。間髪入れずコートの中から短機関銃サブマシンガンを抜き放つ。魔術でコートの内ポケットの空間を拡張し、その中に武器類を収納しておいたのだ。

マズルフラッシュが炸裂する。背後から迫る使い魔にも慌てることはない。投薬かなにかで痛みを誤魔化しているのか、後ろを振り向く無駄も反動リコイルを気にする余分さえなく、腕と手首の動きだけで短機関銃を敵に向ける。

短機関銃の物理的な破壊力に加え『魔殺し』と『幻想否定』の概念ろいをたつぷりと含ませた魔弾は、霊体には効かなくとも実体には効果的だった。魔に属する獣を、容赦なく一匹一匹確実に斃していく。

使い魔と同数の光の連射が終了すると同時に、獣は全て地に伏し、塵となって消滅していった。

わずか数秒。難なく敵を滅ぼした。内漏らしや無駄弾は一つもなかった。

時間差で魍魎・悪霊と思しき靈魂が切嗣に迫る。

番犬の代わりに集められた霊体だろう。間隙を狙う、緩急をつけた奇襲。強力な使い魔を倒したことで気を緩めていれば瞬時に彼らの餌食となる。

直接的な害を及ぼすような魍魎・悪霊は少ない。だが、憑かれれば負の呪いに近い霊症を起こすことがある。

おぞましい毛虫が這い寄るような気配。邪気に気づけたとしても、慣れぬ者では対処も難しい。

切嗣はコレも余裕で排除した。

彼がコートから取り出したのは、物理的な破壊力を持つ銃器だけではなかった。サブマシンガンでふさがった片腕とは反対の手に小さなピンを握っていた。

男は栓を開け、無色透明ながらキラキラと輝く液体を撒き散らした。

中身は怨霊の類を封じる聖水だ。本来なら空間に溜まった瘴気を打ち消し、澱んだ空気を浄化することに使用されるマジックアイテムである。戦闘向きの礼装ではないが、より濃度の高いモノを使用することで下級の霊的存在への対策として利用できた。

サーヴァントのような高位の精霊には通用しないため、このように低級霊に囲まれた場合に備えての武装の一つである。

聖水は切嗣の期待通りの効果を発揮した。彼の周囲に迫っていた

魍魎・悪霊は、聖水の霊力に触れ、その全てが無に帰する。

切嗣はこれまでの攻防に関心も見せなかった。

戦闘を行った意識もないのだ。彼の感覚としては、ただ邪魔な障害物を退ける延長として銃を抜いただけ、という程度の興味でしかなかった。

二歩、三歩と進み、階段を離れて通路に足を踏み入れた瞬間、棘のような槍が上方から無数に射出される。

光沢から判断するに、恐らくは敵の得意とする魔術『水銀』で作り出された槍だろう。重力によって加速し、逃げる隙間を与えることなく、標的めがけて豪雨のように降り注ぐ。

それもまた想定内の範囲内だった。切嗣は予め幾重にも詠唱しておいた魔術障壁を展開させ、人体の主だった内臓器官を中心に障壁で防御する。同時に、次の攻撃を回避するべく、床に向けてにサブマシンガンの銃口を構えた。

水銀のスコールが敵を射殺そうと攻め立てるのに合わせ、男の足元から、前後合わせて十二本の牙が勢いよく生える。

廊下の床そのものが巨大な口に変化したのだ。牙は獲物を喰らうべく襲い掛かる。

上に注意を惹きつけ足元を掬う。初歩的かつ使い古された手は、一瞬でも気を抜いては生き残れない確実な一手でもある。

……逆に、それは判り易い戦法であるとも言えた。

槍を防ぎつつ切嗣は大きく開かれた口に鉛玉をぶち込んだ。これまでの敵の傾向から、このタイミングで仕掛けてくるのは直接ダメージを与える類の罫だと読んで、物理的威力を持つサブマシンガン

を再び使用した。

巨大な口は聞くに堪えない悲鳴を上げて消滅する。断末魔の甲高い叫びは、常人なら気が滅入りそうな音量と痛ましさがあつた。相手の精神的ダメージを計算して、こんな悲鳴を用意していたと言うなら見事なモノだ。むろん、悪い意味でだが。

ここまで、三十二階に入って数歩以内の出来事だつた。全てに対応し切る切嗣の力量もさすがである。

階段を登りきつた時点でこれだけの猛攻を仕掛けてきたというのだから、この先に待ち受ける魔術はこの程度では済むまい。

魔術師の拠点は、基本的に来る者を拒み、入った者は決して逃さない造りとなつている。奥へ、奥へと入っていくことは、脱出不能なアリ地獄に自ら落ちるのと変わらない。

それでも魔術師の長所も短所も、危険な部分も御しやすい所も把握する男は怯まない。

敵を侮っているわけではない。敵の戦力は正確に読んでいる。準備は万全。“己が死んだ場合”にも備えてあつた。彼は臆することなく奥へと進んでゆく。

『魔術師殺し』は用意した武装を惜しみなく使用していく。より深いところまで進み、設置された魔力炉を一つと、いくつもの防壁、いくつものトラップを突破した。そこで切嗣は予備の弾も尽きた短機関銃を通路側にポイと投げ捨てる。

如何なる仕掛けが施されていたのか、銃は爆破霧散する。同時に、その爆発と共に呪詛が流れ出し、工房の魔力の流れを阻害した。

魔術による簡単な妨害だ。単純だが強力なもので、これで敵は拠

点の罫を十二分に機能させることはできない。

全て聖杯戦争のため、アインツベルンの財力にモノを言わせて用意したものである。

コレの欠点は物質を媒介にすることと、敵拠点の奥深くで起動させなければ効果が薄いということ。ここまでくれば問題なく起動できた。

そんな仕掛けを発動させるほどの奥まで入って、切嗣は己が敵を正しく評価していなかったことを確信した。

どんな作品にも作り手の個性というものが現れる。

例えば絵画。例えば彫刻。例えば料理。
敵を撃退するために設置された、魔術師の罫もしかり。

優れた職人や目利きであるならば、同業者の作品を見て、その作り手の姿を読みとることもできるという。

切嗣はこと魔術師の工房に関しては目が利いた。魔術師殺しとして幾多の魔術師の工房を見てきた切嗣は、まさに魔術鑑定士とも言えるほどに目が肥えていた。

基本的には敵の隙を狙う“奇襲”や“暗殺”を主な手法としてきた切嗣ではあるが、標的の陣地に踏み込む強硬手段に出たのはこれが初めてのことでない。

魔術師というイキモノは基本的に隙が無い。高位の魔術師であればあるほどに付け入る隙というものを見せない。

そのため今回のように、直接、敵のねぐらに潜り込むことが要求される状況は、彼にとって珍しいことではなかった。

そんな彼の眼から見た今回の敵拠点は、じつに見事なモノだった。トランプの配置は敵の動きを完璧に計算している。放たれた使い魔の質も高度である。魔力炉から流れる魔力は、効率的に自陣に行き渡るよう最高の調律が施してあった。二十四層もの連なった結界は、もはや城壁と呼ぶに差し支えない。

用意された魔術はどれも凶悪で、魔術的観点から言うなら素晴らしいの一言に尽きる。一般の美的感覚で言うならグロテスクで気味が悪いと表現する他にないが、少しでも魔術をかじった者なら、これがどれほど優れた工房か理解できるだろう。さすがに“神童”と讃えられた秀才が用意しただけはある。

強力かつ華麗。ゆえに芸術作品。

これまで長年にわたり魔術師と戦ってきた切嗣でも、こんな壮麗な工房に遭遇したのは初めてのことだ。

しかし侵入者撃退を旨とする陣地として見るならば、この拠点は及第点も与えることはできなかった。

まず、敵の回避や破壊は計算に入っているが、弱者を追いこむ前提で作られており、強者に攻め入られた場合を想定していない。

この工房を作った者は、己より力量が上の者が存在しないとでも思っているのか。

用意された魔力炉は、使いきれもしない魔力をただ無駄に垂れ流すだけで、それ以外の用途がなかった。魔術師ならば一つの装置に二重三重の意味を持たせておいて良さそうなものだというのに、そんな気配はまったくなかった。

計算された畏も、侵入者の動きを完璧に計算して配置しているだ

けに、逆に侵入者側から次の仕掛けが読みやすいものだった。こちらの想定を上回るモノも、下回るモノもないのだから、楽に先が読めるというものだ。

使い魔の群れとて赤点をつけてやりたくなるレベルだった。強力であつても、狭い通路内では力も活かしきれない。しかも少し煽つてやるだけで簡単に統率が崩れてしまうのだから、せっかく何十体と用意された番犬も台無しである。

どうにも美しくあることに感^かめてばかりで、効^{まじ}率的でない。

無駄に強力な魔術を用意するより、敵の急所を貫く呪い、敵の呼吸を止める仕掛けでも置いた方が、効率よく敵を殺せるのだ。毒化させた魔力を霧状にして散布したほうがマシだったかもしれない。（もちろん切嗣はソレらへの対抗策は準備していた）

正直なところ、切嗣が敵の工房に対して抱いた感想は「拍子抜け」であつた。

いや、この感覚は拍子抜けと言うよりも、物足りないとも言つた方が近いのか。

敵の刃を止める工夫が足りない。敵を出し抜く狡猾さが足りない。敵の足を射抜く速さが足りない。

なにより敵を殺すための殺意が足りない。見えてくるのは、己の力を誇示しようという敵の意図だけだ。仮に、最後の罠か何かでこちらを貶めるための伏線だとすれば、周到にもほどがある。

よつて、最終的に評価を下すなら「芸術作品としてはA+、身を護り、敵を屠る拠点としてはC-」というのが妥当なところだろう。

切嗣は敵を過大評価していたのだと結論づけた。

集めた情報から、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが魔術師として優秀な能力を有しているという評価を下した。それ事態が彼の失策であったのだ。

かき集めた情報によれば、ケイネスは高慢で、己以外を見下す男であるという。

由緒正しき家柄に生まれて、才能あふれ、エリート街道を突き進む者であるならば、多少の驕りは当然だろうと気にも留めなかった。

特に『戦い』の舞台となれば、性格という要素を切嗣はあまり重くは見ない。

自らの欠点を自覚して私心を殺す者や、暗示などで別の人格を用意できる者もいるからだ。

だからケイネスの勘違いぶりも、つけ込む弱点として機能するのは期待していなかった。

こうまで筋金が入っているとは思っていなかったのである。

たまにいる手合いだ。魔術師であることが絶対の価値観と信じ、魔術を成し得る自らを選ばれた人間であると思いつく。こんな勘違いを自陣にまで反映させるとは。

人々を震撼せしめる証明を発見する学者こそが選ばれた者で、それ以外の者は単なる学徒でしかないという、そんな簡単なことにも気がつかない愚か者。少し優れた論文を書いた段階で満足するような気配が見て取れた。

閉鎖的なインツベルンの城で過ごした頃は、さして珍しくもなかった。千年もの歴史を重ね、ただ失われた『第三魔法』を蘇らせることに栄光を夢見てきたインツベルンが、他者を信用すること

なく自らの矜持に固執するようになっていたのは仕方のないことではあった。

まさかシャバに出て早々、そんな謬見にお目にかかるとは。想定していた中で最も低い可能性だったのだ。

歴史古き家系の魔術師が、それも“神童”と謳われるロード・エルメロイが、そんな愚昧であるとは予想外だった。魔術師を知りすぎていたことが、今回逆に切嗣の目を曇らせていた。

ケイネスは己の誇りに固執している。執念を燃やすほどの目的をケイネスは持ち合わせていないのだ。これならば、魂喰いのような自らを貶めるマネはしないだろう。

高級ホテルを滞在地にしたのは、単に自らの気品に合う宿泊施設を選んだだけではないだろうか。天才と名高い己の本名を晒し、自らの居場所を周りに知らせていたのは、単に見落としたか自信過剰なだけではないのか。

早期に討たんとする必要もなかった。敵を正当に評価したことが裏目に出た。対策アリと見て、ホテルごと敵を討つ手段をとらなかつたが、もし選んでいればソレで簡単に倒せたのではないか。

そんな仮定を考えて首を振った。

すでに選択は成されたのだ。ならば今更後悔しても意味がなかった。

それに、真実がどうあれ最悪のケースは常に備えておかなければならない。敵が最強であると、常に用心しておかなければならない。頭を切り替え、頭上から襲う刃を躲しつつ、切嗣は標的を求めて更に奥へと進んでいった。

“この女、手強い……！”
デイルムツドはかつてない強敵との邂逅に、烈しくも心地よい痺れを感じていた。

小火で済ませる程度の火は、予報以上の風力と、宿泊客の避難に手間取った従業員のおかげで消火作業が進まず、その勢いを増していた。

二十五階に位置する二人の英霊も既に火の手に取り囲まれていた。

彼らはそんなものは気にしない。彼らサーヴァントは物理的な炎で焼かれる存在ではない。対峙する敵から目を逸らすことは、即、死に繋がるため、それ以外のモノに関心を向ける余裕などなかった。

ランサーは右の長槍一本で刺突を繰り返し、縦横無尽にセイバーの剣戟を振り払う。

通常の槍使いにない独特の動きは、バーサーカーと戦った時と比べれば些か鈍く、隙も格段に多い。

セイバーも同様に動きが硬かった。彼女もまた、アサシンを一撃の下に破った時の力強さはなりを潜めていた。踏み込む力も五分以下に抑え、小手先の技に頼ってランサーと刃を交錯させていた。

槍騎士の槍が虚空を斬る。剣騎士の剣が敵の残像を斬る。英霊の刃が作り出す風圧ならば内装を削り壊しそうなものだが、しかし壁面は健在であった。

彼らは本気で敵を殺しにかかっているが、全力を出してはいなか

ったのだ。

互いのマスターが上階にいるため、二人は思うようには戦えなかった。英霊たる彼らが本気の力で暴れまわれれば、ホテルの支柱をも破壊しかねない。そうとあつては主がホテルの崩落に巻き込まれる。それゆえ彼らはその実力を見せることができずにいた。

不利なのはランサーのほうだ。小柄な体躯の少女は小回りも効いて、狭い室内でもそれなりに戦うことができた。

対して背の高い青年は、槍使いの宿命として長竿を存分に振りまわすことができなかった。

如何に通路の横幅が広くとも、壁と天井に囲まれた屋内で槍の真価が発揮できるワケがない。しかもデルムツドの槍は一つではなく二本なのだ。これではランサーの長所を活かしきることなどできなかった。

彼のスタイルは右のゲイ・ジャルグを攻めの要に、左のゲイ・ボウで護りと牽制を行うことにある。

それぞれを片腕で扱うからこそ、普通の槍術とは比べ物にならない引き出しを有する彼の技は、この状況では両手で扱うよりも手数が多い程度にしか機能していなかった。

本来は変幻自在の動きを見せる彼の槍は、完全に封じられていた。いつそ片方を置き、一本だけで戦おうかとも思ったが、目の前の敵にはどちらの宝具を失うことも敗北に繋がると悟り、彼は二本の槍で戦い続けた。

率直に言つて青年と少女を比べるならセイバーの方が強い。

戦術こそ互角の戦いを可能とするほどだが、単純なステータスは

剣の英霊の方が上だ。それをマスターの“目”で見抜いたからこそ、切嗣はセイバーにランサーとの直接戦闘を任せただ。

スキルにおいても彼らには開きがあった。ランサーには“心眼”と呼ばれる、経験から敵の行動を予測するスキルがあるが、セイバーには“直感”という才能による予知能力のスキルがあった。

敵の行動予測が可能という点は似た能力と言えるかもしれないが、まったくの別物である二つの能力。一概にどちらが上と断ずることはできないソレも、青年と少女を比べるのであれば、若干セイバーの“直感”がランクで上回っていた。

戦闘経験を頼みに不利を打開しようとしても、それ以上の予測を以ってセイバーが攻め手に回るため、ランサーはどうにも突破口が掴めないでいる。

さらに長身も災いして、男は俊敏さを生かすこともできなかった。ステータス基礎能力でもセイバーに軍配が上がり、所持能力スキルにおいてもランサーが劣る。武装の有利も生かせぬとあっては、槍騎士の勝率は格段に低くなる。

圧倒的不利 そんな状況に陥ってなお、この強敵と戦えることにランサーは誇りを感じていた。

先だつてのバーサーカーとの戦闘は、敵がケモノゆえに己の戦い方をすることもできなかったが、今度の相手は最優と称せられるセイバーである。

その清廉なる太刀筋に、純粋な『刃を持つ人間の戦い』ができることに悦びを抱いていた。

奔るセイバーの剣戟をランサーがゲイ・ジャルグで受け止める。

「ぐっ……」

呻くランサー。力を五分に抑えた剣戟はそれでも重く、火花を散らせるほどの火勢である。

爆薬を叩きつけるようなセイバーの剣は、真実その通りだった。

セイバーの剣が振るわれ、それを受けるたびにランサーの槍が光を帯びる。それがなんであるかランサーにはすぐに見当がついた。

ソレは視覚できるほどの魔力の猛りだ。セイバーの何気ない攻撃には、とてつもない程の魔力が籠っている。そのあまりに強い魔力が、鏑迫り合う敵の武器にまで浸透しているのだ。

ただ受けるだけでも感電したと錯覚するほどの衝撃だった。男の槍が正確無比な狙撃銃だとしたら、少女の一撃は火力に物を言わせた散弾銃である。

少女の一撃が振るわれる度、電灯の切れた通路内に炎とは別の閃光が走った。

だが。

「っ！」

歯噛みするのは一撃の威力に驚愕するランサーではなく、むしろセイバーのほうであった。

飛び散る魔力の火花は即座に鎮火する。敵の得物にまで及んだ彼女の魔力が瞬時に消失しているのだ。まるで、少女の魔力を槍が喰らっているようにも見えた。

いや、消されたのは槍に届いた魔力だけではなかった。

紅い槍と交錯した瞬間、刹那の間ではあるが突風が巻き起こり、見えぬはずの剣が黄金の刀身を露わにしていた。不可視の宝剣が敵

にその輝きを晒したのだ。

彼女の剣を見えなくしていたのは『風王結界』と呼ばれる、風の魔術の加護である。

圧縮された風を剣に巻きつけることによって、斬撃の威力を増大させ、さらに光の屈折率を変化させて剣そのものを不可視にする。それがセイバーの二つ目の鞘の能力だ。

剣が纏った風は、敵の槍に応じるたびに削られた。ランサーの槍が『風王結界』を暴き、ごくわずかな合間だけ宝剣の真の姿を白日の下に曝け出した。風の鞘は直後に少女の魔力で再生を果たすも、見られたものは取り返しようがない。

触れ合うモノの魔力を奪うのが紅い槍の能力であることは、疑うまでもなかった。

基本戦力に差があっても、あとは戦略と“切り札”で補うことはできる。とは言え、このような睨みあいとなつては、お互いに戦略など立てようもない。

ならば残るは切り札の競い合いである。敵の宝具の力を垣間見たセイバーは、強く攻めに出ることができないでいた。

ランサーは宝具の使用を、この戦いに限って主より許されていた。だからバーサーカー戦と同じになるはずがなかったのだ。彼は宝具、ゲイ・ジャルグ破魔の紅薔薇の真の力を用いてセイバーと斬り結んでいた。

それは当然ながら、相手に己の真名を教えてしまうということでもあった。

「……双槍を振るい、さらに片方が魔を断つ刃。加えて、これほどの槍術の使い手と言うなら、思い当たる名は一つしかない」

少女は呟くように言う。数合受けた程度ではわからなかったかも

しれないが、さすがに魔槍の力を晒した状態で二十分以上も打ち合えば、その正体も掴めるといふものだ。

「フィアナ騎士団、随一の騎士……。御身は“輝く顔”デイルムツド・オデйнаとお見受けしましたが」

己の伝承の類縁にあたる英雄の名に、もっと早く気がつくべきだったとセイバーは己を叱咤した。

ついに襲撃者に真名を看破されたランサーは、むしろ清々しいほどの面持ちで目を細める。

「名にし負う騎士王と鏢迫り合うことができようとはな。フフン、どうやら俺も捨てたものではないらしい」

真名を看破したのは剣士の少女だけでなかった。

英霊として時間軸の“外”に置かれた彼らは、生前より未来の英雄が相手であっても関係が無い。デイルムツドもまた、後に彼の故郷を栄光へと導くことになるアーサー王を伝説として知るのである。

ランサーは得たりとばかりに笑い、槍を剣士に突きつけた。

「刃渡りも確かに見てとった。これでもう、見えぬ間合いに惑わされることはない」

互いの名も知れた。これでようやくと騎士として尋常なる勝負を挑めると、そう青年が信じた時であった。

「　　ッ!?」

ランサーの動きが硬直する。立ち会う者でなければ気がつかないほど小さな、先のセイバーの剣が露出したよりも短い一瞬ではあるが、ランサーに確かな隙が生じる。

むろんセイバーがその隙を見逃すワケがない。これを勝機と見た

か、ランサーの槍をかくぐって敵の懐に潜り込み、胴を薙ぐ一撃で両断せんと刃を見舞う。

遅れてランサーが黄の槍で防ぐ。が、不意打ちにも等しい攻撃に当然、戦いの場で隙を見せたランサーの失態だ。態勢が崩れたのは誤魔化しようがない。

いかなデイルムツドの双槍とて、互角以上かもしれぬ敵の刃を、乱れた足取りのままに捌き切れるはずもなかった。剣士の鋭い太刀筋は確実に槍兵を追い詰めていった。

隙を生んだのは油断や驕り、精神の未熟さからのものではなかった。契約を結んだサーヴァントはマスターが甚大な危機に陥った場合、感覚でそのことを知ることができる。ランサーがセイバーに騎士としての戦いを挑もうとした時、折しも時を同じくして、槍兵は主の危機を察知したのだ。

またもやセイバーのマスターによって、ランサーのマスターが窮地に追いやられていた。デイルムツドは主に忠誠を誓う者として、主の危機を看過するわけにはいかなかった。それゆえに動揺が現れたのである。

少女はそんな敵の事情に遠慮はしない。何を抱えた相手であろうと、敵として立つなら斃すまで。

元より彼女は襲撃者側。マスターである切嗣がなにかを起こし、結果、相手に隙が生じたと言うならソレに準ずるだけだった。

急いで主の下に向かわねばならないランサーであるが、ここでセイバーに背を向ければ敗北は避けえない。主の救援に赴くにはセイバーをどうにかしなければならなかった。

セイバーの剣技はまさしく正道だった。剣の“型”に逸脱することなく、勝利を前提とした動きは流麗かつ無駄が無い。剣士の手本のような剣筋は、およそ人間が刃を握る上で、これ以上が望めないほどに理に適うモノだった。

ゆえに王道。ヒトが振るう中で最高の剣技。セイバーの剣は、ランサーのような二槍を用いる邪道の筋にはない『正統派の剣』であつた。

ディルムツドほどの英霊にとって、正統派の剣は力モでしかない。型にハマつた綺麗な剣筋とは、悪く言えば読みやすい剣。教科書通りの業など、死地を何度となく逃れてきた槍騎士は見飽きている。

だが筋が読みやすいはずの華麗な剣戟は、見えぬ宝剣が邪魔をして軌道を判別し辛くしていた。

否、武器の性能を頼みにしているのではない。少女の太刀筋は、華麗な騎士よりも疾く、熟練の兵士よりも巧みで、屈強な戦士よりも遙かに重かつた。

コレと比べては、並みの騎士など子供も同然。型通りの剣もこれほどに昇華させていれば別物だ。

刃渡りを測つたディルムツドでさえギリギリだった。仮に剣が眼に見えるモノであつたとして、果たして凡庸な戦士たちに彼女の剣が読めるかどうか。

己に合つた業を磨き上げる戦士たちにとって、正統派で頂点を目指す者ほど恐ろしいモノはない。半端な習得では他者に破られるだけだが、極めることができれば、選ばれた者しか届かぬ領域に踏み入ることができるからだ。

少女の剣はソレだった。一朝一夕の鍛錬では身につかず、生半可な才能では至れない『王者の剣』であった。

……そんな剣戟を披露する相手だから信じ難かった。

騎士としての名乗りを蹴って、勝利を優先する戦いを選ぶ彼女の真実がデイルムッドには受け入れられなかった。

「ぐっ……、セイバー！ お前とてこのような戦いは本意ではないハズ……！ 騎士としての己を貶めてまで、勝利を得ようと言うのか！？」

少女は騎士の頂点として伝承に名を残す者。ならば、彼らが望む戦いは同じモノではないのか。そう願って、剣士の猛攻を防ぐランサーは声を荒げた。

不本意な戦いを強いられることなど承知だった。だが、これほどの相手を前に、眠らせていたはずの騎士道精神が沸き上がっていた。互いにマスターの生死という憂いを抱え、全力の出せぬこの状況もつと尋常な、正々堂々の戦いをランサーは望んでしまった。

彼の望みの中には、誉れ高き戦いにその身を投じ、騎士として雄々しく戦った上で勝ち残ることを前提とするものもあった。それを果たすことができるかもしれぬ機会を得たというのに、これでは彼の心は晴れぬばかりだ。

セイバーは敵の言葉に心を震わせるでもなく淡々と応える。

「騎士なればこそだ、ランサー。我らサーヴァントはマスターの剣にすぎない存在。私は騎士として主に勝利をもたらし、聖杯を掴めればそれでいい」

己の名誉など二の次だと。聖杯は勝利の果てに主と二人で得るも

のだと騎士王は自らに任じていた。それがサーヴァントの役割だと彼女は律していたのだ。

その覚悟が、己より重いものであると槍騎士は悟った。

……そう、我ら騎士に必要なモノは名利に非ず。

カタチだけの誉れを求め虚栄心を満たそうなどは、それこそ騎士としてあってはならない欲望ではないか。

我らは私心を捨てて主に剣を捧ぐ者。主君を信じ、主君に奉ずることこそ騎士の喜びであり、騎士の道理ではなかったか。

この身は忠道を貫くと決めた。ならば、己の誇りにこだわる以前に、果たすべきことがあるはずだ。

ランサーは全力でセイバーを振り払い、その勢いで壁にたたきつける。砕けることはなかったが壁に蜘蛛の巣状のヒビが入った。

突如として本気を出した槍兵に、セイバーはとっさの防御で手いっぱいだった。

ずいぶんと甘えていたものと、デイルムツド・オディナは苦笑するように嘆息する。敵に騎士道を説こうとして、自分の方こそ誇りにこだわるあまり、騎士としての己を貶めようとしていたことに気がつかされた。

己の目指すモノにはかり囚われて、成すべきことが何であるかを忘れていた。

「……すまんセイバー。我が心はずいぶんと曇らされていたようだ。お前を相手にこれでは失礼だな」

憂いを帯びた美貌に、キラキラとした殺気が宿る。二槍を持つ騎士の気配が、先ほどよりもさらに手強い相手に変貌したことに剣の英霊は気がついた。

「ここからは今までと違う。次なる一撃は、最大の敬意を以ってお前に挑むことにしよう」

ランサーは自らの恥を拭うべく、槍を握る手に力を込める。一触即発の空気に二人を囲んでいた炎すら消し飛んだ。

ランサーは主を想うて決着を急ぎ、セイバーもまた、敵を斃さんとする気迫に満ちている。次で勝敗が決することは誰の目にも明らかだった。

沈黙のまま、緊張の密度は倍増して、両者はじりじりと間合いを詰めてゆく。

ここで、セイバーには一つの懸念があった。

未だ力を見せぬもう一振りの槍……それがデイルムツド・オデインの槍だと言うなら、男はその力を最大限利用してくるはずだ。

勝機を逃さぬには、傷を負うことは覚悟しなければならない。果たしてどちらを受けるべきか。

動いたのはランサーが先であった。

右の魔槍の刺突が閃光の如く繰り出される。朱の槍が少女の心臓を狙う。ただの直線の軌道は、これまでと比べ物にならぬほどの勢いと速度であった。

ゲイ・ジャルグ 破魔の紅薔薇の前では、魔力で編んだ鎧など意味を成さない。この一合を決着と決めたセイバーは魔槍を回避しての斬撃を狙う。

予期していたランサーはセイバーが左に……つまりは彼のもう一つの槍の側に避けねば回避できぬよう、その体躯で通路を塞いだ。これでセイバーは紅か黄のどちらかの槍を打ち払って防御しなくてはならなくなった。

双槍の片割れ必滅の黄薔薇は、ひとたび穿てばその傷を癒さぬ呪いの槍。生身で受けるには危険だが、破魔の紅薔薇と異なり、魔力で編んだ強固な鎧を破る力はない。

己の真名を知るセイバーならば必滅の黄薔薇の力を見抜き、甘んじて黄の槍を払う道を選ぶとランサーは読んだ。

案の定、セイバーはランサー渾身の刺突を左に逃れることで避け、ランサーが誘導した通りの位置で剣を振り上げる。

その判断は相手がディルムツドでさえなければ正解である。どんな達人だろうと、全力の攻撃が躲されては次に繋げることができないものだ。しかし今代のランサーはどこまでも戦の条理を覆す。

「甘いぞセイバー。俺は最大の敬意を籠めると言っただけだ！」

槍兵の動きが急変し、変わらぬハズの長竿の動きが変わる。迎撃討とうとした敵に必滅の黄薔薇の一撃を向けた。

狙うは心の臓ではなく鎧纏わぬ首筋である。振り上げた少女の両腕が邪魔ではあったが、ディルムツドならば針で縫うように隙間を選ぶこともできる。

黄の槍を破り、その延長で敵を斬ろうとしたセイバーは窮地に立たされた。既に腕は振り下ろす態勢に入っている。いまさら相手の動きに合わせて攻撃を変えるなど不可能。さすがのセイバーもそんなことはできない。

もはや回避も防御も間に合わない。癒せぬ傷を与える魔槍を受ければ、かすめただけでも致命傷だ。例えば後にランサーが斬られるとしても、セイバーがそれ以上の深手を負うことは確実だった。

ランサーは数秒先の勝利を見た。

そこで、少女がポツリとつぶやく。

「ああ、そうだなランサー。だから私も最大の敬意を以って貴方を倒そう」

セイバーは右腕のみを剣から離し、更に魔力で作られた籠手を自らの意志で消滅させる。

剣より早く振り下ろされるセイバーの右腕が、そのまま必滅の黄薔薇ボウに突き刺さった。

ランサーの目が驚愕に見開かれる。腕に固定された槍は、軌道を強引に逸らされた。太刀の邪魔をするものはなくなり、左腕のみで操られる聖剣が振り下ろされる。

袈裟がけの一撃は、そのままもう一槍を握るランサーの右腕を、肩口あたりから斬り落とした。

「くあ……ッ!!」

舞う鮮血と漏れる苦悶。斬撃は腕を落とすだけに止まらず胸にまで達し、槍兵に致命傷を与えていた。

ランサーはバーサーカーにならない、トドメにかかるセイバーを蹴り飛ばして生き延びる。無茶な体勢からの足蹴りにセイバーの腕から槍は抜け、ランサーは天井を仰ぐように転倒した。

彼はもう長くなかった。もって数分。すぐに魔術師の治療を受けねば、もっと早く死に至る。

土壇場で余命が許されたのはランサーの敏捷さがあってこそ。セイバーは彼を殺りにいって、ランサーは腕と胸を犠牲にギリギリで急所を回避した。他の英霊なら既に命を落としている。

セイバーが誘いに乗ったのは必滅の黄薔薇ゲイ・ボウの力を予測していたか

らだ。そこからランサーの取るであろう戦術を読みとり、なお癒せぬ傷を受ける道を選んだ。ディルムッドほどの強敵に勝つには、傷を恐れてはならないと彼女は知っていたのである。

魔槍の力を読んでいるなら治癒が利かぬと判りきつた傷を受けるワケがない。そんな敵の先入観を逆手にとつた袈裟斬りであった。

立ち上がる暇は与えぬと、遠く蹴飛ばされたセイバーは態勢を立て直し、仰向けに倒れたランサーに躍りかかる。

「どうやら、戦いにおいてはお前のほうが一枚も二枚も上手であるようだ」

青年は少女に言う。地に伏した騎士は敵に備えるでもなく残る左腕に槍を握り、倒れたままの姿勢で天井を睨みつける。

セイバーは敵の狙いに気がついてハツとする。そうはさせぬと剣をランサーの首に振り下ろす。

「だが勝利は渡さん。俺は主を護りに行かせてもらおう」

だが遅かった。いや、最速の英霊のほうが遥かに速かった。

男は残る腕でゲイ・ボウを真上に投げ放つ。炎と、戦いの余波に傷つき痛めつけられた通路の天井は、槍の投擲に耐えられず脆くも崩れさる。

衝撃とコンクリートの雪崩がセイバーの行く手を阻む。建造物の破片が対立する二人を隔てるように降り注いだ。幸いにして支柱等は無事であるらしく、ホテルに甚大な被害を及ぼすことはなかった。

ややあつて剣士の行動を邪魔した天井の崩落が終わり、セイバーは積み上げられた瓦礫の山を力づくで吹き飛ばす。少女が向けた視

線の先にランサーの姿は存在しなかった。

セイバーは己の失態を責めた。穿たれた腕がわずかに鈍り、間に合ったはずのランサー打倒が遅れたのだ。

槍騎士の行先はすぐに見当がついた。彼はサーヴァントの当然の義務として危機に瀕した主を救いに行ったのだ。それは当然ながら勝敗より優先されるモノ。決着をつけぬままの撤退は彼とて不本意だったのだろうが、隙を見出した以上はなりふり構ってられない。

「く……っ！ マスター！！」

セイバーは地を蹴って駆けだした。

ランサーにしてみれば、一時しのぎの目くらましのつもりである。通路の破壊は、この英霊に限って最大の効果を発揮した。

彼女は霊体になれない。一直線にマスターを目指すことができるランサーと違い、セイバーは天井や壁に沿って進まねばならないのである。

たったそれだけの差が、この場でどれだけのタイムラグを引き起こすか。まさか霊体になれぬハンデがこんな形で影響してこようとは。

セイバーは最速の英霊を追い、主の無事を願って冬木ハイアットの通路を走り抜けた。

09 四日目・夜 - バベルの塔 - (後書き)

ケイネスの工房って『魔術師殺し』から見ればこんなモンじゃね？とか私なりに想像しながら書いたつもりです。

自分とこのインスタント工房より強力であろうアインツベルン城に一人で乗り込む困ったちゃんの拠点ですから。

ケイネスは周囲に持ちあげられてたそうですが、表面上ヨイショされてただけで、彼の見えないところでは他の魔術師に叩かれまくってたと勝手に思ってます。

Zeroの時臣もですけど“格別”であることに固執した発言ばかりで、凜さんあたりが容赦なく酷評してくれそうじゃないですか。

セイバーの覚悟がデイルムツドより上みたいなこと書いてるのは、一介の騎士であるデイルムツドと仮にも騎士王であるセイバーとなら、セイバーの方が騎士としての心構えは上だろうと作者が勝手に判断したためです。

デイルさんは人のことを「名利に憑かれてる」とか言う割に、自分こそ“騎士の名誉”に一番こだわってるキャラだそうです。

英雄の条件とは何であろうか。

より輝かしい武勲を打ちたてることか？ より多くの敵を殺し尽くすことか？

ある者は言った。

悲劇的な末路に人生を終えた時こそ 英雄と呼ばれるに相応しい、と。

ランサーとして召還されたサーヴァント、デイルムッド・オデインには一つの未練がある。

生前の彼は一人の英雄を主と仰ぐ騎士団員であった。

英雄の名をファイアナ騎士団首領フィン・マツクール。その輝かしい栄光と語り継がれる武勇の数々にデイルムッドも憧れていた。

彼はフィンを敬愛し、揺るがぬ忠誠を誓っていた。いつかは彼の一命の下、雄々しく、猛々しく、誉れ高く戦場に命を散らすものだと、そう信じて疑わなかった。

ただ忠義に生き、誇りを賭して戦いに臨む。それこそが騎士たる者の本懐であるとデイルムッドは心より思っていた。

しかしそんな誓いは一人の女によって破られる。

『我が愛と引き替えに、貴方はを負うのです。愛しき人よ、どうかこの忌まわしい婚姻を破棄させて。私を連れてお逃げください……地の果ての、そのまた彼方まで！』

フィンと婚約を交わす筈であった王妃グラニアは、その婚姻の宴の日にデイルムツドに縋すがりついた。彼女の眼差しは、涙に濡れてなお一途な恋に燃えていた。

デイルムツドは女の哀願を振りはらうことができず、偉大なる老雄との縁談を拒んだグラニアと手を携えて、共にミコルタの大宴会場から逃げ出した。

……それが煉獄の炎となって、己を焼き滅ぼすことになるであろうことは、デイルムツドも理解していた。

それでも、彼は王妃の愛によって課せられた聖誓に逆らうことはしなかった。

名誉を試すゲッシユ聖誓の重さと、自ら奉じた忠臣の道と、果たしてどちらがより尊かったのか。幾度、自問し葛藤しても、答えに至ったことはない。

だからきつと、彼を駆り立てたのは誇りと関係のない理由だったのだろう。

女を取られた怒りか、己の顔に泥を塗られた憎しみか、それとも裏切りへの悲しみであったのか。老君フィンは嫉妬の激憤に駆られ、駆け落ちをした二人に配下の総勢を動員した。その結果、哀れにも多くの騎士がその双槍によって屠られた。

忠義とは何か？ 愛とは何か？ デイルムツドは追手を退けるたび、犠牲のむなしさに心を痛めた。

相矛盾する忠節とゲツシユの板挟みに苛まれながらも、迷うより先に敵を討ち、引き裂かれる心を抑えて、何の意味もない死を撒き散らした。

デイルムツドは逃避行の間、騎士団に居たころ以上の武勇を積み重ねていくことになる。それは誰よりも高潔な忠臣たらんとした彼にとって、あまりに皮肉な英雄譚であった。

最終的に彼はフィンと和解をするのだが、この一人の女を巡る愛憎劇が元で、デイルムツドはフィンによって見殺しにされることになる。

戦場で華々しく散ると信じていた彼の末路は、戦場と無関係な、狩りの場での事故だった。

悲劇と言うには女に振り回された感の否めない彼の人生は、しかしグラニア姫に完全なる非があるわけではない。デイルムツド特有のスキル“愛の黒子”は女性を幻惑する魅了の呪い。王妃は英雄の魔貌が放つ呪力に魅入られていたのだ。

呪いが発端ゆえ、謂われのない恋と一蹴してしまえばそれまでの話だったかもしれない。

いつかは姫も己の想いに疑問を抱き、後悔に泣き崩れる恋慕であったのかもしれない。

だとしても、親族との縁、約束された栄華、王女としての誇り、すべてに背を向け苦難の恋路を選んだグラニアの決断が、捨て身のモノであったことを忘れてはならない。

巻き込まれたデイルムツドこそ災難、という見解は余人のものだ。デイルムツドは彼女を恨んだことは一度もない。自分の想いを信じて貫いた妻の勇氣に敬服すら覚えていたし、最後にはグラニアを愛するようにさえなっていた。

彼はつねに我が身の苦難より、相手の心の痛みに想いを致す男だ。過ぎし日々と己が末路を顧みてもデイルムツドに後悔の念は無かった。妻の愛にも応えたかった。フィンの怒りも理解できた。デイルムツドは誰を怨もうという気はなかった。

苦難と悲観ばかりの人生だったわけではない。君主と組み交わした盃も、妻と囁き合った睦言も、彼の中にはかけがえない記憶として残っている。その末路が悲劇でも、騎士は己の天命を不服とは思わなかった。彼と、彼を巡る者たちは、精一杯前向きに生きたのだから。

ただ、一つだけ心残りなことがある。

かつて取りこぼした誉れ。全うできなかった誇り。それらを拾うことができるなら。もし仮に、再び騎士として剣を執る、二度目の人生があつたとするならば。

それが、彼がサーヴァントとしての召喚を応じた理由みれんであつた。

彼の願いは忠義を果たすことにある。生前は叶わなかった、騎士としての本懐に生きる道。曇りなき信義とともに、主に勝利を捧げる名譽。

つまるところ、彼の願いは既に半分叶っていた。仕えるべき主を得て、冬木という戦場に立った時点で、彼の願望は半ば達せられていた。

あとは騎士らしく堂々と戦い、勝利の証たる聖杯を主の許へ持ち帰った時に完遂する。

かつての記憶を保ったまま、現世に降臨するという奇蹟に等しい前提は、聖杯の恩恵によつて得ることができた。ここからは彼自身の実力に頼るところである。だが、ここからがまた難儀なところでもあった。

聖杯戦争は他に六人も英霊が召喚される。己と同等か、それ以上の逸話や能力を持つ者たちに勝利しなくては彼の望みは完結しないのだ。戦いに参加した以上、自身の敗北を疑う英雄は存在しないが、敵が同じく英雄であるなら誰しも敗する可能性はある。

誇りを全うする戦いを欲しようとも、この聖杯戦争たたかいの合間だけ現世での活動が許されるサーヴァントたちは、魔術師にとつてすれば戦うための手段にすぎない。効率を優先する魔術師たちは従者の誇りなどには目もくれない。

敵が強大で、主人も従者の意思を歯牙にもかけぬと言つのなら、彼の誇りを満たす戦いは不可能だろう。

主ケイネスは効率などよりも誇りを求める人物ではあったが、彼の言つところの誇りとは己の優越を満たすことで、サーヴァントの矜持に報いるということではなかった。

いかにディルムツドが主と共に誇りある戦いに挑もうと願ったところで、主にしてみれば単なる手駒の戯言だ。

それを忘れるほどにディルムツドは自分の誇りに盲目ではない。騎士として忠義に生きるのであれば、主命に殉じることを最優先としなくてはならない。マスターが戦いの道具としてのディルムツドを欲したと言ふのなら、彼は君命を果たすに徹するのみ。

この状況こそ奇蹟と呼ぶべきモノだと知っているから、それ以上の誇りを望むなら己の力で　と、デイルムツドは考えていた。まずは忠義に生きる騎士として、主の信頼を己の槍で勝ち取ろうと決めていた。

そんな彼の前途には更なる暗雲が立ち込める。

暗雲の正体は、ソラウ・ヌアザレ・ソフィアリ。主の婚約者である女性だった。

いずれケイネスの伴侶となるはずのソラウは、かつてのグラニア姫と同じ眼差しでデイルムツドを見つめていた。

ケイネスに同行し、冬木へとやってきたソラウは、召喚されたサーヴァントを一目見た瞬間に恋に落ちた。彼女は自らデイルムツドの魔貌まぼうの魅力を受け入れたのだ。

またもや主の婚約者という存在が、彼と新たな君主の間に楔を打ち込もうとしていた。ソラウの恋慕には、彼女を心より愛するケイネスも薄々ながら気が付いている。ことは、かつての非運の再演では済まないかもしれない。

主はデイルムツドに婚約者が奪われることを恐れていた。それはデイルムツドにも容易に察することができた恐怖であった。

青年の逸話を鑑みるなら、それは仕方のない警戒である。主の立場から見た己の伝承がどんなものであるか、想像できないほどデイルムツドは愚かではない。

が、主のそんな意識は余分な危機感だ。もしソラウが第二のグラニアとなってランサーに継りついてくるのなら　そのとき彼は、その首をもって主に償うつもりでいた。

これは悲運を贖^{あがな}うための戦いだ。なればこそ、悲運を繰り返すことは絶対に避けなくてはならぬ。

死ねば済む、などと軽く考えているわけではないが、今のところ彼にはそれ以上の対策が見当たらなかった。

彼は絶対の忠誠を主に誓った。誓った以上、主に仇なすことは許されない。かつて聖誓^{ゲッシュ}と女の愛に傾いた彼の心は、今回そのようにあるつもりはない。ソラウが背臣の聖誓を課そうとするなら、己が目と耳と舌を切り捨てるまで。

再び同じ選択をすれば主の名を穢すことになる。恋に盲目となつた女の名に醜穢なる女狐の烙印を押してしまう。英霊となり、己の伝説を“知識”として客観的に知る彼は、そんな中傷を理解していた。

主に害なす存在が自分であるのなら、自分が存在することで主を貶めると言うのなら、それこそ自身を排除するだけの話。

とうにその覚悟はできていた。例え己が死せども、主の名を護ることができれば、彼の、騎士の誇りは保たれるのだ。

忠義の成果として聖杯を主の許へ持ち帰ることができなくなるとしても、それは己の力量不足の証明でしかない。自らの名を力足りぬ脆弱な亡霊として貶める程度、なんのことはなかった。

主をたかが使い魔に裏切られた魯鈍として、後世の嗤い者とするわけにはいかぬ。彼が生前の穢れを雪ごうと願うなら、かつてのフインと同じ苦い想いを主にさせるわけにはいかなかった。

彼が生粹の騎士であるがゆえの決意は、しかし主には伝わらなか

った。

時を待たずに死を迎える身となった彼に口惜しさが残るとしたらそのことだ。

どうか主の御心に、我が意が届くことを。
そんな彼の願いは、叶う気配を見せてはくれなかった。

炎上する建物の中をディルムツドは走った。

霊体であるサーヴァントは炎に焼かれるホテルをもともしない。壁をすり抜け、廊下の天井をすり抜け、彼は主の下へと馳せ参ずるべく足を急がせた。

右腕を失った彼が、残る片腕に握るのは回収に成功した魔槍の片割れゲイ・ボウだ。ゲイ・ジャルグは腕が斬り飛ばされた後、セイバーの側に落ちたために諦めざるをえなかった。

腕を再生させるには魔術師の協力が不可欠だった。

彼自身の治癒力だけでは、例え腕の消失をごまかせても削られた魔力いのちまで蘇らない。彼が余命幾ばくもない身であることに変わりはなかった。

最速の英霊の名はダテではない。常人では考えられない速度で目指すべき場所に迫っていた。

このペースなら、三十二階に位置する主人の部屋までの距離を、二十秒とかけずに駆け抜けることができるだろう。

主の無事を祈るランサーであったが、それは希望的観測。ただの願望にすぎなかった。

ケイネスの異変を察しセイバーとの決着を放棄した彼は、確かに主との繋がりを感じていた。主が生きていることは断言できた。

とは言え、それも時間の問題だろう。敵の手に堕ちることがどういふことか、意味するところを理解できないデイルムツドではない。それでも彼は主の健在を信じて走り続けた。

命のやりとりが戦場の常であるのは当然のこと。次に誰が命を落とすかは神のみぞ知る。もし仮に、ケイネスが最高の僕を従える最強の魔術師だったとしても、敗北という死を迎える確率が存在しないわけではない。

ここでマスターが死に絶えていたところで、美貌の青年に非などありはしない。エリートである自分がやられるはずがないと踏んで、敵対者あるならば迎え撃つべきと判断したのはケイネスである。

ランサーは主の命に従ったまで。どんな結末になつていようと、責めを負うべきは魔術師なのだ。

ケイネスの計算違いは、予想以上の難敵が立ち塞がったということ。ランサーはセイバーを倒すことができず、その操り手に時計塔の魔術師は敵わなかった。ある意味でケイネスの判断も間違つてはいなかったが、天才魔術師の思惑を越える敵が存在したことが異常だった。

ことここに至っては、純粋にセイバーとの戦いを楽しむほうがランサーにとって有意義だ。武勇を望むならば、あの剣士を討ち果たして新たなマスターを探さうが、よほど賢い選択だったろう。

しかしそれは許されない。槍兵の望みは、正しき忠道を歩み生前の穢れを雪ぐことにある。

騎士としての誉れ高き戦いへの望みは騎士王の剣が断ち切った。

敵に背を向けるは騎士に非ず。自ら敗走を選んだ時点で、もはや騎士らしい戦いを望む権利は彼にない。敗北を喫した時点で、もはや未練は完全に断たれていた。

だからせめて、主への忠誠を果たさなくては。残るただ一つの誓いだけは最後まで守らなければ。敗走の兵として後世に名を残す不名誉も、今のランサーにとっては瑣末事だった。

ここで忠義を欠いては、なんのためにこの戦いに参加したのかもわからなくなってしまう。だからこそ命尽きる直前で剣士との決着を蹴り、マスターの生死を優先した。ランサーは既に意味がないと知りつつもケイネスを見限ることなどできなかった。

炎に包まれるハイアットホテルの中、彼は主の部屋を目指した。

「ケイネス様……！　どうかご無事で……！」

青年から零れる言葉に嘘はない。この騎士は心からマスターの生存を祈っていた。

従者のことを見ようとしなない男であったとしても、彼にとって命を賭けると誓った主だった。愚かしさを絵に描いたような男であったとしても、この現世で手を取り合った協力者だった。

英霊という、崇められるだけの偶像と成り果てた自分に、槍を振るう場を与えてくれた、誓いを果たす場を用意してくれた召喚者であった。

主を見捨てるなど、どうしてできる。決して自分の誇り^{ねがい}だけで主に仕えたわけではない。ランサーには、ケイネスに未だ返しきれぬ恩義がある。それに反するなど、騎士としてあってはならない裏切りだ

……ケイネス当人が意識していないにしても、ただ都合のいい手駒を欲して結んだ契約であったにせよ、結果的に想いを遂げるべき場を提供してくれたことに変わりはない。

仕えるべき主、心を満たすための戦場、あり得るハズもないと諦めていた二度目の現世という奇蹟。死者に与えられるハズのない、自然の摂理に逆らったこの状況を、ケイネス・エルメロイが提供したのだ。

それだけでランサーは十分だった。ケイネスがもたらしたこの機会を活かせるかどうかはランサー次第。もし望みが果たせなかったとしたら、それは槍兵自身の力不足。主が自分をどんな目で見ようと関係がなかった。

なにがあるうとも、主を護る。

それが望みとは別のところに生まれた槍兵の誓い。

今度は間違えないと、そう死後に夢見た彼が、仮初の生者と成ったことで得た真実だ。

己の分身とも言うべき宝具を捨て、矜持を擲ってまでセイバーに背を向けた。彼が主に勝利を齎すことは、もう不可能だろう。今のデイルムツドに残されたのは主を護るといふ決意のみ。

誇りを護り抜くという望みが叶えられずとも、主の命だけは守り抜いてみせる。騎士としての誇りが損なわれようとも、騎士として

の誓いがそこにはある。

主が再び戦いに臨むと言うなら供になろう。別の英霊との契約を望むならば力も貸そう。マスターであることを放棄するなら、この身もまた、主を護り抜いた後に自刃する。

既に一度、命が尽き果てた身の上ならば、これ以上自らの命に固執する理由はない

青年は走った。その身一つでケイネスを落ち延びさせることも視野に入れながら、腕の治療のためなどではなく己のマスターを護るため、ランサーは走り続けた。

そしてついにランサーはケイネスの部屋の前に辿りついた。

わずか十数秒の道のりでしかなかったが、魔槍の使い手には何時間という道に感じられたことだろう。

火の手がここまで回っていたのか、襲撃者との戦いで出火したのかは不明だが、最上階もすでに炎に包まれていた。

槍の英霊は実体化し、扉を叩き壊して中に突入する。炎で部屋の内部の様子はわからない。躊躇している暇などなかった。

敵の存在も定かではないというのに、その行動は愚かだったかもしれない。

それも己などより主の救命が最優先と判断すればこそ。万が一の時、即座に攻勢に移るための実体化だ。ランサーはこの浅慮になんら恥じるころはなかった。

「ケイネス様　！」

叫び、主の工房に入るランサーは、果たして自身のマスターの姿をすぐに見つけだした。主は探し出すまでもなく槍兵の目の前にい

た。

ケイネスは婚約者に折り重なるようにして、その口から鮮血を流し倒れていた。

傍らには背を向けるように立つコートの魔術師。ランサーを素通りして行ったセイバーのマスター。状況を鑑みるまでもなく、ケイネスを倒したのはこの男だと確信できる。

「貴様っ!!」

敵に躍りかかるランサーは冷静さを欠いていた。激情を抑えることも試みず、主を足蹴とする男に槍をもって切りかかる。

ケイネスは死んでいるのだろうか？ 否、まだ主との繋がりは生きている。主が命尽き果てたなら、ランサーはとうに繋がりを感じられずにいるはずだ。

ならば、この男さえ倒せば、主を救う道はある。

それは彼らしからぬ行動であった。

常の彼であれば別の思考が働いたかもしれない。ここに至るまであらゆる可能性を熟慮していたのだ。むろん、このような状況も予想していた。いつもの彼なら、冷静に的確に対処できていたはずだ。

……平常心を失うのも無理はない。主に槍を捧げることだけが彼の望みだった。剣の英霊に敗北し、騎士らしく戦うことを否定された以上、彼に残ったモノはそれだけだった。だと言うのに、その他愛のない願いが、一人の男の手で奪われた。

激昂する騎士は止まらなかつた。感情は思考をはるかに凌駕する。英雄は敵を討つべく魔術師に向かう。

意味のない仮定だが、もしも彼が冷静であつたならば、ここから先の結末は迎えなかつたかもしれない。

そう、輝く貌と称される青年は気がつかなかつた。心理的に追い詰められ、怒りに燃える彼はの目にはマスターとその敵しか映らず、魔術師の手中にあるものに気づけなかつた。

魔術師がその手に、ケイネスの腕を抱えていたということに。

「動………
動くなランサー」

「ぐっ!？」

閃光のような一撃は言霊をもつて止められる。槍の穂先が、男の眉間に突き刺さる寸前で停止していた。ランサーの意思ではない。魔術師の言葉に、ランサーは強制的に制止させられたのだ。

男は 衛宮切嗣は、あるうことか、契約など交わしていない敵のサーヴァントに命じたのである。

「ば………かな………!」

槍の担い手は足に力を込め、握る拳に力を込め、主の傍らに立つ魔術師に肉薄しようとする。

だが動けない。ランサーの四肢は主人の意思に反し続け、まるで石と化したかのように、一步も踏みだすことができなかった。

額に脂汗をかき、齒を軋ませるランサーの姿を見れば、彼が全力を尽くしても体が反応しないでいることは明らかだ。

痙攣するかの如く五体を振るわせるランサー。そんな彼を魔術師

は冷やかな目で見つめていた。

種を明かすならば単純なからくりである。魔術師はケイネスの腕の令呪を介することで、ランサーに命令した。

令呪による命令は絶対だ。聖杯に召喚されたサーヴァントは、令呪の強制力に従うしかない。特に「生まれ」などといった単一の命令ならば、その効力は桁違いに増す。対魔力の高い三騎士に該当する英霊だろうと、逆らえる者は数えるほどしかない。

Bランクに相当するディルムツドの対魔力も令呪の縛りには抗えなかった。

例えソレを上回る対魔力を持っていたとしても、命を削られ疲弊し切った彼では抵抗することなどできなかつただろう。

令呪の強奪は不可能ではない。時間さえかければ、一般の魔術師でもマスターから令呪を剥奪し、ただの呪印の二画として別の肉体に刻むことは可能だ。だが、それを即座に実行しようと思うなら高い霊媒治療術が必要となる。

魔術師殺しである以前に一流の魔術師でもある切嗣も、そこまで霊媒魔術を昇華させてはいない。

それゆえ腕ごと令呪を奪うという手段に出たのだ。

死を迎えたマスターからは、すぐに令呪が失われる。その時点で敗者と見なされるためだ。

切嗣はケイネスがまだ存命していた時、生きたままその腕を奪いとった。この状態ならば未だランサーとの契約は保たれたままだ。

……そう、ケイネスは、その婚約者ソラウもろとも、既に息絶え

ていた。

ランサーが感じたマスターとの繋がり、残された令呪との繋がりが見せた錯覚であったのだ。

延命の処置を施された腕は肉体あつじがまだ生きていると誤認した。結果、ケイネスの腕には未使用の令呪が二画分残されることとなった。

そして、切嗣は敵を制することにソレを利用したのである。

「……た……の……む……！」

ランサーはギリギリと齒を鳴らしながら懇願する。
槍使いが流す涙は朱に染まっていた。

英雄が、戦乱の世に生きるわけでもない魔術師ごときにいいように弄ばれる。主を守ることもできず、彼の願いは果たされること叶わず露と消える。

それはいかほどの屈辱か。英霊は口惜しさと我が身への憎悪に血の涙を流していた。

美貌の頬をなでる、ひとしずくの赤。

「貴公に……貴公の手に主の令呪がある以上、私は貴公に抗えぬ……。この戦、既に我々の負けだ……、だがせめて、せめて我が主を看取らせてくれ！ 私に騎士として最後の責務を果たさせてくれ！」

もうこれ以上、主の遺体を辱めないでくれ、と。

ランサーは涙ながらに敵に縋りついた。

槍の騎士が言うとおり、既に勝敗は決していた。ランサーが令呪に完全に抗うほどの対魔力を持っていないことは今まさに証明されている。如何なる英霊だろうと、少し時間を与えたところで、この

状態から逆転し得る手などあり得ない。

願いを切嗣が受け入れる理由はない。対して、断る理由もまた存在しなかった。

一呼吸の間、果たして魔術師は道をあけるように後ろに引き、命令を解いた。

ランサーの顔に浮かぶ表情をなんと表現したものか。

それは安堵か、はたまた疑念か、一時でも敵が自身に伝えてくれたことへの喜びか。このような形でしか主の死を受け入れられぬ、この結末への悔恨か。

ランサーは切嗣の脇を通り抜けるように、主の亡骸に近づこうとし、

「命じる。自害せよランサー」

その手に持った呪いの槍で、己が心臓を貫いた。

「ガッ……！」

膝を折り、崩れ落ちるランサー。その左胸からは止めようのない鮮血が流れ続け、土下座するかのように体を折った槍兵を中心に赤い水溜りを作り出した。

左胸から生えたその黄の輝きの名を必滅ゲイ・ボウの黄薔薇。彼を彼たらしめる宝具の一つ、必殺の槍。

必滅ゲイ・ボウの黄薔薇によって与えられた傷は決して癒えることはない。

……それで心臓を傷つけるといふことがどういふことか、理解できない者はおるまい。文字通り必滅の呪いに犯されたその傷は、いかな手段をもつてしても治療不可能。

切嗣はランサーが致命傷を受けていることも、とうに気づいていた。放置していても問題なかった。断る理由もなかったのだから、ランサーの言葉を受け入れ、彼に最後の夢くらい見せても構わなかった。

そう、断るだけの理由はない。

だからこそランサーに隙が生まれるだろうと考えた。

ランサーが主との別離を果たしたなら、素直に自らの敗北を受け入れ、死を受け入れたことだろう。こういった手合いが敗北を認め、死を拒むことがないことは、いくつもの死と戦場を越えた切嗣は知っている。

だから今すぐ殺そうと、あとで殺そうと、どちらでも構わなかった。心変わりを起こしたとしても、令呪がある以上は確実な死を与えられるのだから、焦る必要もなかった。

切嗣が急^せいだ理由を強いて挙げるならば、単に時間が惜しかったからだ。別れなどわずか数十秒で済む。だが、そんなことにイチイチ時間をかけてはいられなかった。

殺すなら隙ができるタイミングを狙ったほうが確実だと思っただけ。これから消える者の繰り言などに、魔術師はなんら関心を持っていなかった。

「ご無事ですか！ マスター！」
一歩遅れて、炎上する廊下を抜けたセイバーが到着する。

さしもの最優の英霊も最速の英霊には追いつけなかったらしい。
壊れたドアをくぐり抜け入室する少女は、彼女には珍しく焦りをまったく隠そうとしていなかった。

霊体化できぬ身の上で、ランサー到着から間を置かずこの場に現れたことは驚嘆に値すると言っていい。この程度の遅れなら許容範囲内。と言うか、切嗣にとっては想定内の範囲内だ。

切嗣は足止めという目的を果たした自身の従者を招き寄せ、ケイネスの腕を火の中に放り投げた。令呪を使い切った腕は、赤々と燃える炎に焼かれる。肉の焼ける臭いが辺りに漂った。

「貴様らは……そんなに……」

槍兵が憎悪に歪めた顔をあげる。

デイルムツド・オディナは自身を貶めた魔術師に、その従者たる英雄に対し、おぞましいほどの憎悪の炎を燃やしていた。

彼の目には二人がどう映ったのか。主を想うセイバーとそれを御している切嗣は、信頼し合った理想的な主従関係を築いているようにも見えなかったかもしれない。

互いに効率を優先するために衝突していないだけなのだが、そんなことはデイルムツドの知るところではない。

そんな二人が 敵の想いを穢してまで勝利を求めるのが、どこまでも彼には許せなかった。

「そんなにも勝ちたいか！？ そうまでして聖杯が欲しいか！？

この俺が…… たったひとつ懐いた祈りさえ、踏みにじって…… 貴様らはッ、何一つ恥じることもないのか!？」

その美貌は憤怒の血涙に歪み、いまや見る影もない鬼相と化していた。

憎しみに我を忘れたランサーは、もはや誰彼の見境もなく、切嗣に、セイバーに、そして世界の全てに向けて、喉も張り裂けよとばかりに怨嗟の叫びを吐き散らした。

…… その憤怒を聞こうとも、切嗣はなんの感慨も沸かなかった。ランサーに向ける視線は冷たく、感情など何一つ籠ってはいなかった。

「赦さん…… 断じて貴様らを赦さんッ！ 名前に憑かれ、騎士の誇りを貶めた亡者ども…… 我が主を穢した畜生ども…… その夢を我が血で穢すがいい！ 聖杯に呪いあれ！ その願望に災いあれ！ いか地獄の釜に落ちながら、このデイルムツドの怒りを思い出せ！」

視界をほつれさせ、茫洋たる影へと崩れて行きながら、彼は消えゆく最後の瞬間まで、呪詛の禍言を叫んでいた。

そこに輝かしく英霊の姿はなく、ただ怨念に吠える悪霊の声だけを残響させて、やがてランサーのサーヴァントは完全に消滅した。

あとに残るのは二つの死体と二つの人影であった。

死者を弔う者はなく、勝者を祝する声もない。炎に焼かれる部屋は、そのまま敗者を葬るだろう。

炎が爆ぜる音が空しく室内に響き渡った。

既に事は済んでいた。

敵の拠点に辿り着いたセイバーの眼にまず入ったのは、敵を下し悠然とそこに立つ、自らの主の姿であった。

そして彼女は先まで戦っていた英霊の、最後の怨嗟を聞いたのであった。

必滅の黄薔薇ゲイ・ボウでつけられた傷も治癒が可能となったことを感じ取り、セイバーはランサーが完全に消滅したことを確認した。
あるいは、そのために受けた傷であったのかもしれない。

セイバーは美貌の騎士の末路を憐れむこともなかった。
ランサーの嘆きは彼女が何度も見てきた光景でしかない。そのよ
うな相手に今更感じ入ることなどなにもない。

そも、聖杯戦争とは互いの願いの競い合い。その果てにあるモノ
は、互いの願いの潰し合いだ。願いを懸ける戦い、それが聖杯戦争
の本質であり真実なのだ。

敗れてしまえばどんな願いも叶わない。力無き者は破れ、祈りと
共に血だまりの中に倒れ伏す。

敗者の末路はいつの世も変わらない。願い尽きる悲哀から、血を
吐き絶望の叫びを上げる。それは、英雄ならば理解しているベ
きモノだ。

英雄とはより多くの者を殺してきた者たちのことである。願い奪
うこと、奪われることは日常である。

この戦いに限ったモノではない。どの戦場にも存在する慟哭だ。

望みが、願いが絶えるなど、戦いに身を置くならば当然覚悟していることだ。

ランサーとて、槍を執る以上はダレカの願いを踏みにじる。己の我を通すということはそういうことだ。だと言うのに、彼は英霊でありながらソレを理解していなかった。

デイルムツドの終わりは、まさに悪霊だった。彼は最後の最後で、己が英雄としての霊格を貶めた。

……原因の一端を担うセイバーは、男の最後の言葉を忘れぬよう自らに誓った。

この命もまた、自分の願いのために消えゆく命なのだと、彼女は自らの魂に刻み込んだ。それが勝者にできる唯一の弔いだと、彼女は知っている。

今、セイバーの胸に宿る憐憫は、ランサーではなく、このように怨嗟を零しながら最後を向かえたのであろう、自分が切り捨ててきた者たちに向けられていた。

アーサー王が敵対する国や部族、民や臣下に行った仕打ち。
国を守るために、自らの民すら犠牲にした冷酷な治世。

今しがた消えさった怨恨を、アーサー王はいくつも生み出してきた。それをアルトリアは改めて思い出していた。

そうだ。だから、あのような間違った終焉は許されない。

結果のため全てを捨てたのに、その結末がアンナモノであっては、捨てられたカレラが許すわけがない。

ズレ始めた思考を振り払って、セイバーは切嗣に向き直る。
「申し訳ありませんマスター。ランサーに振り切られてしまい、討ち果たすことは適いませんでした」

悔しさを噛みしめるように報告をするセイバー。今まさにランサーは消え果てたというのに、少女の生真面目さは結果論を許さず、自身の失敗を恥じ入った。

正しいと信じることに對しては意固地なセイバーも、非が己にあるとするモノに對しては素直である。

あの状況ならば確実に倒せていた。そう思うからこそ彼女は頭を垂れるしかなかった。

切嗣が敵を仕留めることには成功したとは言え、ランサーを逃がしてしまったことには変わらない。

罰せられて当然だと考えるセイバーに反し、切嗣はただ軽くセイバーの頭に手を置いただけで何も言わなかった。

魔術師はそんなことを責める気は毛頭なかった。確かにセイバーはランサーを逃がしたかもしれないが、相手は最速の称号を持つクラス。戦場から離脱することにかけてはキャスターにも匹敵しよう。

何においてもマスターを優先するのがサーヴァントである。主の窮地を察したサーヴァントが敵に背を向けるのは常道だ。切嗣はこの状況は予想済みである。

セイバーは彼の策通り、敵のマスターを討つまでの時間を稼いだのだから、最低限の役目をこなした道具に罰を与える必要はなかったのだ。

それでは納得ができぬと主を見つめるセイバーであったが、すぐに頭を切り替える。

マスターが今回のことを不問にすると言うなら敢えて逆らうまい。今はそんなことを問うている場合ではない。

「マスター。もうここにおいても意味はない。いえ、これ以上留まると貴方の身が危ない」

セイバーの言葉に頷く切嗣。

すでに三十分近くが経過し、外では必死の消防活動が行われているにも関わらず、炎の勢いは止まる^{こと}がない。

サーヴァントとして、これ以上マスターを炎の中に立たせるわけにはいかなかった。

敵の工房と化している影響か、この中では通信機も繋がらず、切嗣は舞弥と連絡を取ることもできなかった。即時撤退は必然であった。

主の首肯が撤退の合図となった。セイバーは手近な窓を破り、外からは煙で見られないことを確認すると切嗣を抱きかかえた。

俗に、お姫様抱っこと呼ばれる態勢だ。

「既に炎は建物全体を覆い、部屋の外も炎で満ちています。魔術師ならば無事に外に出る術もあるのでしようが、失礼ながらマスターは魔力も尽き、炎から身を守るだけで手いっぱいでしょう。このまま外に出ることなど望めません。ですから私が貴方の足となります」

セイバーの判断は的確だった。ほとんど切嗣の考えと合致していた。

彼女の能力ならば、高所からの脱出などものともしない。外に飛び出し、その勢いのまま、離れた地点に降り立つことができるだろう。

場合によっては魔力放出によるブーストで距離をかせげばいい。窓から出るという下策も、この、男としては屈辱的な態勢も、思いのほか時間がかかってしまった以上やむを得ない。

瞬時に結論を導き出した従者に切嗣も文句の言いようがなかった。

炎上するホテルの三十二階。猛スピードで人影が飛び出すなど、野次馬からすればホラーにもならない笑い話。目撃者の後始末は監督役に押し付けてしまうことにしよう。

……しかし、男として見た目が年端もいかぬ少女に抱きかかえられる姿はいかがなものか。

やや落ち込みかけた切嗣の耳に、凜とした声が届く。

「では行きます。極力、目撃者が出ないように全力を出しますので、舌を噛まないようにしてください」

宣告と共に少女は夜の虚空に飛びだした。人の身ではありえぬ速度で彼女はホテルから離脱する。その姿を見た者は、空を駆ける少女に、伝承に語られる『魔法使い』の姿を思い浮かべることだろう。

それとほぼ同時に、約束の刻限が訪れたのか。夜気の中に鉄筋コンクリートが軋みをあげる不気味な断末魔が響き渡るのを切嗣は確かに耳にした。

背後を見やれば、高層建築が直立の姿勢を保ったまま、大地に吸い込まれるようにして崩落していく様が見えた。

モリッソ
支柱を破壊することで、ビルの自重により内側へと圧壊させる爆

破解体は、周囲に破壊の被害を及ぼすことなく冬木ハイアットを崩壊させた。

150メートルもの高さを誇った建築物は、破片を除けるのも難儀する瓦礫の山へと姿を変えた。

かつての高層ホテルの残骸は、『ロード・エルメロイ』ことケイネス卿と、その婚約者ソラウ・ヌアザレの巨大すぎる墓標となった。もし万一、彼らが死を偽装していたとしても、魔力尽きた状態とあつては生還する術もないだろう。

彼らが掘り出されるまでいつたい何日かかるのであるのか。“神童”と呼ばれた天才魔術師の死は、魔術協会、聖堂教会の両組織の手によって、富豪の死ではなく単なる旅行者の死として処理されることになる。

セイバーと切嗣は人気のない路地裏に着地すると、倒壊直前のハイアットから飛び出した人影などパニックで完全に忘れ去った野次馬に紛れ、舞弥との合流ポイントへと向かった。

ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは、予想以上の強敵だったと、切嗣はセイバーを伴って夜道を歩きながら思い返していた。

切嗣も決して彼を侮っていたわけではない。得られた情報を元に、最大限の警戒と準備をして、ケイネスとの攻防に挑んだのである。

ケイネスの力量は切嗣の予想を大きく上回っていた。魔術師とし

ての才はケイネスのほうが圧倒的に上だった。想定していた以上の戦いを彼は見せたのだ。学者畑の魔術師ということだったが、なかなかどうして手強かった。

ランサーのマスターに勝利したのは、相手が戦いに関しては素人だったということが大きい。

いくら天才的な能力を持っていようと、しょせんは素人。戦闘のプロの切嗣が相手では、どうあっても埋めようのない“差”というものが存在する。

セイバーの宝具の力で不死に近い体となっている切嗣は、己の命を無理に守らず攻めに集中できた。元々自らを勘定に入れない魔術師殺しは、切り札のおかげで性能を十二分に発揮できた。

それと、敵があまりにも人間的であったことが、ケイネス敗北の最大の要因であった。魔術師は選ばれた者と、愚物が陥る浅い考えに加えて、彼には決定的な弱点があったのだ。

ケイネスは一見、澱みない攻防を繰り広げるように見せながら、どこか動きがぎこちなかった。

それが恋人を庇おうとしてのものだとということに切嗣はすぐに気がついた。ケイネスの戦い方は、女を守ろうとする男のモノだった。

……もしも彼がプライドを捨てても恋人を逃がしていれば、少しは違う未来があったのかもしれない。

もしも彼が魔術師らしさを身に着けていれば、目的のためのやむを得ぬ犠牲として、婚約者の命を顧みずに切嗣と戦えたかもしれない。

最終的に切嗣は、敵の隙をついてソラウを人質に取るという手段

に出た。結果は語るまでもない。ケイネスは倒れ、その婚約者も屍を晒すこととなったのだ。

ケイネスは愚かであった。戦闘力をもたない女など、戦場に同伴するべきではなかった。

恐らくソラウはいつでも補充できる予備魔力としての役割を担っていたのだろう。それならばパスを繋げた状態で、戦火に巻き込まれぬよう冬木市のどこかに隠れさせておけばよかった話だ。

かけがえのない誰かの命が危険にさらされたとき、人の判断は鈍ってしまう。どんな時であろうと、思考を曇らせ、決断が遅れてしまつては命取りだ。

自らの命を惜しむことさえ、敵に付け入る隙となる。その矛盾は人である限り何処までもついて回る。

では、いったいどうすれば、そのような不確定要素を排除することができるのか？

簡単だ。他人であろうと、自分であろうと、命など道具の一つと見ればよい。

目の前にいる者は人間ではないと、単なる使い捨ての道具であると判別すれば、決断を躊躇することはない。自分も他人も、いつかは命を落とす歯車ではない。そんな意識で臨めば、戦いで恐れることは何も無いのだ。

ソレを実践してきた切嗣にとって、ケイネスの愚かしさは度し難いモノであった。大事な人間であるのなら、傍らに置くべきではなかったのだ。傍らに置くというのなら、せめて失う覚悟はしておくべきだったのだ。

ケイネスの心構えは、何一つ褒められるモノがなかった。

……そんなケイネスを羨ましいと感じてしまったのは、いったいなんの気の迷いか。

命を切り捨てることを実践してきた切嗣には、女を　愛する者を護ろうという、ケイネスの姿勢は眩しく映った。

切嗣は全てを捨てた男だ。たった一つの願いのために、愛する者すら捨てる覚悟で聖杯戦争に臨んだ男だ。そんな彼だから、人間なら当然のモノまで捨ててしまった彼だから、ケイネスの人間らしさが妬ましかった。

不格好でも、愚かでもいい。自分もあんな風に、何の罪悪を抱えることなく愛する者を護りたかったと　。

“　やめろ。考えても仕方がないだろう　”

切嗣は目を閉じ、自らの思考をカットした。

次に彼が目を開けた時、その両眼に迷いの色は宿っていないかった。

切嗣はくわえたタバコに火をつけ、歩きながら次の戦いの事を考える。

ランサーとそのマスターのことなど、彼の頭の中には、もはや存在していないかった。

最も危険な主従の手にかかり一組の主従が脱落した今宵、それは別の異変があった。

アサシンのサーヴァント、全てのサーヴァントを見張る役目を負った間諜の英霊が、戦いを最後まで見届けることなく消滅したということであった。

切嗣がケイネスを下した時、近くでアサシンが霊体のまま死に絶え消滅していたことを、魔術師殺しは当然ながら知ることがなかった。

10 四日目・夜 - 怨念 - (後書き)

デイルムツド好きの方々ごめんなさい。

ケイネス、ソラウまさかの出番なく退場。二人が好きな方々にもごめんなさい。

今呪の設定とか完全に自己解釈です。もっと無理のないオチを予定してましたが「非道さが足りない」と思って結局こんな終わり方にしました。展開が強引とか禁句。

デイルさんの忠誠心が妙に上がっておりますが、アッサリ死んでしまうため、主に罵倒されるまでを書けず、呪いを吐く末路に説得力を持たせるため「主を護ることだけ考えてたのにソレを踏みにじられた」感じにしたからです。

238

というのは建前で。

せっかく三角関係なのに、厚い忠義を訴えるデイルさんが「実は忠誠より自分の騎士らしさの方が大事」ってのは勿体ないなー、片思いの数珠繋ぎにしたいなー。

なんて、作者の腐った脳みそが考えてしまった結果だったりします。

まあ、ケイネスとソラウの描写がないから死に設定状態ですけど。

時は、英霊ディルムッド・オディナが死を迎えるよりも前。ケイネス・エルメロイ・アーチボルトが人質に屈した頃に遡る。

時刻をほぼ同じくして、夜の沈黙に抱かれた冬木教会の地下室にて、言峰綺礼が闇の中に座していた。僧衣姿の綺礼は瞑想に耽るかのように目を閉ざし、自らのサーヴァントと知覚を共感させていた。

彼が行使しているのは、パスの繋がった契約者に対し感覚器の知覚を共有する魔術であった。サーヴァントの見聞きしたモノをマスターの情報とすることができこの能力は、斥候能力に長けたアサシンを従える綺礼にこそ相応しいと言えた。

臉を閉ざした綺礼の片目に映っているのは、炎上するホテル内部と、その中で白兵戦を行う二騎のサーヴァント。

綺礼は戦技を競い合う英霊の真名を探りつつ、戦う二人の一挙手一投足を観察していた。

もう片目には、衛宮切嗣という凶悪な魔術師が、天才魔術師ケイネス・エルメロイを追い詰める姿が映っていた。それは冬木ハイアットに設けられたケイネスの拠点の奥深く。かの神童の陣地の中枢での出来事である。

普段はさすがのアサシンも深入りすることを避けていた場所だったが、今回、幾重もの罫と防壁を突破する襲撃者の後を蹤けるようにして侵入を成功させていた。

敗北者という名目で言峰教会に保護された綺礼は、二つの戦闘を同時に監視していた。ランサーとセイバー、そのマスターであるケイネスと切嗣の戦いを、一瞬も目を離すことなく凝視し続けた。

彼ほどの手練れであるならば、両目から別々に入ってくる情報を並行して脳内で処理することも可能である。だから同時に複数の戦闘が起ると、綺礼にとっては問題のないことだった。

しかしソレはおかしな話ではないか。

下僕を介して二か所以上を監視すると言うのは、彼の下僕が二体以上、別の場所に同時に存在していなければ成り立たない策略である。

少なくとも視点が一つでは不可能なことだ。そしてハサン・サツバーハは、例えば魔術のような視点を増やすことのできるスキルを有してはいない。

では、視点を複数持つことが、今代のアサシンの宝具なのであるうか？

否。英雄の伝承を具現化した宝具の力が、そんなチンケな能力に落ち着くことはない。

たしかに宝具の力を応用してはいたが、アサシンの宝具『ザバーニヤ』は、決してそれだけの能力ではなかった。

「衛宮が人質をとりました。決着はもうじきつくでしょう」

『人質策か。調べた通り、ずいぶんと姑息な手を使うな。こんな男を招き入れるとは、アインツベルンもなりふり構ってられないということか』

綺礼が語りかける闇の中には誰もいない。代わりに、卓上に乗せられた古めかしい骨董品が綺礼の言葉に應對していた。

古式ゆかしい朝顔型の集音部分のおかげで蓄音機と見紛う形の骨董装置には、蓄音器にあるべきターンテーブルと針がなかった。代わりに朝顔の終端にあるのは、針金の弦によって支えられた宝石だ。

正体は遠坂家伝来の魔導通信装置であった。宝石魔術を応用し、互いに空気の振動を相互に交換し合うことで、遠く離れた同じ装置同士の会話を可能とする魔導器。ここしばらくは使う機会もなく、倉庫の奥で埃を被っていた物だ。

コスト面で言えば、宝石を使用し魔力を無駄に費やす魔導器よりも、電話機や無線機でも使ったほうが儉約的まじつしであるのだが、こちらは無線等と違い傍受される心配がない。より慎重を期しての使用であった。

もしも魔術師たちが科学知識を軽視する存在だったなら、電波の傍受など警戒する必要もないのだろうが、そういうわけにもいかない。大局でない限り魔力を無駄にしない時臣も、さすがに生涯の大イベントとあつては大盤振る舞いを見せていた。

『まあ、宿泊客を全て犠牲にするようなマネをされるよりはマシか。そこまでやる男なら、討伐対象として君の父上と話し合わねばならなかったかもしれん。さすがに弁えているならば問題はない』

魔導器は、かすかに歪んだ音質ではあるが、遠坂時臣の余裕ある洒脱な声を室内に響かせる。冬木の管理者としての立場からか、大勢が死ななくて良かったと、師が多少なりとも安堵したのを綺礼は感じ取った。

従者としての協力を行わないアーチャーに代わり、時臣の目と耳となる役割を負った綺礼は、楽観的に切嗣を見る時臣とは違った見解を持っていた。

すなわち、切嗣がホテルに火を放ったのは、敵の動きを限定させるためだったと。

敵対者の本陣に乗り込めば、どうあっても己の存在を教えることになる。気がつかれぬように奇襲をかけることなど望めない。襲撃が露呈するからこそ、客の避難を促したのだ。

マスターが滞在するホテルが焼かれては、聖杯戦争と無関係な炎であるとは思うまい。

炎はケイネスに対する警告をも含んでいた。「こちらはお前がマスターであることも、ホテルを拠点として使用していることも知っている」と、切嗣は敵に教えたのだ。

それ自体が切嗣の狙いであつたのだろう。襲撃者を予感したなら、ケイネスが取るべき道は二つしかない。迎え撃つか、逃げるかだ。

後者の選択は、まずありえない。

敵に顔が割れている以上、すぐに迎撃しなければどこへ隠れても同じことだからだ。

どこかへ逃れるよりも、信頼が置ける自陣で構えた方が安全ということもある。

客に紛れるのはもつと悪い。ケイネスからすれば、敵が誰と手を組んでいるかわからず、遠距離攻撃を受ける可能性も孕む状況だった。どんな偽装をしようと、外に出れば狙い撃たれることは間違いない。そして、それを対処しようとするれば、一般人を巻き込むこと

は確実だ。

そうなれば大勢の人々の前で目立つ魔術を使うことになる。場合によっては、監督側から何らかのペナルティを受けることになるかもしれない。どちらも生粋の魔術師ならば避けたい事態だ。

マイナス要素に目を瞑り、脱出を図るにしても、炎を避けながらでは逃亡ルートを敵に教えるも同然である。

敵襲アリと気づいたなら護りに回る。そうと予想したからこそその放火であつたのだ。

それ以外の意図があるとすれば、せいぜい戦いの邪魔となる障害物を効率的に排した程度のものだ。

切嗣は人を殺すことに何の躊躇ためらいもない。少なくとも、火消しを何人が確実に犠牲にする手を選ぶ程度には。

炎は無関係な犠牲を憂いてのモノではなく、敵を誘導するためのモノだった。かつて異端狩りを行う“代行者”として数多くの敵と戦ってきた綺礼は、正確に“魔術師殺し”の思惑を読みとっていた。

彼を放置しておけば、もっと多くの人間を生贄に敵を屠る策を使つて来るかもしれない。そんな綺礼の不安を、師匠は察知することができなかった。

『三戦も観戦し続けて君も疲れただろう。監視を終了するといいい』
弟子が自分以上に敵を正しく理解したことに気がつくことなく、時臣は休息を勧める。

『ここまでくれば勝敗は決したも同然だ。敵サーヴァントの正体と宝具も読めた。ならばこれ以上は無駄な時間の浪費でしかない。ま

た君の力を借りることになるのだから、今は魔力を温存しておきたまえ」

失敗を避けるため、盤石でなければ冒険はしない。そんな魔術師らしさを有する時臣だが、しかし大胆な時もある。例えば戦局の有利を確信していれば、情報収集よりも弟子を労うことを優先するのも珍しくはない。

時臣はどんな時であろうとも、常に優雅で余裕ある生き様を心がける男だ。警戒心から常に気を張る生き方は好まず、他者に合わせて生活を変えるつもりは毛頭ない。その姿勢は戦時であっても決して変わることがなかった。

特別な時だからと言って、敵に怯えるかのように引きこもったり、露骨に普段と違う行動をとることはない。敵への備えを明確にする戦々恐々とした態度は、彼の　　と言うか、遠坂の流儀ではないのである。

敵の探索、現地の確認と称しては夜毎に散歩に出かけるくらいだから筋金が入っている。実際そういう意図もあるのだろうが、余裕の表情で危険なことをしているのには変わらないのだから、綺礼の心労は嵩むばかりである。

むろん、出歩いて問題がない程度の対策はした上で活動しているし、綺礼も一応は護衛にアサシンを二人ほどつけているが、それでも時臣のサーヴァントは毎夜のごとく遊びに出ており、英霊が跋扈する聖杯戦争としては、ほとんど無防備な状態である。

一見すれば軽挙妄動な時臣の行動を不気味に思っただか、今のところは遠坂邸も時臣個人も襲撃を受ける気配はないのだが、時臣を勝

者とすることを監督役から命じられている綺礼としては、念を入れて大人しく籠城に徹して欲しいというのが本音だった。

もつとも、工房の護りを固めたところで対魔力高いサーヴァントに狙われてはひとたまりもないのだから、時臣の行動も決して無謀というわけではない。

いずれ狙われるなら打って出る。遠坂邸を遠巻きに眺めるだけの小物は警戒にも値しない。それだけの話なのだ。

綺礼は時臣を心から心配することはなかった。師を信頼しているのではなく、師の力量を正しく把握しているからだ。

誰の心労とも無関係に必ず勝ち残る。綺礼の師はそういう人物だ。ならば、憂いたところで意味はなかった。

「わかりました。では通信を切ります。なにか動きを捕捉しだい、ご連絡を」

時臣に告げた綺礼は魔導器を止め、アサシンとの知覚共有をカットした。僧衣の男は気が楽になったように深く座りなおす。

静かになった室内で、男は一人、思案に暮れるかのように顎に手を当てる。頭にあるのは、先ほどまでアサシンの目で見ていた二つの戦闘だった。切嗣という男、本人に関しては無理矢理目を瞑り、そのサーヴァントの戦力を冷静に分析する。

「なるほどな。あれほどの英霊を召喚したとなれば、多少の強引さも領けようというものだ。アレならば魔術師の本拠など鳥の巣箱も同然に叩きつぶせる。まったく、アインツベルンも厄介な英霊を用意してくれた」

聞く者など誰もいないと言うのに一人つぶやく僧衣の男。言葉だ

けは敵を危険視するものであったが、それを吐きだす綺礼本人は脅威を意識しているという雰囲気ではない。

凶悪で憎らしい敵が厄介な手駒を連れている。全てを捨て、敵を屠ることだけに特化した魔術師殺しの勝利は揺るがず、男は必ずや最後まで生き延びる。綺礼が抱いた感情は恐怖や警戒ではなく、苛立ちと喜びという相反するものだった。

人質まで使い、ホテル一つを潰して敵を討つという、命を巻き込むことも恐れぬ非道に、道徳心を尊ぶ綺礼は苦々しいモノを感じていた。ほどなくホテルが爆破されることを知らなかった綺礼だが、切嗣がそこまでするマスターだと完全に読みとっていた。

綺礼はこれまで、衛宮切嗣に関してなるべく目を向けぬよう努めてきた。

切嗣を知った時は確かに出会いに歓喜を抱いた綺礼ではあったが、これ以上、切嗣を冷静に見定めることは、湧き上がる憎悪からできそうもなかったからだ。

心の平静を保つため、必要以上に切嗣のことは見ないようにしてきたのだが、敵の行動はとにかく目立つ。命を省みない動きは否応なく綺礼の目に入り、彼に関する報告はことごとく耳に入ってくる。

間桐邸の襲撃、ホテル炎上、そして天才魔術師との戦闘。無視しようにも無視し切れない。

ここまでくると、衛宮切嗣も分かっているが嫌がらせしているのではないかと、そんな、あり得ないことを邪推したくなってくる。

気にせぬよう努める、などという行為自体が無理あることだった

のかもしれない。

比べてみるまでもなく、切嗣と綺礼の生き方は正反対だ。二人の価値観、二人の孤独は大きく異なっている。

幸福を求め、最後には己はソレに値しないと諦めた綺礼と異なり、切嗣という男は己が幸福に値しないと初めから割り切っている。人としての価値を捨てる生き方とはそういうことだ。彼の人生とは、『人らしく』あることを願った綺礼の対極に位置するもの。

どうして憎まずにいられようか。

どうして許すことができようか。

同類いたんでありながら同胞ではない。綺礼の欲しかったモノ全てを捨て、人ならざる道をゆく男の存在を、どうして認めることができようか。

しかし落ち着いてくれば己の執着に疑問も抱く。

確かに憎らしい相手であることは間違いない。だが、己となんの関係もない相手と割り切ってしまうえば気に病む必要もないと言っ、何故これほど感情的になってしまふのか。

きつと自分と衛宮はどこまでも相容れない存在なのだ。そう、綺礼は結論づけた。

綺礼は己が切嗣に対して抱いている感情の本当の意味に気づかなかった。

いかに歪んでいる綺礼とて人の子。仮に真実に気がついていても、その同類に対する嫌悪がどこから来たものなのか、現段階では素直に認めることなどできなかつたろう。

そのとき綺礼は傍らに忍びよる異形の気配を察知した。

「アサシンか？」

「は。恐れながら」

暗闇の中から浮かびあがる髑髏の面。恭しく頭を下げ、アサシンのサーヴァントが主の前に姿を現した。

「残るサーヴァントの発見を御報告に上がりました」

「キャスターをか。よくやったアサシン」

いつか来るはずだと知っていた報告が綺礼の許に届けられた。

セイバー召喚の時点では認められなかったキャスターの存在。ついに最後のサーヴァントを捉えることに成功したのである。

父の『靈器盤』によって、数日前にキャスターの召喚自体は確認していたが、どこに隠れ潜んでいるのかわからなかった。

ようやく尻尾を掴み、これで戦いの算段を立てられる。

「だが何故わざわざここに来た？ キャスター発見の報なら、念話でもよかったはずだ」

これまでもマスター及びサーヴァント発見の報告は、たいていソレで済ませていたと言つのに、今回、アサシンは顔を見せに来る不必要を行っていた。

「直接、御耳に入れておかねばならぬ議がございます。それゆえに参上いたしました」

マスターからの軽い問いかけに、アサシンは答えた。焦りを見せることもなく、髑髏面は己が見たキャスター陣営の姿を口にする。

それは次のような内容であった。

一つ、キャスターは英霊と呼ばれる者たちよりも怨霊の類に近い。

その正体はどうやら『青髭』ことジル・ド・レエ伯。かつて共に戦ったオルレアンラ・リュセルの聖女の死後、数百人の少年を虐殺するまでの狂気に堕ちた『モンスター・サクレ聖なる怪物』だということ。

一つ、キャスターのマスターは、キャスターの傀儡と化したわけではなさそうだが、しかし従者を律する様子も見られないということ。キャスターがどの様な非道を行っても気にしないと言うのだ。

一つ、かのマスターは人の死を観察することに並々ならぬ関心を持っており、どうやら最近冬木市を騒がす連続殺人の犯人であるということ。悪道に浸る身であるからこそ、キャスターの悪行を容認できるのだろう。

最後に　これが最も問題なのだが　キャスターは魔術の秘匿を行うことなく、ジャンヌ復活の礎と称して女子供の誘拐を行い、マスターの嗜虐の慰み者としているということ。

説明で聞くだけでもキャスターが常軌を逸していることは明らかだった。どうやらジャンヌ・ダルク復活を聖杯への悲願としているらしいが、錯乱して正気を失い、なんの拍子で暴走を開始するかわかったものでないことは、実物を見なくとも想像がついた。

サーヴァントが人を襲うこと自体は奇異なことではない。使い魔の力が足りぬと見て、余所から魔力を補充する方策などは、魔術師からすれば常套手段の一つである。

が、マスターが自らの私欲で一般人を襲い、さらに英霊たるサーヴァントもソレを助長するなど、過去の聖杯戦争でも有り得なかった事態だ。

とは言え、それだけならばまだいい。無関係な一般人に犠牲が出

ようと、それが慎重に隠蔽され、秘密裏に行われるなら如何様なる娯楽も黙認しよう。だが、そういった殺戮をはばかりなく堂々と繰り広げ、余計な騒動を引き起こすとあつては言語道断というほかない。

人世の倫理に外れた殺し合いを演ずるマスターたちにとって、大衆の目を惹くような行動は歓迎できるものではないからだ。

なべて魔術師は秘蹟の担い手である。魔術の隠匿を怠り、自らの研究を妨げる事態を率先して招く者は、まず存在せず、そんな逸脱者を許す魔術師は存在していない。

もしキャスター陣営による被害が一般家庭やビル一棟程度に収まらず、冬木市全体に及ぶようであれば、魔術協会に過度の介入を許してしまう事態になりかねない。そうとなれば聖杯の争奪どころの話ではなくなってしまう。綺礼個人の感覚はどうあれ、聖堂教会の立場からしても無益な殺戮は容認しかねる。

いったいどうしてそんなマスターが選ばれ、そんな英霊を召喚したのか。間諜からの報に、その主は頭痛を抑えるかのように額を押さえた。

ただでさえ豪胆な師匠に振り回されているというのに、いらぬ問題が増えたのだ。無理はない。

綺礼は少し間を開け、息を吐きだした。

「しばらくはキャスター監視を最優先にする。行動を改めれば良いが、そうでないなら早急に対策を立てなくてはならん」

通信を切ったばかりで、また師に繋がねばならない手間が面倒だが、それも言つてはいられない。父も交えて、冬木の管理セカンドオーナー者である時臣と今後の話し合いをすることにした。

綺礼は目の前のアサシンに下がるように命じ、己が盟主に連絡するべく先ほどの魔導器に手を伸ばす。

と、そこで。

「いえ、まだ話は終わっておりません。どうか先に我らの相談をお聞き願いたい」

綺礼はそんなアサシンの声を背後から聞いた。

令呪が刻まれた腕が痛み、綺礼はアサシンの狙いを察する。

振り向くだけの時間も許さず、背後の声はアサシン固有の武器である短剣^{ダイク}を綺礼の首に押しつけた。

暗闇の中から現れる髑髏の仮面は、綺礼の目の前に立つサーヴァントと同一のモノ。綺礼の背後に立つ者もまた、黒衣を纏うアサシンのサーヴァントであった。

いかな元代行者の綺礼とて、暗殺者の英霊に不意を打たれては、反応のしようもなかった。

「……なんのつもりだ？ アサシン」

綺礼は面前のアサシンから目を逸らさずに聞く。静かな声で返答をしたのは、綺礼の喉元に短剣を突きつけたままの背後のアサシンだった。

「貴方のやり方についていけない。そう考える者もいるということですよ」

どちらのアサシンも動揺することはなかった。短剣を持たぬアサシンがもう一人の黒衣の髑髏面を黙認しているあたり、主に叛意を見せるこの行動は予定通りのものなのだろう。

「お前の同胞たちを見殺しにした意趣返しというワケか」

「いいえ、我らは決して恨み言を伝えに来たわけではございません。あくまで、貴方に話を聞いていただきたいだけのことです」
答えたのは、今度は報告に現れたほうのアサシンだった。

「しかし、これは相談相手への態度ではないだろう」
「非礼は重々承知の上。それほどに貴方は信用できぬ」
「信用がおけぬ者に相談事か。それはまた、ずいぶんと思いきったことをするな」

薄く笑うアサシンのマスターは、アサシンが複数存在していることに疑問を抱くことはない。

どのクラスであろうとサーヴァントが複数召喚されることはない。それは聖杯戦争の原則である。にも関わらず、二人のアサシンに挟まれるという不可思議な状況を綺礼は完全に受け入れていた。

綺礼は知っている。『山の翁』^{ハサン}の称号を受け継いだ英霊の中に、たった一人、個人でありながら群体の能力を有した者がいたことを。他でもない、己の従者からソレを聞き及んでいた。

そう、今代のアサシンは複数に分裂することのできるサーヴァントだった。

単一の肉体の内にながら、まったく別個の魂を持った集団存在。現代の世であるなら、多重人格障害と呼ばれる特異能力を生涯の武器として生きた暗殺者。綺礼の従者となったハサンは、そういった存在であった。

固有の逸話がそれぞれの特異能力として現れる英霊の中で、これほど特異な宝具を有する者がどれだけいるだろう。当時の知識においては、多重人格という概念は想定されていなかった。今では病理

として定義されるソレも、かつての暗殺者ハサンにとっては秘中の秘策たる『能力』であった。

異なる人格にそれぞれ備わった特技や能力を暗殺術として利用し、時と場合に応じて性格も能力も完全に豹変する。その完璧すぎる『変身』に、側近すら当時の“翁”の正体を見抜くことはできなかったという。

アサシンの宝具、妄想現象は、かつての秘策が顕著に現れたもの。己の魂を分化し、サヴァント霊体であるがゆえに個々の人格を分身として具現化する。一人の人間が多様な思考と特技を有する英霊。ソレが此度のアサシン、『百の貌のハサン』の異常だった。

現に、この場で主を睨む二人のアサシン以外に、綺礼の従者は冬木の街の至る所に存在していた。

その数ざつと五十人。一人分の魂を分割している以上、個々の戦闘力は恐ろしく落ち込んでいるが、これだけの“目”から逃れられる敵は存在せず、斥候として彼以上のサーヴァントはいなかった。

アサシンの片割れは綺礼に向かい、もう片割れは主に刃を向けたまま。

「私たち二人だけではない。我らの中には、もう何人かが貴方に不信を抱いている」

暗殺者の言葉は嘘ではない。事実、アサシンの人格の中には彼ら以外にも綺礼を信じ切れず、不満を抱えている者が存在していた。ただ彼らほど主に不安を持つ者や、このように思い立った行動をする者がいないだけ。

多重人格者とは統合しきれぬ人格を持つ者のことを呼ぶ。主人格

やリーダー格の人格を筆頭に、性格も考え方も異なる様々な人格を持っている。中には年齢はおるか、人種や性別まで違う人格も存在し、口調や訛りなども特有のモノに変化することがあるという。

それは完全な同一人物でありながら完全に別人だ。人間の心とは複雑で、同じ人間でも環境や学習によつては考え方が変化するもの。そのため人格同士でソリが合わない場合や、他の人格と協調する気がない者が発現することもある。

例えリーダー格の人格を以てしても、統率しきれないのが多重人格の特徴。アサシンはそれを体現できる存在なのだ。

これは彼らの独断だった。他の仲間たちには一切このことを告げていない。

今ここにいるのは、人々の死など知ったことではなく自らの悲願にのみ忠実な人格と、普段は敢えて仲間との足並みを乱すことはないが、より凶悪な性質で、他人を信じるということを知らない人格であった。

聖杯に選ばれしマスターでありながら、同盟相手を勝たせることに集中し、自らのサーヴァントを浪費する盟主に異を訴えることもない。彼ら二人は、そんな主を認めることができない人格なのだ。

本来なら、サーヴァントはマスターに手出しできない。造反意志を見せようとも、自分が存在するためのマスターが消えれば意味がないので、そんな脅しに意味はない。

しかし今回の場合は時臣がいる。例え綺礼が死んだところで、アサシンは時臣と再契約を果たしに行くことだろう。アサシンが余所のマスターと契約を交わせば、死を装った最初の茶番劇が効力を失

つてしまうので、時臣も断りきれないはずだ。

ただでさえアサシンは暗殺に特化したクラス。マスターに気付かれぬまま、敵の懐に近づくことは彼らの十八番。

それは自身の主であっても例外ではない。契約の繋がりには、主に仇なす従者の行動をマスターに伝えるが、そこに至るまでの経過を伝えることはない。

アサシンが気配を殺し、己の殺気と殺意をギリギリまで完全に抑えれば、令呪を持った主への謀反も不可能ではなかった。令呪でサーヴァントの暴走を喰い止められるなら、令呪を使わせなければ良いのだ。そういった意味でアサシンほど造反に卓抜したサーヴァントは存在しなかった。

全サーヴァント中、最も御し難いサーヴァントはアサシンであり、歴代のハサンの中で最も制し難いハサンは、このハサンなのである。

よりもよってそんな存在を引き当てたのが言峰綺礼だった。あの意味でレアカードを引いたのだが、これは運がよかったと嘆くべきか、運が悪かったと嗤うべきか。

半ば本気で思案しかけた綺礼に、殺気立つ相方を抑え、綺礼の首に刃を突きつけた方のアサシンが淡々告げる。

「どうか我々に鎖を与えてほしい。でなければ、いずれ貴方を裏切るやもしれぬ」

私が、とは言わない。他の人格も、皆同じような考えであると、このマスターに誤解させる必要があったから。

鎖が何を指しての発言かなど問うまでもない。

マスターに与えられる絶対命令権を行使せよ。それがアサシンからの要求であった。

「マスターに逆らうな、と、そう命じると言うのか？ アサシン」「さよう。そのように長く広い命令では確かに呪いの効き目は薄い。だが対魔力の低い我らならば、主の意思を尊重する程には効果があるだろう」

あるいは、暗殺者は雇い主の手腕を期待していたのかもしれない。令呪を使わずともこの場を乗り切るようならば良し。そうでなければ、所詮その程度の器でしかないのだと、その程度のマスターだから誰かの下につくしかできなかったのだと、諦めることもできるのだから。

二人の行動は命がけのものだった。この背信としか取れぬ行動が、もし忠誠心厚い同胞ほんかくらに知られば、彼らは粛清されるであろう運命にある。それでもアサシンはこれを必要な進言と信じ、言峰綺礼と対面したのだ。

ここで慌てふためき喚き立てるような情けないマスターなら、アサシンも綺礼を見限る腹積もりであった。

そうではない。最低限の胆力は持っている。ならば綺礼を見切るのには性急であろう。

どうか、マスターに逆らわぬよう縛りを。

そう乞い願うアサシンは、彼なりに忠義を尽くそうとしている。些か矛盾した話だが、主に従うために綺礼に刃を向けたのだ。綺礼も彼らの行動が忠義から来るモノだと察していた。

果たして、主の返答やいかに。

「ふむ……やむをえまい。他で代用できるならば、令呪を消費するわけにもいかんのだが……、残念ながら私には話し合いで解決するほどの器量はないのでな」

スツと令呪が刻まれた腕を上げる。

綺礼は三画の命令権のうち一つを用いて、内心の落胆を隠しきれないアサシンに命令した。

「令呪を以て命じる。暗殺を実行せよアサシン」

その言葉が終る前に、アサシンの一人は己の心臓を貫き、もう一人は自身の短剣で自らの首を斬り裂いた。

音を立てて倒れる二人のアサシン。

綺礼が命じた暗殺。その対象は他でもないアサシン自身であった。
「カツ……ハ、……！」

一人は即死であったのか、即座に存在を消滅させたが、もう一人には未だ息があった。

「ほう、ギリギリで気づいて急所を避けたか。さすがは暗殺者。他人の殺意には敏感のようだな」

ヒュウヒュウと声なき声を漏らすアサシン。死の淵にあって、な

お髑髏の仮面から覗く瞳には生への執着が窺い知れる。

何故、と。黒衣のサーヴァントはその眼でかつての主に問いかける。

宝具で分裂しようとも、結局のところ全てのアサシンは同じ一人だ。令呪による命令は全てのハサンに適用される。

つまり彼の同胞も無事ではない。先の命令によって、冬木市中のアサシンが訳も判らぬ内に自害するのだ。

これで綺礼は、本当の意味でサーヴァントを失うことになる。参加資格であり、英霊と戦うための唯一の手段を自ら捨てたことになる。

自らの悲願を果たす器が目の前にあるというに、少しサーヴァントに脅された程度で、万能の釜を手にする可能性を放棄する。

こんなことをするマスターが存在するのか。

アサシンの認識では、いや、恐らくは他の参加者にとっても信じられないことだろう。

始まりの三家や外来のマスターだけでない、魔術協会や聖堂教会といった、しがらみや思惑がいくつも交差する中、この命がけの戦いに参加する権利を得ながら、簡単に己の剣を捨てるマスターなどありえるのか。

「お前には先に言っていなかったか？ 私に願いなどはない。聖堂教会の意向通り、相応しいマスターの手に聖杯が渡れば、それで構わん」

既に息も絶え絶えな暗殺者を見下ろしながら、綺礼はさらに続ける。

「既に五人のマスターの所在も判明し、サーヴァントの実力も、英雄王の敵ではないと判っている。如何なる力を持つと、それを上回るのが彼の英霊の宝具だからな。確かに宝具の情報は必須だが、正体が割れば自ずと宝具も読める。警戒すべきは素の戦闘力だ」

綺礼は苦しみもがく漆黒のサーヴァントに微笑する。

「バーサーカーを除き、どの英霊の正体も読めた。マスターたちの力量も“ただ一人”を除いて導師を脅かす者はない。そこまでわかっていれば、あとは気づかれぬ程度の使い魔でも放ち、居場所さえ把握しておけば事足りる」

アサシンを残しておく理由は特に無いのだと、そう消えゆく従者に告げた。

望みが潰えたことを徐々に悟りながら絶望に落ち込んでゆく影の姿を、綺礼は感動するかのような表情で見つめている。

「お前たちが残ってさえいれば、どうとでも戦力に組み込めたかもしれん。が、戦力的に劣るお前たちを手駒として数えるのは難しい。正直、お前たちの維持に魔力が喰われることを考えれば、持て余しているところだ」

綺礼には、どのアサシンが己に叛意を持つ者が判別はできない。全ての叛意に対応するなど、綺礼ほどの力量を持つ者であっても不可能だ。

だからこそ、今の内に彼らを排除することを決めたのである。既に敗北者の身の上ならば、いないはずのサーヴァントと引き換えにある程度の情報を得ただけで十分だと。

僧衣の男はアサシンを踏みにじる。

体ではなく心を。少しでもマスターを信じようとした想いを。ア

サシンが聖杯に託そうとした、その望みを。

「ならば後は導師の勝利のため、殺すべき英霊の一人として殺すだけだ。お前を抑えることに労力を割くのも疲れる。別段、いつ殺そうと構わなかったのだがな。お前たちの方から頼んでくるとは思っていないかった」

「キザ……………マ……………ッ！」

無慈悲に、しかし愉快そうに告げるこの男は、間違いなくアサシンの苦痛を愉しんでいた。本人はそんなつもりで殺したのでなかったが、憎しみを吐いて死の淵に沈むアサシンを見て愉悦を覚えていた。

そんな自分に、少なくともはない嫌悪を感じながら、綺礼は最後の別れをハサンに告げる。

「さらばだ。お前たちの役目は、とうに終わっている。」

同時にアサシンが息絶えたのは単なる偶然だった。

漆黒の英霊は、絶命すると共に消滅した。今も綺礼がアサシンとの契約を感じているところからすると、何人が生き残っているアサシンがいるのだろうか。

その証拠に、令呪を介して残るアサシンの苦痛を感じ取る。どういうことか思念を送って主を問い質そうとする者もいたが、綺礼は取り合うことなく完全に無視した。

「……………ふん。奴ならば、もっと早くに令呪を使用したのだろうか」
思わず“誰か”と自分を比較し、忌々しげに唇を噛んだ。

そも、ここでアサシンを殺すことを選択したのは、そのダレかに影響されたからではないか？ 自分自身に対して、そんな疑念

が拭えなかった。

最後に残った令呪が鈍く輝き、徐々にその輪郭が消滅していく。
……おそらくは町中に散らばった全ての間諜が死したのであろう。
鈍い痛みと共に、綺礼の腕から令呪が完全に消え去った。

綺礼は大きく息を吐きだした。

「そうだ、私に願いななどない。そんな男に、お前たちの気持ちが理解できるはずもない」

言葉にはなんの熱も籠っていない。そこにあるのは、物悲しいほどの空虚さか。

己の願いを叶えるため、共に聖杯を求めるマスターの是非を問う。
アサシンの行動は叶えたい想いの強さの証明でもある。

そこまでは綺礼も感得できる。しかし本当の意味でアサシンの想いには共感できない。

願いとはつまり欲望のカタチだ。生きていなければ欲が生まれることもない。

だから生きる目的すらない綺礼の心には、人間らしい願いが生まれることはなかった。そんな男が、アサシンの気持ちを正確に捉えることができるわけがない。

……そう、彼には願いななど思いつかない。願う心など判らない。
他人の不幸だけを糧とする彼には、己が生きる価値さえ見出すことができない。

そんな彼に生きている意味があるとすれば、かつて交わした別れだけだ。

生まれながら欠落している事実を受け入れた後、綺礼はあらゆる努力をした。自分の生きる価値を、意味を見出すために懸命だった青年は、ことごとく無駄に終わった試みの最後に、一人の女を愛そうとした。

異性を愛し、家庭を持ち、静かに息絶える。平穩を嫌悪する彼だったが、そんな幻想を夢見たこともあった。そこに一握りの魅力も感じられなかったが、そうできたらいいと願い、家族という安息に人並みの幸福を求めた。

綺礼が選んだのは、死病に侵された未来のない女だった。そんなコワレかけの女だから愛したのか、そんな哀れな女しか愛せなかったのかは、綺礼自身にもわからない。

綺礼は女を愛そうと努力し、子もなした。

だが結果は変わらなかった。男にとっての幸福とは女の苦しみであり、我が子の絶望に他ならない。愛そうとすればするほど、男の中で女の嘆きを望む声が強くなった。

信心深い女はまさしく聖女だった。綺礼の憤怒を理解できる、唯一と言つていい存在だった。

それゆえに男の絶望は増していく。

あれほど自分を理解し、癒そうとする人間はこの先現れまい。そんな女ですら、綺礼の欠陥を埋めることはできなかったのだ。

敬虔な信徒であればこそ、信ずるべき教義に反する己を容認できぬ。

自分は欠落した存在。生まれたこと自体が間違いだった。

ならば もはや生きて是非を問うこともない。

かつて綺礼は、この身そのものが間違えば消えるだけと結論を下し、女に別れを告げにいったことがある。試みの為に妻としたのだから、終わりを告げるのは至極当然の義務だった。

そこで終わるはずだった彼の人生。しかし、家族を愛そうと躍起になった日々と共に終わったのは、綺礼の命ではなかった。

「私には、おまえを愛せなかった」

石造りの部屋に訪れた男は女に謝罪を述べた。

それを聞いて、死病に冒された女は笑った。立ち上がる事もできぬ細い、骨と皮だけの体で、

「いいえ。貴方はわたしを愛しています」

そう微笑んで、彼女は自らの命を断った。

止めようがなかったし、止めても意味のない事だった。女は死病に冒され死にゆく身。もとよりそういう女を選んだのだ。だから止めたところで無駄だった。

血に染まった女は、掠れていく意識で男を見上げて、

「ほら。貴方、泣いているもの」

笑みのカタチを崩すことなく、美しい聖女のままに瞼を閉じた。

無論、綺礼は泣いていない。ただ女にはそう見えたのだ。

貴方は人を愛せる、生きる価値のある人だと、自らの死を以って証明し、女は永遠の眠りについた。別れを最後に、男は無言で部屋を去り、その時から主の教えに決別した。

このとき確かに綺礼は悲しいと思った。

だがそれは女の死ではない。

“ なんという事だ。どうせ死ぬのなら、私が手を下したかった”
彼が悲しんだものは、女の死を愉しめなかった損得だけだった。

その感情は自らの歓喜によるものなのか。それとも 愛した者だからこそ、自身の手で終わらせたかった悲哀なのか。

その答えが脳裏を掠める時、彼は常に思考をカットした。
それは永遠に沈めておくべきものだ。女の死は無意味だった。その献身とて、男を変える事はできなかつたからだ。

だが、それを無価値にする事を、男は嫌った。女はその身を犠牲として、男に生きる価値があると言ったのだ。ならば彼が生きていく限り、ソレを覆すことなど許されまい。

自身の歪みゆえに、女の苦しみを欲したのか。愛するがゆえに、女を穢したかったのか。 答えを出す事を永遠に止めたのだ。
女は男を愛していた。男は女を愛そうとした。これは、それだけの事である。

それが三年前、遠坂時臣に弟子入りをするより以前の出来事だった。
綺礼が己の悪性も理解できず、妻の死による悲しみの意味を誤解していたなら、少しでも長く、母親以上に難儀な体質を持つ我が子と暮らそうとしたことだろう。

終わってみれば、男は涙さえも得ることができなかつた。
ただ、信じたくはなかつた事実を確信しただけ。

自分に人並みの幸せを望むことはできない絶望と、世界が穢れるほど満たされる、自分という存在への嫌悪だった。

変わったことがあるとすれば、彼は増して『価値のない者が存在する価値』を考えるようになったこと。

けれど答えを出してはならない。

貴方はわたしを愛しています

その言葉を、無価値なモノに貶めるなど、彼にはできないことなのだから。

破綻した感性を有する魔性。

信奉者でありながら、神の教えに背を向けるしかできない背徳者。とすると、この身は本当に悪魔なのかもしれない。綺礼は己の身を嘲った。

悪魔とは、神と、その御子たる人間がいてこそ、初めて存在が許される。

この世のすべてを神が作りたもつたと言つのなら、悪魔すら神が作った舞台装置ということだからだ。敵対者として崇拜される彼らは、人間無くては存在し得ぬ。

であるならば、今ここに座する悪魔もまた、神が存在を祝福していることに他ならない。でなければこの男が生まれてくるはずがない。

だが何故、彼が生まれなければならなかったのか。本当に、この黒き信奉者の存在は許されるのか。

神を心より信仰する綺礼は、主の敵対者となりえない。神の教えでは自分を救うことができないが、救われる者がいることを綺礼は知っていた。だから綺礼は完全なる悪には堕ちない。都合のいい悪役でありながら、敵役としては失格者だ。

男が存在する必要性はどこにもない。悪としても価値がない。

「願いなき私に望みがあると云うのなら、それはこの悪鬼が生まれたい^{しみ}答えを知ることだろう」

一人呟くその言葉には、一体どんな想いが込められているのか。

悪魔とて元は天上に輝きたる熾天であったという。どんな悪役であれ、初めは無垢として存在し、憎しみや欲望、あるいは愛情といった正負の想いに導かれて魔に陥る。

だが、綺礼は違うのだ。

初めから規格外として生を受け、世界から断絶されたモノ。それは世界に害を成す前提として生まれるモノ。

綺礼には生まれつき“善から悪に変わる”という過程さえ許されなかった。善性を成すべき者か、悪人として生きるか自ら決める。そんな当然の権利さえ認められず、受け入れられぬ一つの道しか残されていないとは、いったいなんの冗談だ。

良識が、道徳が、正義が、悪は在^{オマエ}ってはならぬと断定する。赦しを求めて信じ切ったハズの信仰も、悪の末路は死あるのみと断罪する。彼の居場所は最初から用意されていなかった。

それは、なんだ。有ってはならぬモノならば、何故、ワタシが生まれなければならなかった。

初めから望まれぬモノであるなら生まれてこなければ良かったのだ。何の価値も持つておらず、ただ死ぬ為に、ただ疎まれる為だけに在る者たちの、罪の所在はどこにあるのか。それが、彼が抱え続ける問いである。

しかし自ら答えを出すことなど彼にはできない。

聖杯が備える願望機の機能は、人の心を反映させるだけの機能。綺礼の問いから生まれる答えは、綺礼にとって都合の良いモノでしかなく、求めるべきモノは決して見つからない。

だから聖杯を求めたところで無駄なのだ。

綺礼の問いは、神に問うてこそ意義があるもの。聖杯に答えを望んだ場合、綺礼自身でも出せる答えが得られるだけ。それではあまりにも意味がない。

もし彼に望みがあるとすれば、それは一つだけ。

聖杯コタンが出す答えではなく、自身の同胞にして絶対的な存在を。人に価値を望まれぬ、答えが出せるナニカの存在を祝福すること。

「なるほど。私は無意識にそれを求めていたということか」

未練が断ち切れない自分に気がつき、男は自虐的な笑みを浮かべる。

そんなモノいるはずがないと理解するからこそ男は苦しんでいる。いかに聖杯と言えど、願う本人が知らぬものを用意することはできない。聖杯が彼をマスターに選んだのは、そんな葛藤を抱えていたからなのか。

死人しにの願いが無意味と言うなら、いったい綺礼は何を懸ければ良

いのだろう。

綺礼は再び衛宮切嗣の資料を手にする。答えを齎すことができる者があるとするなら、聖杯などよりも今は彼しかないのだ。

この男の正体が、歪んだ『正義の味方』だと言っのなら、人として歪んだ『悪の権化』たる自分は、この男と決着をつけるために存在していたのではないだろうか。

お前と私、果たしてどちらが価値ある存在か。今の綺礼の関心はそれだけだった。

今、己が成すべきことを違えぬ綺礼は、時臣とキャスターについて話し合うため、今度こそ通信機に手を伸ばした。

ごまかしようもないのだから、アサシンを殺したことも正直に話しておこう。ただし話すのは命を狙われたという所まで。余計な部分は黙っておこう。

抜けだすことのできない闇の中で、そんなことを考えながら、綺礼は一人通信機を起動させた。

11 四日目・夜 - サイレントデス - (後書き)

アサシンはもっと後半の、皆の情報が出そろった辺りで脱落させようかと思ったんですが、今落とすのも後も変わらるので「名実共に最初の脱落者」にしました。

……いや、色々と無理矢理かとは思ってたんですよ？

でも正直あんな能力、倒し方が思いつかないんです。倒すとなれば分裂体を一人でも残すわけにはいきませんし。

なので彼の特性、多重人格という面にスポットを当てさせてもらいました。

今回は“あの方”に登場していただきます。

家々の灯りも消え、ビル街からも光が失われてゆき、さらに深くなつていく夜の闇。テールランプの帯をなびかせ、疾走する車体のエンジン音が公道に響き渡った。

自動車は河口も間近な未遠川の川幅を跨ぐ冬木大橋を渡り、冬木市の東側に位置する深山町へと向かう途中である。

メルセデス・ベンツ300SLクーペ 本来の地力に加え、アインツベルンの財力によつて幾重ものチューンナップを施された結果、もはや怪物と呼ぶに値する程のモノとなつたマシンを操作するのは、屈強な男の剛腕ではなく、ダークスーツに身を包む少女の細腕であつた。

騎士にとつて最も重要な武器とは、剣でも槍でもなく、騎馬であると言ふ。彼らは名の通り騎馬を繰り、戦場を駆けることにこそ本質があると。

乗馬に限らず、すべての『騎乗』に共通する疾走感は、現代においては自転車に乗れるようになった年頃の子供ならば、それを理解することができるだろう。

ハンドルを握るセイバーは、血も通わぬ鉄の塊でしかない高級クラシックカーが、乗り手の意を忠実に汲んで速度を上げ向きを変え、恭順ぶりに感嘆していた。

馬に乗るための鎧すら開発されていなかった時代に生きた彼女だが、クラス別に与えられた『騎乗』のスキルによって、足でブレーキ、アクセルを巧みに使い分け、この騎乗装置を難なく乗りこなしていた。

まるで生き物を自在に操るかのような手応えと、生前の騎馬には望めなかったスピードに快感を禁じえない。セイバーは自分が生きた時代にこの乗り物が存在しなかったことを、心底から惜しいと感じていた。

あり得た筈がないと知りながらも、せめて一騎いちだいでも存在してあげばと、つい考えたのは、彼女が軍を率いる者として生きたために抱いた想いか、はたまた戦士としての本能がこの駿馬を欲したか。

楽しむため、ではなく戦の道具として値踏みしてしまうのは、もはや切り離しようのない彼女の本能だ。人間らしい欲求や娯楽の一切を断ちきり、ただ国のために生きてきた少女は、どうしても今日初めて知ったメルセデスの性能をかつての戦場に要求してしまう。

この凶暴な騎馬が本来は主の妻の“玩具”としてあてがわれたモノだとセイバーが知らなかったのは、幸福であるのかもしれない。これほど優れた騎乗装置が貴族の慰み物であるなどと、戦場に生きた英霊としては受け入れ難いことであろう。

助手席に座って寝息を立てているのは、当然のごとく衛宮切嗣である。この間に数刻前の戦闘で疲労した体を休める意図があるのか、車の運転は完全にセイバーに任せて座席に身を沈めていた。

車が向う先は自陣と定めた深山町の武家屋敷。切嗣の肌に合わせて調整し、回復や補助のための陣を張った拠点である。武家屋敷の

無事は、腹にCCDカメラを括りつけた使い魔を使って舞弥が確認している。もしも留守中、何者かに破壊されていた場合、その時は予め用意してある別の拠点に進路を変更すると決めてあった。

予想以上の苦戦を強いられた切嗣には、舞弥から性的手段で魔力を補充するほどの体力も残っていなかったらしく、彼の魔力はほとんど残ってはいない。ならば舞弥の隠れ家で魔力と体力の回復を待てばよいのだが、舞弥の存在を敵に晒す可能性はできるだけ排除したいようで、相棒と合流する時間は常に短く抑えていた。

車は本来なら真っ直ぐと拠点に向うべきところを、大きく弧を描くように遠回りとなる道を進んでいた。拠点に向って直進したのでは、もう一人の従者の居場所が敵に知られるかもしれないからだ。

車内には会話もなく、ただ沈黙が流れている。

決して重苦しい沈黙というわけではなかった。根本的に会話を必要としない主従であったため、談笑を交わすこともなかったのだ。特に今は戦時。沈黙の時間が長くなるのは、この二人ならむしろ自然なことだと言えた。

ランサーとの戦いで負傷した少女の腕は、まだ完治する兆しを見せなかった。応急処置こそ施してはあるものの、必滅の呪いを受けた影響か、回復が一時的に遅くなっている。切嗣の魔力残量がほぼゼロであるために、セイバーの高い自己治癒能力も上手く機能してはいなかった。

冬木市を分かつ大橋を渡り、深山町の半ば、真夜中で人のいなくなった住宅街、大橋のアーチが人の目に届く限界地点にまで差し掛かった辺りで、セイバーは意識に刃の切っ先のような冷気を感じ取った。

サーヴァントの気配。それが真正面に仁王立ちしている。

道路の真ん中に陣取るその気配は、高速で走るメルセデスの存在を承知でそこに立っていた。突っ込んでいけばどんなカウンターが待ち構えているかも判らない。セイバーは安全な停車を諦め、高速で走る機械を急停車させる。

急ブレーキではあったが、およそ数多くの乗り物を制御し切るBランクの騎乗スキルをサーヴァントとして会得しているセイバーは、メルセデスをスピンに陥らせることもなく、完璧なる停車を成し遂げる。

その代わり多大な負荷が車に与えられ、助手席に座っていた男性は、衝撃によって浅い眠りから酷く不本意な脱却を果たすことになった。

非常時に起こすのは構わないが、もっと他に起こし方はないのかと切嗣が思ったのはご愛嬌である。

クラシックカーのヘッドライトが路上に投げかける光の輪の中、時代がかった豪華な長衣のサーヴァントが、迫りくる車両の危険など眼中にないかのように、平然と道の中央に影を落としていた。

車との人影の間隙は、わずか10メートルにも満たないと言つのに、慄く気配おのひとつ見せない度胸は英雄然としたものである。

セイバーはガルウイングのドアを開け、停車からここまで全く隙を見せず、冷たい夜気の中へと降り立った。一步遅れて切嗣も車外に出る。敵サーヴァントの襲来に、二人は戦闘へと備えた。

それと同時に、辺り一帯に消音の簡易結界が起動したことを二人は感知する。

敵マスターによるものかサーヴァントが予め仕掛けておいたものか。優れた術者はミサイルが落ちても周りに気がつかれないような結界を作り出せるというが、この時間帯、防音にのみ特化させれば十分だろう。

消去法から、この場に現れた孤影はキャスターかライダーであると見当をつける。

未見のサーヴァントのクラスは四つ。その内、アーチャーなら遠距離から狙い撃つてくるはずであるし、バーサーカーなら、マスターも無しに姿を見せた段階で、有無を言わずに襲い掛かるはず。

ゆえに残る可能性を二つと見たが、ライダーである可能性は低いと判断した。正々堂々とした戦いを所望なのは不明だが、敵は何に跨ることもなく目の前に立っているからだ。もしライダーならば自動車を用いたこちらに対抗するため、騎乗宝具に乗り込んだ状態で姿を晒すことが予想できる。

つまり敵はキャスターである。権謀術数を戦力とする彼らは、後方支援を役割とするも、時に思いもよらぬ行動を選ぶことがある。例えばそこかしこに罠を用意し、自らを囿としているのかもしれない。そんな気配はなかったが、ここは既に敵陣としての結界が構成されている可能性もあった。懐に短刀を携えたキャスターは多いのだ。

どちらにせよ、狂戦士を除けば、残るは白兵戦に不向きなサーヴァントがほとんど。そんな中、相手は堂々と敵前に立ったのだから、戦いへの準備が万全な敵であると騎士王は予想を立てていた。

だが……。

“……これが、戦いに赴いた者の表情か？”

戦場を駆け抜けた英雄を当惑させたのは、夜行性の獣を想わせる異様に大きな双眸である。

男は満面の笑顔を浮かべていた。まるで生き別れの親兄弟とでも再会を果たしたかのように、いじましいほど無垢な喜びに顔を輝かせていた。

次の行動で、男の不気味さは更に増していく。

「お迎えにあがりました。聖処女よ」

なんとアスファルトの路面に片膝をつき、臣下の礼を取ったのである。深々と頭を下げる正体不明のサーヴァントに、さしものセイバーも一瞬の狼狽を隠せなかった。

相手はセイバーを知っているようだが、彼女はこんな顔は知らない。敵にも部下にも、こんな怪しげな男がいた覚えはなかった。

そもそもセイバーは女であることを隠したまま生涯を終えた。『聖処女』などと呼称されたことは一度もない。このサーヴァントが一体何者か、まるでわからなかった。

知り合いか？ 相手を刺激せぬよう目で問うてくる切嗣に、従者もまた、相手に気取られぬほど僅かに首を振って否定した。

知らぬとハツキリ口にしなかったのは、彼女の記憶にないだけで面識があったかもしれないからだ。なんの弾みでソレを思い出すか知れない以上、軽々しく見覚えがないとは言えなかった。

これまでに統治者として数多くの臣下の謁見を許し、戦場では先陣に立って幾人もの敵を斬ってきた少女にとっては、生前の“覚えのない知り合い”は数え上げればキリがない。早馬に頼る以外に情報伝達の手段もなかった当時、いちいち全ての関係者を覚えていられないし、一方的に彼女を知るだけの人間も多いのである。

出で立ちから察するに、やはり相手はキャスター。もし仮にアー
トリア
サー王が女であったことに気づいていた生前の敵や同郷ならば、な
んの策を持って現れたのかわかったものではない。ここは相手の出
方を慎重に見るべきだ。

いつまで待っても声がかからぬことに何の危機感を覚えたか、血
相を変えたローブのサーヴァントは面を起こし、返答なく押し黙っ
た二人を前に　　と言っても、そのギョロギョロと動く目はセイバ
ーにしか向いていない　　シヨックを受けたかのように狼狽して見
せた。

「何故……何故ご返答くださらぬ!? 私です! 貴方の忠実なる
永遠の僕、ジル・ド・レエにてございます! 貴方の復活だけを祈
願し、いまいちど貴方と巡り合う奇跡だけを待ち望み、先ほどよう
やく貴方の復活を知り、こうして時の果てにまで馳せ参じてきたの
ですぞ。聖処女よ! よもや神めにお声をまでも奪われたのですか
ジャンヌ・ダルク!!!」

嘆きを込めた訴えに、大仰に言われる謂われも、ジャンヌと呼ば
れる覚えもないセイバーは面食らってしまう。

少女の主もまた、その身を硬直させていた。敵の名前と攻略の要
たる真名を名乗った事態に、切嗣は二重の意味で驚きが隠せなかつ
た。

自ら率先して真名を明かすサーヴァントなど有り得ないと思っ
ていた。各々の逸話を伝承に残す英霊たちが名を名乗るのは、自らの
弱点を教えるのと同じ。聖杯戦争に臨む者たちならば何としても隠
し通したい情報なのだ。

しかも名乗ったのが無名の英霊ならいざ知らず、フランス救国の

英雄にして、ある時を境に黒魔術の背徳に身を染めた『青髭』とは、有名どころすぎて性質が丸わかりである。

ジル・ド・レエには確かにキャスターに該当する逸話がある。彼の発言が真実なら、敵が黒魔術師であることが確定してしまう。

「おお、おお……」

敵の意図が読めず、困惑と警戒からなおも答えぬセイバーに、告げられた名前の意味が判っていないことを感じ取ったか、キャスターは両手で髪を掻き毟って呻きを漏らす。先ほどまでの歓喜はどこへと消えたのか、脂ぎった異相は狼狽と落胆で戯画のように歪んでいる。

「そんな、まさか……まさか記憶を失っておられるのか！？ お忘れなのか！？ 生前の御自身を……！」

哀れをもよおす嗚咽と共に悲痛な声を張り上げ、キャスターは見ても無残に取り乱す。

英霊として不完全な身であるセイバーは、英霊の座で与えられる時空を超えた知識を得てはいない。そのため、ジル・ド・レエという名前にも、ジャンヌ・ダルクという名にも心当たりがなく、どうして目の前のサーヴァントがこれほどまでに慌てふためくのか、サツパリ理解できなかつた。

「……キャスターのサーヴァントと見受けるが、相違はないな？」

誰と勘違いしているのであれ、サーヴァントであるなら、この場に現れた以上は聖杯奪取に身を賭する覚悟があるだろうと考えたセイバーは、戦いの意志の確認を試みる。

だが、そんな彼女の言葉はキャスターを更なる狂乱に導く結果となつた。

「おおお！ オオオオオオオツ！！」

半ば悲鳴に等しい嗚咽を振り上げながら、跪いたまま無様に地を叩き、キャスターは神に呪いを吐いてセイバーに縋りつく。

「なんと嘆かわしい……未だ忌まわしき神の聖性などという幻想に囚われ、魂を閉ざしてしまわれたかつ！ なんと痛ましい！ 御身の復活を祈願した洩神の生贄も足りなかったと言うのですか！」

ピクリ、と、セイバーの眉根が僅かに反応したことを知ることもなく、男は大袈裟なりアクションを交えて訴える。

「ジャンヌ、かつて誰よりも烈しく、誰よりも敬虔に神を信じた貴女だ。神に見捨てられ、何の加護も救済もないままに魔女として処刑されたのだから、己を見失うのも無理はない。ですがこれ以上、神ごときに惑わされてはならない！ 貴女はオルレアンの聖処女、フランスの救世主たるジャンヌ・ダルクその人なのだ！ 目覚めるのですジャンヌ！！」

畏怖とはまた違うおぞましさに、セイバーはうなじの毛が逆立つのを感じた。こちらが何も言わぬ内から少女の素性を決めつけ、さらには返答なき理由を『記憶を失っているもの』として扱う男は、セイバーをイコールジャンヌであるとする自分勝手な妄想以外、認めるつもりはないのだ。

錯乱している。その言動と行動から、セイバーも切嗣もすぐに気がついた。

男は何かしらの策を弄する意図で出てきたのではなかったのだ。ただ、本当に“ジャンヌ・ダルク”を迎えに来ただけ。それを覆すモノは何一つ目を向けようとはしないだけのことだ。

どれだけセイバーがジャンヌ・ダルクと似ているのかは知らない

が、まさか養子や風采の全てが見分けもつかぬほどに瓜二つということはあるまい。にもかかわらずキャスターは、セイバーを想い人そのものと確信したきり、疑念の余地すら許さないのである。

いつそ少女の真名を明かしてしまえばいいのかも知れないが、そんなわけにもいくまい。人違いであると断言したところで納得するようにも思えなかった。それに、セイバーの個人的な心緒としても、こんなことで名乗りを上げようという気にはなれなかった。

騎士という生き物の信念として、名乗られては返さずにいられないセイバーだが、しかし別人と間違えられた拳句、ワケのわからないことを叫び続ける相手に明かす安い名前は持ち得ない。

相手に戦う意志があり、かつ立ち合いの礼儀を果たしたのなら、その覚悟に騎士の長たる立場のアーサーは応じるしかない。が、こんな狂人の世迷い言のために騎士の名乗りを穢すわけにはいかなかった。

「ジャンヌ、もはや私をキャスターなどと御呼び召さるな。既に我らはサーヴァントなどという頸木きくに繋がれてはいない。聖杯戦争は既に決着している！」

何者をも恐れぬキャスターの言葉に、さすがのセイバーも無反応というわけにはいかなかった。

「戯言を。終結したと言うならば、聖杯は誰の手に渡ったと言うのだ」

「もちろん、万能の釜たる聖杯は、既に我が手に収まっている！」
満面の笑みも晴れやかに、キャスターは堂々と胸を張って宣言した。

先ごろまで、この世の終わりを悲観するように叫び、落ち込んでいたと言つのに、ジャンヌに声を掛けられただけで急に元気になった。これまでの言動を含め、感情の振幅が異様に激しい人物であることが窺える。

「なぜならば我が唯一の願望、聖処女ジャンヌ・ダルクの復活が、まぎれもなくここに果たされているのだから！ 何人なんびとと競い争うまでもなく、既に我が願望は成就した。戦うまでもなく聖杯はこのジルを選んだのです！！」

妄言は既に剣騎士の耳に届いていない。聖杯は我が手にアリ、貴女の身がなよりの証拠と血迷った段階で、剣騎士はもはや会話の通じない相手と言葉を交わす気を逸していた。

セイバーは主の命令を待った。切嗣が敵の意志を顧みる甘い男なら、命令を待たずして、この不快な敵サーヴァントを切り捨てていた。主が戦いへの心構えを忘れていない男であるがゆえに、セイバーはマスターの指示を仰ぐ。

「では聞くがジル元帥」

予想外に、口を開いた切嗣が話しかけたのは、敵に対してだった。「聖杯　神の血を分けし聖なる杯がお前を選んだのなら、お前が罵るところの神が力を貸したということになるが？」

キャスターからしてみれば、敬愛するジャンヌとの会話に横合いから口を挟まれたのに等しかろう問である。しかしジル・ド・レエは、ケラケラと気味の悪い笑い声を上げた後、寛容に答える。

……ただし質問者相手にはなく、セイバーに向けて。

「見なさいジャンヌ。そのこの男の、聖杯を掠め取らんがために私を

惑わそうという浅ましさを。しかしそれは無駄なこと。聖杯とはすなわち願いを叶えるべき願望機の総称。決して神の子が血を注ぎし杯ではない。つまり！ 神ごときの力を借りるまでもなくジャンヌが復活を果たした今、神も及ばぬ“万能の力”が私を選んだということだ！」

セイバーは切嗣の意図を察した。彼らしかぬ無意味な問い掛けかと思つたがそうではなかつた。彼はキャスターがどれほど正気を失っているか、その状態を確かめるために質問をしたのだ。

聖杯の名称が、ただ願望機のことを指すモノだと承知するキャスターの答えは、錯乱し、正気を失いながらも、かつての知性は失つていないことを示すものであつた。

最悪のケースである。狂いつつも知略を備えた魔術師の英霊など、放つておけばどんな事態を引き起こすかわかつたものではない。

演説し足りないらしく、未だ何かと五月蠅いキャスターを尻目に、切嗣は目と首の動きでセイバーに指示を出す。

殺れ^や。これ以上、この狂乱の怪物を残しても意味がないとの結論に至つた切嗣は、従者にそう命じた。

セイバーをジャンヌと信じて執着する以上は、彼を泳がせたところで他のサーヴァントと噛み合うこともないだろう。上手くすればセイバーを護る盾に利用できたかもしれないが、錯乱したサーヴァントなど、マスターを込みで御し切ることは難しい。

こんな様子では情報も望めないだろう。ならば、この先の障害とならないよう、さつさと殺してしまうに限るということだ。

標的はキャスター。こちらの手駒はセイバー。ステータスでも白

兵戦でも完全に有利。神代に生きた魔術師でも傷つけられるか怪しいAランクの対魔力を保持するセイバーなら、この状況で魔術師の英霊が敵意を向けてきたとしても防ぐことはできる。

こちらは魔力尽き果てた身ではあるが素の戦闘力が違いすぎた。唯一の警戒は、マスターの目で見た時、敵の宝具の数値が異様に高いこと。恐らくは宝具に特化したタイプの英霊なのだろう。

ジル・ド・レエの逸話を鑑みるならば、召喚師であることは容易に予想がつく。彼の魔術師としての伝承が悪魔召喚を目論んだ人物のモノであるならば、宝具もそれに関する物か。

だとすればレベルの高い使い魔を召喚する宝具と仮定して良いだろう。セイバーの対魔力は彼女を対象とする魔術に対し有効なモノであって、魔術で呼び出されるバケモノには何一つ意味を成さないが、召喚の時間を許さなければ問題は無い。この場では召喚の宝具よりも、剣の宝具の振るうほうが圧倒的に早いのだ。

コクリと頷いたセイバーは、殺意にも気づくことがないキャスターに歩み寄る。

「流神の生贄を用意したと言ったなキャスター」

冷徹かつ、落ち着いた声。なんの感情も乗らぬ無表情に怒りが混じっているなどと、誰に推し測ることができただろう。

聖杯戦争で犠牲が出るのは当然だ。彼女のマスターのように、目的を目指す上でのやむを得ぬ犠牲を容認するのは、彼女とて生前の経験から学んでいる。極力それを抑えるために冷徹な手段をとってきた少女は、今更『戦略上の死人』を咎めるつもりはなかった。

それでも、否、命の重みを知るからこそ、悪逆は悪逆として許せ

ぬのだ。

敵の言にあつたジャンヌ復活の生贄。死者の蘇生はそれこそ、聖杯なり魔法なりの力をもつてしなれば成し得ぬ奇跡だと言つのに、かつての主君を蘇らせるために、他者の命を消費して神を穢したとジルは言つた。

無意味な犠牲だ。狂者が自らの悦を満たさんがために、いたずらに無関係な命を散らしたに過ぎない。単に一般人の魔力で己を強化したのを、そのように称しているのだとしても、人々の魂を喰らう行為は英霊としての靈格を貶めること。主命であるならまだ仕方ないソレを自らの意志で嬉々として行つ英霊など、彼女には許すことのできる存在ではなかつた。

「ならば、その身が贄と同じ末路を辿ろうとも異論はないな」

無情に、彼女は見えぬ刃を振り上げ、何が起こつているのかよく分かつていないキャスター目掛けて振り下ろした。

戦闘にすらならない。これはもはや、単なる処刑も同然だつた。

そんな、三つの影を見つめる眼差しが、冬木大橋のアーチの上存在した。

頂きの高さは五十メートルを越えるアーチ形式の大橋は、海から吹き込む風を受ければ、すぐさま足を踏み外して眼下の川へと落下するのは目に見えていて、熟練の整備工も命綱なしに上ることは決してない。

そんな冷たい鉄で造られた橋の上に二つの人影が存在していたことは、真夜中で人通りが少ないこともあって、誰も気がつくことがなかった。片方は両手両足だけで鉄骨にしがみつくと少年であり、片方は威厳たつぷりの態度でもって胡坐をかいて座る巨漢の男であった。

なぜ霊体ではなく魔力を無駄に浪費する実体と化しているのか不思議だが、巨漢の男は疑いようもなく英霊だった。強力な魔力を帯びたるその威光。存在感も、力強さも、ただの人間では有り得ないでは傍らで震える少年は彼のマスターなのか。

「は、早く……降り、よう、ここ……早く!」

少年は寒さと恐怖に歯をひっきりなしに鳴らしながら、隣に座った男に訴える。そんな態度からも、少年が本意にアーチの上にいるのは明らかだった。

涙声が聞こえているのかいないのか、大男は数百メートル先の“対話”を見やり、顎に手を当てる。人間の視力ではとうに不可視の領域であるのだが、さすがに人智を超えた英霊の目は、米粒ていどにしか見えぬはずの三つの人影の動きを正確に把握していた。

「……いかなあ。これはいかな。セイバーめ、早々にキヤスターを屠るつもりでおる」

彼が焦りの言葉を発したのは、ちょうど切嗣がキヤスターに質問を始める直前である。

男の目で捉えられるのは対峙する者たちの姿だけで、英霊の優れた聴覚をもってしても会話は聞き取れてはならず、セイバーの表情も殺気も読みとれたわけではない。それでも、男は正確に英傑の意志を察知していた。

「そ、それって、好都合なんじゃ、ないの、かよ」

少年は震えながらも、主の安全にまるで無頓着な自身のサーヴァントに半泣きの顔を向ける。正直なところ、少年は今すぐにでも逃げ出したい気分ではいっぱいだ。

これだけの高所。しょせん魔術師として半人前である彼は、落ちてしまえば確実に死ぬ。従者に無理矢理ここまで付き合わされた少年は、何度も降ろせと叫んでいるのだが、巨体はいっこうに耳を傾ける気配がなかった。

巨漢には高い所が危険だとする当然の意識がないのかもしれない。どちらにせよ、主が従者を御し切れていないことは、彼らのやりとりだけでも窺い知ることができた。

「馬鹿者。何を言っとるか」

ガン、と、巨漢の男は踵の下の鉄屑を踏み鳴らす。まるで、だだをこねる大きな子供だった。全身で鉄骨に貼りついていた少年は、その振動に骨まで揺すぶられ、悲鳴を上げそうになる。

「あのままではキャスターが脱落しかねん。そうなってからでは遅い」

「お、遅いって　奴らが潰し合うのを待ってから襲うんじゃないのかよ！」

だからこそ、自分の反対意見を完全に封殺して、視野の広い高所を陣取ったのではないか。そう、少年はサーヴァントに叫ぶ。

「……あのなあ坊主、何を勘違いしておったのか知らんが」

サーヴァントは眉を顰めて、まるで笑えない道化師の芸に興ざめたかのような表情で足下の少年を見下ろした。

「たしかにボーっとしておったキャスターめを見つけた時、様子を見るとは言った。さつき目をつけたばかりであるしな。だが、セイバーが出てきた今となっては、早目に誘いをかけなくてはキャスターが消えてしまうではないか」

これで戦いが長引き、他の英霊どもが現れてくれればよかったのだがなあ。などと続ける巨漢の従者に、少年マスターは高所の恐怖も忘れてポカンと口を開けた。

言葉の真意が読みとれない少年に大男は補足する。

「余が征服王であるからには、やはり他の英雄たちも配下に迎えるのが筋というものだろう。諸人を魅せ、最上の栄華を齎すが我が王道よ」

そう言って征服王と名乗った英霊は、肉食獣が唸りを上げるような、獐猛で剣呑な笑みを浮かべた。その笑みは、全てを呑み込みまんとする強欲と傲慢の現れであった。

「第一、セイバーの方は目立つた行動を取っている者たちだと、おぬし言うておったであろう。ならば、その周りに黙って居座り続けるのは危険だぞ」

「は、な、なんでだよ？」

戦の鉄則は情報収集。むざむざ目立つ敵に挑みかかるのは愚の骨頂。戦いを開始しようとする者たちを遠巻きに監視し、どちらか一方が敗退したところで、勝ち残った方を自分のサーヴァントに潰させれば漁夫の利となる。

それが少年の思惑であったのだが、しかし巨漢はマスターの考えを首を振って否定した。

「セイバーの陣営が既に誰かと　例えば、“鷹の目”を持つアーチャーなんぞと手を組んでいたとすれば、彼奴等の周囲を無策に張りつるのは、花に群がる昆虫も同然。狙い撃ちしてくれと言っようなもんだ。あるいは敢えて囷となっっているのかも知れん。あ奴らの周りでウロウロしておるなど、それこそ自殺行為よ」

狙撃手の可能性を考慮するなら、屋外では常に移動しなければ良的になるだけだとする指摘に、少年はハッと気づいたように顔を歪ませる。目の前の敵にはばかり気を取られ、それ以外の者に狙われる可能性を無意識に頭の中から排除していたらしい。

ちなみにサーヴァントの警戒は正解だ。今回は不測の事態ゆえ不在であるが、切嗣は戦いの場には舞弥を潜ませる腹づもりでいる。もしも舞弥が近辺に潜んでいたならば、アーチの上でくつろぐサーヴァントの方とはかく、恐怖との戦いに震える少年マスターはライフルの狙撃によって命を落としていた。

サーヴァントは腰の剣を抜きはらい、目の前の空間を切り裂いた。切り開かれた空間がぱっくりと口を開けて裏返し、渦巻く魔力の奔流とともに、煌々と輝きながら強壮なる大型の戦車が出現する。恐らくは大男の宝具であろう。

「見物はここまでだ。我らも参じるぞ坊主」
巨体はマントを翻して跳躍し、戦車に跨った。これを見て、サーヴァントに言いくるめられそうになった少年は、もちろん慌てふためいた。

「……まてまてまて！　ソレとコレとは話が別だ！　だからって、無闇に姿を晒していいもんかー！！」

「ふむ？　気に食わぬなら、この場所に残って見ているか？」

「行きます！ 連れて行け馬鹿！」

「い良し。よくぞ言ったウェイバー・ベルベット。それでこそ我がマスターだ」

返答に満足したらしく、サーヴァントは豪快に笑って少年の襟首を掴み上げると自らの隣に乗せる。

「いざ駆ける、ゴルディアスホイール神威の車輪！！」

手綱を手に取り、ウェイバーと呼ばれた少年と共に、征服王を名乗るサーヴァントは戦場へと向かって駆けだした。

聖剣にて悪徳の霊を切り捨てようとした、まさにその瞬間。不意に響き渡る雷鳴の響きと威圧感にも似た悪寒から、セイバーはマスターを抱えて後ろに飛びすさり、キャスターと距離を開ける。彼女の優れすぎた直感が危険信号を発し、キャスターを捨て置いても迫りくる脅威に備えなくてはならぬと四肢に命じたのだ。

轟音の元となる中央大橋の上空、西方の空を振り返る。紫電のスパークを夜空に撒き散らし、まるで雷を従えるかのようにして、こちらを目掛けて空中を駆ける幻影の姿を、セイバーは見た。

「……チャリオット戦車……ライダー騎乗兵か」

マスターが呟いたソレは、少女も心に抱いた確信であった。

遅しくも美しい牝牛を軍馬の代わりに仕立てた、二頭立ての古風な戦車。恐ろしいのは、ソレが空の上に存在するということだ。風船のように漫然と空を漂っているわけではなく、二頭の神牛が地を

蹴るかのように稲妻を“蹴って”空を移動しているのだ。

これが英霊の宝具でなくてなんだと言うのか。騎乗兵のサーヴァントがやってきたのは間違いなかった。

進む魔力と共に雷を従えて、キャスターとセイバーの合間に割って入るように、ライダーのサーヴァントが全速の疾走をもって到着した。

アスファルトには、牝牛の蹄によってブレーキ痕にも似た焦げ跡が刻印された。もしセイバーがあのままキャスター打倒を優先したなら、回避は間に合わずに轢き殺されていたのかもしれない。

着地と同時に眩い雷光が収まり、御者台に立ちはだかる威風堂々たる巨漢の姿が露わになった。

「双方、武器を収めよ。王の御前である！」

キャスターとセイバーを見渡し、大音声で吠える気迫は、なるほど王を名乗るだけの圧力があつた。

わからないのは、何故いきなり出しゃばつて来たのかということだ。少し待てばセイバーがキャスターを始末していたというのに、それを阻害する形で登場したのが剣の主従には解せない。明らかにキャスターを護る意図での登場だったわけだが、キャスターは誰かと手を組む類の英霊ではない。同盟関係にあるのでもないだろうに、なんの目的でこんなマネをしたのであろうか。

「我が名は征服王イスカンダル。此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界した」

呆氣にとられるとはこのことだ。切嗣も、セイバーも、キャスターが名乗った時以上の驚きに絶句させられた。

『王』を自称し、素性のヒントを明かすくらいなら、まだ許容範

囲内である。しかしまさか、キャスターと違って錯乱した様子も見られぬサーヴァントが、しかもマスターと思われる少年を傍らに正体を明かそうなど、思ってもみなかった事態である。

彼が跨るチャリオットは、ゴルディアス王がゼウス神に捧げたという供物に相違あるまい。それに縁ゆかりある英霊ならイスカンドル王も当てはまる。見る限り、イスカンドルの真名が嘘であったとしても完全なる出まかせというわけではなさそうだ。

信憑性を増す名乗りに、混乱を深める剣の主従よりも動転していたのは、ライダーの隣で驚きに手足を振りまわす少年だった。

「何を……考えていやりますかこの馬ッ鹿はああ!! 同盟持ち掛けるだけで真名しゃべってどーすん!!」

少年が最後の“だ”まで言えなかったのは、ライダーの非情のデコピンが彼の頭に炸裂したからである。小柄なマスターは「ギャオウ!」と痛そうな悲鳴を上げ、御者台の上でのたうちまわった。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交えるより先に、まずは問うておくことがある。うぬらが聖杯に何を期するのは知らぬ。だが、今一度考えてみよ。その願望、大地を喰らう願望に比してもなお、まだ重いものであるのかどうか」

「……貴公。何が言いたい?」

連続して真名をバラす英霊の登場に困惑し、さらには懲悪の機を奪われてイラ立つセイバーは、その怒りと混乱を胸中に抑えつけ、不可解な言葉の真意を問う。

「うむ、噛み砕いて言うのだな。ひとつ我が軍門に下り、聖杯を余に譲る気はないか? さすれば余は貴様らを朋友として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存である」

人を食ったような態度に、今度こそ、完全に剣の主従は呆れかえった。答えは当然“否”と決まっているが、話の通じないサーヴァントの前例もあって、どう応対すべきか即決できなかつたのは彼らの失態であろう。

ところで。長きに渡って雷いかずちとは神の怒り、神が成し得る奇跡であると信じられてきた。近代では単なる放電現象として知られるソレも、かつての世界においては天上より降り注がれる炎の槍であり、神が人間の愚かしさを嘆いて振り下ろす神罰の鉄槌だとされてきた。

では例えば中世に生きた人間　それも、神という存在を心より信じてきた者の目に、雷はどのように映るモノだろう。神は奇跡など起こさぬと知りながら、しかし自分と想い人を分かつように雷の化身が邪魔をしたなら、仮に現代の知識を聖杯に与えられていたとしても、神の意志たる雷光は耐えられるモノなのであるうか。

「オオツ、オオオオオオオオオオオオオオオオオツ！！」
ライダー登場から硬直し、石像のように動かなかつたキャスターが、突如として雄叫びを上げる。

結界の影響から、声など聞こえぬ場所で成り行きを観戦をしていたライダーにとって、キャスターが理由のよく分からない絶叫をしたことは意外であつたようで、おどけるように驚いていた。

「おのれ……おのれえええツ！！　僕徒を差し向けてまで私と彼女の邪魔をしようと言うのか！　神めえ！！　この世に再び生誕せし我が麗しの乙女の記憶を奪うだけでは飽き足らず、どこまでも自身の許から解放せぬつもりなのかあツ！！」

頭を振り回す姿には、かつてフランスを救うべく戦った雄々しさはどこにもない。あるのは、たった一人の女性の悲劇のために、信仰を嘆き、世を呪った怨霊のサマである。

「おぬしセイバーに惚れておったか？ そりゃあ邪魔して悪かったが、別におぬしの恋路を否定しようなどという気はありやせんぞ」
そんな気の緩んだ発言に耳を傾けることなく、ひとしきり言いたいことを叫んだキャスターは、無様に喚いていただけの姿から一転、覚悟も新たに立ちあがる。

みなぎる気迫を惜しみなく放つその長身の体躯は、一度ならず大地を血で染め上げた者が持つ威風を纏っていた。やはり彼も英霊として伝承に名を残すだけのことはあり、容易く降せる相手ではないのだ。だからこそ切嗣もセイバーも、この自失した元帥を倒せる内に倒しておきたかったと言うのに、ライダーの介入で全て台無しである。

「こうなればジャンヌ、この現世で貴女を神の御座よりお救いするまで。しばしの御辛抱でございます。このジルめがいずれ必ずや神を貶め、御身を真なる再生にお導きして差し上げましょう」

ライダーの巨躯と宝具の影に見えなくなったセイバーに誓い、キャスターは実体化を解いて夜の闇へと消えた。なんらかの魔術を用いたのか、陰気な気配は一瞬にして消え去った。

セイバーが自身に敵意を向け、ライダーも彼女の救援に現れた（と、キャスターが思い込んでいるだけだ）以上は、どんな者でも一旦引かねば話にならぬ。精神を穢されて、なお知略を失わぬサーヴァントは、状況の不利を悟って撤退したのだ。

簡易結界を残したまま姿を消したのは、切嗣には信じられないことであった。場所が住宅街だからか、ジャンヌとの再会に一般人の邪魔が入らないようにするのが目的だったのであって、魔術を世間に隠す気はさらさらないようだ。結界の処理は監督役に任せることになるだろう。そんな行動からも、キャスターが普通でないことが伝わった。

さて、残されるのは当然ながら剣士と騎乗兵と、そのマスターたちである。

「なんじゃい。忙しい奴だのう」

せつかくの誘いを袖にされたことが面白くないライダーは、憮然とした表情で消えゆく敵サーヴァントを見つめた。

自身の真名を知る敵を逃すわけにいかないという聖杯戦争のセオリーは、むしろ自ら名乗ったライダーには関係がないのか、キャスターが離脱しようとも咎めることもなかった。この場でカタをつける気かと読んだ切嗣の予測は大外れである。

もつとも、姿を消しゆくキャスターを追いかけるためにセイバーに背を向ければ、剣士は即座にライダーを切り捨てるのだから、見逃したのも仕方ないと言えば仕方ないことでもあった。

ライダーは気を取り直して少女一人を視線の標的にする。

「で、おぬしはどうだセイバー。待遇は応相談だが？」

どうやら征服王を名乗った男は、まだ勧誘の延長に乗っているつもりであるらしい。ニカツとこの場にそぐわぬほど爽やかに笑い、親指を立てて剣騎士に先の質問の答えを促す。

「ら、い、だあゝ……何考えてんだお前え。キャスター逃げちま

「つたし、セイバーだって断るに決まってるだろ……オマエ本気でセイバーとキャスターを手下にできると思ってたのか？」

「ここまで完全に存在を忘れ去られていたウェイバーは、自らのサーヴァントに低い音程で呻くように愚痴を漏らす。

「いや、まあ、ものは試しと言うのではないか」

「ものは試しで真名バラしたンかい!？」

逆上したウェイバーは、悪びれた風もなくハハハと笑う巨漢を、非力きわまる両手の拳でポカポカ殴りながら泣きじゃくる。哀れを誘う光景だった。敵対する立場にいる者たちも、心中で別のことに気を取られていなければ多少は同情したことだろう。

“ まずい ”

剣の主従は共に同じ思考に行きついていた。

正気を離れた魔術師ならば、如何に魔力を消費してしようと、最高の対魔力を誇るセイバーは対処できる。だがライダーのサーヴァントはキャスターとは違う。

ライダーのサーヴァントと戦うには何よりも機動力の確保が優先される。敵の“疾走”に対応できるだけ視界が開けた空間でなければ、彼らの騎乗宝具に対抗することができない。遮蔽物で敵の動きを制限するという手もあるが、敵が征服王イスカンダルとあつてはそうもいかなかった。

切嗣はライダーの宝具の性能をマスターの目で見抜いていた。敵が騎乗する戦車は、近代兵器に換算すれば戦略爆撃機にも匹敵する。ソレは小一時間も暴走させれば、新都の全域は焦土に変えることができるほどの代物だ。

セイバーも己の先達と言えるイスカンドルの逸話は把握していたので、知識と直感を合わせ、ゴルディアス王の戦車の威力をかなり正確に読みとっていた。それを鑑みるならば、四方を家々に囲まれた住宅街での戦闘は不利でしかなかった。

白兵戦なら敵を抑え込める障害物も、破格の突破力を持つ彼の王の宝具の前では意味を成さず、逆にこちらの動きを束縛する結果となる。建物を盾としたところで、その壁さえも壊しながら速度を緩めることなく一直線に突き進むことのできる相手には、壁が逆にこちらへの目くらましとなるだけだ。

むろん状況の不利など、あらゆる戦況を打破してきた騎士王にとって窮地の内にも入らない。腕の傷が完治していないセイバーでも、彼女一人だけならば、不惜身命の挑戦に出ることはできた。

だが、彼女の側には魔力を使いきったマスターがいる。機動力高く、これほどの宝具を持つライダーとの戦いは主を巻き込むことになる。体力も限界まで使った今の切嗣は完全なるお荷物。足手まといにしかなくていい。

そしてライダーの狙いが英霊の勧誘ならば、切嗣のみメルセデスで場を逃れたとき、敵がセイバーと少年マスターとの再契約を狙って切嗣を追い回さないとも限らず、既に宝具と思しい戦車に騎乗している相手からマスターを安全な場所まで逃がすことは不可能だった。

それは切嗣としても同じ結論だった。鞘の加護があるとは言え、強力な騎乗宝具に引き潰されては、ひとたまりもない。従者が主を気にして戦い難いと言うなら、この場での戦闘は避けなくてはならなかった。

「……征服王イスカンドルと言いましたね」
セイバーは前に出て、一つの策　　と言つよりは、賭けを実行する。

その声は固い。喋る気のなかった情報を語るうとしていることは明白だった。

「その覚悟や見事。名乗られたからには、こちらも返すのが騎士の礼です。それに応え、私も真名を明かしましょう」

早まったことを口走る従者に、焦った切嗣は咎めるような目を向け　　、その顔を見て、なにかに感づいたように視線を外した。

マスターに後で罰せられることを覚悟しながらも、現状を切り抜ける手段はこれしかないと判断し、少女は聖杯戦争のセオリーを破る。

「我が名はアルトリア。ウーサー・ペンドラゴンの嫡子たる、ブリテン国の王」

堂々とした名乗りに、草原に立つ王の姿を切嗣は幻視した。

「ほう？　ブリテンの王とな？　しかし、おぬしさつきジャンヌとか呼ばれておらんかったか？」

「アレはキャスターの空言です。忘れなさい」
キャスターのおぞましい視線を思い出したセイバーは、ジャンヌと呼ばれることに露骨な不快感を示した。

「こりや驚いた。名にし負う騎士王が、こんな小娘であつたとはな」
何の物的根拠もなしに納得したライダーは、新しい玩具を見つけた子供のように、楽しそうな顔で眉を上げた。

どうにも舐められているようで気分が悪かったが、セイバーは構

わず言葉を続ける。

「……それで征服王よ。一つ提案がある」
「なんじやい騎士王。言うてみい」

「簡単なこと。この場は王が雌雄を決するに相応しくない。貴方のマスターも恐怖に震え、私のマスターも魔力が底をついている。」

「ここは日を改めての再戦としないか？」

戦車から推測するなら、確かにイスカンドルである可能性は高い。マスターの方はライダーに逆らえぬことも、二人を見ていれば当然予想がついた。ここまで己の王聖を違えぬ王ならば、勝利よりも『王としての戦い』を優先するのではないか。というセイバーの読みであった。

どのような責め苦を味わおうとも語る気のなかった己の正体を晒したのは、彼女の信ずる生き方を貫くに加え、サーヴァントの責任として、リスクを負ってでも主をこの場から生還させるための計略であった。

マスターの魔力枯渇をバラしたのも賭けの一端。従者の横で「お、怯えてなんかないやつ！」と叫ぶ少年も魔術師の端くれならば、切嗣の残存魔力を、正確でなくともある程度までは見抜くことができるだろう。だからこそ敢えて利用する。

……どちらにせよ、このまま殺し合いになるならば、全力を懸けることになるのは間違いないかった。この状態では真名を隠しきることもなどできないし、斃し切るにせよ、敗北するにせよ、この場でどちらかが果てるまで戦うなら、真名を黙り続けても意味はなかった。

実のところアルトリアの場合、剣士とバレている時点で真名を伏

せることの意味は薄い。彼女に目立った弱点は無く、また、普遍的な剣士としてオールマイティに優れるため、長所や短所があるわけでもない。あるとすれば、この体格くらいなものである。

隠すに越したことがないのは事実。しかしセイバーのサーヴァントは特殊な宝具やスキルを持つ者は少なく、力押しでも十分勝ちぬけるステータスを持つ者に与えられるクラスだ。有名すぎるために戦術を読まれることは確実だが、比類なき高出力を可能とする少女は、例え戦力が看破されようとも十分戦える。

どう転んだところで『予想されるリスク以上のマイナス』はなかった。仮に、征服王の名乗りが偽りであったとしても、不明瞭だったマスターの姿を確認し、その従者の騎馬ほづまを知ることができただけでも収穫だ。

分の悪い賭けである。良くて八対二。成功確率の方が二だ。敵を倒せる時に叩かぬ者などおるまい。

セイバー当人としても甚だ本意な策であった。駆け引きと呼ぶには稚拙であったが、今この場を切り抜ける手は、戦う以外はこれしかなかった。

「その前におぬし、余の問いに答えておらぬぞ」
先に質問をしたのは自分だと、ライダーは当然の権利として答えを要求する。

「その話ならば断る。私が今生にて剣を捧げるのは、誓いを交わしたマスターただ一人。いかな大王とて騎士の誓いを穢すことは許さない。ましてやマスターを飛び越えての交渉事など、サーヴァントとして吞めるわけがない」

今度のセイバーは即答であった。

既に戦うことも想定に入れた騎士は、戦う姿勢も崩すことなく、真つ向から大帝国の王と相對する。

「重ねて言うなら、私もまた一人の王として国を預かる身だ。誰の軍門にも下るつもりはない」

一時的に部下となったフリをして、寝首をかく。この場を切り抜けるだけなら、そういう手段もあるのだが、セイバーは英雄の誇りから裏切りを良しとはしなかった。

そもそもセイバーがライダー配下となった場合、切嗣がどのよう^{マスター}に扱われるか知れたものではないので、そんな無謀は冒せなかった。

「交渉は決裂かあ。勿体ないなあ。残念だなあ」

深くため息をつき、ぼやきながら俯いたライダーは、すぐに顔を上げて、ふむ、と顎に手を当て、なにやら考え込むようにしてから大仰に頷いた。

どうやらセイバーの提案に対し、なんと答えるか検討していたらしい。

「よかろう。征服王たる余は勝利を掠め取るようなマネはせん。今日は貴様の誓いの重みとやらに免じて引き下がろう」

「ちよ、おま！？ なに勝手に言っただよライダーー!!」

傍らのウェイバーが声を荒げる。ここまで完全に振り回された拳句、マスターを無視して話を進め、なんの成果もないままに手を引くと約束したのだから、至極まっとうな怒りである。

「坊主、貴様の望みは名を上げることであろう？ ならばここは引け。手負いを討って聖杯を手にしたところで、卑劣漢として貴様の名が穢れるだけだぞ？」

グツと言葉に詰まるウェイバー。ライダーに一理ありと思ったのではなく、彼が一度言いだしたことを曲げることは有り得ないと知っているの、説得に難儀することを躊躇したのである。

マスターが何を言ったところで、この従者は自らの意を通そうとすることを、ウェイバーはここ数日で学んでいた。

「~~~~っ!! わかった! わかったよ! 撤退だ!!」

これではどちらが従者かわからない。そう思いながら、やけっぱちに少年マスターは退却を認めた。

よしよしと満足げに笑うライダーの顔は晴れやかなるモノであった。

「では騎士王、しばしの別れだ。次に会うときは存分に余の血を熱くしてもらおうか」

緊迫感のない空気の中、ぶちぶちと文句を止めぬマスターを横に、ライダーは神牛に手綱を入れた。牛は嘶きと共にヒツメから稲妻を散らして虚空へと駆け上がる。

「さらば!」

チャリオットは天を駆け、轟雷の響きと共に新都の方向へと去っていった。

ライダーたちの姿が完全に見えなくなった頃、今宵の邂逅を疑問に思う切嗣はポツリと漏らした。

「……世界はあんな馬鹿に一度征服されかけたのか?」

あまりと言えばあまりな言葉は、彼の正直な感想だった。三人の英霊が一堂に介したと言うのに、こんな結末となったのでは、彼の疲労もそうとうだ。

結局のところ、征服王は何をしに出てきたのだろう。聖杯戦争としては意味のないタイミングで横槍を入れ、宝具によって魔力を無駄遣いし、自分の正体をバラすだけバラして帰って行く。効率を慮る切嗣が敵を馬鹿と評するのも無理はなかった。

セイバーは黙したまま、ライダーの飛び去った空の果てを見据えている。あの英霊は、この聖杯戦争で最大の敵となると彼女は感じていた。

少女は、ライダーのせいでキャスターを逃がしたことに口惜しさを覚え、悪霊退治を邪魔立てされたことに怒りを感じ、だが自らの名を明かしてまで王道を貫きたるイスカンドルの気概に、呆れと感心を抱いていた。

王となつてからは感情をほとんど表に出したことがなかったセイバーは、様々な想いが^{なま}絢交ぜとなつた今、感情の処理しようがどうにも掴めないでいる。

それより何より、自分で選んだ策とはいえ、敵の慈悲に助けられたカチチになつているのが心に一つのしこりを残していた。舐められた、という感覚が、どうにも彼女の中に強く残っている。

セイバーは歯を軋ませた。これもマスターを護るための選択だ。そう思つても、胸中では相変わらずモヤモヤとした小さな苦みが渦巻いている。敵の撤退を期待するなど、らしくもない策を使った自分が度し難かった。

敵はサーヴァントとして立つたのではない。王として立ちほだかり、ただ何者にも縛られぬ王としての己を見せ付けていった。使い魔に自らを貶めてなお、王たる己を優先させていた。

言い方を変えるなら、ライダーは傲慢かつ自分勝手に契約者を振り回したただけだ。

セイバーとは、違う。この戦いの間は結果のため、魔術師の使い魔となることを誓った少女の覚悟とは天地の差がある。比べるまでもなく、戦いに懸ける覚悟ならば少女が上……そのはずなのに、どうして痛みが残るのだろうか？

極々小さな、針で刺したような痛みであった。気にするほどのモノでもないのだが、セイバーには何故か無視できなかつた。

それが一体なんなのか 義憤でも不満でも、悔しさでもない。アルトリアは、これまで感じたことのない痛みに戸惑っていた。

その小さな棘は、私情を捨てた常勝無敗の王が、生涯に一度として感じたことになかつたモノ。“屈辱”と呼ばれる、負の感情であることに彼女が気がつくのは、もっと先の話である。

12 四日目・深夜 - 邂逅 - (後書き)

今後のため、そろそろイスカンドル王やジル元帥をセイバーに会わせねば。

とか思っただはいいけど、しかし会わせた後どーやって収集つけるか迷いました。

セイバーの総戦闘回数を七回未満に抑えるため、戦わせることなく、感情に流されることもなく、その上でライダーにいずれライバルと認識させるため真名を露呈させ、無理なく撤退する……。

どーやってそんな風にするのよ、と、悩んだ拳句の結果がコレですよ。

これまでより遥かにゴイインですが、もうこういう作風だと思っただってつかあさい。

作者の都合により、次回の更新は結構遅れると思います。

誰だ、夏休みに補修授業なんて最初に考えたのは。

どうして、こんなことになったのだろう。

とある民家のダイニングキッチンにて、いつも通りの冬木での食卓、いつも通りの朝の風景へと突入したウェイバーは、そんな想いに頭を悩ませていた。

ウェイバー・ベルベツトは自称“天才”魔術師である。

聖杯戦争の概要を偶然に知った彼は、マスターとなって儀式に関わるため、何日も前に日本の片田舎へとやってきた。

戦いなど野蛮であるとするウェイバーは好んで戦いに参じたわけではなかった。聖杯によって叶えたい願いがあつたわけでもなかった。単純な優劣を決定する殺し合いの場合は、彼の目的を果たすに適していたのだ。

ウェイバーは不遇の天才という言葉がよく似合うと、少なくとも本人は思っている。

魔術師として大した家系に生まれただけではない彼が、ほとんど独学で魔術を学び、ついには魔術協会が誇るロンドンの最高学府に席を置くまでに至る。それこそが己が天才たる証であり、何人及ばぬ栄光であるとして、彼は才能への自負を深めていった。

だがウェイバーのプライドは、その最高学府『時計塔』にて大き

く傷つけられることになる。

己より力量を持つ者たちに囲まれ自信を失くした　ということではなく、少年の才能がいつこうに認められないことに憤りを感じていた。

ゆえに、聖杯を勝ち取ることで己の優秀さを認めさせるというのが、彼が聖杯戦争に懸けるところの意気込みであった。目下、才能の証明を最優先の目標とするウェイバーにとって、優れた者が勝ち残る聖杯戦争は理想の花舞台であった。

不遇の才人はカタチある成果を求めたのではなく、勝利と言う名の栄光を掴むことで才覚を周囲に知らしめることを画策し、様々な偶然の助けを借りて極東の島国に訪れたのである。

そんな彼は、昨夜、強大な敵と遭遇し、非常に不本意な結果を残すことになった。相対する敵影を確認したのに、いざ戦闘というところで、マスターとして在るべき姿を見失ってしまった。

勝利に榮譽を求めたハズの少年は、なんと従者の言い成りとなり、勢いに任せてヤケクソの撤退を選択してしまったのだ。

何の成果も出ない内に撤退してしまうという失態に、ウェイバーは自分のマヌケさが信じられなかった。

現在の隠れ家に帰ってすぐ己の行動を振りかえり、主を意に介さない従者には聞こえないようにして「なんであんなことしたんだろう……」と、暗い顔で落ち込んだほどだった。

先日のセイバー陣営との邂逅は、初めて敵と遭遇したものであるわけではない。彼は暗殺者の英霊を最初に倒している。その時はあまりの齒ごたえのなさに、こんなものかと聖杯戦争の容易さを噛みしめ、有頂天となった己を従者に見せぬように込み上げた笑いを押

し殺したものだ。

悪く言えば調子に乗った少年は、さらなる勝利を求めて夜には何
度か外へと出たのだが、今度はどうも想定していたほど上手くないか
なかった。

偶然か、敵が周到に隠れ潜んだのか、一昨日の夜までは誰も見つ
けることができず、ただ毎夜ライダーに振り回されて自陣へと帰る
体たらくである。

いつそ見るからに無防備な遠坂時臣に喧嘩を吹っ掛けようかと思
ったこともあったが、ああまで堂々とされていると裏を勘ぐって逆
に警戒を深めるといふもので、せめて彼のサーヴァントが判明して
からにしようと考え、今のところ時臣に対しては使い魔による監視
で留めている。

ついに出会った昨晚の敵は、使い魔を通して何度か姿を見ていた
相手だった。間桐の拠点を破壊し、敵を恐れる気配も見せない陣営
確かに強力な敵に違いはないのだろうが、ウェイバーにしてみれば
自信過剰な馬鹿でしかなかった。

プライドを護ることしか知らない彼は、セイバーの高すぎるステ
ータスを読みとったことで、敵の行動は己の力量に驕ったがゆえの
モノと思い込んだ。あらゆるモノを目的のために使うマスターと、
不惜身命を旨とするサーヴァントの危険さに気づくこともできず、
敵の真の戦力を正確に把握することができなかったのだ。

彼らに自分の使い魔を落とされた恨みもあつたが、己を過信した
愚かな相手ならば焦ることはないと思ひ、はやる復讐心をグツと堪
えて敵がキヤスターと潰し合ってくれんことを期待した。

ところが、ライダーが先走ったことで全てがオジャンとなり、計

算を狂わされたウェイバーは自らの混乱を抑えることもできず、従者の言うがままに撤退を選択してしまったというワケだ。

少年マスターは自らの行動を悔い、己の醜態の原因を内心で責めた。

彼の認識では、聖杯戦争は魔術師同士の殺し合いである。いかにサーヴァントが強力で重要な戦力と言えど、主を高貴に彩る文字通りの従者であって、それ以上の価値がある存在ではなかった。

なのに昨夜はライダーの方が目立っていた。戦いの一要因に過ぎないサーヴァントに振り回され、主であるはずのウェイバーは完全に蚊帳の外。敵にマスターとして存在が認められることもなく、どころかサーヴァントの付属品程度オマケの扱いしかされていない。

セイバーがライダーを完全に敵と見做したことは、さすがに少年にも理解できた。それだけライダーが脅威と見られていたということだ。敵の陣営は、これで「ライダーの陣営」を脅威と警戒するだろう。

だが、そう認識させるほどの存在であったのはライダーだけだ。ただウェイバーの武器たる下僕が強力というだけで、ウェイバー自身が優れた者である証明が成されたわけではないのだ。

セイバーも、そのマスターも、ライダーの象徴ほつぐの一つを警戒し、サーヴァントも抑えられない脆弱マスターぶりを披露した少年などは眼中に入れていなかった。

これまでに体験してきた「己の真価が認められぬ」という状況と変わらないのである。

許せなかった。この苦渋は、何度も知ったからと言って受け入れ

られるものではない。受け入れることができたらなら、聖杯戦争に参加などしてはいないのだから。

「どうかしたのかいウェイバー。さっきから溜め息ばかりついて……どこか具合でも悪いのかね？」

少年の向いの席に座っていた年老いた男性が、唇を強く噛んでいるウェイバーに声をかける。

「そうねえ……今朝は顔色も優れないみたいだし……。体調が良くないのなら、ご飯、無理して食べなくてもいいのよ？」

続けて、老人の心配を引き継ぐ形で、隣に座っていた老婆が心配そうに言う。

ウェイバーが冬木での拠点と選んだのは、なんの縁もゆかりもない老夫婦が住まう民家であった。

老夫婦はウェイバーを自分たちの孫として扱っているが、彼らは赤の他人であり、血のつながりどころか、これまで面識があったわけでもない。

ホテル住まいをするだけの費用がなかったウェイバーは、とある孤独な老夫婦に目をつけ、魔術による暗示でウェイバーを海外遊学から戻ってきた孫であると思いきませ、快適な生活と偽の身分を手に入れていた。

外来の居留者の多い冬木市では、ウェイバーの東洋人離れた容姿を家族としても問題ない家庭は珍しくもなかった。少年はその中の一軒であるグレン・マッケンジーとマーサ夫婦の家に転がり込み、「ウェイバー・マッケンジー」として二人の愛孫になりすましていた。

ともすれば彼らの平穩を脅かす存在であろうウェイバーに何の疑問も抱かぬ老夫婦は、今日も寄生者を受け入れて、朝の風景を演出していた。

彼らは大切な愛孫がしかめ面で思い悩んでいる姿に気をもんでいた。

ウェイバーの目の前に用意されたオーソドックスな西洋風の朝食は、少年が席についてだいぶ時間が経ったと言うのに減ってはいない。考えに浸って食の進まない『愛孫』を気遣うのは、夫妻の認識では当然のことだった。

「な、なんでもないよ、お爺ちゃんお婆ちゃん。心配をかけたならごめん。でも大丈夫だから、安心して」

ウェイバーは完璧に老夫婦の孫を装い、不自然のない笑顔を何とか捻りだす。とっさの対応でも顔が強張っていなかったのだから、彼の演技力も大したものである。

「それならいいが……」とそれでも不安そうにする宿主に対して、良心の痛みを感じることもなく、少年はジャムを多めに塗った食パンにかじりついた。誰かに八つ当たりしかねない今の彼は、早めにパンを食べてしまわなければ、いつも不満に思っていたフニャフニャとした食感に文句をつけてしまいそうだ。

なんでもないと言ったのは当然ながら嘘であった。ウェイバーの中で昨夜の失態は大きく、一晚経った今なお、彼はじくじたる思いを引きずっていた。夜の戦いのことは老夫婦に相談できることでもないのです、不満を外へと吐き出すこともできず、内心のイラ立ちを溜め込むこととなっていた。

再び深い溜め息をつく。少年は自らへの懐疑心が、どうしても消

せなかった。

あの時、自分はどのようにして撤退を容認してしまったのか。

答えは簡単だ。敵の殺気、ライダーを射抜く殺気の余波から逃れるためだ。自分に向けられたわけでもない気迫に背を向けるためだ。

敵も意図して少年を無視していたわけでないことくらい、ウェイバーとてわかっていた。サーヴァントが邪魔をするのが確実とは言え、マスターを殺せば優位に立てるのだから、普通は敵のマスターから目を逸らそうとは思わない。

単に彼のサーヴァントが、マスターにまで意識を回せないほどの存在感を放っていただけだ。

先夜の会話に、ウェイバーは割って入ることもできなかった。

ライダーは何時もの通り飄々としていたので、まだ勢いに任せれば彼には文句も言えたものの、それで精一杯。敵に対しては捨て台詞の一つも残すことができなかった。敵の方を睨むこともできなかった。

怖かったのだ。歴戦の勇士と本職の暗殺者を前に、その覇気と殺気にウェイバーは完全に気圧されていた。

先にアサシンの殺気と対峙していなければ、ライダーという支えが隣にいてくれなければ、眼前で戦闘が開始されていたならば、軽く数回、気を失っていただろう。

どうあっても今の彼は認めないが、ウェイバーの力量不足はたしかな事実。強敵を前に恐怖に震えてしまい、実戦経験が乏しいことを簡単に看破されたのだ。少年が怯えているものだと思抜いたセイバーの慧眼は正解だった。

従者の暴挙を止めることもできず独断を見逃し、サーヴァント同

士の会話に主として声を差し挟むこともできず、その上、恐怖心に駆られて逃げ出した。

セイバーたちから見たライダーのマスターとは、そんなものだろう。そして、それが概ね言い訳しようのない真実だということが、彼の屈辱感を高める結果となっていた。

なにもすることができない自分が腹立たしかった。こちらを雑魚と認識した敵が憎らしかった。同時に、凶悪な気配を前にして、威厳を失うこともなく、何一つ物怖じしなかったライダーを凄いと感じてしまったのが嫌だった。

心に渦巻く不満を解消する術を、今の彼は持ち合わせていなかった。

よくよく考えてみるならば、アサシンを撃退したのもライダーだけの力であって、ウェイバー自身はなにもしていない。当時は一番に敵を倒した戦果への興奮と、目の前で撒き散らされた血飛沫の紅蓮に心が沸騰し、冷静でいられなかったので思い至ることはなかったその事実にも、己を顧みることのできる今になってようやく彼は辿り着いた。

結局のところ、少年は未だ何も成し得ていないのだ。

これが従者に完全に主導権を握られたマスターの惨めな姿だとも言うのか。少年は被害妄想も甚だしい憤慨に身を震わせた。

朝食に時間をかけるような暇はない。残念なことに食欲を抑えることのできないウェイバーは、朝のメニューを頬張りながらも、早く胃の中の内容物を消化させて戦いに赴こうと奮起に顔を歪める。

急ぎ過ぎてサラダを喉に詰まらせるハプニングに反省をするまで、老夫婦の視線を集中させてしまう奇行を続けたのであった。

人目を避けるなら夜に戦う方が都合がいい　茹だつた頭の中からは、そんな簡単な思考さえ失われていた。あるのは一刻も早い汚名返上。敵を探し出し、自らの優れたたる知略と魔術を駆使して敵を叩き、この心の渴きを潤わせなければという焦燥感。

今、彼が必要としているのは、食事ではなく倒すべき敵なのだ。最優先するところの目標は、セイバーの陣営ではなく、この戦いに参加しているはずの見知った魔術師。ウェイバーの脳裏には、ある男の嫌見たらしい笑みが浮かんでいた。

それは彼にとって最大の標的である。あのいけ好かない男が参加すると聞いたからこそ、ウェイバーは野蛮な戦いに身を投じることを決定したのだ。

ウェイバーにとって、怒りの矛先を向ける相手は“アイツ”以外に有り得ない。

少年は思った。

早くアイツに、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトに、僕の才覚を認めさせなくてはならない！……と。

ウェイバーはイライラと、もう一枚の食パンを手に取り、いつもより大量にジャムを塗りたくって口の中に突っ込んだ。……というところでテレビから流れるニュースを耳にすることになった。

『えー……、近隣への被害は出ていませんが、現場付近は未だ混乱が収まらず　』

瓦礫の山の前でカメラが回っているらしい。映像は、痛々しく崩壊した建物を映し続けていた。

マッケンジー夫妻が好むローカルな報道番組が、何者かによって

冬木ハイアットという高級ホテルが爆破されたと伝えてくる。最初は気にも留めなかったウェイバーも、爆破の原因に気がついてから食い入るようにテレビを見つめた。

このタイミングで起こった宿泊施設の破壊。これは聖杯戦争が出した被害だとウェイバーは理解した。高級ホテルに泊まりそんな魔術師には心当たりがあったので、“彼”が狙われたのではないかと思っただけで注視したのだ。

監督役の隠蔽班が事後処理をしているはずなので、ニュースで伝えられる情報は一般向けの『表向きの話』でしかない。それでも万一の“隠蔽漏れ”や、隠された情報から逆に真実が辿れるのではないかと期待して、ウェイバーはテレビを見守った。興奮冷めやらぬ心でありながら、少年は冷静な判断を下していた。

数分後。少年の淡い期待とはやや異なる答えをアナウンサーが発した時、ウェイバーは茫然と手に持つ食パンを落してしまい、ズボンにジャムを盛大につけてしまうことになった。

ダイニングキッチンに備え付けられたテレビから流れるアナウンサーの声が、年若き魔術師を現実から遠ざける。朝の陽気に目覚めた頭も、再び眠りに落ちたかのように停止した。もはや、今すぐ戦いに行こうという気持ちは完全に消滅していた。

『瓦礫の下から、行方不明だった宿泊客、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト氏の遺体が確認され』

本当、どうして、こんなことになったのだろうか。

「はあ……」

ウェイバーは息を吐き出しつつ、俯きにベッドに倒れ込んだ。白いシーツに敷かれた毛布の上で大の字となる姿は、どこか哀愁を誘うものだった。

現在は彼の私室となっている二階の寝室で、戦いに臨むべく士気を高めていた少年は、今では気が抜けたように突っ伏している。ベッドの脇では、テレビに向かってなにやら熱中する大男の姿が見えた。

「むう、なかなか手強いなコレは。これほどの苦戦はソグド人とも戦ったとき以来か」

難しい顔ながら楽しそうにコントローラーを握る巨漢は、何を隠そう、かつて世界征服に後一步まで迫った男イスカンダル。すなわちマケドニアの王、英雄アレクサンダーだ。

英雄としての知名度は、世界を見渡しても五本の指に入るであろう彼が興じているのは、現代の子供が外の遊びよりも夢中になる遊具。中でも携帯式のタイプではない、テレビに繋いで初めて使用が可能となる、据え置き型の大きな機械。

つまりはテレビゲームであった。

思いのほか現代に馴染んだライダーは、通信販売を駆使してＴシャツを購入し、さらにはウェイバーを焚きつけて外へと出るたびに、余計な（少なくとも聖杯戦争には関係がない）モノを買って資金の

無駄遣いを続けていた。

彼が遊んでいるゲームも、ウェイバーの財布を犠牲にするライダーの浪費によって手に入れた物だった。

エジプトまでも支配し、一時は大帝國を築き上げ、世界を震撼させた英雄がテレビゲーム……なんともシユールな光景である。

かつての苦境とゲームの難易度を比較して、敵の大抵抗に応じた時ほどの苦難だと軽口を叩くライダーに、そのマスターは何も言えなかった。現実の戦争とゲームの中の戦闘を同列に扱う従者に呆れるだけの気力は、今のウェイバーには残されていなかったのだ。

枕に押し付けた頭から離れないのは先のニュースである。

「死んだ……のか……」

一人ごちるウェイバーの瞳は、茫然としていて何も映していない。ウェイバーはここまでショックを受けている自分に驚いていた。

テレビの中で死んだと報道されたのは、ロード・エルメロイと称せられる若き天才。時計塔でも有名な魔術師である。

時計塔に身を置くウェイバーは、彼のことをよく知っていた。ただの知り合い以上に因縁浅からぬ　と、ウェイバーだけが思っている　相手だった。

ローカル番組とは言え、聖杯戦争に関わった者の名前がああまで大きく出てくるはずがない。ならば早すぎる死体発見は、偶然ではなく、教会や協会の何らかの意図ゆえのものか。

ケイネスは名家アーチボルトの嫡男でもあり、神童として名を馳せた人物でもある。彼の死は聖杯戦争とは関わりのないところでも利用できるし、可能な限りその名声は活用すべきなのだから、き

つと何らかしらの狙いがあったのだらう。そこまで思考が至るほど今の心は落ち着いていなかった。

名の知れた身でありながら堂々ホテルに宿泊していたケイネスの高慢さは、まったく呆れる他にない。これでは隙を突かれるのも無理ない話だ。

そう思えば、ケイネスのマヌケさを笑い飛ばしてやりたかった。なのに、どうしてかソレができないでいた。

ウェイバーにとって、ケイネスは師の一人に当たる人物であった。時計塔では若くして降霊科の講師を務めていたケイネスは、ウェイバーに教鞭を取ったこともあったのである。

とは言っても少年はケイネスを恩師と思ったことは一度もない。エリート意識を鼻にかけるあの男は、ウェイバーにとって最も忌避すべき存在であり、最も嫌悪する類の魔術師であった。

歴史が浅い家系に生まれた少年に、貴族の出であるケイネスは侮蔑も隠さず応じていた。ウェイバーがケイネスに煮え湯を吞まされたのは一度や二度で済まない。若き講師に馬鹿にされたのは何度だったか、数えるのも億劫おっくうになる。

そんな、嫌悪を通り越して憎らしかった男が死んだ。少なくともアナウンサーはそう言っている。ソレを知ったウェイバーの胸に去来したものは、どうしようもない空しさで、言いようのない喪失感であった。

「死んだのかあ……」

ウェイバーは同じ言葉を反芻した。何度か口を通せば、現実として受け入れられるかと思っただ。

効果が現れることはなく、ウェイバーはモヤモヤとする気持ちだけを胸に抱えていた。

ケイネスの工房が攻め込まれたのかどうかは彼には解らない。戦いの余波でホテルが倒壊したのかも。もしかすれば、ただ建物を壊してケイネスを瓦礫の下敷きにしたのかもかもしれない。

どちらにせよウェイバーが求めるような才能の証明は二の次として、敵を殺すためにビル一つを潰すマスターがいることは間違いない。

彼の想像するところの『魔術勝負』とは、知略を尽くして敵の裏をかき、互いの奇跡を競い合うというものだった。聖杯戦争も、魔術というカタチで才能を存分に発揮する、決闘めいたモノであると捉えていた。

よもやこんな手法をもって敵を討つマスターがいようとは、思ってもみなかったのである。戦慄した、という程ではなかったが、思い描いていた前提が覆され、ウェイバーは認識の甘さを実感していた。

目指すところを一つ定めたなら、魔術師は決して怯まず、目的に至るための手段は選ばない。自身の価値に固執した若きマスターは、そんな魔術師の一般論さえ忘却の彼方に置き去りにしてしまっていたのだ。

魔術師は最初の基本として、人を殺す覚悟を知る。人世の影に位置する彼らの道は血に濡れる道であると、何よりも真つ先に教わるのだ。

それは半人前のウェイバーであっても例外ではない。彼とて相手と同じ魔術師ならば殺すことに何の抵抗もない。そんな初歩は当然

ながら学んでいる。

しかし本当に正しく理解できていたかは別の話だ。

サーヴァント一騎は戦闘機の一機に相当すると言われている。それほど戦力がぶつかり合えば周囲が無事で済むわけもない。よって、英霊の戦闘によって被害が出ることは承知の上だった。被害への覚悟できていると思っていた。

いま自らが参加している儀式が、残虐無比の殺し合いであり、そこに感傷を交える余地など微塵もないと肝に銘じていた。そのハズなのに、ホテル破壊跡のような凄惨な光景をウェイバーが想定できていたかと問われれば否定するしかない。

死の悲惨さを理解もせず知ったかぶりで語る現代っ子。さつきまでのウェイバーを正しく評するならそんなモノだ。

どこか戦いに幻想を抱いていたことを彼は理解した。この街で行われているのが文字通りの戦争であると、ようやくと呑み込んだのである。

彼が聖杯戦争に挑もうと思ったのは、高慢ちきな魔術師ケイネスたちに自分の才能を認めさせたいという一心であった。

魔術師の総本山たる時計塔において、少年のような新米魔術師の待遇は良いモノではない。親が子に研鑽を引き継ぎ、魔術師の分身とも言える魔術回路も引き継がせ、より奇跡を成すに相応しい体へと次代の子を造り変えていく魔術の世界では、家柄の浅い者は新米と見られ、代を重ねた魔導の家門ほど力を持つのが常識である。

歴史も浅く、魔術刻印も弱く、魔術回路も足りぬ新興の家系など、いてもいなくても大差ないのだ。

ハッキリ言って期待などまるでされていない。どこの世界でも新しい可能性というものは扱いが良くないものだが、魔術師の世界は特に厳しい。

何世代にも渡って後継者の改造を行ってきた一族すら辿りつけぬ領域が、それこそ無数に存在しているというのに、どうして新興の家柄なんぞに期待をしなくてはならぬのか。

協会は若き才能を卑下しているのではなく、確たる事実として若人より玄人を支持するのだ。

魔術師の総本山とは、神秘の奥の奥、真理の頂きを求める者たちが集まる場所。言ってしまうえば『研究馬鹿かつ効率主義者の溜まり場』だ。神秘の極地に至る可能性高い者が優遇されるのは仕方のないことだった。

才能溢れ、期待値の高い者が相手ならば寛容にもなるが、成果が出せぬと判り切った若手が相手なら、振り当てることのできる経費や時間はほとんど無い。協会が個人に求めるモノは皆が認める“結果”であり、若い家系の努力や成長ではないのである。

力を一つ所に収束した方が都合がよいとする協会の意図からすれば、血が薄く、それも無謀を犯しやすい若い年齢の魔術師は、監視しておかなければならない存在だ。なんの弾みで禁忌を破るともわからない彼らを、正しき魔導に導くのが時計塔の役目の一つ。

ようするに若い家系に対する時計塔の教育方針は「次代の礎となるように」という意識が根底にあるのだ。いたずらに知識を振りまいて魔術を広めることはしない。血の浅い魔術師に術の伝承や魔導書の閲覧すら渋るのは、無駄を排する彼らの思想としては当然の答えだった。

そんな“当たり前”が認められず、己こそは選ばれし才人であるとするウェイバーは、血統の差など個々の才能で補えると豪語していた。経験の密度で歴史の差は埋められる、術に必要不可欠な魔術回路の絶対数が他より少なくとも、より深い魔術への理解があれば補えると固く信じていた。

……たかが二十年足らずの人生しか経験していない者が、数百年と積まれてきた英知に挑むということが、どれほど愚かしいことか子供が大人に掴みかかるのと同じである。彼の場合、ソレを考える想像力よりも自尊心が上回っていた。

血統の古さばかりを鼻にかける優等生たちに、それに阿諛追従し、媚び諂う取り巻きたち……というのは、ウェイバーから見た魔術協会の姿だった。確かに血統を重んじる協会の中にそのような悪しき慣例がないとは言いきれないのだが、ソレばかりだと思っているのは少年だけである。

血統そんなことの善し悪しはどうでもよいから、さつさと研究を完成させたいと願う魔術師然とした者たちは、自らの研究室に引きこもっていることが多く、また、ウェイバーのような半端モノに興味がなかったので、あまりウェイバーと接点を持つことがなかった。

そんな魔術師たち、ないし彼らの祖先とて、後進のために立場の確立に奮闘したのであったり、自らの研究費用の調達に奔走してきたケースが多く、彼らは彼らで使えるモノを使いつくそうとして尊き血統の者たちに取り入ってきた歴史もあるのだが、そんな世知辛い事情になど少年は関心がない。

今後の研究ため、後ろ盾を得て立場を盤石にしようと優等生に頭

を下げる者たちも、貴族の愚痴を言うだけの少年になど構ってやる暇はなかった。そのため、必然としてウェイバーの相手をしたのは『格差にこだわる者たち』が多かっただけなのだが、幸か不幸か彼はそんなことにも気がつかなかった。

血筋に圧される理不尽に耐えられなかったウェイバーは、魔術協会の旧態然とした態勢を糾弾すべく、ある一本の論文をしたためる。皮肉にも、それが彼の聖杯戦争への参加を決意させる原因となった。

血筋や年の功などで魔術師の質は決まらぬはずだとする持論を、徹底的に突き詰め、噛み砕いて理路整然と展開させた隙のない論文。協会の腐敗を打ち破り、自らの才能をすべからく知らしめることができる。と本人も納得するだけの力作。だったのに、そんな彼の渾身の論文は妄想と称され目の前で破かれた。

『君のこういう妄想癖は、魔導の探究には不向きだぞ。ウェイバーくん』

講師は高飛車に、声音には憐憫さえ含めながら、冷やかに見下して嘲笑した。

そんな非道を行ったのはだれあろう、ケイネス・エルメロイ・アーチボルトだったのだ。

ある意味で、それはケイネスの優しさだった。出来が悪くとも教え子は教え子。その他大勢の一人でしかないどうでも良い生徒でも道を過とうとしているなら正すのが教師の役目である。皆の笑い者となるであろう愚行を止めるべく、彼なりに優しく諭してやったつもりだったのだが、そんな気遣いは弟子に届いていなかった。

会心の出来と信じてやまぬ、ウェイバーの数年間に渡る集大成が、たった一回の流し読みしで下らぬと一蹴された屈辱は果たしていか

ほか。

魔術で紙束も修復できぬ少年は、講師の行動を卑劣と恨んだ。ウェイバーはケイネスが若き才能に嫉妬し、天才の芽を摘み取るために論文を裂き、二度と元には戻せぬ姿へと変えたのだと考え、臆病な神童への敵愾心を深めていったのである。

だからウェイバーは聖杯戦争で最大の敵を倒し、自分の目の前に這い蹲らせて、泣いて謝るくらいのはさせたかった。

なのに、その対象であったロード・エルメロイが死亡したのである。それも、魔術とは何ら関係のない方法を用いられて。

ウェイバーはベッドの上でゴロリと転がって、天井を仰いで再び溜息をつく。

ザマア見ると喜ぶ気持ちも、天罰が下ったのだとする神への感謝も、最大の障害がいなくなった悲しみも、彼の心には湧いてこない。

実感がないのだ。ブラウン管の向こう側から「ケイネスが死んだらしいよ」などと伝えられても、彼はどう反応していいものかわからない。心がまったくついてこない。

ただ、死ぬわけがないと心のどこかで思っていた相手の死を知って、これが本当に命を懸けた殺し合いなのだ、そんな初めから判りきっていたことを正しく再認識した。

彼はケイネスが自分以外に殺される姿を、……いや、もしかしたら自分がケイネスを殺す姿さえ、まともに想像することができていなかったのかもしれない。

シヨックなのは、そのことだった。死に対して過敏になっている自分が、正しく“死”というモノを想像できていなかった自分がシヨックだった。

ウェイバーはどんな不意打ちで“死”を目の当たりにしようとも、決して動揺するまいと決めていた。

今の冬木は戦場なのだから、死体が目についたとしても不思議ではないのだから、何が起こっても驚くことはない。そう思っていた。ケイネス死亡のニュースを知るまでは。

アサシンを倒したときのように、死体を直接見たわけでもない。血肉の匂いに嘔吐するほどの興奮もなく、恐怖心が刺激され動悸が激しくなるほどのことでもない。

それでも妙な喪失感と死への嫌悪は、アサシンをコロした時とは比べ物にならない。

わからなかった。実感も掴めないままに動揺している自分が理解できなかった。

嫌っていたケイネスの存在が自分に大きく影響していたことが意外で、それゆえに“死”とは何かを考え始めた。

彼はやっと“死”というものと向き合ったのである。

「あっちゃあ……やられちゃったわい」

呑気な声が鼓膜に響く。横を向けば、画面の前で大げさに悔しそうにするライダーが目に入ってきた。

人の気も知らないで、いい気なもんだと心の中で従者をなじる。

サーヴァントを召喚して以来、ウェイバーの心労が絶えぬ日はない。ライダーは奔放で、一応はウェイバーの言うことも聞きはするが、主を尊重する意志はまったくない。

たまに契約する英雄を間違えたのではないかと悩んだこともあった。

“……そっか、あんな奴でも英雄だったな”

そんな当たり前なことを今更のように思い出し、寝転がったままの態勢で、ライダーに聞いてみることにした。

「なあ、ライダー」

「んー？ なんじゃい坊主。やっと余と対戦モードをやる気になったか？」

のそりと少年に顔を向ける。どうやらゲーム征服は失敗に終わったらしく、黒くなった画面には「GAME OVER」の文字がデカデカと表示されていた。未経験なためか、あまり電子ゲームは得意ではないらしい。

苦笑を交えて応じる余裕もなかったウェイバーは、どこか場違いな従者の声を無視して自分の質問だけをぶつける。

「お前もさあ……人を、殺してきたんだよな？」

聞くまでもない、聞く方が馬鹿だと普段のウェイバーなら言うだろう問いは、今の彼にとって大切な質問であった。

イスカンドルの『征服王』としての伝承は、二十歳の若さで王位を継いでから始まる。

敵対者を排除してマケドニアを掌握した彼は、ドナウ川下流域の方面へと遠征し、さらに全ギリシアを制圧した後、ペルシア東征へと赴いた。

そうして常に先陣に立った男は、いくつもの国を支配下に置き、英雄と称えられる偉業を成した。

その豪気さ。その勇猛さ。彼は掛け値なしの英雄である。

が、その輝かしい栄光と繁栄の裏で、どれだけ多くの命を奪ったのであるうか。

彼が東方遠征を目指した理由は諸説上げられるが、真実がどうであれ、イスカンドルが征服という行為のために『自ら乱世を巻き起こした王』であることに変わりはないのだ。

そんな男が目の前にいる。大量の死を撒き散らす生き方を望み、それでも怯むことなく、多くの犠牲を出し続けながら突き進んだ王が。

正直、信じられない思いが強い。

目の前にいるのは稀代の英雄のハズなのに、彼は戦時でありながら現代知識をため込むだけで何の戦略も考えず、お気に入りシャツを着てテレビゲームに熱中している。

こんなヤツに従ってた連中は相当な変人ばかりだったのではないかとウェイバーは思った。

キョトンとしたライダーは、マスターの発言の意図がわからぬとばかりに眉を寄せる。

「藪から棒に何を言うかと思えばそんなことか。おぬし、いつも以上に覇気がないぞ」

昨夜、震えるマスターを心配することもなかった彼に気を使われるようではおしまいではないかと、冗談めかしたことを考えつつも、ウェイバーは黙って大男の返答を待った。

答えるまで主は黙したままなのだと察したライダーは、ボリボリと頭を掻きつつ嘆息する。

「確かに余は多くを者を殺したな。不殺ころせの戦なんぞできるわけがない。敵も味方も、余の号令の下で何人の英雄豪傑が命を賭して、その身を華と散らせたかなどわかりやせんわ」

「……それは、お前の欲望のために？」

まあ、なあ。と、少し恥ずかしそうにするライダー。かつてを思い出しているのか、懐かしむように、どこか惜しむようにして、彼は遠くを見る目でうなずいた。

ソレを聞いて、ウェイバーは益々難しい顔になった。仰向けのまま、どこか納得がいかない様子で天井を見つめる。それを見たイスカンドルは慥然とした顔で言う。

「坊主。豪傑どもは自らが信ずるモノを求め、己の命を惜しむことなく戦ってきたにすぎん。それを同情なんぞしようものなら、それは侮辱と言うものだぞ」

別にウェイバーはライダーにつき従ったという過去の変人たちを同情してやったわけではない。単に“命”というモノの価値観について、自分と巨漢の王とは全く違うことを知って、なんとなく不機嫌になっただけである。

争う必要も特になく、恵まれた現代に生きるウェイバーは、命と言うモノを考える時「己の命は大切にしなければならぬ」という一般的価値観がどうしても先立ってしまう。

だが彼ら英雄は違った。
彼らの価値観での“命”とは「信念のために燃やし尽くすモノ」であるのだ。

無為な時間を過ごして後生大事に命を抱え込むなど、英雄たちにはむしろ耐え難い拷問なのかもしれない。少なくとも、目の前の巨漢にとっては。

ウェイバーにしてみれば野蛮で愚かな考えも、ライダーにとって

すれば考えるまでもない常識だった。

霸道も半ばに逝ってしまった男。それでも彼は好き放題に生きて、信じる道に命を賭したのだ。ならば、その結果に無念はあっても悔恨は何もないのだろう。

押し黙ったままのマスターに、ライダーは首をかしげる。

「なんじゃ。いまさら怖気づきよったか？」

「ば、馬鹿言うな！」

ガバリと跳ね起きて、怒りと羞恥で真っ赤に染まった顔で巨漢を睨んだ。まるで凶星を指されたかのような取り乱しようだったが、ウェイバーの意識としては不敬に対して正当な怒りを覚えただけである。

「僕は怖がってなんかいない！ 今度そんなことを言ったら、次は令呪つかって黙らせるからな！」

激憤に身を任せたマスターに、サーヴァントは目を細める。

「殺されるかもしれぬ。そして、誰かを殺すことになってるか？」

返答は静かに、何一つ尊大さを失わないものだった。

ぐっとうまるウェイバー。それは、本人もケイネスの死を知るまで、考えもしなかった不安であった。

たしかに魔術師として“殺すこと”を教わってはいるが、未だ本当に手を汚したことはないために躊躇がある。迷いを征服王は見抜いていた。

「なにも余は茶化しているわけではないぞ。死を恐れるのは生き物の性よ。その性を否定してまで、人殺しなんぞに慣れるもんじゃない」

生前は率先して戦いを引き起こしておきながら、何を言い出すの

かと思い、しかし言葉は何も矛盾していないことを理解した。

きつと、この男は王という立場が誰よりもヒトを殺すと知っていたのだろう。

だからこそより多くを手にかけることも恐れず、王が背負うべき業を受け入れて自らの欲望を貫き続けた。それが悠然と立つ王の正体であったのだ。

ライダーは彼には珍しく真剣な表情でマスターを諭す。

「もし、おぬしが戦いに嫌気が差したと言うなら、やむをえん。契約を破棄するがいい。余もおぬしの決断を責めようとは思わん」

語りかけるライダーの視線は優しく、言葉は心に染み渡る。

「僕が……マスターがいなくなったら、サーヴァントは現世との接点がなくなる。オマエだつて困るんじゃないのか」

「まあ、痛いかな。その時はその時だ」

笑いながらもマスターを気遣う巨漢は、いつも通りのライダーだった。

それが、非常に腹が立った。

新たな依り代を探す必要が出てくるのは面倒だが、ウェイバーがいてもいなくても大差はない。そんな風に思われている気がした。

「……やるよ、やってやるってんだよ！！　ここまで来て、引き下がるわけがないだろッ！！」

たしかに最大の目的はいなくなってしまうた。だからと言って、今になって戦いをやめるといふ選択は彼の中に存在しない答えである。

このままでは引き下がれない。舐められたままでは終われない。敵には無視され、従者にすら馬鹿にされたのに、おめおめロンドンに逃げ帰るなど、ウェイバーのプライドが許さなかった。

「よしよし、良い気概だ。余のマスターはこうでなくてはな！」
ハツハツハと豪快に笑い、巨漢はウェイバーの肩をバシバシと叩く。体格差のありすぎる攻撃を受けるたびに酷い痛みが走り、小柄な少年は背が更に縮むのではないかと心配になった。

「な、なんでそんな嬉しそうなんだよオマエ」
痛みから逃れる本心を隠し、さも、うっとおしい手を払いのけるようにしながらウェイバーは問うた。

「余のマスターたるべき男は、余と共に戦場を馳せる勇者でなければならぬ。誇るがいいぞマスター。戦を知り、死を恐れ、なお戦いを選んだおぬしは、余と共に戦場を駆け抜けるに足る男ということよ」

何を言われたのかわからず、しばらくは笑い続ける男を不思議そうに見上げていたウェイバーだったが、言葉の意味を呑み込むにつれて顔面が紅潮していった。

ウェイバーを指して、それでこそ我がマスターに相応しいと、ライダーはそう言ったのだ。

「ば、ばばばつ、馬鹿言っつてんじゃないぞライダー！ 僕がマスターに相応しいなんて……そんな当たり前のこと、今更過ぎるんだよ！！」

「んん？ そうさなあ。おぬしはもう少し色々な心得違いが無くなれば文句はないのだがなあ」

「うるさいっ！ もう寝るっ！！」

叫び、すごい勢いでベッドに入り、毛布を引つ被った。もう話しかけるなという意志表示以外のなにものでもなかった。

横で「おい。寝るも何も起きたばかりではないか」などと空気を読まないライダーの声が聞こえてくるも、ウェイバーは「うるさいうるさい！ 睡眠の邪魔だ！」と、子供のように叫ぶだけだった。

ライダーにしてみれば特別な意味も籠めていない、無為な言葉でしかなかっただろう。だからこそ言葉は真実だと実感できた。裏など何も無い、感じたままを口にしたのだと伝わってきた。

肩を叩いたライダーの掌の大きさ、いかつさは、先ほどまで不愉快な痛みでしかなかったのに、今となっては心地よい痛みであったかのようにも思えてくる。

自分の価値が、認められた。思えばそれは、物心ついて以来、初めてのことだった。

称賛など屑ほどの価値もないと思ってきた。他人の称賛に気を良くすることこそ愚かだと、それまで誰に顧みられることのなかった少年はそう信じて疑わなかった。

自らの才能を自負する彼が、周りに求める『正当な評価』とは、すなわち賛美を求めているのと変わらなかったのだが、ウェイバーにそんな自覚はまったくなかったようだ。

だから今、ウェイバーは胸の内のこそばゆい歓喜をどう処しているか解らない。踊る心は抑え難いが、さりとして素直に喜ぶのはプライドが邪魔をする。自分に対してなんの敬意も礼節も意中もない従者に感謝をするのも憚れる。

このままだと自分の価値を認めてくれた最初の一人である男に懐いてしまいそうだった。戦いを続けると決めればかりなのに、サーヴアントに弱みは見せられない。結果、ウェイバーは破顔を誤魔化すために、ベッドに逃げ込んだのであった。

複雑な思いに囚われ、少年はニヤけそうになる顔を毛布の下に引っ込めた。

どのように従者に話しかければよいのか解らないウェイバーは、日が高く昇ったころ、散策に出たがるライダーに引きずり出されるまで、ベッドの中に引きこもっていた。

Zeroでは初戦後、見当違いと理解しているハズの評価に「認めてもらえた」とか喜ぶウェイバー君ですが、本作の彼は面と向かって褒められています。

こんな展開になったのも、前回、褒めるライダーと喜ぶウェイバー書くのを作者がすっかり忘れてたから……ゲフンゲフン。

ホテル破壊を見たZero言峰は「手段を選ばないやり方は魔術師とは思えない」と言ってますが、ホテル破壊を知り、Zeroで外道呼びわりのしたはずの五次セイバーは「目的以外に興味がなく、そのためにどんな手段もとる典型的魔術師」と切嗣を評してるんですよね。

どっちなよ。

本作で顔を見せない時計塔の魔術師の方々は、実験にマンション一つ使う僧侶とか、魔術に頼るより魔力の節約に雑務を選ぶ元王女とか、そんな型月系魔術師像に近くしてるつもりです。

最初は、自分の夢だと思ったのだ。

大量の死。怨念が染み込んだ空気。亡骸に覆われ、鮮血に染まった朱の丘。かつて自分が殺してきた者たちの怨嗟の声。まだ精神が擦り切れていなかった頃に見ていたモノと酷似していたから、自分の夢だと思い込んだ。

暗殺者として何人も魔術師を狩った日々と、傭兵として数多くの戦場を巡ってきた日々。過程が違っても同列の二つは、これまでもマーブル状に混ざり合っては男に過去を振り返らせてきた痛みだ。

目に入るモノは、おびただしいほどの怨嗟。

戦死。慟哭。嘆き。狂乱。

中には勝利の余韻に感動の雄叫びを上げ、生き延びた喜びに友と抱き合う者も見えたが、戦場での個人の正は、全体の負に打ち消される。

罪悪感に苛まれ、幾度となく見てきた悪夢。

自分が行ってきた悪行。自分が行ってきた正義。延々と見せつけられ、ついには“死”に何も感じるものがなくなるほどに摩耗した。

淡い希望など抱くこともできず、緩い理想など土に還る、いつも通りの世界の姿。悪夢と呼ぶには、あまりにも惨たらしい現実の冷たさは、彼がこれまでに体験してきた愁嘆であった。

それを、今更どうして見せられなければならぬのかと疑問に思いながら、男は「夢ならば仕方ない」と思い、ただ黙って目覚めが訪れるのを待つことにした。

数多の戦場を駆け、数多の敵を屠る、普段通りの自分の姿を見て

そこで、違和感に気がついた。

ちよつと待つてほしい。自分はこんなにも小柄で、銀の鎧を身につけていたのだろうか。

何度か場面が変わった段階で気がついた。

本当なら、周囲が古風な甲冑の騎士だった時点で思い至るべきだったのだが、夢という理不尽な世界の中では、すぐに間違いを悟ることはできなかつたということか。

自分の夢にしては、あまりにも敵の数が多い。

自分の夢にしては、あまりにも護る者が多い。

客観的に見る自分の姿は、明らかに別人のモノであった。

この記憶は自分のモノではない。剣の墓場と成り果てたかつての戦場の姿を見て、この夢は自分の経験ではないと、彼は、衛宮切嗣は思い直した。

薄墨に染められた空は黄昏にも似て、手を伸ばせば掴めそうな雲が広がっている。

黄金だった草原は、見る影もなく無残な赤色。鎧や大剣といった、鋼の鈍い輝きが至るところに転がっていた。

戦場の爪痕だった。ヒトがヒトを殺してきた、何よりの証。彼が最も忌み嫌う痛みのカタチ。何十人単位では済まない死者の群れが、大地をコロシアイに穢していた。

そんな中、剣を手にして佇立しているのは一人の少女。
剣の英霊として、切嗣と契約を結んだセイバーだった。この夢の
主役は、どうやら彼女であるらしい。

つまりは、コレは少女の記憶なのだ。霊的に繋がったマスターと
サーヴァントの絆が強くなった場合、時に記憶を共有することを知
る切嗣は、素直に従者の過去を垣間見ていることを受け入れた。

本来なら夢など見ないはずの、自己暗示による深い睡眠の中だ
ら、記憶を夢として混線するほど繋がりが強くなったという事実に
複雑な想いを抱きつつ、切嗣は逃れようのない過去の映像を見守り
続けた。

銀色に染まった空の下、広がっているのは、もはや当たり前とな
った戦場跡の風景。

それは、少女が常勝の王として過ごしてきた十年の経験と、駆け
抜けてきた十二の大戦。後に伝説にまで讃えられる、アーサー王の
栄光と破滅の物語だった。

滅亡に瀕した国に立った、新たな若き王。その無敵の戦いぶり
は、まさに軍神の業だった。成人したばかりで幼さを残す容貌の騎
士は、常に先陣に立ち、行く手を妨げる全ての敵を駆逐していった。

アルトリア
戦いの神。

竜の化身とまで謳われたその身に敗北などありはしない。少女は
全ての戦いを勝利だけで終わらせた。それは、ただ一心に、王とし
て駆け抜けた日々であった。

戦いを終えた後、彼女は自分が打ち滅ぼした死者の群れを一瞥し、

何の感情さえ窺わせぬ顔で自陣へと足を運ぶ。

国へと凱旋する彼女は民の祝福の声に迎えられ、体を癒す暇さえ取らず、次の戦いに備えるのだ。

その光景は日常だった。失われていた騎馬形式を再構成した彼女の軍は、文字通り自由に戦場を駆け抜け、敵の歩兵を破り、幾つもの城壁を突破した。敗北を知らぬ王の軍は、勇敢で、壮麗で、どこまでも雄々しかった。

栄冠があつた。喝采があつた。夜の如く暗い日々を送つた国を異民族の脅威から守り、安寧へと導く王を、人々は賛美し崇拜した。王は女であることを隠したまま騎士たちを統べ、多くの領土を治めていった。

その影で、涙を飲んで消えていった者たちは、いったいどれだけ存在したのか。

岩の剣を抜いた瞬間、騎士として育つてきたアルトリアの人生は一変した。

否、本来あるべき姿に戻つたと言つべきか。

より正確に記するなら、少女としての人生を“終わらされた”と表現するのが正しかろう。

王となるべく生まれ、誰よりも強くあるべく育つた少女。幼いころには、王とは誰よりも多くの人間を殺すのだと毎夜怯えて、その都度、覚悟を固めた『少女』は、剣を抜き放つた瞬間に消え去つた。

その時から同じ器に『王』だけが残され、以降の彼女は王としてのみ存在することを許された。

逆に言うなら、騎士王として以外は、アルトリアが存在することは許されなかったのだ。

……時間が流れていく。

十年の歲月も、夢の中では走馬灯のように一瞬の場面変化でしかない。

その中で共通していたモノはただ一つ。

玉座にいる時も、何気ない通路でも、戦場においてさえも、彼女に話しかける者はいなかった。

ああ、だから自分が話しかけずとも不満を漏らさなかったのか、と。ソレを見た切嗣は、やや場違いな感想を抱いた。

見目麗しく、しかしどう見ても子供でしかない風貌の王に、多くの騎士は剣を捧げることを良しとはしなかった。

成人間もない年端もいかぬ若造など、上に立つ存在と認め難いのは、仕方のないことだろう。

だが、自分に抜けなかった王の剣を抜いた以上、どんなに不満であっても表面上は従うしかない。若き王を卑下した騎士たちは、アーサーを頂点に仰ぐことを一時の屈辱として受け入れた。

騎士たちは若者が失態を犯すと思っていた。

いかに聖剣を抜こうと所詮は子供。魔術師マージンの補佐があるうと、すぐに馬脚を現すであろう。そうなってから選定の剣を取り上げ、もう一度王を選定すればいい。それが多くの騎士たちの思惑であった。

しかし結果は違う。

アルトリアは非の打ちどころのない王であった。威風堂々たる戦いは騎士の頂点に相応しきものであった。王は正しく完璧であり続

け、常に最善の結果を出し続けた。

争い合う領主たちを纏め上げ、誰もが舌を巻く勢いで政務に勤しみ、侵攻してくる異民族を即座に撃退した。

そうなつては誰もが心より従うしかない。子供の姿をした騎士王に反感を抱いた臣下たちも、結果を出せる王ならばと不満を呑み込んで忠誠を誓った。

彼女が目指したものは理想の王で、騎士たちが支持するものは理想の王。そこに体格や年齢が付け入る隙は無い。ただ王として機能さえすれば、誰も少女のような容姿など気にかげず、一顧だにしなかった。

戦場に立たずとも、少女の日々は戦いだった。騎士たちに王と認めさせるためには結果が求められ、王としての責務を果たすには、やはり、結果を出すしかなかったのだ。

そうして重ねる日々の中に、人間としてのアルトリアなどいなかった。

アルトリアはよくやった。否、よくやりすぎた。

素早く、効率よく敵を殲^{たお}し、犠牲となる民は最小に抑える。その戦いは、あまりに正しく、あまりに厳格だった。

勝利の代償は小さくない。戦火が飛び火して、敵の手によって何もかも奪いつくされた村もあった。一つの戦いを終える頃には多くの兵士が命を失っていた。

数多くの魂と引き換えに勝利という成果を得るのは、戦場では当たり前前の話であり、等価交換が原則となる現実でソレは避け得ない。

戦いとなれば兵士たちは小さな村のことなど考えない。弱者を守

ると心に誓った騎士たちも、目の前の敵からは目を逸らすことができず、争いに巻き込まれた命には目もくれない。それらは蹂躪されて当然のものであり、彼らの守る対象には入っていなかったのだ。

どのような戦であれ、戦いであるのなら犠牲は出る。ならば前もって一の犠牲を払ってでも軍備を整え、異民族に領土が荒らされる前に無駄なく敵を討ち、十の村を守るべきだ。

犠牲が避けえぬと言つのなら、予め一人を切り捨てる覚悟でもって百人を護る。

それが王が出した結論であり、事実、乱世の当時においては最善の政策だった。アーサー王が信じた正義は、人を捨てた少女の闇でもあった。

戦場を知る者なら、そこで行われる殺し合いが如何に醜いか知っている。戦争という地獄の悲惨さは、どこかの内乱でも行けば現代でもすぐに見ることが出来る。個人による清々しい決闘のような清廉さなどを、国の命運がかかった戦場に求める者がこの世に存在するわけではない。

英雄譚とは、歴史の語り部となった詩人たちが荘嚴な物語としての演出を加えて歌い上げ、それを後世の歴史家たちが都合良く解釈したものだ。本当に英雄たちは華麗なる戦いを繰り広げたのか、歴史書を読むだけの我々には知る由もない。気高き決闘に赴いたのだとしても、そこにどんな思惑があったのかを知るのは、かつてを生きた本人だけ。

騎士の頂点に立つ者として、騎士王も望まれたのは堂々たる戦いで勝利。だから、誰よりも強くあろうと日々の鍛練を欠かさなかった。守るべき村々を日上がらせてでも、予め軍備を整えてから戦

に臨み、確實なる勝利を掴む道を選んだ。それが騎士王のやり方だった。

そんな王の結論は騎士たちには不満だったのだろう。

戦いの前から領土を手放す必要などない。我らは勝利を掴むのだから、先んじて犠牲を出すのは王の杞憂である。そう言って、彼らは敵に村が滅ぼされるのは当然だと主張し、自らの手で干上がらせるのは大罪だと王を責める。

重き罪とはアルトリアとて承知だった。だが国は王の玩具ではなく、理想論で扱っていいものではない。国を預かる者として私情は挟めない。

少女は私情を殺して決断を下し、騎士たちは感情を圧してつき従う。そうして臣下との間に軋轢を生みながらも、連勝を続けていく内に国は安定していった。

誰よりも巧く『王』をこなしていく少女に迷いはなかった。やむを得ない、などという言葉で失われた命をごまかすことはできない。仕方がなかったと、そんな言葉で死者の親族は納得しない。アルトリアは一切の言い訳をしなかった。これが自分の選択だと、すべての怨嗟と自らの罪を受け入れた。

少女は王という立場が誰よりもヒトを殺すと知っていた。

だからこそ犠牲をより少なく抑え、王が背負うべき業を受け入れて自らの責務を果たし続けた。それが燦然と立つ王の正体であったのだ。

国の理想を目指すということ、理想論を吐くことは別のこと。

王は理想に生きたわけではない。綺麗事がまかり通る国を求めたわけでもない。ただ、皆が望む理想郷に近づくことを目指して、誰よ

りも現実を見据えて生きたのだ。

せめて皆が恐怖におびえぬ統治を。敵の脅威に民が脅かされることがなく、上に立つ者の欲望に皆が振りまわされることのない、平和な国を築こうとしたのである。

そのために自分が恐れられ、忌避されようと構わなかったのだ。

人間らしい夢を掲げながら、想いを一切外に吐き出すことなく、人間なら心が耐えきれない選択を続けた王。

聖者の如き心根だったとしても傍目には正体不明の怪物にしか見えないただろう。

侵しがたい聖女などそこにはいない。

王という装置だけが、そこにあつたのだ。

アルトリアの言葉・行動は、常に“役割”としてのモノだった。戦いが彼女の役目であるなら戦神となり、最善の統治が求められるなら為政者となる。それ以外の用途は必要ない。それ以外の自分は在ってはならない。そう、己を律してきたのだ。

今も昔も彼女の決意は変わらない。使い魔として、戦うための剣として召喚されたのなら、それ以外の意味など己にあつてはならぬという気概があつた。

……そんな彼女の想いは、どこか、敵を殺すために機械と成り果てた自分と似ていて、切嗣は無意識に舌を打った。

草原に佇む王。眼下に見えるは敵の軍勢。戦いが終われば、目に入るモノは一面の死色。ソレを見守る少女の視線には何も宿っていなかった。独り残った心には、なんの感情も沸き立たない。

そも人としての感情を捨てた者に、自らを駆りたてるほどの感傷

があるのだろうか。

死を嘆き、犠牲に疲れ、己を嫌悪しようとも、始まりの想いを胸に仕舞い込んで少女は独り戦い続けた。

ゆえに、どんな苦境の中であろうと少女が変わることはない。たったひとつの誓いを胸に戦い続けたのだ。どのような重み抱えようと、彼女の戦いへの姿勢が変化することは有り得ない。

その横顔が、瓦礫の山となるより以前に冬木ハイアットを眺めていた時とダブる。

わずか数日の間に切嗣が見てきたモノと全く同じ。使い魔として聖杯戦争に在っても変わらぬ姿。

それを眺めて、初めて切嗣は気がついた。

救国の想いとは、すなわち人を想うことと同義。

誰も死んでほしくない。本当なら、一人も悲しんで欲しくない

。王となるべく剣を抜いたのは、王位の栄光に目が眩んだのではなく、胸に祈りを抱いたからだ。

彼女が魂食いを否定した時、それは霊格を貶める行為であるがゆえの嫌悪と思っていた。あるいは英雄の誇りを尊ぶがための怒りだと思っていた。

たしかにそれも理由の一端ではあったのだろうが、本心は犠牲を避けたいからだったのだと、マスターは従者の心を理解した。

それは現世で戦いに赴く覚悟にも影響していた想い。

戦闘に時間をかけ、敵の強化を許してしまえば、いずれは彼女が有する『最強の対城宝具』を使う時が来る。必要に迫られた場面では迷いなど許されず、少女は勝利のために躊躇なく宝具を使用するだろう。

そうならば“やむを得ぬ犠牲”として、多大な被害が出ることは避け得ない。無関係な人間を巻き込みたくなかったのではない。自身を英雄たらしめる聖剣を抜くことになる前に、少女は戦闘を最小限に抑え、早期に戦いを終わらせたかったのだ。

しよせんは魔力を高め、ステータスを底上げする程度の意味しかない魂食いなど、基本的なステータスが最高値の彼女にとっては必要な犠牲でしかないが、時を重ねてしまえば、その必要性が出てくるかもしれない。少女は、それが嫌だった。

魔力の無駄遣いをしないよう、宝具を使うことがなくてもいいように、敵は倒せる時に全て倒す。ホテル攻略に異議を唱えなかったのもそのためだ。余計な被害者を出さぬためなら、いかに主が冷徹なる判断を下そうとも止めるつもりはなかったのだ。

常に先陣に立ったのは、背に護るべきモノがあるからなのか。

どれほどの命を奪ったのかは少女にもわからない。内政に励む少女には、戦いに傷ついた身体を癒す暇はなかった。それでも彼女は疲労も見せず、不満も吐き出さず、愚痴の一つさえ窺わせることなく王として機能し続けた。

細い両足を支えていたのは勝つ理由ではなく負けられぬ理由。ただ一度の敗北も許されない少女には、泣き言に逃げる余裕などありはしない。機械という例えすら存在しない時代で、少女は機械に徹したのだ。

皮肉なことに、そんな態度が不信を高める助けとなった。

誰が好き好んで自らが護るべき者を殺すと言うのか。己を顧みぬ政治が誰にできると言うのか。そんな手段を行うことができる王に

不安を感じる者が出てくるまで、時間はいらなかった。

『まるで人間らしさを見せようとはしない王は、人間の心を持たないのではないか。人間でないモノを、本当に人々の上に立つ者と認めてよいものなのか』

より、王に近い立場の臣であればあるほど、素顔見せぬ王に不安を抱いていた。

おかしな話だ。

誰も人としてのアルトリアなど求めていなかったと言っのに、人としての感情がなければ、反感を抱いたと言っのだから。

人々が求めたのは乱世を終わらせる強き王。より多くの民を護ることができる理想の王であった。犠牲を最少に、成果は最大に。現実という冷たい世界でソレを体現しようと思うなら、彼女以上の方法は存在しなかった筈だ。

それでも人は理屈だけで生きられるモノではなく、正論だけを語るモノでもない。アーサーの政策が正しいと頭ではわかっていても、その慈悲も容赦もない決断に叛意が沸き立つのも無理はなかった。

神に自らの幸福を願い、叶わねば非情さを呪う人々がいても、神自身を労い、案ずる人々がいないのに似ている。

万能であることが当たり前となった存在は、つまり孤独に墮ちるしかなく、少女もその例に漏れない。国に安寧と勝利を齎すことが日常となった時、王の幸福を願う者はいなくなった。

国の安定が、もう、すぐ目の前に迫った時点で、少女の役割は「王であること」から「疎まれること」に変じていたのかもしれない。乱世に荒んだ人々の心には、どうあっても憎むべき対象が、“生

贄”が必要だ。目立った敵もいなくなれば、上に立つ者ほど負の感情の捌け口に相応しい者はいなかった。

ほとんどの者は、王もまた人間であるという事実を忘れてしまっていたのだ。もしかすれば、王の安らぎを祈る気得な騎士や民もいたのかもしれないが、彼女の記憶の中にはついぞ現れなかった。

当の本人はそれを孤独と悲しんだのか、孤高と信じたのか、ただ少女が生前なした記録きおくを傍で見るだけの男には判別できないこと。

多くの人間を殺す役目を自ら進んで負ったのは、己の力を過信したのではなく、汚れ役は自分一人がやれば良いと思っただから。己を殺す決意をした少女は、誰よりも優しく、また、誰よりも冷酷だった。

相反する二つの意志、矛盾を抱えたまま突き進んだ少女の破綻は目に見えていた。国のあらゆる問題を解決したところで、先に待つモノは同じだった。

だが、アルトリアはそんなことは些末事だと、気にも留めようとしなかった。

……それは、もうとっくに覚悟を決めていたからなのだろう。選定の剣を手にとると決意した時から、彼女は感情など捨てたのだ。

もはや遠い過去となった昔の光景。次の王を選ぶため、国中の領主と騎士が集まった予言の日。王権を与えるという岩の剣を抜くことができた者は誰もおらず、皆は馬上戦による選定を始めてしまう。

まだ騎士見習いだった少女は馬上戦に参加する資格がなく、闘技場の外から歓声を聞くしかなかった。

それは、外から祭りを見る感覚に似ていた。

闘技場から聞こえてくる勇ましい騎兵の喧騒は遠く、剣が刺さった岩の周囲は人気もない。

“この剣を岩より引き抜きし者は、ブリテンの王たるべき者である”

その黄金の銘が刻まれた剣を前に、少女は何を思ったのか。気がつけば、背後には国で最も恐れられている魔術師がいた。

『いやいや。その剣を手取る前に、きちんと考えた方がいい』

悪いことは言わないからやめておけ、と魔術師は言い、それを手にしたが最後、お前は人間ではなくなるのだ、とも告げた。

そして最後に、皆に恨まれ、惨たらしい死を迎えることを少女に教えたのだ。

魔術師は少女に未来を見せた。王の剣を手を取った時、その身にどのような破滅の未来が訪れるのか。それでもいいのかと訊ねる魔術師に少女は力強く頷いて、ためらうことなく剣に手を伸ばす。

『多くの人が笑っていました。それはきつと、間違いではないと思います』

答えを聞いた魔術師は困ったように背を向けて、

『奇跡には代償が必要だ。君は、その一番大切なものを引き替えるするだろう』

伏せた顔をローブに隠し、そんな予言を少女に残した。

剣が抜き放たれ一人の王が誕生するその瞬間を、魔術師は見ようとはしなかった。

……そう。

少女はただ、皆を守りたかった。けれど人の心を持っていては王として国を守ることなど出来ない。ソレを成し遂げるためには“人々を守りたい”という感情を捨てなければならなかった。

それを承知で剣を抜いた。己と引き替えにすることで、完璧なる王となって守ることを望んだ。だから離れられ、恐れられ、裏切られ、ひたすら自らの死に進もうと、彼女の心は変わらなかった。

尊き誓いを、誰が知ろう。

戦うと決めた。

何もかも失って、皆に嫌われたとしても。

それでも、戦うと決めたのだ。

その先に、避け得ない、孤独な破滅が待っていたとしても。

辿り着いたのは、血まみれになった剣の丘だった。

アーサー王最後の戦いとして後世に語られるカムランの戦い。それが彼女の結末である。

自分の意志を殺して国の意志となり、信頼できる騎士たちから疎まれるようになった日々の果て、戦いに勝利するたび、望まぬ戦いを望まれたアルトリアを待っていたものは、肉親による謀反だった。

王が遠征へと出立した後、一人の騎士の裏切りによって国は王に刃を向けた。

篡奪された王座のため国は二つに分かれて殺し合うことになり、王は自らが守ってきた領土へ侵攻し、自らが従えてきた騎士のごとくを斬り伏せた。かろうじて最後まで付き従った騎士たちも、皆、この戦いで息絶えた。

辛くなかった筈はない。思えば身を裂くような十年の中で、辛い戦いなどありはしなかった。それは、その最後に相応しい、もっとも大きな傷跡に他ならない。

平和な国を作り上げようとして、そのために、あらゆる手を尽くしてきて 結局、理解を求めなかった王は、誰にも理解されることなく死を迎える。それだけの話だった。

周囲には、今まで通り誰もいない。これまでと何も変わらない。騎士道も何もかも華と散り、胸にあるのは、王として生き、誓いを護り抜いた誇りだけ。

彼女は自身の終焉を知っていた。死に瀕した体を剣に預ける己の終幕を知っていた。

まさしくこの光景である。自分が斬った屍に周囲を囲まれて、たった一人、孤独な死を迎える姿。

それでも得るモノがあると信じて、ここまでやってきたのだ。自らの破滅を知っていながら、誓いを一点も穢すことなく走り続けたのだ。

後悔などしていない。王として生涯を全うし、王として果てる。その人生と約束された己の破滅に不服はなかった。

未練があるとしたら、それは誓いを守りながらもついに護れなかった、荒れ果てた国の姿への無念だけだった。

遠く離れた城は見え、あるものは戦場跡と深い森。これまで悠然と駆け抜けてきた丘が、もう二度と越えられぬ壁となって初めて、彼女は自分の意志で聖剣から指を離れた。

視界が霞み、風景が崩れていく。

彼女の記憶に先など存在していないのなら、ここで夢が終わるのは当然だ。従者に護られ、体を休めた切嗣は、朝の日差しに目を覚ますのだろう。

……それは、冷たい過去げんじつであり、もう変えようのない一つの結末。

頑張つて頑張つて、恨まれて、裏切られて、そんな痛みも受け入れて。

国よりも人を愛していた事実を知られることなく、皆のために無慈悲な王で在り続けた、一人の少女の、報われることない物語。

14 五日目・夜 - 過去 - (後書き)

無関心に終わるのもアレなんで、本作切嗣には士郎と同じような夢を見させました。

ほぼ死の直後の意識を持つセイバーの想いが強く、士郎より早く深いところを夢に見た感じですよ。

セイバー視点では主と解り合うことになかった感じにオとします
が、切嗣の視点だと実は……みたいにした。

けどアイリスフィールを使ってないことから分かる通り、この
時点の切嗣はセイバー信用してませんよ。

詳しいことは後々。

「まずは急な呼び出しにも関わらず、今日、この教会へと来ていただいた事に感謝の意を述べさせていたただこう」

冬木市新都の郊外、小高い丘の上に立つ冬木教会。老人の労いが妖気漂う室内に木霊する。神を崇拜するための施設だけあって、惜しみなく荘厳な造りをした信徒席には、そんな厳かな雰囲気とは程遠い、魔を想わせる空気が充満していた。

外来居留者の多い冬木市では、教会の利用者も日本にしては多い方で、信仰の本場である西欧なみに本格的で壮麗な備えになっていた。この教会は聖杯戦争を監視する目的で建設された聖堂教会の拠点であり、当然、ここに赴任する神父はすべからず監督役の任を負っている。

現担当者の名は言峰璃正。何も知らぬ一般信者を相手に日々の祭祀を司りながらも、マスターとサーヴァントの死闘を監視するという本来の役割を果たし続ける、齢八十にも手が届く老神父である。

年齢の割には精気に溢れた老人は、信徒席を見渡して軽い会釈をする。

彼は聖杯戦争での重大な決定事項を伝えるため、魔術師にのみ視認可能な、狼煙にも似た信号を使ってマスターたちを教会に招集した。集合の号令より役一時間の時を空け、今この場には璃正の想定とやや異なる状況が出来上がっていた。

暗がりの中から璃正を見つめる使い魔は二匹。これらは自らの身を晒すつもりも、教会への表敬も意中になく、話だけは聞いておこうという魂胆の者たちだ。敗者として死亡が確認されている外来マスター・ケイネスと、表向きは敗者となった綺礼の使いは、もちろん存在してはいない。

それら使い魔とは別に人の形をした影が三つ、信徒席に各々の姿勢で待機していた。残るマスターは三人でも、その内の一人は信号の意味合いすら理解していないと思われたので、使い魔二匹が他人のマスターのものだとすると、影は残る二つの陣営のものだ。

人影の全てが別の陣営に属するモノならば、少々数が合わないことになってしまいが、一人だけ少女の姿をした人物はコートを着た男の側から離れようとはしない。ならば二人組は同一陣営だろう。

「礼に適った挨拶など、彼らはする気がないようだ。神父どの、早めに用件を伝えた方がいい」

皮肉めかした良く通る声が神父を促す。信徒席に座って聖書を開いている男から発せられたものだ。

璃正の友であり、影の同盟相手でもある遠坂時臣であった。彼は代理としての使い魔を放つことはせず、誰よりも早く自らの足で教会にやってきた男である。

……と、言うのは正確ではないだろう。彼は収集の信号が上げられる前から教会にいたのだから。

時臣が璃正を知り合いのように扱うことは、何も不思議なことではない。聖杯戦争での監督者と参加者という間柄ではあるものの、それ以前は公的な立場から何度か親交がある。調べればそうと解ることなので、友愛の情さえ見せなければ面識があるようにしても不

自然ではなかった。

問題なのは彼が無防備に教会に在るということだ。もちろん監督役が逗留する教会はマスターたちにとって不可侵ではある。だが、その領域から少しでも外に出れば、マスターたちに一斉に狙われる可能性すらあるので、体一つで教会に赴くのは危険である。

なのに彼は堂々姿を晒し、従者も連れてはいなかった。たしかに今は真昼間。魔術師たちが人目につくことを恐れるならば、戦いの心配は杞憂に終わるかもしれない。とは言え、自らの存在や攻撃を隠蔽できるマスターないしサーヴァントがいれば、いかに時臣とてサーヴァントなしで状況を切り抜けるのは難しいだろう。

そのくらい彼も承知しているはずだが、足を組んで座る時臣の気配は焦るでもなく優美なものだ。旧知の男がマスター招集に出席するとは聞いていなかった璃正も、慌てふためくようなことはしなかった。

形式に則った上で勝ち残ろうとする遠坂の家系の性格ならば、この場に出向くことは至極当たり前だからだ。それと、これから打とうとしている一手なら、時臣の身を守ることもできると知っているからこそその態度だった。

何故か出席した二匹の使い魔の内、複眼の昆虫を模した一匹が時臣を睨みつけているように見受けられる。殺気など放つことのない魔術の塊でありながら、使役する者の殺意だとも言うのか、その使い魔から男に対して憎悪のオーラが立ち上っているように見えなくもない。時臣に深い因縁を抱くマスターが一人いるということなのか。

「そうですね。では、単刀直入に話に入らせていただきます」

神父は軽く咳払いし、神父は二匹の使い魔と三つの人影に向って語り始めた。

「諸君らの悲願へと至る道であるところの聖杯戦争が、いま重大な危機に見舞われている。本来ならば聖杯は、それを求める者に対してのみ、力を分け与えてサーヴァントとの契約を可能ならしめる。ところがここに裏切り者が現れた。彼らは聖杯戦争の大義を忘れ、課し与えられた力を賤薄な欲望のため濫用しはじめている」

神父はいつもの説法の習慣で、聴衆の反応を見るべく語りに間を開けた。信徒席に座る人影は何も言わず、闇に潜む魔性たちも重い沈黙のままに身を潜めている。満足げに頷いた老神父は先を続けることにした。

「キャスターのマスター。この男は昨今の冬木市を騒がせている連続殺人および誘拐事件の下手人であることが判明した。彼は犯行に及んでサーヴァントを使役し、しかもその痕跡を平然と放置している。この重大な違反行為がどのような結果をもたらすか　諸君らには説明するまでもあるまい」

人影に動揺の様子は現れなかった。予め内容を知っていた時臣はともかく、残る人影が何の反応も示さないのは、彼らの胆力によるものだろうか。魔術師ならば、この裏切りに対して心を揺らさずにはいられないと思っていたのだが、ここにいる人影は一筋縄ではないかない相手であるようだ。

「彼とそのサーヴァントは諸君ら一人一人の敵であるばかりでなく、聖杯の招来そのものを脅かす危険因子である。よって私は、非常時における監督権限をここに発動し、聖杯戦争の暫定的ルール変更を設定する」

璃正はカソックの右袖をまくりあげ、右腕の肌を露わにした。老いた身でありながら、壮年の頃の鍛錬が伺える筋張った腕は、びっしりと刺青のような文様が覆っていた。

それは、聖杯戦争に参加した者たちにとって、身近に見知ったモノであった。

「これは、過去の聖杯戦争を通じて回収され、今回の監督役たる私に託されたものだ。決着を待たずしてサーヴァントを喪失し、脱落したマスターたちの遺産　彼らが使い残した令呪である」

監督役にのみ与えられる権限の一つとして、令呪の剥奪と委譲、そして保管の権利が璃正にはある。老神父の肘から手首にかけて刻まれた令呪の数々こそ、彼の監督役としての権威を裏打ちする証拠だった。

「私はこれら予備令呪のひとつひとつを、私個人の判断で任意の相手に与えることができる。諸君らにとって、これらの刻印は貴重きわまりない価値を持つハズだ」

令呪はサーヴァントに一つの命令を実行させる『絶対命令権』である。それは従者の叛意を抑えつけることにも、逆に潜在能力を一時的に引き出すことにも利用できる。

主従の魔力が足りてさえいれば、以前ケイネスがやって見せたように、遠く離れた地にいるサーヴァントを強制命令で呼び出すことも可能な代物だ。

これをどう巧く使用するのが聖杯戦争での鍵となる。たった一つの令呪があるかないかというだけで、その後の戦略を大きく左右するケースも多い。

璃正の言う通り、サーヴァントを統べるマスターたちからすれば、喉から手が出るほどに欲しいモノだった。

「すべてのマスターは直ちに戦闘行為を中断し、各々、キャスター殲滅に尽力せよ。そして、見事キャスターとそのマスターを討ち取った者には、特別措置として追加の令呪を寄贈する」

これまで無言であった人影の一つから、息を飲む気配が伝わってきた。おそらくは懸賞金代わりに令呪を用意した璃正の大胆さに感心したのではなく、既にそこまでしなければならぬ状況となっていることに感づいたのだろう。

「もし単独で成し遂げたのであれば達成者の一つ。また、他者と共闘しての成果であれば、事に当たった全員に一つずつ。我が腕の令呪が贈られる。そしてキャスターの消滅が確認された時点で、改めて従来通りの聖杯戦争を再開するものとする」

つまりは参加者たちを利用してキャスターを狩ろうという謀である。はかばか

今回のような場合、逸脱者がいたからと言って、そのマスターの参加資格をただ奪えばよいわけではない。それなりの対応策が必要だった。

聖杯戦争の期間のみ現界が許されるサーヴァントたちは、聖杯を得ることで現世への復活を真に果たすことができるわけだが、聖杯なしでもサーヴァントを存命させる方法はいくつか存在しており、そうやってキャスターが生き長らえた場合、被害が冬木市だけで収まらなくなる可能性が高い。

キャスターは既に三十人以上の子供たちを誘拐していた。昨夜は

急に誘拐活動が活発になり、一夜にして十五人もの児童を攫い、うち三件では目を覚ました家人を虐殺するという非道を行っていた。

隠匿に気を使う配慮を見せるどころか、なおも派手さを増す蛮行に、手を焼かされているのである。

事は既に聖杯戦争に収まりきらない。このままでは魔術協会も黙ってはいないだろう。こと事態の隠滅に関する限り、協会は断固として徹底的だ。昨今の協会だとそこまでの事例はないが、彼らは状況が最悪となれば冬木市そのものを地図から抹消することもやりかねないのである。

そのため早期の対策が監督者には求められた。

対魔力有するサーヴァントたちと比較して、キャスターは最弱と呼ばれるサーヴァントだが、しかしキャスターとて英霊である。キャスターに狙いを絞る今回のルール改定は、たかだか現代の魔術師や異端狩りを数人用意した程度では、魔術師の英霊に太刀打ちできる道理がないための対応だった。

魔術師ならば聖杯入手の機会が奪われるのは度し難い。倫理を求める者としても悪事は許し難い。そんな、参加者にとって放任できない状況を逆に利用して、璃正と冬木市の管理者たる時臣は裏で話し合い、マスターたちに狐狩りをさせることを画策したというわけだ。

それにつけても璃正の提案は見事である。令呪というアドバンテージを得た者は、聖杯戦争で優位に立つことができるが、逆に敵に与えてしまつては不利となる。これでマスターたちはキャスター討伐に力を入れざるをえない。

報酬と状況を用意しておきながら、璃正は同盟者以外のマスター

に令呪を差し出すつもりはなかった。

教会の意向は、相応しき者の手に聖杯を渡らせることだ。強大な願望機を得た勝利者に、神の教義に反する行いをされては困る。ゆえに璃正が報酬を渡すと定めた相手は、彼が見込んだ時臣だけなのだ。

キャスターが全ての陣営に狩りたてられ、弱り切ったところで、時臣に自らのサーヴァントを投入するよう打診してある。要は漁夫の利を掴ませようというのだ。

綺礼の支援もあり、全ての陣営の現在地は把握しているので、いつ戦いが起ころうとも時臣はすぐに現場に向かうことができる。彼ならば最も旨味があるタイミングを狙うのも容易いことを見越しての計画だった。

「また、聖杯戦争に参加した誇りあるマスターたちに、そのような魔術師はいないとは思われるが、万が一にも協定を破り、キャスターを討つより先に他のマスターないしサーヴァントを攻撃した場合

」

カソックの袖を戻してから、老神父はさらにルール改正を付け加える。璃正の目には、暗い信徒席のなか、ニヤリと笑う時臣の姿が入ってきた。

「その時は令呪を一つ剥奪させていただく。故意、偶然を問わず、マスターやサーヴァント一人を攻撃することに一つ。あまりに目に余るようであれば、次はその逸脱者が皆の標的となることだろう」

ソレは場合によっては参加資格を失うという、逸脱者のディスプレイを意味していた。

魔術師の基本は等価交換。よって破格の報酬に対し、破格の罰則が用意されているのは当然のことだった。

普通に考えて協定違反を犯した者が令呪を奪われに教会に現れることはない。

一見すると無意味な制約のようであるが、しかしソレはルールを外れてでも勝利を掴もうとする者に対する、明かな脅迫であった。

ルールの強制としては効果が弱くとも、公平を演ずる監督者としては万一を考慮した罰則は必要だった。

令呪を失うだけでなく次のターゲットに設定される。そういう可能性を用意して見せることで、抜け駆けを阻止しようというのである。

キャスターを倒そうと躍起になっている者たちを側面から攻撃すれば、不意打ちで何人かのマスターを屠ることができるかもしれない。少なくとも、ケイネスを倒したマスターは、そう企んだとしても不思議ではない。ならば、今の内から選択の幅を狭めておくに限る。

冬木の街を見張る監視役の目をひたすらに誤魔化そうとも、成果が出なければ無駄な浪費。成功したところで、監督者に「このマスターは聖杯入手に値せず」と判断を下すだけの名目を与えてしまえば、キャスターと同じ立場に立つことになる。

やりすぎるようなら次はソイツの番だと予め念押しされてしまっ
ては、違反行為を指摘された時、知らぬ存ぜぬで逃げおおせること
もできない。例えば教会に寄りつかぬことで追及を免れたとして
も、他のマスターたち全てに一齐に攻撃されるとあつては従う他な
いだらう。

これは時臣を護るための策でもあった。教会に姿を現した時臣を狙うマスターがいたとしても、キヤスター陣営を排除するまでの間の時間稼ぎにはなるといわけた。彼の身を案ずる友人として、そして同盟者としての璃正の配慮だった。

人影の一つが舌を打った。時臣ではなく二人組の内の片方だった。懸念していた手段を使うつもりであったのかは知らないが、設けられたペナルティに異を唱えられずに苛立っていることは間違いない。そうと察した璃正は内心でほくそ笑んだ。

今回の集まりは、名目も目的も、魔術を隠すこともなく人として許されぬ悪行を重ねる悪鬼を止めることにある。それを円滑にするための新たな秩序に抗議をしては、必然、皆に腹の中身を勘ぐられる。

時臣と璃正の結託を疑っている者にとっては、時臣を有利にしようという璃正の意図が見え透いていることだろうが、抜け駆けを封じられただけでは時臣への贖罪を糾弾することもできない。これで全ての陣営が、否応なしにキヤスター討伐に集中するしかなかった。

「さて、質問がある者は今この場で申し出るがいい。もつとも、監督者として答えられる範囲に限らせてもらうがね」
会合の締めくくりとして、璃正が皆に質疑を募る。

暗闇は動かなかった。監督役の説明は端的にして明瞭であり、質問の余地はどこにもない。聖杯を巡る闘争者たちは、新たな形態の競い合いに向けて力を尽くすばかりである。

ならば、もはや教会には用はないハズだが、何を思ったか誰も動こうとはしない。この場に出席した三人の動向を気にしているのか、

言葉を発さぬはずの使い魔たちも動く気配はなかった。

「ひとつ質問……と言うよりも、聞きたいことがある」

人影が口を開く。コートを羽織った男だった。それは少女らしい服を来た従者と共に教会に現れた唯一のマスター、衛宮切嗣であった。自らの命をも餌とする彼のスタンスは、どんな時でも変わることはないようだ。

信徒席に座して神父の言葉を聞くマスターと異なり、その従者たる少女　セイバーのサーヴァントは、主の後ろに控えるように立っていた。

「件のサーヴァント、キャスターとそのマスターに関して、可能な限りの情報は教えてもらいたい」

質問の体を装った情報の要求に、璃正の顔が誰も気づかぬ程度にしかめられた。よもや直球で情報開示を求めてくるとは思っていなかったのだ。

使い魔たちが去ってから質問を望む男が、魔性が去るのを待たずして口を開いた理由は、その頃には解散と称して璃正も質問を打ち切ってしまうと読んだからである。

ルール変更が成された以上、監督役はキャスターとそのマスターの行いを確信するだけの情報を得ていることになる。工房の位置が掴めていなかったとしても、キャスターが犯行に及んだ現場くらいは知っていなければおかしい。

その事実に至っていたからこそその要求だろう。断罪と肅清を掲げている以上、キャスター陣営の情報を渡すことは拒めない。既にキャスターの悪行を把握している監督が、わからぬと誤魔化し通すこ

とはできなかった。

璃正には時臣以外の陣営にキャスターらと全力で戦わせ、その戦力を削ぐ目論みがあった。なので、余計な情報を与えてしまうのは望ましくない。璃正の情報からキャスター攻略の鍵を掴み、思いもよらなかった方法でキャスターを倒されてしまえば、令呪を渡さなくてはならなくなる。ソレは避けたかった。

「どうした？ まさか神に仕える身でありながら、先の言葉を覆そうとは思ってはいまい？」

切嗣の目が冷ややかに璃正を見る。傍らに控えた少女も無言の圧力を加えた。ここで璃正が沈黙を保つなら、老神父の監督意志に裏ありと切嗣は確信することができる。

キャスターに関する情報は、切嗣は既に得ている　　というか、会ったことがある。

だが、そのマスターについては切嗣は何も知らない。舞弥も日夜敵を探索を進めていたが、かのマスターに関する情報は未だ入っていないかった。

キャスターはセイバーをジャンヌとして執着している。他にキャスターの陣営を知る者がこの場にいたとしても、情報を平均化させることができれば、切嗣が一步前に出ることができる。

加えて、時臣は確実に璃正が知る程度の情報は持っているはずだと考えれば、彼一人を有利な立ち位置に置くわけにいかない。引き出せる情報は、できる限り引き出しておかねばなるまい。

相手が魔術師の英霊とは言え、痕跡を隠す思考を持たないのなら、いずれは舞弥か、敵の誰かが捕捉するであろう。令呪のためにキャ

スター狩りを余儀なくされた切嗣は、漁夫の利を視野に入れながらも、早いうちにキャスターを潰すために、多くの情報を欲していた。

そもそも魔術師を知り尽くした切嗣からしてみれば、今回の話は予想外もいいところだった。

例え聖杯戦争に勝利したとしても、魔術協会の戦闘集団に狙われることになれば、一生、逃亡生活だ。教会の側も本来は死者である英霊の存在を許すことはないだろう。

いかに英霊の庇護下であろうと、共通の目的を持った両組織から逃げ切るのは不可能。ましてやキャスターなどという『自分より優れた魔術師』を完全に信頼するなど、それこそ魔術師としては有り得ない。

仮にも魔術師の端くれが、連日に渡って三面記事の紙面を飾るような狼藉を働こうなどは、本来はあってはならない事態なのである。恐れることなく悪事を繰り返すキャスターのマスターは、異常と呼ばざるを得ない存在だ。ゆえに切嗣自身もこの疑問を解消しなかった。

勝利して聖杯を得られれば何もかも従えられると考えた小物か、あるいは、恐れることは何も無いと思っっている大物か。どちらにせよ筋金入りの馬鹿であることは間違いないが、どちらなので切嗣の対応も変わってくる。

「それには、私が答えよう」

横合いから涼しい声が割って入る。切嗣の質問に返答したのは老神父ではなく、意外なことに遠坂時臣であった。

「キャスターのマスターは教会への申請もしなかった下賤でな。教

会側は彼らのことをよく知らないのだよ。キャスターらの愚行を発見したのは我が陣営の使い魔だ。冬木の管理者として、始まりの三家の一角として、彼らの非道を見過ごすことはできない。だから私は監督役にその旨を伝えたのだ」

切嗣の目が細められる。教会との繋がりを思わせる時臣の言動は、露骨な癒着を示唆するほどのモノでなかった。切嗣も動じなかった。彼が聞き咎めたのは別の事柄だ。

敢えてそこまで情報を晒そうとする時臣の意図は、これまでの話を元にすればすぐに読めた。

「そうか。ならばその、キャスターを発見したという使い魔は既に消滅している」と、判断していいんだな」

瞬間、場が凍りつく。

冷気をも思わせる緊迫感があたりに漂う。席に座っていたはずの二人のマスターは、いつの間にも立ちあがって対峙している。セイバーと呼ばれる少女もまた、時臣の殺気に応え、中立を保つ教会にありながら、いつでも剣を抜けるような態勢で備えていた。

時臣の眼光は凍てついた氷のように鋭く冷たかった。

「……なぜ、そう思うのか聞いてもいいかね？」

「答えていいのか？ ここには、お前の情報をも狙う余所のマスターの使い魔がいるというのに」

キャスターの陣営を発見するほどの情報収集能力があると、時臣が敢えて明かしたのは切嗣ら敵マスターを牽制するためだ。本当にそんな情報収集力があるのなら、それを敵対者に明かすメリットはまったくない。

バラせば敵の警戒が厳しくなり、情報集めが難しくなることは明らかだ。ならば時臣はもはや情報を集めるつもりがない。あるいは情報を得る能力を持つ存在が、この世に既にいらないからこそ教えたのだと考えるべきだ。徒勞による敵の疲弊や、自らの優勢を証明する狙いだらう。

仮に使い魔を失ったと言うなら新たに同じモノを作れば良い話だが、それをしないということは、つまり時臣には消滅した使い魔と同等の魔を生み出すだけの力がないということ。短期にキャスターを発見し、なおかつ行動を子細に監視できるほどの使い魔は稀だ。それほどの能力を持つ『使い魔』はアサシンのサーヴァント以外に有り得ない。

キャスターを発見したのはアサシンであり、そのアサシンも敗北したのだと考えれば筋は通る。セイバーがアサシンを斬った時、本当に倒せていたのかは解らないが、やはり遠坂と言峰綺礼は手を組んでいた。事を確信した切嗣は、キャスター討伐後、他の陣営を時臣への攻勢に誘導するため、敵使い魔の前で痛いところを突いたのである。

二人の間に流れる冷たい空気に、実力者である璃正も思わず冷や汗をかきそうになる。見聞きした情報を主に伝えるだけの使い魔は相変わらず沈黙のままであるが、おそらくは魔性の目を通して見ているマスターたちも、完全に呑み込まれていることだらう。

収めたのは、時臣が先だった。

「いや、気遣いありがとう。そうだな、たしかに余分なことではなかった。今大切なのは君の疑問に答えることだ」

時臣はあくまでもクールに座りなおす。切嗣とは少し視線がズレたが、そんなことは気にも留めなかった。

一度口にした言葉には責任を持つのが魔術師である。言葉に裏があるケースは非常に多いものの、彼らの原則とするものが等価交換とソレを証明する契約である以上は、平気で嘘をつける魔術師というモノは少なく、やはり時臣も言質を覆すようなマネはすることがない。

「キャストのマスターは素人らしい。マスターとしての意識どころか、魔術師としての自覚すらないものと思われる。大方、野に下った魔道の血筋の者が、なにかの偶然で英霊との契約を交わしてしまったのだらう。そしてこれは私見だが、彼らは既に聖杯戦争は眼中にないようだ。要領を得ないことを叫んでは蛮行を重ねている」

既にキャストと出会い、その目的を知る切嗣は、時臣の言葉が嘘ではないことを読み取っていたが、傍で使い魔たちを通して聞いているマスターたちは、彼の言葉を一体どのように捉えただらう。

「……では、そのマスターはサーヴァントの傀儡と成り果てているわけか？ 確かに、現代の魔術師よりも優れたキャストは、マスターさえも掌中にする場合があるというが」

いかに錯乱していても、キャストとなれば素人風情は軽く操り人形にできたということなのか。

思考を巡らせる切嗣に、時臣は首を横に振った。

「そうではない。キャストとの会話から察するところ、マスターは従者の行動を容認している。いや、むしろソレを楽しんでいる節がある。サーヴァントのみならず、そのマスターも狂気に見舞われているのだよ」

合点がいったとばかりに切嗣は頷いた。サーヴァントは、召喚者

の性質により近い存在が呼び出されるもの。狂気を患った召喚者なら、狂気を孕んだ英霊を召喚してもおかしくはない。偶然の召喚で、触媒を用意していなかったのなら尚更だ。キャスターの奇行にばかり目がいつていたが、異常を抱えていたのはマスターの方だったのだ。

「錯乱して暴走したサーヴァントと、それを律するでもないマスター。過去にも例のなかった異常事態だ。一体どうしてそんな連中が聖杯に選ばれたのか理解に苦しむが、それでも敵は、どこぞのマスターよりも『魔術師』ではある」

哀れむような時臣の分析は、どこか嫌味な音色を含んでいた。

「件のマスターは“死”を探究することに並々ならぬ情熱を注いでいる。それこそ、倫理や道德の境界を越えてしまっただけに。そういった意味では魔術師と呼ぶにふさわしい人物だ。なにせ真理を追究する姿勢が完成している。自身の娯楽と直結させ、無益な虐殺を繰り返している時点で失格者だが、それでも暗殺者などよりは魔術師向きだな」

視線は切嗣に向けたモノであり、その侮蔑が誰を指しているかは明らかだった。かつて弟子に語った嫌悪は今も拭い難いモノであるらしく、魔道の担い手としては底辺でも、まだ“死の真理”に近づこうとするキャスターのマスターより、魔術師の本分から大きく外れた切嗣の方が許せないようであった。

「知っているかね？ 小遣い稼ぎでもしているのか、魔術を用いて賞金稼ぎや傭兵紛いのことをしている愚か者がいる。下賤な暗殺者。魔術師を名乗るもおこがましい、そんな輩が聖杯戦争に参加している。何故そんな者がマスターになれたのか。私としてはこちらにも理解に苦しむことだ」

普段の彼なら、意識しなくとも流麗な言葉の羅列の中に余裕が見えてくるものである。が、毒を吐く彼からはソレが微塵も感じられない。溢れ出る不満と嫌悪から、つい素の自分を晒してしまっていたことに時臣自身は気がついていなかった。

「しかも先日、そのマスターはキャスターを取り逃しているらしい。キャスターが凶行を深める直前にだ。私には、そのマスターが奇行を後押しする軽率な振る舞いをしたとしか」
と、そこで当てつけがましい時臣の口の動きが止まった。

「そこまでだ魔術師^{メイガス}。それ以上、我が主を侮辱することは私が許さない」

礼拝堂に響き渡る凜とした少女の声は、強い意志が混じった鋭い剣閃を連想させる。セイバーが時臣に怒気を向けたのだ。少女は淡々と、しかし威圧感だけは重く、射抜くように敵を見据える。

剣を抜き放つことがなかったのは、ここが中立の場である教会だったからだ。そうでなければ、彼女の剣の切っ先が時臣の喉元に突きつけられていただろう。

彼女とて敵マスターの発言が挑発だということくらいわかっている。それでも、主が愚弄されているのを黙って聞いているなど、騎士としての信念に反する。

使い魔を用いた二人のマスターに切嗣の素性を確信させることになるであろうセイバーの行動も、切嗣は特に咎めなかった。言葉が明らかに切嗣を指してのものであったので、少女が挑発に反応しようとしまいと同じだったのだ。

そも切嗣という傭兵がインツベルンに婿入りしたこと自体は、

かなり前から知られていることであり、最低でも遠坂と間桐が彼を警戒しているはずだったので、いまさら素性がバレるものにもあったものではない。切嗣は自身の経歴を隠す努力を『無駄』だとして早々に切り捨てていた。

「誰のことと言った覚えはないのだが。不快を与えたのなら非礼は詫びよう」

恭しく一礼し、謝罪を述べる礼儀作法には、優雅な佇まいが戻っていた。アーサー王という“高貴”な英霊を認識したことで、時臣の心に幾分か余裕ができたのだ。

ランサーとセイバーの戦闘と会話を綺礼に透き見させた結果、少女の正体をアーサー王と察した時臣は、セイバーに対して礼儀を欠くことはしなかった。貴族である彼にとって、気高き魂は尊ぶべき存在なのだ。

それでも相手は敵の使い魔という立場ゆえ、敬語などを使うつもりはなく、口調は普段通りであったのだが。

「では、そろそろ質問は打ち切らせてもらおう。各人それぞれ、非道の下手人を追ってほしい」

流す汗も隠さず璃正が強引に場を収める。不可侵の教会であれど、もしも自制が効かぬ者が暴れ出せば戦闘に発展しかねないので、彼が焦るのも判らないことではない。

闇の中に羽ばたきの音が湧く。続いて、かさこそと駆け去る蟲の足音が、ひめやかに消えていく。二匹の使い魔が立ち去る音であった。これ以上の長居は不要となれば、教会に留まり続ける意味はない。

切嗣もまた、教会に残る理由などなく、このまま外に出るだけだ。

彼は時臣や璃正に背を向け、従者と共に外へと歩を進める。

扉の手前に立った切嗣は、何を感じたのか背後を振りかえる。そこには、先ほどと変わらず聖書を開いて長椅子に座る時臣と、切嗣の動向を見守る璃正のみ。

「生き残るのは私と君だろう。此度の幕を飾るのは我々の戦いだ。その時は宜しく頼むよ。もつとも、勝つのは私だろうがね」

と、時臣は切嗣のほうを見ることなく宣戦を布告した。世辞や冗句ではない、心から出たものだった。

戦闘では玄人の切嗣も、決して『最強の魔術師』と言うわけではない。彼よりも強い魔術師もそれなりに存在してはいるし、彼よりも巧く戦いをこなす戦闘者は無数に存在している。もしかすればそんな輩が聖杯戦争に参加しているかもしれない。それでも生き残るのは切嗣と自分だと、遠坂の当主は確信していた。

答えることなく切嗣は扉を開いて外に出ていく。年季の入った両開きの扉の鈍い開閉音は、教会を後にする魔術師に別れを告げるかの如く周囲に響いた。

男の三步後ろに控えるセイバーは、閉まる扉の向こう側で、鋭い警戒の視線を以って時臣を凝視していた。

お前がどんなサーヴァントを連れていようと、どんな策謀を用意していようと、関係ない。この身と引き換えにしようとも、立ち塞がる敵は全て排除する。そんな決意と覚悟を“最強の敵マスター”に示しながら、サーヴァントは主の後に続いて姿を消した。

神父と魔術師、二人だけになった教会の暗がり、時臣は聖書を閉じて立ち上がった。

「さて。私は、我が王の様子でも見に行かせてもらおうとしよう」

全て予定通りに事は運んでいる。もはや老神父と交わすべき会話も終わっている。ゆえに友人の労をねぎらう余分は魔術師にはなく、彼は自らの用事を済ませるために弟子の私室へと向かった。

我が王。時臣がそのように讃えるただ一人の相手は、時折、綺礼の部屋で一人酒宴を興じているという。数日前に弟子から聞き出した事実を元に、時臣は本来なら従者であるはずの王に会いに行った。

来訪者がいなくなった礼拝堂で、璃正は大きく息を吐き出した。今回はキャスター討伐の仕込みをするだけのハズだった。もつと楽に終わるモノだと老神父は思っていた。だのに集まったマスターたちはそんな楽をさせてはくれず、一触即発の空気を教会内に持ち込んでくれた。

静けさを取り戻した暗闇の中で、取り繕う必要がなくなり、璃正はようやくと疲れを吐き出すことが許され、深い安堵の吐息で自らを労った。

これより先は、魔力消費や情報漏洩を恐れ、動かず敵の動向を見守る陣営と、令呪というアドバンテージを他陣営に渡さぬため、キャスター討伐に力を注ぐ側に分けられる。

切嗣の選択は当然後者だ。キャスター討伐に関して、切嗣には正確にはセイバーには、他よりも優位な位置にいる。それを利用

しない手はない。

キヤスターがセイバーに固執するのでは、どのみちこの選択を選ぶ以外になかった。

「……敵のサーヴァントは姿を現しませんでしたね」

外に出たセイバーが、無言のマスターに向って口にした第一声がソレだった。

先ほどセイバーが時臣の挑発にのつたのは、むろん騎士としての忠節からの行動だが、実は敵のサーヴァントを見極める意味もあった。露骨な殺意をマスターに向けられては時臣のサーヴァントは黙ってはおるまいと、そういう意図がないわけではなかった。

より忠誠心が高い従者であるならば、例え戦う意志のないものと解ってはいても、主に殺気をぶつけられては無視できない。

それがなかったということは、敵のサーヴァントはセイバーとは違って忠義を重んじる類の英霊ではないのだろう。

室内に英霊の気配もなかったので、宝具による力や『千里眼』に近いスキルか何かで主の様子を見守っていることも思慮に入れていたのだが、出てこなかったところを鑑みるとコレもまた可能性はない。

セイバーは聖杯によって最低限の現代知識を与えられている。「デート」や「セクハラ」などといった細かい単語の意味こそ理解が及ばないものの、現代人の基本的な生活水準くらいは学んでいるつもりだ。

それと照らし合わせて判断するならば、この現世での魔術師たちは、協会に大きく逆らった場合を除いて、ほとんど戦闘行為を行う

必要性がない。だからあのようにならざることを正道を進む意気込みを見せた時臣には、実戦の経験があるわけがないのだ。

それゆえに主を放置するサーヴァントの動向と、そんな状態でも余裕綽々な時臣の態度が気になった。

あの胆力はいったいなんだ？ 剣の英霊の圧力におじけることなく、優雅に受け流したことは驚嘆に値する。彼は本当に戦いの素人なのか？

恐らく遠坂時臣は、この聖杯戦争において最も厄介な『魔術師』だ。セイバーは確信に近い直感を抱き、同じ感想を受けたであろう主の様子を窺った。

だが。

「遠坂^{ヤツ}時臣では役者不足 僕たちを下す者がいるとしたら、やはり、言峰綺礼を置いて他にはいない」

その結論だけは、切嗣の中では変わりようがなかった。

独り言でしかない極々小さな呟きも、セイバーの優れた聴覚は聞き漏らすことがない。

セイバーの頭は疑問で溢れ返った。彼女は切嗣が一人の敵に固執する理由を知らない。警戒心の意味するところを聞いてはいない。なぜ、キリツグはコトミネキレイに拘るのか。

「……どういうことですかマスター。貴方は、そのコトミネという人物に何か特別な因縁を？」

少女の純粹な疑問にも、やはり返答することはなかった。切嗣はただ黙って従者の前を歩くだけだ。

しよせんセイバーは敵サーヴァントと戦うだけの道具と見るがゆえに、マスターの情報を教える必要もないと思っているのか。それとも彼自身、彼女の質問に答える術を持っていないのか。

ささやかな質問にさえ答えない切嗣の態度に、さすがにセイバーもムっとしたが、効率主義のマスターが答えないのなら知る必要のないことだと判断し、会話を諦めてマスターに追従した。

15 六日目・昼 - 狩人の集い - (後書き)

切嗣のような雇われ……少なくとも魔術無視でビルを爆破する、Zeroだと「魔術師とは信じ難い手」を打つマスターないしその協力者がいると、キャスター狩り決定時点で監督者・璃正は知っていたのに、その対策を練らないルール改正はしないでしよう。

と、狩りの足並み乱しかねない奴を牽制くらいはすると思い、恐らくは剣組みの喧嘩のため、あえて罰則を用意しなかったであろうZeroとは異なった展開に。

私的に、戦えば犠牲が出ると知るセイバーが、今後の犠牲を黙認した切嗣に「それでは足りない」とか言い出すか疑問ですが。

その辺もドラマのため原作殺した影響なんでしょうねきっと。

冬木教会は内装も整っており、日本という国の町教会としては中々に趣き深い。何度か訪れたことのある時臣もこの建物が気に入っている。

通路を歩く男はその所作さえも優雅に、今は“ある役目”を負って外に出ている弟子が冬木での私室にしているという部屋へと向かった。

遠坂今代当主、時臣は優秀で余裕を絶やさず、まさに貴族たる男という彼に与えられた周囲の評価は、長年に渡る努力によつて築き上げられたイメージである。

元は貴族である遠坂一族の家訓には『常に余裕を持って優雅たれ』というものがある。彼の魔術師としての半生は、そのほとんどが家訓を守り抜くために捧げられたものだった。

時臣は秀でた天賦を持っていたわけではない。その資質は歴代の遠坂の中でも凡庸とされる側に属するモノだ。彼が練達の術師として一目を置かれるようになるまでの苦労は、余人の想像も及ばないところであるのは間違いない。

十の成果が求められれば、二十の鍛練を経て相応しき成果を叩きだす。それは凡人でしかなかった男が、魔道の名門家系の長という座を受け継ぐに当たって、それ相応の魔術師で在り続けるがための、苦肉とも言える生き方だった。

彼が優雅に見えるのは虚勢を張り続けているから。彼が成し得た成果の全ては、絶え間ない努力の賜物だった。

その在り方はまさしく白鳥。美しく湖面を漂いながらも、水面下で必死に足を動かし続けるのが時臣という男だった。

日頃から余裕を持って行動して見せながらも、実際は自らに相当な無理を強いてきた。

人に見せる姿と正体は全く違う。

ズレが露呈することも稀にあったが、鍛え上げた己の手腕で全てをフォローしてみせた。

師であり父であった先代が亡くなってからは、彼の真実を知る者は誰もいなくなった。

そんな己の人生に時臣は不満を感じることもなく、むしろ家訓を体現するために苦心する日々を誇りにさえ思っていた。

……それはきつと、自分で決めた生き方だったからなのだろう。時臣自身、才能なき己が歩む未来が険しい茨の道であることは予見していた。それでも、かつて自らの意志で魔道を進むと決めたのである。

その自覚こそが彼を内側から支える骨格だった。

とうの昔に魔術を担う覚悟はできていた。魔術師は既に人ならざる存在。ただ真理の果てを求め、この世の先にあるモノを目指す。それは先代から受け継がれた誇り。その信念を貫き続けた自負があった。

徹底した自立と克己の意志。課せられた試練の数々を、家名に恥じめよう緋々とこなし続けるためだけに、他の魔術師たちとは比べ

モノにならぬ修練に己を虐め抜く。そんな意地を張り続けた彼もまた、遠坂の一族らしく負けず嫌いであつたのではなかるうか。

彼の生き方は聖杯戦争の中でも変わることがない。

戦時下であるにも関わらず、良く言えば自信に充ち溢れ、悪く言えば周囲を見下したような行動の数々。ソレらも遠坂の規範となるべくして自らに課した重みであつた。

歴代の遠坂のマスターには、優れた霊地に立つ遠坂の工房を過信し、護りを固め続けるだけで他のマスターへの対応を怠っていた者もいた。その時は結託したマスターたちの総攻撃を受け、無残にも早期敗退の辛酸を舐めることになつたそうだ。

時臣はそんなミスは犯せない。これまで三度も苦渋を味わつてきたのに、これ以上の屈辱を認めてよいわけもない。かのゼルレツチ翁の教えを受けた魔道の名門の末裔として時臣に敗北は許されない。

それでも、そこに魂喰いによるサーヴァント強化や、人質を用いる脅迫めいた手法を持ち込むわけにはいかなかった。

それは聖杯戦争の最古参であり創始者の一角である遠坂の矜持と、時臣自身の貴族としての美德による制約だつた。

遠坂のマスターが勝ち残るなど当然の結果であり、時臣に求められるのは正規の手順を踏んだ上での勝利なのである。

敵に怯えず勇猛に。敵を恐れず秀麗に。監視の使い魔に手を振つて見せるくらいのことやっつてのけずして、なにが遠坂か。

権謀術数を張り巡らせ、姿を偽り敵を騙し、臆病に見えるほどの慎重を重ねる魔術師らしさ。それに加えて、愚直なまでに家訓に従い、余裕を以て敵を下す大胆さと勇敢さ。矛盾にも思える二つを兼

ね備えてこそ遠坂時臣なのだ。

当初は自らが呼び出したサーヴァントと共に外に出向いて、夜毎のマスター狩りに及ぶ予定であった。時臣の力量と元代行者である綺礼の支援、そして英霊キラーでもある自分のサーヴァントとなら、戦略次第でそれも可能だと構想していた。

優秀であるがゆえに他人を見下しがちだと弟子にさえ思われている時臣だが、表面上は強気であるだけで、真実、他人を過小評価したことはない。サーヴァントに対しても同じだ。魔術師の拠点など、英霊の前では何も役に立たないことを理解している。

セイバー、ランサーら三騎士の前では、魔術の工房は意味を成さない。

ライダーの騎乗宝具が突破力高いモノならば、物理的な破壊によって粉碎されよう。

キャスターの知謀はマスターたちを遥かに上回り、彼らの魔術なら敵の隠れ家を攻略することなど造作もない。

それ以外でも、敵は籠城の対策を事前に用意していると想定すべきであり、よって拠点の割れている時臣が引き籠ったところで意味はなく、さっさと敵を探し出しては潰す方が効率的で手っ取り早いと考えていた。

集めた情報から、敵の力量を正しく計算していたからこそその判断だった。荒事は好まないため、早期に戦いを終わらせようと画策していたのだ。

……なのだが、それも奔放なサーヴァントのせいで見送ることになった。

召喚されて以来、アーチャーは一夜として遠坂邸に留まったこと

がない。クラス別に振り当てられた『単独行動』のスキルをフル活用し、マスターなしでも二日は存命できるその能力をもって、時臣との繋がりをカットしては毎晩のように出掛けていた。

マスターのことなど眼中になく、ただ遊び放題のサーヴァント。いや、そもそも彼は聖杯戦争さえ興味の外であるようで、マスターの生死を意に介する気配もなかった。

高貴なる王に時臣が異論を唱えることなどできるはずもなく、魔術師の目論見は早々に崩れさることとなる。

問題は思惑から大きく逸れたことよりも身を護る術を失ったことだ。こうなってしまうた以上は敵の潰し合いを待つ他になく、その間、サーヴァントなしで身を護るのはどう考えても無理があった。

助けてくれと泣きつけば、英雄王はきつと時臣に手を貸すことだろう。だが遠坂にそんな無様はあつてはならない。令呪で言うことを聞かせるのも後々の確執を生むとなれば論外だ。第一、スマートでないのは好ましくない。

では一体どうしたものかと頭を巡らせ、ならばいつそサーヴァントは連れずに深夜徘徊を行うことに決めた。

従者に合わせて行動を変えたのではなく、マスターの命を歯牙にもかけぬ英雄王の威厳に感化されたのだ。と時臣当人は信じている。

効果は靦面に現れた。やはり聖杯戦争を熟知した者が無謀を犯すのは異様に見えたらしく、思った通り時臣を攻撃する者は誰もいなかった。賢者が相手であればこそ、無警戒な術師の行為を深読みせずにはいられないとの考えは正しかった。

血に飢えた獣どもが遠巻きに寄り集まって、そこで遭遇し合い、

戦いを始めてくれれば申し分なかったのだが、そこまで上手くは転がらなかった。とりあえず今のところは戦闘を行うこともなく、時臣はこうして生を謳歌している。

そうして、サーヴァントなしでもやってきたが、ここから先はどうあってもアーチャーの力を借りなければならない。キャスターの討伐にサーヴァントの力は必須であり、その後を開始される、四人にまで減った参加者たちへの争奪戦にも参戦してもらわねば困るのだ。

その気質からするとアーチャーは後半の戦いには黙っていないだろう。後のことは良いとして、今なんとかしなくてはならないのは目先の令呪だった。狩りの賞品は時臣のために用意された物。それを他人に奪われては物笑いの種になること必至である。

それに実益や管理者としての立場を脇に置いたとしても、時臣はキャスターの悪事を見逃せなかった。必ずやアーチャーには協力してもらわなくては。

さて、どうやってあの英雄王を戦う気にさせたものか。

……まったく、アーチャーが言うことを聞いてさえくれれば余計な苦勞を負うことなどなかったのに。などと考えながら歩いていたら、目的の扉の前にまだどり着いた。胸の内の鬱憤を隠し、扉を数回ノックする。返答はなかったが、弟子の部屋なのだから師匠が入って問題はないハズだとして戸を開けた。

扉が開けられたことで空気の流れが生まれ、室内に充満した酒の匂いを外に逃がした。

室内では酒宴が催されていたことが手に取るようにわかる。奥に進んでみれば、酒宴の主賓であり、ただ一人の参加者である

黄金のサーヴァント・アーチャーが、ランプの火に照らされるソファに鎮座ましましていた。

テーブルには酒瓶や酒の肴が転がっているが、むろんアーチャーには自分で後片付けをするような殊勝な心は持っていない。後始末に手を汚すのは臣民の役目。高慢な王はただ気の向くままに奪い、喰らうだけだ。

散らかった部屋は後で綺礼が整理することになるのだろう。悪く言ってしまうえば身勝手なアーチャーの振る舞いを見ても、時臣は諫めるつもりなど毛頭ありはしない。先の不満はどこへやら、それでこそ我が王であるとサーヴァントに心底から感嘆した。

掃除などは使用人がやることだと高貴なる血筋の男も捉えている。上に立つ貴族として下々のことを深く想いはしても、それぞれが負うべき役割が違うことは認めている。

なので、もし己が王と仰ぐアーチャーが進んで掃除する姿でも見ってしまったなら、時臣は大いに落胆していたことだろう。

時臣とアーチャーの関係は完全に逆転したものだ。本来ならサーヴァントがマスターを主として仰ぐべきところが、彼らの場合はマスターがサーヴァントを敬っている。高貴な血統を重んじる時臣は、自分よりも高き身分に位置する『最古の王』に服従の意志を見せていた。

「ここはオマエのところよりも幾分か上等な酒を置いている。まったく、けしからん弟子もいたものだな」

サーヴァントが言葉を発する。相変わらず時臣になど目もくれないが、忠臣に対して意識を向ける程度の気遣いはあるらしい。

綺礼が高価な酒を集めているのは時臣も承知だった。前に一度、弟子が高度な修練を終えた時、ささやかな贈り物をしようと思つて、欲しい物はないか聞いてみたことがある。綺礼は少し考えた後、上等な酒があれば譲つてほしいと師匠に申し出たのだ。以来、その収集癖は、無欲な弟子の数少ない楽しみなのだろうと認識していた。

「で、なんの用だトキオミ。コトミネがお前の命で動いているなら、ここにいないことなど承知だろう?」

もはや我がもの顔を通り越して、まるで己の別宅であるかのような言動に、さすがに時臣も綺礼に同情をした。自室を酒蔵として提供させられた弟子の苦勞がありありと目に浮かんだのだ。

綺礼は配下^{アサシン}を失うという失態を犯した。聞く必要もなかったので事の顛末までは詳しく聞き出していないのだが、どうやら時臣の支援をしていたことにアサシンが不満を抱き、造反を招いてしまったらしい。時臣にとって情報収集の要である使い魔は綺礼の手により消滅した。

ならば綺礼の咎であると時臣は捉えた。例えその原因が時臣の取った戦略にあると、叛意を抑え込むだけの能力が弟子になかったのが最大の要因だ。だから時臣にすれば、ミスしたのはアサシンの心緒など意中になかった自分ではなく、謀反を許してしまった綺礼なのである。

ゆえに不手際を補うのは弟子の役目。そう思うからこそ、あえて脱落者として数えられるはずの綺礼に外での雑用をさせていた。英雄王に振り回されていることには同情もするが、それとこれは別の事柄であり、アサシンを失ったことに関しては正しく罰を与えるだけだった。

彼に命じた雑務は全て聖杯戦争での布石で、命の危険を伴う任務であったのだが、綺礼は文句の一つも言うことなく承諾していた。自らの非を悔んだからこそ、というわけでもないのだろう。命を賭した鍛練にも積極的な弟子は、これまでも師に逆らったことや不満の色を見せたことは一度もない。

そういつた事情から部屋の主は不在であるのだが、アーチャーはこの部屋に取り揃えられた酒の種類がそれなりに気に入っているらしく、綺礼に関係なく『酒蔵』に顔を出していた。そのせいでここまで足を運ぶ羽目になった時臣を前にしても、このサーヴァントに悪びれる様子は欠片もなかった。

時臣は恭しく一礼する。

「キヤスターめの蛮行と我らの対策……綺礼にお聞きいただけましたでしょうか」

「ああ。お前たちが騒ぐから自然と耳に入ってきたぞ」

彼に情報を教えるのは時臣の役割だが、アーチャーは「煩わしい」の一言で念話や知覚共有の類を一切遮断しているので何も伝えられていない。感覚や認識を侵犯されるなど英雄王には耐え難いのだろう。それでも不思議と耳聡いサーヴァントは、今の状況はある程度把握していた。

ならば話は早いと、結局上手い煽て文句も思いつかなかった時臣は正直に英雄王への支援を求めた。

「我が王。件の悪鬼、どうか手ずからの誅戮を行い、真の英雄たる神威を世に知らしめ下さいませ」

「……ほう。こんなことで我^{オレ}に動けと言うのかトキオミ？」

目を細めるアーチャーの威圧感は、常人なら七度は死んでもおか

しくないものだった。剣の英霊の殺気をも受け流した時臣はなんとか耐えきって見せる。

言葉の一つ一つに籠められたカリスマ性。呪いにも似た言霊が耳を通り抜けるのが心地よい。英雄王はこれまでも、妖しい魅力と恐ろしい圧力で全てのモノを支配してきたのだということを、アーチャーのマスターは実感した。

赤い瞳は例えようもなく不吉であった。その眼に見据えられては、誰も生きた心地などしないだろう。

深紅の重圧に耐えられた時臣の器量は素晴らしいの一言に尽きる。経験に鍛え上げられたモノか、彼もまた並はずれた強さを備えていることが窺えた。

「かような些事、本来ならば我が王のお手を煩わせるほどのことではございません。……が、敵は魔術師の英霊。情けないことではあります。私や他の参加者たちの追跡がどこまで通用する相手か。どうか、どうか我が冬木の民を救うために、ふがいなき我らに英雄王のお力を示して下さい」

深々と頭を垂れる時臣は冬木市民を想っていた。人道に乖離した魔術師イキモでありながら、彼は決して人道を軽んじない。魔道を外れた者たちを処断する義務だけではなく、冬木市民の安否を願ってキャスターの掃討を心底から望んでいた。

それが余分な痛みであると自覚しつつも、時臣は難儀な自分を変えようという気はなかった。

ただ、今更のように自分の間抜けさに気がついて、時臣は伏せた顔に苦渋を浮かべた。彼には監督役によるルール変更が知らされる以前に、サーヴァントと打ち合わせておくアドバンテージがあった

はずだ。なのに事前にアーチャーに話を通しておかなかったのは明かな落ち度である。

このサーヴァントがどれほど扱いづらいか知らぬわけでもあるまいに、何故そのことを失念していたのか。時臣は追加令呪を得る機会を得たことに浮かれてしまった自身を悔いる以外になかった。

アーチャーはやれやれと首を振った。それは忠臣としての分を弁えながらも、力を貸せと傲慢に要求する時臣への嘆息ではなく、このような事態に陥ったことに対する呆れだった。

「過ぎた力に頼ろうとするから、そんな輩も出てくるのだ。まったく聖杯を巡って殺し合うだけなら、英霊なぞ不要だろうに。そこまでして靈長最強の魂を欲したか」

王の言葉が何を意味するのか。聖杯戦争の“真の”仕組みを知る遠坂の者なら、瞬時に読みとれることである。

事も無げに投げかけられた皮肉に、魔術師は身を固くするでもなく淡々答えた。

「……いつたい、何のことおっしゃっているのでしょうか。私には皆目見当つきません」

澄ました顔でアーチャーに傳かたずく時臣も、背に流れる汗の冷たさを感じずにいられなかった。

本来、ギルガメッシュに知られてはならないこと。その核心に近いところを突かれ、それでも内心の驚愕を顔に出すことがなかったのはさすがとしか言いようがない。

「シラを切りとおせると思ったのか？ この茶番の意味、我がオレ気がつかないとも？ そもそも無駄を嫌うお前たち魔術師が、英霊の召喚などという無駄な手間を懸けている時点で、この戦いは破綻し

ているではないか」

聖杯などに興味はなし。むしろ、現世の出来事にこそ興味ありとしたアーチャーだからこそ気がついた事だった。

英霊を召喚する破格の奇蹟こそ聖杯の力を証明するものだ、監督者や最古参の者たちは外来の参加者に説明してきた。不確かな力を信じる愚かな者はいないため、願望機の力を示すのは参加者を募るのに都合がよかった。さらには冬木の聖杯は霊体であり、それに触れられるのは同じ霊体だけだと、英霊の必要性を説いてきた。

それゆえに英霊が召喚されるという“異常”の真意に気がつく者は少なかった。歴代の参加者の中には確かに聖杯戦争のシステムに疑問を持つ者もいたが、戦いの仕組みを察した秀才たちも、システムを掌握するより勝利して聖杯を得る方がよほど効率的で簡単だと、聖杯戦争のルールに従ってきた。

サーヴァントとて、聖杯戦争の支配下では敵を倒す義務感と高揚感が植え付けられている。戦いの意志を後押しする程度のモノで、思考の根本にまで影響するものではないのだが、それでも『真実』から目を逸らさせるには十分すぎた。

だからこれまでは問題がなかった。なかったのに、よりもよつてこの男が辿りついてしまった。

我を通すことのできる強力な能力を有し、本人も遊びすぎるために誤解されがちだが、英雄王は意外にも知略に長けた面もある。

ただ夜毎に遊び呆けているだけだと思っていたのに。アーチャーは、抑えるべきところはしっかりと把握していたのだ。神代の魔術師ならいざ知らず、それ以外の英霊でここまで至れるのは恐らく彼だけだろう。

「……っ！！ 英霊にて勝敗を決するは正しき所有者を選定する試練のため！ それが聖杯の意志ともなれば、我らには如何ともし難く……！！」

冷静で優雅な魔術師の仮面は崩れ、完全に焦った口調で何事かを口走る。それは、明らかに“何か”を隠そうと必死になる者の行動だ。

「お前らしくもないなトキオミ。言えば、更なる墓穴を掘るだけだぞ」

哀れなほどに狼狽するマスターの貴重な姿を見て、珍しいこともあるものだ、アーチャーは可笑しそうに諭した。

自分の反応が愚にもつかないものであったことを悟り、サツと時臣の端正な顔が紅潮する。普段なら、この程度のやり取りで彼の本性を垣間見ることはできない。思わず隙が出来てしまうほどに、聖杯戦争下で疲労を溜めていたのだ。

考えてみれば連日連夜において気を張り続け、さらには立て続けに英霊のプレッシャーに晒されたのだ。ストレスを感じていないほうがおかしいだろう。

マスターとしての戦いだけでなく、管理者の立場に頭を痛め、遠坂当主としての面子も護り続けてきたことで、常人離れた彼の自制にも歪みが生じつつあった。

「まあよからう。キャスター退治は引き受けてやる。我^{オレ}とて、おめおめと街の人間を殺されるのは性に合わん」

時臣の狼狽に満足したアーチャーは赤い明りに照らされながら、溢れる威厳を惜しむことなく言い放つ。

英雄王の言葉に驚きを感じない者がいるのだろうか。自分以外は

何者も要らぬという男が、よもや街の人間の安否を気遣おうとは。そんな男ではないと思つたからこそ、どうやってアーチャーを言いくるめるか彼のマスターも悩んでいたと言つのに。いったいどんな気紛れかと時臣は自らのサーヴァントをいぶかしんだ。

「雑種がいくら死のうが^{オレ}が私の知つたことではないが、我は我以外の者が人間を殺すのを善しとせぬ。人が人を降せばつまらぬ罪罰で迷おう。その手の苦しみは楽しくもなんともないからな。それに、そんな輩の慰み物となつた雑種どもが世を祟るのも面白くない。ならばキャスターには死を与えてやるのが正義というものだ」

死の救済こそ慈悲だと男は語る。生の苦より人々を救うために死を遣うのだと。

アーチャーにすれば、殺生とはおぞましきを殺し、哀れを救罪するためにある言葉。

英雄王と言っただけあって、やはり彼もまた英霊なのである。

王という立場は誰よりもヒトを殺す椅子だと知る青年は、どこまでも傲慢であつた。輝ける王は、常人に及ばぬ考え方の持ち主なのであつた。

サーヴァントの考えはどうあれ、これで市民の命が救われると安堵した冬木の管理者は、冬木市に住まう者を代表してアーチャーに頭を垂れた。

「我が王……。その御英断、王の御慈悲の恩恵知らぬ冬木の民に変わり感謝を……」

「礼を言う暇があるなら早く準備を済ませるのだな。事は迅速に済ませるのが我の方針だ。お前の憶病さを留意して多少は待つてやるが、手間取るようなら我は我で好きなようにやらせてもらつぞ」

酒を喰らい、喉を鳴らしながら、話はこれで終わりだとアーチャーは切り上げた。

再び内心で慌てることになった時臣である。勝手にキャスターの首級を上げられても困るのだ。アーチャーなら敵を討つのは造作もないことであるだろうが、ここまで隠してきた能力が明るみに出るのは避けたい。アーチャーをキャスターにぶつけるタイミングは、なんとしてもこちらでコントロールしなければ。

「承知いたしました。我が王、今しばらくお待ちください」

部屋に留まる理由はなく、時臣は臣下の礼を誤まることないように部屋の外へと出た。

その瞬間、魔術師の表情は先ほどまでとまったく違うモノに変貌する。そこにあるのは漆黒のように冷たい瞳。強大な相手との敵対を心に決めた者の覚悟である。

彼が敵と認識したのはキャスターではない。自身が契約したサーヴァントの方だった。先ほど涙を流さんばかりにアーチャーに感謝をした人物は、同じ相手に最大の障害を見据える目を向けていた。

時臣は急に考え方を改めたのでも、アサシンのように多重の人格を有しているのでもない。部屋を出る前も後も思考は同一である。ならばこの変貌ぶりはいったいどういうことか。

なんのことはない。感謝と敵視は別のところにあるというだけの話だ。

アーチャーは危険だった。聖杯戦争と呼ばれた儀式の、その本来の目的を遂げようとする時臣にとって、事実近づきすぎたアーチャーは既に邪魔な存在と成りつつあった。今はキャスター討伐とい

う目先の義務があるために何も手は打てないが、いずれは対策が必要だと決断を下したのだ。

秘中の秘とされる『大聖杯』の機能。それは七体のサーヴァントを生贄に『原初』に辿り着くことにある。英霊という一人で万人に値するとされる魂の力をもって、世界に“孔”を穿ち『根源』へと至ることが儀式の真の目的だった。七人のマスターによる争奪戦は隠れ蓑である。

今となつては強大な願望機という風聞、英霊を召喚するために必要なマスターたちを集める“餌”が独り歩きして、戦いの形骸が出来る上がってしまったが、真に必要なのは七騎の英霊とソレを呼び出す魔術師なのだ。

魔術の歴史に名を残す偉業を成す奇跡。それが戦争にまで変じた儀式の本来の意味だった。

そう。七騎の英霊全てを贄に必要とする時臣は、最後の最後、聖杯戦争に勝ち残った暁には自身のサーヴァントに令呪で自決を命じるつもりだった。

英雄王はどこまでの事実を掴んでいるのか。もしもマスターの企みに行きついているなら早いうちに手を打たなくては。

マスターが死ねばサーヴァントの現界にも支障が出るとは言え、生き延びようと思えば方法はいくらでもある。ある程度までマスターを認めたとしても、どこで見切りをつけるかわかったものではない。特にギルガメッシュは気まぐれな男だ。そんな相手を信頼することはできない。

さきほどは確かに心の底よりアーチャーに感謝した。アーチャーを王と仰ぐ男は、その王がキャスターを討つべく臣下に手を貸して

くれることに頼もしさを覚えもした。だが、感情と実益を区別して考えることができる男にとって“それ”と“これ”は別なのだ。

時臣はギルガメッシュに掛け値なしの畏怖と敬意を抱いている。その敬服はサーヴァントとして現界した映し身……言わば英霊の“クローン”であるアーチャーに対しては変わらない。

嘘偽りのない英雄王への忠誠。それでも、彼の前途に対して障害となるモノであるのなら排除するだけだった。

骨の髄まで魔術師として完成している男は、すべからくを奇跡を成すための道具であると捉えている。それは自身の命であっても例外ではなく、さらには敬愛する王の命、英雄王の偉大さを模った模倣品であっても同列なのである。必要なら生贄にすることも、邪魔なら消すことも辞さないのだ。

……やはり四つ目の令呪は必要だ。時臣はキャスター討伐への決意を固くした。

アーチャーは令呪への対策を用意してくるだろう。令呪を二つ重ねがければ、どんな英霊でも抵抗できないが、あの『宝具』を持つ男はどんな手立てを用意してくるかわからない。

ならば最低でも三つの令呪を全て残し、保険の一つを手に入れておかなくては。

キャスターの掃討に加え、アーチャーへの対応も視野に入れる羽目になった時臣は、薄暗い廊下の中でこれからの苦勞を想って溜息をついた。

「……まったく、つまらん。この世に一つ程度は、私の思い通りにならぬモノがあつてくれなければ」

金色の英霊は心底から退屈そうに呟く。手の中のワイングラスを左右に揺らすのに合わせて、中身の酒がゆらゆらと波打った。

英雄王ギルガメッシュ。

半神の身である彼の思い通りにならないモノはなかった。

金運を初めとする因果は常に味方をし、呪いの如き威光は全てを従える。稀に彼を咎めることができる者もいたが、意に背くならば容赦なく処断してきた。

王とは何もかもを支配する超越者。ゆえに全てが彼のモノであり、民草は英雄王に奉仕して然るべき。すべからくが王の意に従うものだ。ギルガメッシュは考えている。それはギルガメッシュには生前からの常識であり、疑う余地も議論する価値もないほど当然のことであつた。

しかしだからと言って本当に英雄王に遜^{へりくだ}る者を彼は好まない。民が従うことなど至極当然のことであるとしながらも、ソレさえ気に食わないのだ。

気難しい英霊は、そのため時臣のこともあまり好ましくは思っていない。なかつた。その能力や忠誠を認めてはいるものの、自らのマスターに足ると思つてはいなかつた。

もう少し時臣には見所があると思つていたのだが存外につまらない。度胸を見せるところは買うが、それも苦肉から生じた策では話にならぬ。

時臣が興味あるのは魔術師としての義務と『根源』へと至る悲願だときている。王の関心はそんなものにならぬ。酒飲みの供にもなら

ぬ輩ゆえ、これまでの時臣には何の感興も抱くことがなかった。

今は忠臣の目論見に感づいて評価を改めたところだ。令呪が邪魔だと思つ一方で、簡単に御せると慢心したギルガメツシュは、あんなマスターでも化ければ面白いものを見せるのではと期待して、ギリギリまで時臣の好きにやらせてみようと考えていた。ようやく王の意に背く気骨を見せ始めた時臣に、見世物程度の興味は覚えつつあった。

意にそぐわない者を王は許さないが、酒の肴になるくらいの妙味を提供するなら話は別だ。

それは単に、この王は些末事に細心の意識を割くほどの警戒を持ち合わせていなかったから。時臣の命を救ったのは王の寛大さではなく、逆心など兇戯と並ぶ些事だとする王の自尊だった。

彼はまさしく支配者である。天地に我のみという傍若無人かつ強大な自我。並び立つ者を認めず、真実、彼と肩を並べることができない者は存在しない。

その選定は他者を顧みることがなく、決断の全てが是と肯定される。

彼が正しい行いをするのではない。彼の行い全てが正しい。それが最古の王ギルガメツシュなのだ。

手に入れられぬモノ、足りないモノはない。脅かす者もなければ、求めるモノもついに無くなった王。

だからこそ抱える苛立ちもある。あらゆる者を超える力を持つがゆえに、ギルガメツシュは自分以外の人間全てが雑草に等しく見えていた。

聖杯戦争による現世来訪は、彼にとっては退屈凌ぎに過ぎなかつ

た。

生まれついで勝利者として世界を手にした者に望みはない。英霊として祭り上げられてからの“生前とたいして変わり映えもない称賛”を浴び続けることに飽いて、特に求めるようなモノもないままに現世へと降りたのである。

あるいは時を経た現世ならば、眼に適う宝物もあるのではないかと期待してサーヴァントの縛りを受け入れた王は、結論として再び世を支配するのも良いと思うに至った。

世界は思っていた以上に面白い。この現世は、かつて見たモノと根本が同じでも、装飾が圧倒的に違っている。

これならば飽きるということもないだろう。英霊となつて、世界の在り方は『知識』として知っていたが、やはり知識と実物は感触が違う。僅か数日の見物だけでも、娯楽として楽しむには十分な手応えがあった。

だが、再び世界に君臨するには些か有象無象が多すぎる。

彼にしてみれば多いということはそれだけで気色が悪い。世に蔓延る害虫どもは際限なく増え、いくら潰してもうじゃうじゃと湧いてくる。この楽しい世界の中で、それだけは容認し得ない部分だ。

彼は豪勢なモノを許す。愛でるべき最たるは装飾華美。それは均整に彩られた美しさに与えられる称賛であり、景觀を穢す群衆には決して合わない言葉である。

ギルガメッシュにとって、凡百の雑草が生を謳歌するのは、王に対する冒瀆に等しいのだ。

つまるところ彼は人間を愛でる気はなかった。

派手なことと、ただ乱雑に無駄を散りばめることは違つたと悟った

のはいつだったか。幼年の頃は足元の野花に慈愛を示し、善き為政者たろうと血迷っていたのも、今となっては他人事のようにであった。

英雄王は余分なモノに許しを与える意義を認めてはいない。誰も蟲の群れを支配したいとは思わないように、ギルガメッシュも雑種を支配する気はない。おぞましきを一掃し、救世を行うことを望んでいた。その手段としてなら、聖杯の力も悪くはないかもしれないと思案するほどだ。

今の人間たちは駄弱がすぎる。彼が生きた時代なら、奴隷から赤子に至るまで無駄は一つもなかったのに、今の世界は余裕に溢れている。罪を受け入れず、罰を知ることもない人間たちに満ちている。世界は楽しいが同様に度し難い。サーヴァントとして活動した僅かな時間だけでも、おそろしく人間に優しい世の中になったと実感できた。

死の淵に落ちて、なお生を掴もうとする浅ましき執念。現世に執着する、命に貪欲な醜悪さ。その果てに生を掴み取る強き者。過酷な地獄の中でさえ生き残ることができる命の輝きこそ、英雄王が支配してやるのに相応しい民なのだ。

自らの罪に自滅するような者に用はない。この世界のあり様を見る限り、ギルガメッシュが世を去ってからの長き歲月の間は、誰も裁き手が現れなかったのだらう。

ならば、やはりヒトを裁き、選り分けるのは英雄王たる彼の役目。

「いずれ、選別は我の手で行う。キャスター風情に、私の庭で好き勝手な振る舞いをさせるものか」

手の中の酒を飲み乾し、一人残った黄金が呟く言葉を聞く者は誰もいなかった。

バビロニアの英雄王、ギルガメッシュは暴君であった。

古都ウルクに君臨した彼は、活力に溢れ、その全身は豊かな魅力に装われ、まさに人々の牧者であったとされる。

王は昼も夜も眠ることがなかった。それゆえに彼の暴挙は夜通し続く。

男たちは城壁を作るために過酷な労働を強いられ、女たちは犯された。たとえ勇士の娘でも、婚礼の初夜を迎えようとする花嫁であっても、王はお構いなしに食い散らかした。

終わることのない蹂躪。欲望に任せて愉悦を貪り、民草を顧みぬ無慈悲な行い。人々の尊厳を、ただ退屈を紛らわせるために奪っていく。

そんな王の姿を嘆いた神は、人々の願いの中から王の抑止となる存在を生み出した。

“ソレ”は荒野に現れたという怪物だった。人の形をしていようと、人の言葉を解さぬならば、人間と怪物に境界は無い。

泥より生まれた野人。その全身は毛に覆われ、誕生してからしばらくは知性を持たなかったとされる、生まれながらに完成されていた王とは正反対の男だった。

野人は聖娼シャムハトに導れ王と出会い、国を戦場にして彼らは戦った。如何なる気紛れであったのか、王は全力で野人の挑戦に応える。

野人は人々に安息を齎す、生まれ持った使命のために。王は己の心のあるがまま、自らの行く手を邪魔立てする者を排除するために。二人の英傑の戦いは、互いに全霊を賭しての殺し合いだった。

王と並ぶ者でなければ王の抑止には成りえない。半獣の野人はその霊格こそ半神の王には及ばなかったものの、王と互角の、もしかすれば王を凌ぐほどの能力を持っていた。そのため王は“ソレ”を組み伏せることはできなかった。

絶対者だった王には、この上ない屈辱である。生まれて初めて、自分の思い通りにならぬ相手が目の前に立ち塞がったのだ。

生殺与奪の権利は王が握るモノ。民が生きることができるのは王が存在を許しているからにすぎない。なのに、“ソレ”は王の決定を覆してみせた。

もはや動くことさえできぬほどに傷ついた二人は、支え抱き合うかのように倒れ、互いを振り払うこともできずに疲労の吐息を漏らす。

『偉大なる王よ。僕は君の行く末を見届けたい。君が道を誤る時、僕が君の導となろう。喜びと嘆きの人、ギルガメツシュの行きつく先を見せてほしい。そこにはきつと、僕が生まれてきた意味がある』

“ソレ”は王と共に生きたいと願った。王の強さに感服したか、そうするしか使命を果たす道はないと悟ったかは知らない。未だヒトとしての人生を知らなかった“ソレ”は、強く気高く、身勝手に人間らしい欲望に溢れた王の舵取りになりたいと言った。

その時なにを思ったか過去に無頓着なギルガメツシュには思いだすこともできないが、あの時の感情は覚えている。野人との戦いに

はどこか心地よさがあつた。全霊を懸けた出し惜しみもない戦いは、心から満足できるものだった。また彼と戦うのも良いと高揚する気持ちがどこかにあつた。

『……貴様はいずれ我の手ずから殺してやろう。それまでは、せいぜい偽りの人生を堪能するがいい』

王の決定は変わらない。邪魔な男はいつか殺す。そこに称賛と猶予を与えたのは英雄王の慈悲であつた。

その日から、望み通り“ソレ”は王の友として在り続けた。人々は臣民として王を信仰するか、敵対者として王に潰されるかの二択しか持ち合わせていなかった時代。その中でたった一人、味方として王に傅くことをせず、敵として王に敗北することもなく、男は心許せる友として王の傍らに在り続けた。

野人の名をエルキドウ。英雄王の生涯唯一の友であつたとされる男。

彼は王を裏切ること、王の力を恐れることも、王に媚び諂うこともしなかつた。泥より生まれ、神が造つた人形でありながら、バビロニアの王に並ぶ力を与えられた者。超越者としての度し難い退屈から、ギルガメッシュを唯一解き放つてくれた最大の好敵手。

王が思い通りにできなかつたのは彼だけだ。

隣に立つ者として王が許したのは彼だけだ。

心底から楽しいと王に感じさせたのは、この世の中で彼だけだったのだ。

野人との死闘を終えて以来、王は善き統治者となつたと伝えられているが、ギルガメッシュ当人は特に心変わりしたつもりはない。

何かが変わったように見えたのだとすれば、女を抱き男どもをい

たぶるより、側にいた男と語り合うことの方が有意義だったからだろう。

考え方も感じ方も違う。信じるべき道も異なり、在り方は正反対の両者であったが、不思議と彼らは気が合った。エルキドゥは幾度となく王の考え方を咎め、王は男の言葉を一蹴することもあった。互いの言葉を不快に思うこともあった。それでも互いを見限ろうとは思わなかった。

香柏の森の番人との戦い。天牛の討伐。友と成し遂げた冒険は、どれも鮮明に思い返すことができる。王が一人で行ったなら、他愛もない記憶として残っただけであろう日常も、あの男と共にあったからこそ掛け替えのないカケラとして胸に刻まれた。

そんな楽しい日常にも終わりの時は来る。変わらないモノなどありはしない。永遠とは、虚無の中にしか存在しない言葉だ。

彼との日々の終焉は、思っていた以上にアツサリと訪れた。

幕を下ろしたのは神の意志であった。

女神の姦計によって天牛と戦った時、エルキドゥは王の抑止となる役目を外れてしまい、役目を誤まった男は神の呪いで病に臥せる。本来なら即座に潰されていた命だったが、彼は寝たきりになってまでしぶとく生き延びた。呪いを撥ね退けるほどの意志力に、さしもの英雄王も感嘆したほどだった。

しかし神造の命が神に逆らえるハズもなく、彼は徐々に衰弱していく。

あと三日も生きられないと悟った時、エルキドゥは涙を流して王に泣きついた。

死が怖いと。あれほどに強かった男が子供のように顔をぐしゃぐ

しやにして、血涙も流れんばかりの悔しさを噛みしめ、金色に輝きたる王に嗚咽を漏らした。

友の死は避けられぬと知るギルガメツシュは、何の感情も見せなかつた。

『何故そうまで醜く生にしがみつく？ 生き汚くあれば、お前の価値を下げるだけだ。なんなら我が介錯をしてやってもよいのだぞ』

英雄王はどれだけ執着した相手であろうと、手に入らないのなら捨てる非情さを持っている。そこに人間らしい感情を挟ませることもなく選定を下すことができるのだ。

だからエルキドゥが死ぬことを王は残念にも思わなかつた。むしろ耳触りに泣き喚く友に対して、理不尽な苛立ちを抱いたのである。

死ぬのなら潔く逝くがいい。約定の通り我が手で殺してやる。男の涙など目ざわりなだけだと、無情に、彼は友であつた男をねめつける。

エルキドゥは首を横に振つた。友との約束を反故にしても、友に嫌われたとしても死ぬのだけは嫌だと泣き濡れながら。

彼は神によつて作られた存在だ。人ほどの寿命など初めから用意されてはいない。どのみち、いつかは訪れる破滅だつた。

己の末路を知つていたエルキドゥは、死ぬことを恐れたことはなかつたと言う。それでも死ぬのは嫌だと訴えた。

その時ギルガメツシュは彼の涙の意味を知る。

『この僕がいなくなつた後、いったい誰が君を理解できるというのだ？ いったい誰が君の傍に在ることができるといふのだ？ 朋友よ、だから僕は死にたくない。これから始まる君の悠久の孤独。それを想うと、涙が溢れて止まらない』

神意に抵抗し続けた男が死する直前に流した涙を、自らの命を削ってまで王を想い続けた男の慟哭を、ギルガメッシュは永遠に忘れない。

……思えば、王の威光カリスマに支配されることなく、心からウルクの王を案じた者などあの男だけだった。

友の死後、ギルガメッシュは不死の秘薬を探す旅に出るのだが、それは伝承に言われるように死に怯えたからではない。

単に自らのモノを他人に使われるのが気に食わなかったただけだ。自分の命は自分のモノ　神などの好きにさせてたまるものかと、神のいい様に弄ばれた友を見て思ったのだ。

あの男と出会うまで王は孤独であった。

独りであることを嘆いたことはない。英雄王に並ぶ者がいないのなら、孤独は当然のことであるし、生涯の友人を作ろうと思うことさえもなかった。

だから　あの男と出会えたことは、二度とは有り得ない奇跡なのだ。

今でも退屈が続けば、あの男のことを思い出す。惜しむ気持などありはしないが、きつと楽しい日々だったのだと、ふと思い返すことがある。

王の心を湧かせることができた者は、後にも先にもエルキドゥー人だけだ。

最後まで神に逆らい続けた強靱な意志。友を想う純粹な心。なによりも、生の苦しみから逃げ出すことなく向き合う道を選んだ彼の尊さは、何ものにも代えがたいほど愛おしかった。

もう、あんな相手には出会えまい。魂の煌めき。強さを備えるだけではなく、王の心に触れることができる者。自らが立つところをこそ天上と定める男が、自らの財を共有しても良いと思えるだけの存在など、二度とは現れまい。

結局のところ、英雄王は「美しく強い魂」に惹かれるのだろう。それは強大すぎる魂を持つがために同胞を求める性なのか、ギルガメッシュ自身もわからないし興味もない。

ギルガメッシュは常に孤高であり、孤独であり、全てを超越した王であり続ける。得難い友を亡くしても彼は変わらなかつた。

ただ、朋友の輝きを知つた今、もしかすれば彼は待ち望んでいるのかもしれない。

かつての友と同格とまでは言わないまでも、英雄王が心から求めるだけの存在。気高く、尊い輝きを。

16 六日目・昼 - タイラント - (後書き)

エルキドウの話を無理に割り込ませた感ありますが、単に書きたかったんです。ホントは蛇さんに秘薬をくれてやる話も書きたかったけどカットしました。

ギルっぽくないかもしれませんが、私なりにギル様の性格と伝承を鑑みたつもりです。

「器を弁えず大望を持つ者を好む」とZeroでは言いますが、だったら士郎のこともっと評価してんじゃねーの？ と思い、ギルにとつての“価値”はUBWを参考にしたものにさせていただきました。

五次で「人間を愛でようと努める気はない」ってモロに言ってるんで、本作のギルはあんまり人間自体には興味ありません。人間のやることとかは興味ありますけど。

一人でhollowを解決できるチート野郎なんで、教えられなくても聖杯戦争の仕組みも気がつくんじゃないかなーとか思ったら時臣の心労が上がってたり。

聖杯戦争の歴史を辿ると、およそ千年の時を遡る。

その発端は二百年前。アインツベルン、遠坂、マキリの三家が敷いたシステムだと言われているが、そもその始まり、聖杯降臨のシステムを考案するまでに至ったのは、聖杯に千年の妄執を抱いたアインツベルンである。

幾度となく聖杯入手の試みを繰り返してきた彼らは、五百年の過ちと引き換えに奇跡に至る光明を見つけて出す。

ついには聖杯を自分たちの手で造り出すという結論に至り、しかしその難易度の高さに頭を悩ませた。

かつてのアインツベルンは“万能の釜”を成す基礎を築き上げたにも関わらず、必要な土地と、聖杯召喚を実行するだけの技術、呼びだした英霊を従わせるための呪縛を用意することができなかった。

探究を初めて約八百年。ようやく自分たちだけでは聖杯を造れぬと受け入れた彼らは、魔術協会・聖堂教会の両組織の目から遠く離れた極東で、外の魔術師たちを仲間に誘い入れることを決定する。その相手が降霊術に優れる遠坂家、使い魔を律する業に長けたマキリの一族だった。

魔術師というものは基本的に外の者を信用しない。特に選民的な思想を持つ者たちは、外来の者を嫌悪するほどに嫌う傾向にある。

これまで外部との交流を一切断ってきたアインツベルンも、本来

はその類の家系だったのだが、必要な手順を果たすために仕方なく二家と結託する。

千の歳月を家の誇りに賭した者たちが、悲願を成し遂げるべく外部の人間を招き入れたという事実。誇り高い一族が余所の家門に助けを求めるなど、それだけでも腹を引き裂いてハラワタを抉りだしたくなる苦渋にまみれた決断であったはずだ。

後の聖杯戦争に『始まりの三家』と呼ばれる三つの家門が、一つの儀式のために集うて各々の秘術を提供し合った。

これほど大規模かつ、他家を受け入れた魔術儀式は滅多にない。全ては“万能の釜”聖杯を手に入れるため。そのために、彼らは曲げられぬ信念の一つを捻じ曲げた。

だが三竦みで事を構えた儀式は、そこまですたにも関わらず失敗に終わる。

どれだけ大人数で奇跡に挑もうと成果を得られるのは一人だけ。そんな魔術師の鉄則と実状に、始まりのマスターたちは殺し合うこととなった。

同胞を認め得ぬ矜持を穢してまで盤石の態勢で挑んだというのに、最善を選んだせいで不破を招いたとは、笑い話にもなるまい。

聖杯戦争のルールが敷かれたのはそれからだ。一度目はルールも何もなく、ただ陰惨な結末となったことをマスターたちは悔い、再び争いとなるのが目に見えていた二度目からは、予め戦いの体裁を整えて儀式を行うことにした。

その結果、始まりの三家も、外来の魔術師も関係なく、皆が同列に殺し合いの参加者となり、アインツベルンに残ったものは、儀式

に携わる最古参の家柄という肩書だけであった。

それでもめげることなく、三度に渡る聖杯戦争に参戦したインツベルンは、その全てに敗北の憂き目を見ることになった。

一度目は殺し合いをしている間に、聖杯降臨の機を逃した。

二度目も敗北の辛酸を舐めることとなったが、ルールの綻びを見つけ出した。

三度目には『呼んではならぬモノ』まで用意したと言うのに、異例の速さで敗退する屈辱を味わった。

他の魔術師たちと同格に身を落した挙句、一度として勝利に到達することができず、聖杯を手にする資格さえ得られない。

全ての基盤を組み上げた一族として、それは耐え難い恥辱であったに違いない。

そして四度目 外の人間を代表にたてるという、ある種、反則めいた裏技を犯し、最強の手ゴマを掴み取った。

インツベルンの長・ユーブスタクハイトは、戦闘に長けた魔術師を今代のマスターとして招き入れ、コーンウォールから最強のサーヴァントを呼ぶための触媒を発掘する。

またもや信条を曲げて外部の力に頼るという屈辱に甘んじたのは、敗北の凌辱感に膝を折るよりもマシだったのか。

そうして召喚された英霊がセイバー。ユーブスタクハイトに見込まれた魔術師こそ、衛宮切嗣である。

集団の意志を一千年も貫き続け、一度も道を誤ることがなかった怪物。戦闘力で他に劣りながらも、執念だけで戦い続けてきたインツベルン。

もはや彼らに敗北は許されない。

これまでの苦難が未到達^{むかち}に終わるなど認められず、彼らの聖杯への熱は朽ち果てることはない。

千年の執念は今もなお、絶えることなく息づいていた。

そんなアインツベルンが、聖杯戦争行われる冬木で出城として使用するのが、都市部から遠く離れた場所に建てられた文字通りの『城』だった。

冬木市市街より、直線距離にして西へ三十キロ余りも離れた山中にある、鬱蒼と生い茂る森林地帯。深い森の奥底には、石造りの荘厳な城が存在する。

もちろん、一般の人間はその存在を知ることがない。

重層の幻覚と魔術結界によって守られ、異空間と化した一帯は、森を測量する空撮にも“あやかしの城”を捉えさせることがない。

戦いのために存在し、堅牢な要塞として特化され、聖杯戦争が開催される時期にのみ主を受け入れる魔城。知る者ぞ知る『アインツベルンの城』こそが、アインツベルンのマスターが逗留すべき拠点だった。

城内の一室。個人用の一人部屋と呼ぶには非常に豪華で、そこいらの金持ちなど裸足で逃げ出すくらいに絢爛な寝室の中、切嗣は部屋の威圧感など意に介することなく真面目な顔で何事かを話してい

た。

「注意してほしいのは、言峰綺礼の動向だ。仮に奴が何も企てていないとしても、遠坂時臣は利用できるなら敗者をも利用する典型的な魔術師だ。敵が同盟を組んでいるとしたら、奴はいつか僕らの前に姿を現すことになる」

切嗣はベッドに横たわる女性に語りかける。その声は他の誰と相対した時よりも幾分か柔和である。戦略上の注意点を告げているだけなのに、ここ数日間では誰に見せることもなかった優しさが溢れていた。

「君は予定通り身を護ることに徹して欲しい。わざわざこの森の深い結界の中、マスターもいない城を攻め落とそうと考える奴はいないだろう」

ベッド脇のイスに腰掛け、手元の机に資料を投げ出し、男は手振りを加えて説明する。

アインツベルンの城は、拠点としては申し分ない。どころか、非の打ちどころがない。強力な魔術と天然の迷路という、二重の結界に守られた城を攻略することは難しいことこの上ない。

通常の護りに加えてセイバーという戦力もあり、守りに徹すれば如何なる英霊を以つてしても、恐らくは宝具の使用なしに単騎で攻め落とすこと不可能だ。

しかし今の切嗣にとって、完璧なる城塞はマイナスにしかかりえない。

それほどに強力な拠点を前にしては、敵も慎重になるのが道理。戦闘を生業とする『封印指定の執行者』クラスの術者として、襲撃を行うことは先ずないだろう。

なにせ森そのものが防波堤の役割を有しているのだ。領域内に踏み込んだ段階で侵入が露呈するのでは、奇襲のかけようもない。それこそ戦車か爆撃機でも持ちださないうり落とせない城になど、よほどの理由がなければ好き好んで近づこうとするマスターはいない。

ゆえに、自らを囿とする役目を負う切嗣は城を使わない選択をした。

敵の隙を突くことを基本とする彼は、戦闘となればゲリラ戦を頼みに行ることが多く、籠城に徹するやり方には慣れていない。しかも援軍も望めぬ聖杯戦争で、高い対魔力を有する英霊を相手にした場合の籠城戦は効果的でなかった。

聖杯戦争の勝利条件は最後まで生き残ることではない。敵を殺しつくすことなのだ。

そう思えば、この判断も仕方のないことだと言えた。

「万が一に敵がここを潰しに来たとしても、用意しておいた霊体用の仕掛けを作動すれば、マスターはもちろん、サーヴァント相手でもしばらくは持ち堪えられる。閃光弾でも時間稼ぎにはなるから、最悪、躊躇ためらうことなく城を捨てて欲しい。それと」

と、そこで美女の視線に気がついた。半眼でジッと夫を見つめるソレは、何か恨みや怨恨を残す目つきではなく、どこか拗ねたような、休日の約束を破った父親を咎める子供のような目。漫画などでは「ジト目」と表現されるであろう視線だった。

美しい女性である。雪のように白い、透き通るような肌。人のモノとは思えない煌びやかな銀の髪。衰弱したように血色は悪いが、それでも高貴な宝石を思わせる美貌は些かも衰えない。どこか子供

のような無垢な雰囲気、彼女の人間離れた美しさを引き立てていた。

切嗣の妻・アイリスフィール。ユーブスタクハイトが切嗣に目をつけなければ、今代アインツベルンのマスターとなっていたであろう女性は、普通の人間ではなかった。

人の手による人造物。聖杯戦争のためだけに生み出されたホルムクルス。それが、彼女の正体だった。

「アイリ……、どうかしたのかい？」

男は自身の妻に問いかける。どこか説明に解りづらいつころでもあったのかと少し心配になりながら、長年の相棒が愛する女性にか判らない困惑の表情を浮かべた。

むくれる美女は拗ねるような口調で夫に抗議する。

「だって切嗣ったら、戦いのことばかり。もう少し外の話も聞かせてくれたっていいじゃないの」

ツンと、白い女性は、同じく白いベッドの上でそっぽを向いた。

聞いて切嗣は苦笑した。せつかく生まれて初めて生家の外に出たのに、彼女は物見遊山に楽しむ暇もなく城に引き籠ることになったのだから、不満に口を尖らせるのも無理ないことだと思った。

体調から、既に会話をすることも辛く感じているだろうアイリスフィールの苦痛を思えば、愚痴の一つや二つは愛嬌として軽く聞き流すくらい寛容にもなるというもので、むしろ普段通りな彼女の姿を切嗣は痛々しいと感じていた。

「そう言わないでくれアイリ。今は戦いの真つ只中、外に出たらどんな目に遭っても文句は言えないんだ。今は辛抱して体を休めてく

れ」

注意に不満そうな目を向けながらも、ハイイと、子供のように返答する女の姿を見て、切嗣は軽く溜息をついた。

彼女が本気で言うてはいないことはわかっていた。昨夜は睡眠を取ったとはいえ、ほぼ不眠不休で雑事やら戦闘やらをこなしてきた切嗣に対し、彼女の不平不満はただの甘えでしかない。それを理解できないアイリスフィールではないのだ。

今の態度は、妻と子供を置いて一人遠い戦場へと赴いた夫への、ささやかな仕返しだったのだろう。

幾重もの用意が必要だった切嗣は、妻よりも先に冬木に訪れた。結果としてソレはアイリスフィールを置き去りにしたのに等しい。だから彼女は軽くジャレついで困らせることで切嗣に復讐したのだ。

普段通りに過ごさなければ、男はどこか遠くへ行ってしまうと、心のどこかで理解していたからこそその甘えなのだ。

「確認するが　アサシン、ランサーの死は間違いないんだね？」
「ええ。どのサーヴァントが脱落したかまでは断言できないけれど、英霊が二人消えたことだけは確実よ。貴方が二人倒したと言うなら、間違いはないと思う」

奇妙な問いであった。冬木市に訪れて以降、彼女はずっと城にいた。使い魔を放ち、可能な範囲で街の見物を行うこともあったのだが、敵マスターやサーヴァントに接触するような運用を彼女は避けてきた。

そんなことは切嗣も知っている。なのに、自身が倒したハズの二騎の生死をアイリスフィールに訊ねようとは。

何も知らぬ者たちから見れば実に不可解であろう二人の会話には、重大な真実が隠されていた。

すなわち今回の戦争で使われる聖杯の『器』が、アイリスフィールの身体に仕込まれているという事実である。

“万能の釜”、力の渦としての聖杯は、カタチを持たない霊的存在である。それを現世に呼び出すには、カタチある『器』が必要となる。

その『器』を冬木市まで運び込み、最後の最後まで護り通すことが、アイリスフィールに課せられた役目であった。

過去の聖杯戦争の中には、聖杯召喚の儀に移る前に依り代となる『器』が破損したことで、儀式を断念せざるを得ない事態もあった。そこで、二の轍を踏めないアインツベルンは『器』自体に意志を持たせることで、自衛をさせることを思いついたのである。

危険な賭けでもあった。聖杯は敗れた英霊たちの魂を集めていく収集装置でもある。聖杯を内に宿すということは、儀式が進むにつれて英霊の魂をアイリスフィールの体に溜め込むのと変わらない。強力な異物を身体に溜め込んでいけば、彼女の性能は著しく低下してゆく。

一つの魂を抱え込むのがやっとの人体に、霊長最強の魂を六つも集めるなど自殺行為。

例えるなら狭い宿に何百人単位の客を連れ込むのようなもの。いつか許容量を越え、使ってはいけない部屋にまで客人を通さなくてはならなくなる。

つまり儀式が進んで英霊の魂を回収すればするほど、彼女は失ってはならないヒトの機能を失っていく。いずれは人格や生命維持に

支障をきたすこと必至である。

アイリスフィールは儀式の最後まで自意識を保っていられるか怪しいのだ。

かような不都合が生じるならば聖杯運搬にアイリスフィールを使うよりも、英霊の魂に堪えられるホムンクルスを生み出すことができなかつたと事実を受け止め、魔術師殺しに『器』を委ねるべきであつただろう。

だがアインツベルンは切嗣に聖杯を渡さなかつた。

いつかアイリスフィールが倒れた時、やはり切嗣に頼らねばならなくなると知りながら、アインツベルンは傭兵に『器』を許さず、自分たちが生み出したモノに託したのである。

これで切嗣への信用がどれほどのものか、わかつたというものだ。

それならばそれと、切嗣は妻の苦痛さえも利用した。

女は自らの内にどれだけの英霊が溜まつたか、ある程度は把握でききる。

自分の体の異変だ。英霊の収集具合で苦しみも増すのだから、気がつかないほうがおかしい。それを男は、戦いの進行具合を確認するのに利用しているのだ。

敵サーヴァントの消滅を視認しただけでは倒したと言いきれない。死を偽装されては寝首をかかれる。ならば敗者の墓を暴いて、その死を確信しよう。それが魔術師殺しの目論見だった。

墓荒らしにも似た自分の行いに抱く嫌悪も、妻を利用することへの罪悪も黙殺して。

言うなればアイリスフィールは英霊の墓標なのだ。

サーヴァントがどれだけ敗れたのか。それを今代マスターに示す

十字架。男は戦いの間、妻をそんな「道具」として見ることにしていた。

そう覚悟しなければ、女が死んだ時、彼は後悔に狂ってしまふ。

価値のない女。聖杯を運ぶ役目を終えれば、自らの寿命によって死ぬ女。

初めから死が確定した者を失ったとて、切嗣がコワれることはない。女が死んだ後、聖杯の力で再び生を与えることも男は望まないだろう。それは女の覚悟に対する冒瀆に等しいのだから。

“……ああ、そう言えば自分以外にも『価値のない女』を伴侶に選んだ酔狂な男がいたのだったな”

ふと、頭をよぎった考えに切嗣は顔をしかめる。またぞろ嫌な奴との共通点を見つけてしまい、陰鬱な気分が増えて重くなった。

「切嗣？」

小首を傾げ、心配そうに覗き込むアイリスフィールに「なんでもない」とだけ答える。明らかに“なんでもある”顔だったのだが、出来た妻は夫を追求することはしなかった。

本当は、アイリスフィールを城の外に連れ出して、色々なモノを見せたかった。

女は儀式が終わりに近づけば近づくほど衰弱していく体に造られている。時間が経てば、二度と己の足で大地に立つことも叶わなくなる。

それを思えば、他愛のない彼女の望みを少しでも叶えてやりたかった。

せめてセイバーを護衛に、多少は遊びに行かせるべきかとも思った。未来のない彼女にも、一時の夢を体験させてあげるべきではな

いのかと何度か自問した。

だが、それは今の状況では軽率だ。アイリスフィールの役割を知らない者が、彼女を『アインツベルンの予備マスター』とでも判断した場合、命の危険に晒されることになるのだから。

いかにセイバーが優れているとは言え、戦いとなれば敵サーヴァント一騎に集中するしかない。サーヴァントがサーヴァントの相手をしている間、マスターたちは無防備となり、どうあっても敵マスターの脅威に晒される。

なので戦闘力の低いアイリスフィールを外に出向かせるなど、慎重を期する切嗣にはできなかった。

それにあの生真面目な騎士は、マスターの息抜きでもない遊びの付き添いなど、あまり良い顔はしないだろう。

サーヴァントは戦うための存在と割り切る彼女は、戦時に不必要な行為は己の存在を否定すると捉えている。主に強く命ぜられれば従うだろうが、マスターから離れて他者の護衛など、余計な感情を抱かせかねない。

切嗣はセイバーを信用してはいない。なので必要最低限の行動以外、叛意を増長するマネはできるだけ避けていた。夢を共有するほどに繋がりが強くなって、それでも男は戦友と呼べるほどに背中を預けた相手を信じていなかった。

人を欺き、騙し、裏をかくことを主な手法としてきた切嗣は、どうしても他人が信じられない。それは時間の経過による信頼などで覆せるものではなく、裏技を生業としてきた人間はそれ以外ができないということだ。

もしも、切嗣よりも強力だと判断できる魔術師が現れた時。もし

も、切嗣よりも勝率が高い魔術師がマスターとして名乗り出た時。

果たしてセイバーは、本当に切嗣を護り続けるだろうか？

裏切りなど常套手段としてきた男にとって、他人の反逆を想定するのは至極当然の思考である。忠節を重んじる騎士が相手でも同じことだ。舞弥のように、自分の手で一からすべてを育て上げた者ならいざ知らず、完成された他人に大切な“荷”を預けるなど、彼ならば絶対に有り得ない行為だった。

現状、その警戒に意味はないが、この先の戦いで状況が不利となった時。アイリスフィールの役目を知ったセイバーが彼女を攫い、他のマスターにつかないとは断言できないのだ。

サーヴァントとは聖杯奪取を目的として現世に蘇った存在である。願望機を得るために必要ならば、マスターを背後から刺し貫くことだって有り得ない話ではなかった。

忠誠と悲願を天秤にかけて、より確実な『結果』を優先する恐れがある相手に、この戦いではアイリスフィールが最も重要な役目を担っていると、こちらの『弱点』を教えることはできなかった。

男は妻になにも与えることができない申し訳なさを嘔みしめながら、いずれ切り捨てなければならぬ女性に同情をすることがないよう、悼む気持ちを押し殺して、強引に心を落ち着けた。

「僕らはこれからこの森でキャスターを迎え撃つ。君は城から出ないようになしてくれ。ここは聖杯戦争にのみ特化した城だけあって、遠坂や間桐の家よりも防衛力が高い。ここにいた方が安全だ」

監督役と遠坂の結託を疑う切嗣としては、本来なら彼らの提案に乗る意味は薄い。キャスターを討ったとて、公平に令呪を渡すかも

疑わしい。が、他の獲物を狙えない以上はキャスターを斃さねばならない。こうなれば敵にみすみす令呪を渡すわけにもいかないからだ。

唯一の不安としては、城の護りを警戒したキャスターがこちらに出向いてこないことだが、敵がセイバーをジャンヌ・ダルクと心酔しているなら、そのうち必ず現れると切嗣は読んでいた。

「貴方が前に言っていた、円蔵山は使えないの？ 敵の迎撃なら、あそこ以上に適した場所はないんでしょう？」

戦闘用ホムンクルスの二、三人はアハト翁に借りてくるべきだったかと、独りごちる切嗣にアイリスフィールは問うた。

城の周辺が戦場となれば、自分の命が巻き込まれる可能性も高まると察しながら、アイリスフィールの声には怯えの色ひとつ含まれてはいなかった。それだけ夫を信頼しているのだ。

「ああ、実際にセイバーを連れて見に行つて確信したよ。ただ、今からあそこを拠点に仕上げるとなると時間が掛るし、非効率的だ。実践派の僧侶がいらないとは言え、修行僧全てに暗示をかけるのも少し厳しいからね」

切嗣は煙草を吸おうと懐に手を伸ばしかけて、はたと横になっている女の体に悪いことに気づき手を止めた。誤魔化すように言葉を繋げる。

「それにいくら優れた霊地だとは言つても、今回の召喚場所が円蔵山でない以上、身動き取れない状態になるのは避けたい。今回はあそこは使わないよ」

優れた霊脈をいくつか有する冬木市の中でも、聖杯召喚に適した

霊地は四か所存在している。

柳洞寺を頂く円蔵山。管理者が陣取る遠坂邸。丘の上に立つ冬木教会。そして新都の新興住宅街の中心に建てられた、真新しい公民館である。

儀式の要である聖杯の召喚を行う土地はどこでもいいというわけではなく、戦争のたびに相応しい土地が定められている。

確かに六人のサーヴァントが消滅した後なら、四つの候補地のどこで聖杯を召喚したところで、願望機として使用する程度の力を持たせることはできる。

しかしそれでは不完全なのだ。

聖杯はカタチが存在していないため、いつ、どこで、何に呼び出すかによって完成度合いが大きく変貌するのである。“本来の機能”のために完成を目的とするなら、最も相応しい場所で聖杯の召喚を行わなければならなかった。

今回の戦争で召喚地に選ばれたのは第四の霊地。もともと冬木に存在したのではなく、かつて三つの霊脈が魔術的に加工されたことで偶然出来上がった後発的な霊脈こそ、此度の儀式に使用される祭壇であった。

召喚地が巡ること自体が儀式の一部として組み込まれているか、はたまた一度使用した祭壇は傷ついた霊脈を百年単位で休ませた方が良いのかは、知ったところで優位に立てるわけでもなし、システムの改竄も不可能なので切嗣はわざわざ調べてはいない。

祭壇が円蔵山でさえあれば、聖杯を有するアインツベルンの陣営は有利に立てた。後半は多少無理をしてもそこに陣取って、セイ

バーを正門前に配置することでサーヴァントを迎え撃ち、山道脇の木陰から舞弥との二重射撃を以ってマスターを仕留めるという手段も選べたのに。残念だと言う他にない。

とは言え、公民館が祭壇に定められているなら、その前提での戦略を練るだけのことだ。後半には先んじて聖杯を確保しているアドバンテージを活かし、聖杯召喚を餌さに敵を誘き寄せ、セイバーの剣戟と多重の罠をもって敵を葬る予定だった。

予め祭壇に罠を準備しておくことは難しい。公共施設が造られているために、さすがにインツベルンの財力をもってしても土地の買収はできなかったのだ。

そのため罠の設置は儀式の当日に行くことになる。多少、突貫工事にはなってしまうが仕方ない。敵対陣営に抑えられることがないように、今は舞弥が見張りを続けている。

「それじゃあ、僕は次の戦いに備える。君は無理をしないように気をつけてくれ」

切嗣はさらに、いくつかの確認と打ち合わせを済ませると、アイリスフィールとの話を切って立ち上がる。談笑に花を咲かせたかろう妻の本心を考えれば、後ろ髪引かれる思いだった。

「……ねえ、切嗣」

アイリスフィールが声をかける。その声は非常に重く真剣で、雑談に興じようというモノではなかった。部屋から立ち去ろうとした切嗣は足を止めた。

「始まりの三家のどこかが儀式本来の目的を達すれば 協定も意味がなくなつて、聖杯戦争は終わるわ。成果を得た後、『大聖杯』をそのままにしておく魔術師なんて、いるわけないもの。そして貴

方が勝ち抜けば、貴方の悲願も果たされる」

紡ぐ声音は約束された未来を謳うようで、どこか悲しみが見え隠れしている。

未来を夢見て語ったところで、自分には空想巡らせた“もしも”は意味がないと知っているからだ。

「私は貴方が成し遂げてくれると信じている。全てが終わったその時は、役目の無くなったイリヤを護ってあげて」

女は微笑みながら、男に手を伸ばした。そこには深い信頼と慈愛が籠められている。切嗣を見つめるアイリスフィールの眼は、どこまでも夫を信じる妻の眼差しだった。

女の言葉は遺言だった。自分に未来は望めないと理解する者が、最も愛する男に、最も愛する我が子を託したのだ。

一瞬、黙ってしまった己を悔いた。

すぐに領けなかった自分を責めたかった。心を痛めてしまった自分を罵りたかった。

イリヤの名前が 愛する娘の名前が出てきたことに、僅かながら動揺してしまった自分が腹立たしかった。

「……………ああ、約束するよ。僕は勝つて、必ずイリヤを護る。だから安心してくれ」

娘を迎えに行くとは口にできず、絞り出すようにソレだけ答え、男は女の手を取った。細い手首と、冷たい手のひらは、女を雪の精であるかのように錯覚させる。

男は必ず勝ち残る。切嗣は、理想を叶えるためだけに暗殺機械と成ったのだ。それが勝てないハズがない。

自らの願いを果たすために、己の命を使い潰してでも勝ち上がるのだ。自ら聖杯しとうを捨てない限り、男に敗北の二字は有り得ない。

ただ。

勝ち残りさえすれば、もう戦いに身を投じる必要もなくなり、男は娘を迎えに行くことができると思じた、女の淡い希望が叶うかどうかは解らない。

自分の命を顧みない男は、女の気持ちを理解していて、それでも自身の戦い方を変えるつもりはなかった。己の身を護る戦いに徹してしまつては、命懸けの敵を相手取って勝ち残ることなどできないのだから。

仮に自分が死んだとしても、勝利を得ることで愛娘イリヤスフィールが責務から解放されるなら。そのように考える男は、虚偽の返答をしたわけではない。女の不安を拭うため、敢えてどんな受け取り様もできる言葉を選んだのだ。

それはアイリスフィールを安堵させるためだけではない。

男は妻の前では、冷徹な暗殺者の仮面を外すことができた。彼女と過ごす時間だけが素の自分でいられる時だった。

弱さだと、そのうち冷たい顔も見せなければならぬ時が来ると覚悟しつつも、せめて今だけは彼女が抱く切嗣の人物像を壊したくなかったからこそ、娘を護ると約束した。

暖かい夫だと信じる妻の想いを裏切る瞬間を、わざと先延ばしにするために。

今度こそ会話を断ち切り、部屋を出て、切嗣は扉の前で待機していたセイバーと合流する。

従者はこれまでのダークスーツによる男装とは異なり、清純なイメージの純白ドレスに身を包んでいた。

簡素なドレスは上品なレース柄以外、目立った装飾は見受けられない。着飾ることを念頭に置きながらも、決して派手ではなく、かと言って質素でもなく、着る者を清楚に見せることを意識しているのが窺える意匠である。

何も遊び半分でこんな恰好をさせたわけではなかった。キャスターはセイバーを聖処女シヤンヌと思い込んでいるので、セイバーをさらに“それらしく”見せることを優先して、この衣装を着せたのだった。

これは本来アイリスフィールの持ち物で、サイズはセイバーに全く合っていない。仕立て直す時間もなかったために、ドレスの裾を切り、胸元には大量に詰め物を入れることで、何とか着ることができるようにしたのである。

少々動きづらいという難点はあったものの、キャスターを誘き寄せる『餌さ』として確実に機能させるための装束であったので、そこは特に問題にはならなかった。

ちなみにプロデューズ兼コーディネイトはアイリスフィール。衰弱した身でありながら、セイバーを聖女風の装いに仕立て上げると聞いた瞬間に目を輝かせ、止めるのも聞かず嬉々として少女の着せ替えを行った。その熱の入り様たるや、セイバーや切嗣を辟易させるほどのものだったのは余談である。

生前は男装ばかりしてきたセイバーは気恥ずかしらしく、アイリスフィールに誉めちぎられては赤面して露骨に話を逸らす、これまでに見せなかった表情からすると、一応気に入ってはいるよう

だ。

そんな従者も、今はアイリスフィールと過ごす時の穏やかな表情はなりを潜め、敵を斬り殺す意志を有する戦士の貌となっていた。聖女を模した格好をしているにも関わらず、彼女の意識はいつでも戦場に赴くことのできる剣士そのものだった。

一礼するセイバーを従えた時点で、切嗣は冷酷なる魔術師殺しの顔を取り繕うことには成功していたが、頭の切り替えが追いついていない自分に苛立ちを噛みしめた。

衛宮切嗣がアイリスフィール・フォン・アインツベルンを娶ったのは、今から約九年前のことである。

当時、アインツベルンは戦闘派の暗殺者として活動をしていた切嗣に接触し、聖杯戦争の知識を与えると共に傭兵として彼を雇い入れた。

彼がアインツベルンに召し抱えられる条件は二つ。ひとつには聖杯戦争に勝利し、その恩恵をアインツベルンに齎すこと。もうひとつは敗北の保険として、より戦闘向きの後継者を残すことだった。

成功の暁には、正式に一族に迎え入れるという報酬が用意されていた。

破格の条件だった。どこの生まれともわからない雑種を由緒正しき家柄の末席に加えるなど、本来ありえない待遇である。

だが切嗣を一族として認めるために宛がわれた女が、人間ではなく『最高のホムンクルスの雛型』だと言うのだから、アインツベルンが切嗣をどう思っているか透けて見える。

彼らにしてみれば、切嗣も、アイリスフィールも、道具の一つに

過ぎないのだ。でなければ二者を懸け合わせて優れた後継者を造り出そうとは思うまい。

男はそれでも構わなかった。

別に貴族の地位を欲したわけではなかったし、肩書きになんの魅力も感じていない。分家も持たず、他の魔術師との交流もなく、我らこそ至高の血族と驕るアインツベルンの歪んだ誇りなど、彼にはまったく興味の持てないこと。

切嗣がアインツベルンに組したのは、願望機を手に入れるただ一点のためだ。彼が懐く目的の前に、願望機の実在は魅力的だった。聖杯本来の機能はアインツベルンに譲るとして、その力で自分のために願いを叶えるのが切嗣の企みだった。

だからアイリスフィールとの婚姻に躊躇はなかった。願望機の情報を提供してくれたアインツベルンに恩義は感じていたというものもあるし、儀式の参加者として聖杯に認められるには『始まりの三家』の人間となるほうが確実だったのだ。

それは言うなれば“戦略結婚”である。機械となった男に、ヒトモドキの女を抱くことへの抵抗はない。生まれてくる我が子が利用されることは初めから承知だったので、そこに悲しみを覚える余分さえ在りはしなかった。

アインツベルンの代理人^{マスター}となる契約を交わした時、不満も異論も挟まなかった。彼はただ目的を果たすために、人ではない女を伴侶として受け入れた。

婚姻は目的のための手段だった。……手段でしかなかった、ハズだった。

なのに、そこに愛が芽生えてしまったのは、なんの間違いだつたのだろう。

男は妻を女として愛し、女との子供を我が子として愛してしまつた。

その感情は、全てを得るために全てを捨てたハズの男の胸中に紛れ込んだ異物だつた。

自分の想いがついた時の苦痛は、どれほどに重いものだつたことか。

妻・アイリスフィールと、娘・イリヤスフィール。切嗣という男が愛する者たちは、切嗣という魔術師殺しの足枷となりかねない障害だつた。

より大勢の人間を救済することが彼の願いである。一人を切り捨ててでも、より多くを救うと心に定めたその決意。

ソレは、見知らぬダレカも、愛しい女も、等価の命として見なければならぬということだ。特別に愛する存在など、彼にはあつてはならないもの。

では愛を得て、男の性能は全盛期より衰えてしまったのであろうか？

否。例え何を手にしようと、そんなことで彼は衰えない。

なぜならば、彼はこれまでソレを知らなかつたのではなく捨てる^てきたのだから、今更そんなことにたじろぐことはない。捨つてしまつた余分は、また捨てるだけのことだつた。

確かに家族との歳月は夢のような日々だつた。

正義の味方になると決めて以来、得られるはずのないと知つていた幸福を味わつた。妻子と過ごす時間は、何ものとも比較できない暖かな安らぎだつた。

あの日々に溶けてしまいたかった。外のことなど何も考えることなく、冬の城で家族と共に生きる日常を甘受したかったのだ。……そう、密かに願うだけに留めて、彼は九年間の休息を過ぎた夢だと割り切った。

鉄の心は揺らぐことなく、こうして健在だ。途方もなく遠い理想を追い求めた男は脆弱に墮ちることがなかった。機械に徹する限り、情の欠片も持ち得ない。

だが、理屈あたままで感情こころを殺し続けた時、そのツケは肉体かいたに回ってくる。

「うっ……!!」

突如、男は自らの口を押さえて蹲すくった。

痙攣するかのように震えだし、片膝をついて込み上げてくる苦みを呑み込もうとする。

「キリツグ!？」

セイバーが駆け寄り、抱きとめるようにして体を支える。それで少しは楽になったのだが、男は喉の奥からの不快感を御しきれず、切嗣の自制は決壊した。

「おえ……………ゲエ……………ガハッ……………!!」

切嗣は盛大に嘔吐した。これまでのストレスを全て吐き出すように、強い酸性の苦みを荘厳な城の通路にぶちまける。

ここ数日、彼が口にしたものは携帯食料ばかりだったためか、ほとんどの胃液しか出てこなかった。

「うあ……………ガア……………!!」

吐瀉物の上に両肘をついて倒れる。ゼエゼエと肩で息をする背中をセイバーが擦こすった。戦時において常に冷静な彼女には珍しいこと

に、主を氣遣つて心配そうな顔を浮かべている。

そつだ。切嗣は人間として大切なモノを全て見捨てて、いまなお踏みつける覚悟を以つて突き進んでいる。人としての平穩、得られたかもしれない“もしも”を否定しなければ理想を貫けない現実に耐えて、泣きそうになりながら歩いてきた。

今また愛する者たちを切ろうとしている。

彼の願いは人々を愛するからこそ生まれたモノ。なのに、たった一人の人間を深く愛することさえ許されない。ヒトとして大切な全てを蔑ろにして、
本当ならば手放したくなかつた人間の心を全て否定して、ここに立っている。

切嗣の選択に感情は宿らない。常に冷静に、常に冷徹に、常に最善の行動を選ぶ。

卑怯と呼ばれる手を用いても、目的を遂げることにつながるならば、容易く外道を進むことができる。

……それは、あくまでも大勢の命を救う『正義の味方』として正しくあるための機能であり、本当に感情が存在しないわけではない。周囲になんと思われたとしても、皆が幸せであるならそれでいいと願うからこそその戦い方だ。

他人も隣人も同じ一個の命と数えるため自らに課したルールは、男に延々と傷を与え続けるものだった。

彼は人間だ。それも、他人の痛みを自らのモノと思えるほど心優しい人間だ。なのに機械に徹し、愛する者を犠牲とすることが、どれほど苦痛を伴うのか。

人を愛することは、他人を自分の一部として認識するのと同じだ

と言える。自らと同じほどに大切と思える相手を殺すのは、自分の半身を斬り裂くような痛みだ。人間を愛することしかできない彼は、決して慣れることない辛苦を何度だって体験してきた。

これまで彼は余分な荷物を全て捨ててきた。敵を屠るためには、何があるうと動じないマシンとなるのが一番だったから、それを実践することで無敗の暗殺者で在り続けた。

その代償がコレだ。大切なモノを拒み、心を削る懊悩に苛まれる。自分の幸福など望めない道化のような人生だ。

もし、彼が弱ければ。何もかも途中で投げ出してしまえるほどに心が弱かったなら。あるいは、自身の幸福を選ぶ道もあったのかもしれない。一生、罪悪感に囚われることになっただろうが、罪を重ね続けるよりは心が楽であったはずだ。

理想も痛みも全て忘れ、妻子と共に生きることができたのであれば、どんなに楽しい人生になっただろう。

彼にその道は選べない。これまでに犠牲とした命を偲べば、自らの業を捨てるなど彼にはできなかつた。いまさら自らの半生を、これまで犯した罪を、すべて無意味にすることができなかつた。

いつそ異なる人格を用意してしまえばよかつた。傷つくことなく、外の感傷に心動くことのない人形のような自分を、文字通りの意味で“作り出す”べきだつた。本来、それだけで彼は完成していた。例えば魔術で別の人格を生み出すことは、衛宮切嗣ならば容易いことなのだ。

だが、切嗣はソレをしなかつた。

彼が求める“願い”は人間としての意志があつてこそ。想いを誤魔化した人間では聖杯を得ることもできないし、願いを叶えるにも

値しないと彼は信じた。痛みを抱えながら進むことを自ら選んだのだ。

それでなければ、聖杯には届かない。届く価値すらないのだ、と。

つき合い短い従者は主の事情など知るわけもなく、矢継ぎ早に言葉をかけて。

「マスター、やはり体に負担をかけていたのではありませんか？今の貴方は顔色も優れません。治癒魔術の類を会得していないのでしたら、しばらく横になっていたほうがよろしいかと」

例え本心を見せようとしぬい男であるにせよ、セイバーにすれば絶対に護らなくてはならない大切な主。ひとたび契りを交わしたならば、その身を気遣うのは当然だ。

憂慮する少女を制するようには、切嗣は首を横に振る。なんでもないからこれ以上踏み込むなという意思表示に他ならなかった。

しかしそれで引き下がらないのがセイバーというサーヴァントである。忠誠心厚い彼女は主の意志を尊重するも、それが間違っていると判断すれば異論を唱えもする。それがマスターの身体に関することであるなら尚更だった。

「いいえ。客観的に見て、今の貴方は戦える状態にない。今後の影響を考えるなら、少しでも身体を休めるべきです」

どうやら、切嗣の苦しみを魔術か何かによる肉体負荷の反動と判断したようだ。

セイバーが見てきた限り、切嗣が眠ったのは英霊召喚の反動に耐えきれなかった初日と、昨日の夜だけ。後はランサーを倒した夜の車内で身を休めた十数分くらいなものだ。主の不調が肉体的なモノ

と思っても無理は無い。

連日の徹夜に加え、携帯食料による最低限の栄養補給。さらには幾度かの戦闘。お世辞にも自身を気遣っているとは言えず、常に身体を酷使し続けているのだから、心配されるのも当たり前である。

少女の言っていることは実に正しい。この身体すら道具と定めて戦いに臨んだとて、どこかで倒れてしまつては元も子もない。切嗣にとつての最強のアイテム、衛宮切嗣という肉体の性能を落とさぬためには休養を取ること重要だ。

森の結界は強力だ。敵も簡単には破れないし、無理に挑めば手痛いしっぺ返しを喰う。サーヴァント感知とは別に鋭い感覚を持つセイバーは、人気のない森で近づく気配があれば、すぐに異変を捉えて現場に急行できるのだし、彼女を見張りに立てて少しは眠っておくべきかもしれない。

ただしそれは、本当に肉体が休息を必要としているなら、という場合に限る。

従者が何を言ったところで、今の切嗣にとっては余計なお節介だ。なぜなら彼の不調は、セイバーが言うように体調を崩したものでなく、単にこれまでの鬱積が爆発しただけだったからだ。

感情の波が堰を切つて溢れ出したただだと従者に弱音を漏らせるハズもなく、切嗣は少し従者への返答に迷った。頭を冷やせば、すぐにメンタルコンディションを調えられるので、セイバーの心配はしよせん杞憂でしかないのだ。

兎に角セイバーを落ち着かせるため、適当な説明でもしようと思ひ、初めて少女に対し口を開こうとした切嗣は、次の発言を聞いて

言葉を引っ込めた。

「まずは御自分を大切になさってください。失礼ですが、貴方は自分を蔑ろにしすぎている。目的の前には自身の命をも使うのが魔術師と言うのでしようが、それで戦いに支障をきたしてしまつては本末転と

そこまで喋つたところで、セイバーの口の動きが止まった。

剣の英霊の進言を止めたのは、殺意も抱かんばかりに睨みつける主の鋭い視線だった。嫌悪と憎悪が入り混じる瞳に見えたのは、きつと自分の勘違いだと、セイバーは思うしかなかった。

それは「お前にだけは言われたくない」という非難の視線だったのだが、剣の英霊は「余計なことを言うな」と咎めるモノと受け止めた。主は従者に対して口数が少ない　どころか話かけたことすらないので、未だに主の本意を読みぬセイバーには、そのようにか見えなかったのだ。

「……なるべく御自愛を。御身を護るのが私の役割です。無理をなさつて倒れられては、私の立場がなくなつてしまつ」

主に邪険にされたセイバーは顔を伏せて引き下がった。単にマスターがごねるだけなら、彼女だつてもつと強く出る。だが自らの行動を理解した上で忠告を拒絶するとあつては、引くしかなかった。

少女にとって主の態度は不服だったかもしれない。このサーヴァントはマスターを信頼している。否、信頼するように努めている。生前は王としての役割に徹した少女は、今は従者としての役割に徹しているのだ。

出来ることなら従者を信じて、胸の内に抱えているモノを吐きだして欲しかったことだろう。

その想いで伸ばした手を、切嗣は払い除けた。人らしい交わりを拒絶した。それは二人の立場を明確化するものだった。

切嗣は自身を叱咤した。主の身を気遣うという、従者として当然の反応をしたセイバーに声をかけてしまいそうになった自身の愚を責めた。

気を遣わせたくなければ弱みを見せなければいい。そんな当たり前のことができなかった己に怒りを覚えたのだ。

ハッキリさせておくが、切嗣は別段セイバーを嫌っているわけではないし、特別に好感を持っているわけでもない。少女の過去を垣間見た切嗣であったが、おかげで何か彼女への態度が変わるということもない。

そもそも好悪の感情で対応を変えるなど、人間ならまだしも、機械にそんな馬鹿げた機能は附随していない。同情心に似た感情や、自分でも説明できないイラ立ちを抱いても、それを態度に出すようなことはなかった。

セイバーに「話しかける」ということをしないのは、役割を貫くことで自らを律しようとしているからだ。

声をかけるのは命令を下す時のみ。自分はマスター。セイバーはサーヴァント。その分を超えることはないし、それ以外の意味や価値を認めてはならない。そういつた前提で動いている。

セイバーは道具であり、意志ある人間だと思ってはならない
アイリスフィールと出会う前の己を取り戻すため、彼は徹底して“
魔術師殺しの自分”としてサーヴァントに対応していた。

皮肉にも従者の発言への嫌悪によって説明を断ち切ったことが、本来あるべき自分の立場を思い出させた。

アイリスフィールを見限ろうとしている以上、少なくとも聖杯戦争の間は人間に戻るわけにはいかなかった。そのことを切嗣は思いだし、妻との会話で崩れかけた外殻を持ち直したのである。

彼の動悸が唐突に激しくなったのは、決意を改めたのと同時だった。

森に張り巡らされた結界の術式が、切嗣の魔術回路に侵入者の警戒を呼び掛ける。この警報は、簡単に結界と肉体を繋げた切嗣のみならず、城の主であるアイリスフィールも把握しているだろう。

さっそくか。そう切嗣は呟いた。

「できるなら舞弥が戻ってからがよかったが　　そうまでタイミン
グよくはいかないか」

一網打尽にされることを警戒し、一箇所に集まることを極力控えて行動してきた弊害だった。

予想よりはるかに早く訪れた戦いの風を肌で受け止めながら、男はこの先の苦難に想いを馳せるように虚空を見つめた。

17 六日目・夜 - 剣の主従3 - (後書き)

戦闘用ホムンクルスとか出したかったけど、オリキャラ出さないって言うってしまったんで我慢しました。

「柳洞寺は今回の祭壇」「召喚場所は第一次と同じ場所に戻った」「だからキャスターも寺を手放せない」など、予め聖杯召喚地が決められているような発言を五次で色々なキャラが言ってますので、今回そつちに合わせました。

本作品の切嗣は五次の言峰の評価に沿うキャラにしてるつもりです。誰のモノとわかる使い魔を教会に差し向け、言峰の目を惹くマネしておきながら「危険な奴に狙われて怖い」とアイリに泣きつくことはありません。別の理由で泣き言を言う可能性はありますが。

だいぶ前のカジュアル洋服セイバーや、ドレスセイバーは「四次では様々な変装をした」という設定を補完するために無理矢理出しました。

セイバー着せ替えシリーズがやりたかっただけってのが本音です。

戦の勝敗とは、すなわち如何にして相手の心をへし折るか といふところに帰結する。

武力で敵を殲滅、あるいは制圧するというのは、敗北感に身を委ねることのない者たちを相手にした場合の最終的な手段。勝利には、敵にどこで妥協を決意させるのか、どうやって戦う意思を剥奪するかが鍵となる。

圧倒的な戦力を以って敵を搦じ伏せるも、卑劣極まりない手練手管を以って敵を貶めるも、肝心な部分は大きく違うものではない。

個々の決闘ならば、互いの健闘を讃え合うことで戦いが終わる状況もあるのだろうが、それも好敵手を認め合うがゆえに戦う気が削がれたということであり、戦意を喪失しての決着に変わりはない。

さて、人質作戦とは切嗣が得意とする手法の一つである。

敵の心を挫くという意味で、切嗣が最も頼りとする戦法は、個々人が戦いに馳せる想いを越える“何か”を贄に用意することだった。

曰く、魔術師とは身内に甘い。

目的には手段を選ばぬ魔術師たちも、研鑽を引き継ぐ後継者として見ているためか、はたまたその家系特有の苦しみを共感できる同士のゆえの親近感か、子供や弟子には甘いものである。

他人を研究の道具として切り捨てることができる冷血漢も、家族の前では穏やかな人格者となるケースは少なくない。

それゆえ、必然として標的の身内を人質に使うことが多かった。

隙あらば敵の家族・友人を盾とする。それが、衛宮切嗣の必勝のスタイル。卑怯、外道と罵られようとも確実に悪を討つ、彼の覚悟を体現した戦い方だった。

しかしそんな油断を見せる魔術師が少ないのも、また事実である。現にこの聖杯戦争でも人質として最適な者たちを吟味し、いくつかの陣営から盾を調達しようとしたが、ガードが固いためにあえなく失敗した。

戦いが始まる以前に、予め用意しておくべきだったと思う者もいるかもしれないが、そうではない。

実際に事が始まってみなければ判断が下せないことも多いのだ。

高名な魔術師を参加者と思わせておいて、その実、無名のマスターを立てるといって戦略だつてあり得る。あまりに早期に敵の家族を一人を捕えれば、残りのマスターにいらぬ警戒も与えてしまう。ゆえに、通用するかも判らない盾を事前に用意しておくことはできなかったのだ。

上記の懸念は、実は切嗣が期間ギリギリまでサーヴァントを召喚しなかった原因の一端でもある。

参加者が“誰”であるのか、本当に事前に調べた情報で対処可能なのか。ソレが確信できるまで、彼は囿の任を実行することができなかったのだ。

間桐邸を襲撃した時、鶴野を雁夜への盾に使おうかとも切嗣は考

えたはずだ。結局そうしなかつたのは、間桐のマスターである間桐雁夜の背景を見るに、鶴野は人質たりえる者と思えなかつたからだろう。

遠坂桜　もとい間桐桜という、遠坂から譲り受けた養子もいるようだったが、そちらを探し出すこともしなかつたのは、恐らく間桐の後継者を産むために用意された女兒など、いくらでも替えが利くものとして見向きもされないと思つたためだ。

衛宮切嗣という男の戦術全てを知る女は、わざわざ余計なことを説明しない上司の行動を、そのように結論づけた。

冬木市郊外へと続く林道に久宇舞弥はいた。ライトバンの運転席に座したまま、これから己が取るべき行動を思考していた。

女はいくつかの事務を終え、これから郊外の森に向かう途中であった。

情報の交換だけならば無線でも使えばいい　とは決して考えない。敵の傍受を警戒するという意味もあるが、実際に顔を合わせて話し合わなければわからないこともあるからだ。

チラ、と一瞬だけ横目で助手席を見やる。

そこには美貌の女性、遠坂葵が穏やかな寝顔を晒して眠っている。遠坂時臣、ひいてはその部下に当たる言峰綺礼への切り札として小一時間ほど前に捕獲した、時臣の妻であった。

遠坂葵はしばらくの間は目を覚ますことはない。魔術による暗示で眠らせ、さらに念を入れて強めの呪法で意識を刈り取つてある。舞弥か切嗣が許さない限り、近くで爆発が起きようが絶対に目を覚まさない状態だった。

あらゆるマスターがキャスター以外との戦闘行為を中止させられている現在、その括りに当てはまらないのが舞弥だった。一人のマスターをサポートする身ではあるが、彼女自身はマスターではなく、サーヴァントも従えてはいない。彼女が敵勢力に攻撃を仕掛けたとて、追加ルール上では何の問題もない。

が、それで油断した敵マスターを仕留めることができたとしても、監督役に難癖つけられ、切嗣が余計なペナルティを負ってしまうのも困りものだ。そのため、彼女が獲物として狙っているのは敵マスターでもサーヴァントでもなく、「参加者ではない者たち」だった。

つまり人質の確保である。

後に聖杯戦争に影響があることがわかっていても、監督役は聖杯戦争とは関わり合いない争いを止める権利は持たない。ゆえに皆がキャスターに意識を割かざるを得ない今のタイミングを狙ったのだ。

遠坂時臣が隣町にある妻の実家に家族を預けていると知った舞弥は、彼女たちの生活パターンを調べては、何度か人質確保に赴いたことがあった。他の勢力は人質に利用できそうな人物がいなかったため、必然として遠坂に集中していたのだ。

元々、舞弥が狙っていたのは、時臣の娘・遠坂凜だ。

だが凜は幼くして魔術師の自覚を持つ才媛であり、学校に行くため外に出る時も、己の立場を理解してか一人になることがない。舞弥は幾度となく遠坂凜の捕獲に失敗していた。

屋敷に直接乗り込もうかとも思ったが、派手な誘拐劇を演じるわけにもいかず断念した。人質の確保は秘密裏に、迅速かつ静粛に行わなければならない。捕獲後、間を空けてしまえば時臣に対策を練

られてしまい、妻子を見捨てる“覚悟”を固めさせてしまつかもしれないからだ。

誘拐が行えるとしたら、今夜が最後の機会だとして、外におびき出す手段を用意し臨んだのだが、ソレらの出番もなく、拍子抜けなほどあっけなく遠坂葵の捕縛に成功する。

盗聴した内容から判断すると、深夜になって遠坂凜は家の外に出たてしまい、それを探すために遠坂葵も外に出たらしい。焦燥に駆られて娘を探しに出た母親を、舞弥は魔術で眠らせて捕らえたのである。

遠坂凜は行方不明となった同級生を探しに夜の冬木へ向かったようだ。

若くして魔術師の自覚が芽生えている少女は、同級生の失踪は単なる事件ではなく聖杯戦争に巻き込まれたものだと理解し、友を助けるつもりで安全な家を出ていった。

年端もいかぬ幼い子供が、恐怖を殺し自ら考え、自らの意志で己の使命に従ったことは稀有な才能と言える。遠坂凜は遊び半分に行動を起こした愚人ではない。代々伝えられてきた矜持を護るため、進んで行動を起こした意志力は、彼女が傑物である何よりの証明である。

本来なら当事者でもある時臣に相談すべき処だが、何も伝えなかつたのは子供なりに戦時下の父親を気遣ったのだろう。

まだ幼く、戦いというものに対して中途半端な理解しかなかった少女の軽はずみな行動は、結果として母を巻き込み、囚われの身とってしまった。

ここで浅薄を犯した少女に責任を問うのは間違いだ。たしかに義務感やら良心の呵責でいどで動くべきでなかったのは事実だし、軽率だと叱られるべきではある。しかしその叱咤をすべき親が、臆病なくらい娘の動向を恐れていれば、こんな事態を避けることはできたはずだ。

ミスを犯したのは遠坂葵。

いかに魔術師としての素養が高く、実際に年齢以上の自覚と、ここいらの魔術師を凌駕する才覚を持つていたとしても、しょせん遠坂凜はまだ子供。守るのは親の役目だ。娘が無謀を犯さぬよう、目を光らせておくべきであった。

幼さゆえの行動力を娘が発揮した現在。こうなっては遠坂葵の最善は夫に事実を伝え、二人を信じて待つことだけ。娘を救い出しに行つて、逆に時臣の細君たる自分が巻き込まれてしまったら。母親の情を押し殺して、冷徹に判断を下すべきであった。

親が子を案じることを間違いとは言わないが、行動は控えるべきだった。

今後の葵の辛苦は想像に難くない。そのうち時臣に対する交換材料に利用されるだろう女を前にしても、舞弥は特に同情をすることもなかった

家族という足枷を持つ遠坂の陣営に対して、有効打となり得るカードを一枚、やっと手に入れた舞弥は、これを阻もうとする者がいるとすれば切嗣の従者・セイバーだと考えていた。

仮に敵が誰かを人質にした場合、セイバーは命を量り間違えることなく、人質救出ではなく敵の撃破を最優先とする。戦場に巻き込まれた命に固執するほど彼女は甘くない。剣の英霊は目の前の命を

守るよりも、更なる被害者を防ぐため、素早い敵の掃討を選ぶ騎士だった。

生前のセイバーは決して清廉潔白な王でも、聖人君子でもない。戦乱を嘆き、乱世を終わらさるべく立ちあがった王は、救える命は一握りであることを知っている。国を平穩に導くためあらゆる手を尽くしてきた少女は、戦いにおける犠牲は已む無しと受け入れる。

だが、味方が人質を用いるとなれば話は別だ。彼女は無関係な命を自ら巻き込むことは嫌っている。

命の優先価値を間違えないということは、そういうことだ。巻き添えを喰らった者たちに関しては、已むに已まれぬ犠牲と認めるが、そうでない者たちは護るべき対象なのだ。

国に生きる大勢のため、戦場となる村を焼き払い策に利用する冷酷さや、犠牲者を減らすために“捨てなければならぬ命”を見限る非情さを備えてはいても、他人を辱めることを良しとはしない。英霊としての譲れないプライド　　というのではなく、人間としての尊厳を貶める行為を秩序の王は認められない。

敵対者には容赦のない少女が『人質として捕らえた敵の伴侶』をどう捉えるか、舞弥にはわからない。もしかすれば既に巻き込んでしまった以上は仕方がないと諦念に従うかもしれないし、何故こんなことをしたのかと切嗣や舞弥に憤慨するかもしれない。

受け入れるのか拒むのか。どちらにせよ、逆上したサーヴァントがマスターを見限る最悪のケースを想定しておくに越したことはなかった。

遠坂葵の身柄を拘束した後、セイバーの説得に切嗣が令呪を使う

か、あるいはサーヴァントがマスターに剣を向けるはずがないと力をくくり、最後まで道具の戯言を無視するか、そういう展開になるだろうと予想し、それをフォローすることが自分の役目だと舞弥は思っていた。

そう。彼女が想定していたのは人質を確保した後の段階のことだった。

慢心したわけではなかった。既にアインツベルンの森の近くにまで迫り、ここまで来れば切嗣との合流を果たすだけという状況だったので、これ以上は妨害も起こりえないと踏んでいた。

だから、ひとつの不確定要素を失念していたことは、素直に認めざるを得ないのだ。

ほぼ全ての陣営がキャスターに注意を向けているはずだった。だからこそ、他に警戒を割く余力ある者がいないと思っていた。思い込んでいた、と。

舞弥は懐から拳銃を取り出した。9mm口径のグロックは座した体勢からでは出しにくかったが、そんな小さな愚痴は漏らすにも値しない。

……思考に欠慮があった、自分のマヌケさを思い知る。

全てのマスターにとって関心があるということはつまり、既にマスターではない者にとっては無関係なことではないと、なぜ思い至らなかったのか。

表立って出てくることも考えておくべきだった。敗者として教会に居座っているなら後方支援に徹するんだろうと、どこかに楽観があったのかもしれない。ペナルティを警戒して教会に監視を送ることができず、彼が外に出たことを知らないためのミスだった。

舞弥は悔いる気持ちを押し殺した。不注意に対する反省など、後でもできる。今は現状を切り抜けることが先決だ。

この後に訪れる苦難に立ち向かう術を模索していた女は、今は目の前の脅威に目を向け、前方にゆっくりと歩み現れた影を睨みつける。

「そこまでだ。遠坂葵をこちらに引き渡してもらおうか」

よもや　こんなところで敵が立ち塞がってこようとは。

レイピアに近い形状の長剣、黒鍵こっけんと呼ばれる教会武器をたずさえた漆黒の僧侶がそこにいた。

タイヤが破壊され停車したライトバンの中で、舞弥はこの場をどうしのぐべきか、場合によっては傍らで眠る切り札を早々に使い切ることも考慮しながら、思考を巡らせ続けた。

444

代行者。

それは神の教えを説く教会にあつて、唯一“魔を祓う”ことが許される部署に務める者たちの通称である。

誤解する者は多いが、悪魔エクソシスト祓いと神父は別のモノだ。神父はあくまでも人々に神の教えを届ける存在。悪霊を退治するなどというのは専門外であり、神父に魔を撃退する権利はない。

神は唯一にして絶対。至高の存在にして全なる聖霊。その神が作り出した世界において不完全な魂など存在し得ない。神が愛した世

界を穢し、人々を墮落させる魔性など、本来なら在ってはならないモノである。

ゆえに聖堂教会は世に蔓延る魔を、愛する子らに神が与えたもうた試練と定義した。彼らの教義で魔は天の御使いと同格に当たる。人の善性を鍛える聖と対を成す、人の悪性を鍛えるモノ。この世界に不可欠な主の被造物なのだ。

が、天の計りである魔の所業は、天の無力を人に錯覚させてしまうこともある。

あるいは生い立ちの不幸。あるいは権力者の強欲。理不尽な仕打ちに涙を流した者たちは、偉大なる奇跡を天に求め、得られなければ主を否定するに至ってしまう。

そうして、人の身でありながら主の“代行”を行う特例が生じた。

本来なら否定すべき異端と、本来なら傍観すべき試練。その矛盾の両立を解消する者たち。第八秘跡を身につける者。人々を汚辱し冒瀆する魔を滅し、説き伏せるべき異教を排除することが許される殺し屋集団。

教義に反する不徳、他者を殺害する背徳が彼らには許される。

つまりは戦闘のエキスパート。

神の教えに仇を成す異端たちに、唯一戦闘で対抗できる存在だ。

以前の綺礼は、そう呼ばれる立場にある信徒だった。

今回、聖杯戦争に参加したマスターたちの中でただ一人、全能なる主より『殺人』の許しを得ている者。

それが言峰綺礼だった。

それはまったくの偶然だった　ということもない。

言峰綺礼も久宇舞弥も、目的地はどちらもアインツベルンの森。どこかで彼らが噛み合うのは必然だった。

キャスターの動きを掴んだ時臣に従い、アインツベルンの森周辺までやってきた綺礼は、先へと進む師を見送って森の外に残った。

森はアインツベルンの勢力の独壇場。セイバーを連れるアインツベルンは、時臣の望み通りキャスターを追い詰めてくれることだろう。後はタイミングを計ってアーチャーをぶつけなければいい。そんな思惑と共に、時臣は森へと入って行った。

キャスター討伐という点において綺礼は戦力外。よって彼の役目は他マスターの足止めだった。これ以上の介入で戦場が混乱するのは困るため、他勢力が寄って来た場合、敵の動きを封じるよう盟主から言い渡されていた。

もちろん戦闘は最後の手段であり、弁舌と取引で敵を封じるのが彼に期待される役割だった。敵に渡しても構わない情報は幾らか用意してあった。

衛宮切嗣と会えないことは、残念だったような、ホツとしたような、複雑な気分だった。

会ってどうするのか綺礼は未だに答えを出せていない。例え遭遇したとしても、サーヴァントもない今の自分ではセイバーに斬り殺されるのがオチだ。

今はまだあの男に遇うべきではないと思った綺礼は、言いつけら

れた使命に従い、使い魔を通して森に近づく者がいないか確認し続けていた。教会の監視者たちを動員したいところでもあるが、教会側はそこまで時臣に手を貸すわけにもいかなかった。

一台の車が向かってくると知った時、すぐに他の陣営のモノであると気がついた。

こんな夜遅く、どこに行けるわけでもない郊外の道を走る車はそれだけでも怪しいもので、最初はキャスターを狙う者かとも思ったが、遠坂葵の姿を視認したことで敵だと確信に至る。

協定によって、キャスターが斃されるまでマスターたちは互いを狙うことができない。だが、その家族に対しては別である。敵はロールの穴に目を付けたのだと綺礼は行き着いた。

車の主はアインツベルンの陣営だと看破した綺礼の行動は素早い。衛宮切嗣と合流させぬため、ライトバンが近づくのを待ち受け、視界に入った瞬間タイヤ目掛けてを黒鍵を射出させた。

見た目は剣のような黒鍵だが本来の用途は投擲武器。この使い方こそが真の姿である。

練達の使い手は物理的な破壊力に乏しい投剣の活かし方をよく心得ている。射抜くと決めれば、例えば高速で走るスポーツカー相手でも命中させ、コンクリートの強度だろうと刺し貫く。

魔術効果を与えられ威力を増した黒鍵は、的を外すことなく強化ゴム製のタイヤに突き刺さる。ライトバンは予想外の脱輪にもコントロールを失うことなかった。窮地に対応し切る腕前に、やはり乗り手は素人ではないと綺礼は判断する。

そうして、停車した敵の車と綺礼は対峙していた。約15メートル

ルの距離を開け、敵の眼前に立ち塞がり、遠坂葵救出のチャンスを探い続けていた。

「降りろ女。僅かでも妙な動きをしてみろ。次は炎上する車からの脱出劇になるぞ」

聞こえなくとも、口の動きから要求は察せるハズだと綺礼は見抜いていた。

奇襲が成功したからと言って、即座に攻勢に入ることはできない。葵が敵の手にある以上、慎重に対応していかなければならなかった。

動けない足に乗り続ける意味を失くした女は『強化』した腕力で葵を掴み、車から引きずり下ろすように外に出る。片手に握る拳銃を人質に突きつけ、敵にアピールするあたり、綺礼に従う意志は窺えない。

綺礼も迂闊に手は出せない。アインツベルンの森の領域内に入られては助け出す事もできなくなるので、交渉を有利に進めるために止むを得ず足を奪ったが、これから奪還を強行するには些か骨が折れそうだ。

摺り足の要領で徐々に女ににじり寄るも、近づき過ぎれば戦闘になるため大きく距離を詰められない。遠坂の門弟で、かつ同盟関係にある男には、恩師の妻を見捨てて舞弥を殺すという選択ができなかった。

彼だって不幸に陥りそうな他人は救いたい。

悪性しか愛せない身でありながら道徳に生きてきた男は、こういつた場面では人質救出を最優先とする。これまで神に仕える信徒として守ってきた彼の『常識』は、その身が“人である”ことの証明でもあった。

とうに自分が“人でない”ことに気がついていた綺礼だが、それでも人並みの善性に未練はある。神の教えに背を向けても、願わくば人並みの幸福をと望む彼にとって、良識を尊ぶことは何よりも大切なことだった。

綺礼は『悪』に身を沈めることができないでいた。

むろん、助けようがなければ即座に捨てる。自分の命も危うい場面であるならば、葵を撒き餌に撤退するくらいの決意はある。それでも、救える命は自分のために救いたい。

対峙する二人は互いに目を逸らすことができなかった。女を逃がさぬため、そして葵を助け出すために、綺礼は敵の動向から目を逸らせない。隙をついての逃亡を謀る舞弥は男から目を逸らさない。

緊張に張りつめてゆく空気の中、手元のことさえおろそかに、二人は互いの出方を計り続けた。

だから、気がついたのは綺礼が先だった。

舞弥は葵に目を向けることができない。そのせいで腕の中にいる女の、微妙な変化を察することができなかった。

遠坂葵が脂汗を流し、僅かだが痙攣していることに。

「女っ！ 今すぐ遠坂葵から離れろ！！」

人間として善を尊ぶ男は叫んだ。切羽詰まったような声は、舞弥を案じてのものである。それを読みとった舞弥は一瞬の驚きの後、すぐに葵の異変に気がついて解放する。

正直に言っつてしまえば遠坂葵など彼には“どうでもよい”存在だ。それでも見捨てることができなかつたのは　きつと、かつて死病憑きの女を救えず目の前で死なれたことが、中々に堪えるものだったからだろう。

やがて葵の絶叫が止まつた。綺礼も額の汗を拭いながら、己の腕を引きずり出す。

ズルリ。音を立てて姿を見せる綺礼の手には、人間の体にはあり得ないモノが握られていた。

それは、世にも不気味な蟲だつた。

男性器を模したようなカタチに、触角にも思える二尾の生えた奇怪な姿。表面は滑りのある体液に濡れて、そのおぞましさに一層拍車をかけている。逃げようとしているのか蟲はビチビチと手の中で動き回つた。

綺礼は躊躇なく握り潰す。ナマコを潰す感触に似ていた。

これが普通の昆虫ではないことは明らかだつた。高度な魔術で括られた、恐らくは使い魔の類だろう。

苦しみの原因と思われる蟲の抽出は終わったが、それでも葵は涙と涙を流し、ヒクヒクと痙攣している。美貌は崩れ、お世辞にも綺麗とは言えない形相と化している。

壊れゆく女を見た綺礼は、喜びで跳ね上がりそうになる心臓をなんとか押さえつける。

「女、早く暗示を解け!!」

「言われなくてもやっています」

能面のような無表情はそのままに堅い声で舞弥が応える。いつの

間にか綺礼の傍らで、苦しむ女の頭を両手で掴んでいた。

彼女にしても、この場で葵が使い物にならなくなるのは困る。ここで葵を救わなければ人質の価値が無くなってしまふ。焦燥感に身を焼きながら、慣れた手つきで施した魔術を解呪させていく。

らしからぬ選択だ。

本来、舞弥の役割を考えるなら、ここで隙だらけな邪魔者きれいを殺すべきである。

携帯した手榴弾をすべて使うなり、ライトバンに仕込んである爆薬を用いるなり、それこそ回避不可能な攻撃手段はいくらでもあった。葵もろとも爆破したとて、人質一人と敵の使い一人を引き換えにするなら帳尻は合っているのだ。

遠坂への人質と切嗣本人が『天敵』と見做した相手を天秤にかけると、どちらに針を傾けるか問うまでもない。その程度の計算ができない舞弥ではない。

だがどうしてだろう。私情を挟まないように教育されてきたハズの女は、この時に限って理にそぐわない行動を取っていた。

隙があるようで、その実、背後に殺意が迫れば、男は葵を盾にしても逃げ切ると頭のどこかで理解していた。というのも、もちろんある。

それ以上に、舞弥は綺礼を殺す気になれなかった。殺そう、という発想さえ、何故か出てこなかった。

しばらくの間の後、作業を終えた舞弥は掴んでいた手を離す。

「……呪いは解除しました。これで目を覚まさないということは、恐らく、彼女は限界なのでしょう」

その声はやはり固かった。

綺礼も気が付いていた。

葵の主だった霊的機関が軒並み“喰われて”いる。恐らくは蟲の仕業だ。綺礼の腕なら修復は可能だったが、治癒を施したところで霊体へのダメージは今更取り返しがつかない。いずれ目を覚ましたとしても脳の機能に欠損が残り、一生車椅子生活になるだろう。

舞弥は綺礼から離れる。これ以上は近くにいっても意味はない。葵の仇と難癖つけられるのも御免こうむる。

10メートルほど離れただけで、舞弥は撤退もせず現場に残る。この場にあるもうひとつの気配について、なんらかの情報を得ておきたいからだ。

そしてそれは綺礼も同じだった。もう治療の意味もなくなった葵を路面に寝かせ、綺礼は道路脇の森林、暗闇の一角を見据える。

「出てこい。何者かは知らんが、いい加減に顔を見せたらどうだ」

沈黙が流れる時間は長かった。威圧を込めた呼びかけに観念したのか、不気味にきしるような忍び笑いが、冷やかに夜気に紛れ込む。

「ワシごときの偽装は見破るか。さすがは歴戦の代行者。良い勘をしておる」

木陰から、ぞわりと不定形の影が盛り上がる。時間を置いて姿を現したのは、痩せ枯れた矮躯の老人であった。月明かりが老体を照らすまで、なぜか綺礼は密集した虫の大群かと見紛った。

「初にお目にかかる。ワシの名は間桐臓硯。見てのとりの老いぼ

れた爺じゃよ」

地面に杖をつきながら歩み出てくる老躯。どう見ても枯れた老人でしかないというのに、双眸には生命力溢れた面妖な光が宿っている。

間桐臓硯。それは綺礼も舞弥も名前だけしか知らない、間桐の黒幕とされる人物である。

聞いた話ではなんらかの魔術で延命しており、五百年の時を生きる妖怪だと言うが……。老体から漂う妖気とも瘴気とも取れる気配からするとソレも真実か。

危険度においては間桐のマスターを遥かに上回る。たしかに全盛の力を失い、隠居せざるを得ない身ではあるのだろうが、それでも敵二人から逃げるくらいのことではできる食わせ物だ。

期せずしてマキリ、アインツベルン、遠坂の『御三家』マスターを支援する者たちが一堂に会するカタチになっていた。この場で最も厄介なのは臓硯である。綺礼も、離れた位置に立つ舞弥も、老魔術師に全力の警戒を向けていた。

まず口を開いたのは綺礼だった。

「私が聞きたいことはただ一つ　なぜ遠坂葵を殺そうとした？」

間桐と遠坂には不可侵の条約があるはずだ」

返答によつては、この場で貴様を抹消する。暗に示しながら、時臣の部下たる僧侶は黒鍵を向ける。

「おお、怖い怖い。そう睨むでないわ。老い先短い年寄りの寿命を縮める気か」

しゃがれた声で老人は笑う。そこに怯えた様子などありはしない。綺礼の十倍以上の歳月を耐えてきた男は、元代行者を恐れてなどい

なかった。

「ワシが殺そうとしたとは大きな誤解じゃよ。確かにぬしが潰した蟲はワシの作品じゃが、ワシは悪漢の手から哀れな女を救おうとしただけじゃ」

冗談めかした蟲の翁の言葉に、綺礼は目だけを動かして舞弥の方を見る。

表情は相も変わらず無表情だったが、どこか緊張したような気配も窺える。あの老人がいつの間にも蟲を潜り込ませたのか、女にはまったく心当たりがないのだ。近くで見張っていたのに、気がつくべき異変を看過してしまった。とでも、自身の失態を責めているのだろうか。

幾重もの経験を持つ綺礼の目から見て、舞弥は相当な手練れである。そんな女が老人の介入を察知できなかったのは、失態や油断があったからではない。舞弥以上に眼前の男が老獪だったただけだと綺礼は結論を出し、臆視への警戒をより深めていく。

「囚われの姫君を救うなど当たり前前の話であろう。遠坂には娘を譲つてもろうた恩義もあったでな。そこな小娘から息子の友人を救つてやるうと思つたのよ」

なおも詭弁を弄する臆視に、綺礼は目を細めた。

「しかし結果として遠坂葵の意識は“死”んだ。老人、貴様は初めからコレが目的だろう。あの蟲に遠坂葵を喰わせる。胎盤として優秀すぎるという彼女の肉体なら、どこかしら貴様の望む部位があったはずだ。蟲を成長させることが狙いだつたな？ そのせいで彼女がどうなるうと構わなかったのではないか」

「それこそおぬしの憶測じゃな。ワシは蟲を体内に潜ませ、救い出す機会を窺っておつたにすぎん。意識を奪われた肉体を動かすために、多少の無茶はしようとしたが、それだけじゃ」

子供の言い訳じみた説明は、真実、子供だましの戯言以外の何物でもない。老人は何と責められようと建前を押し通す気だ。

臓硯の言葉に嘘はないのだろうと綺礼は感じていた。この男は自分と同じで、嘘は吐かないが聞かれない限り肝心なことも言わないタイプなのだろうと、どこか同属嫌悪に近い直感を抱いていた。救おうとしたというのも嘘ではあるまい。

ただし純粹に葵を哀れんで時臣の下へ返そうと思つたのではなく、利用できるなら利用し、それが適わぬなら救い出してやるくらいの気まぐれでしかない。上手く事が運べば敵に責任を擦りつけて蟲の苗床に。蟲が期待通りに機能しなかった場合には、女を助けて遠坂への義理を果たす程度の腹積もりだったのだ。

間桐と遠坂の条約など聖杯戦争下ではほとんど意味を成さない。どこで間桐と遠坂が戦い、誰の争いに巻き込まれるかも判らぬ状況では、不可侵など保っていられない。互いの敷地内にこそ攻め込まずとも、出会えば殺し合うことは暗黙の了解である。

場当たりのな老人の行動も、戦争のドサクサに紛れただけの戯れだ。偶然の機会に優れた“胎盤”を取り込もうとした老人は、遠坂との争いを恐れてなどなかったのだ。せいぜいアインツベルンに罪を被せられれば御の字、くらいにしと考えていない。

時臣が死にでもすれば遠坂の跡取りは小娘が一人。どれほど才気にあふれる器と言えども、しょせん幼子であるなら老人は舌先三寸で丸め込むこともできる。だからこそ今がチャンスとばかりに前々

から狙っていた獲物を狩りに来たのだ。

盟約を破りなどしていないとの主張の数々には、白々しいほど欺瞞が見え透いてはいる。それでも綺礼は聖職に携わる者として、一応は敵の言い分を受け止めなければならなかった。

「そんな言い訳が通じると本気で思っているのか？」

「通じんかったらどうする？ 条約を破棄してワシを殺すか遠坂の弟子。それもよかるう。じゃが、遠坂の小倅めが戦いに生き残ってからでなければ、ソレも意味はあるまい」

やや呆れ半分に問う綺礼に、飄々とした態度で答える臓硯。

それは、まるで時臣は生き残ることができないと確信しているかのような口ぶりだった。

「まあ、結果としてワシの蟲はより力を得ることにはなった。女の滋養はパスを通じて他の蟲どもも得ておるでな。もつとも、栄養を蓄えた蟲から直接中身を吸い出さねば効果は薄い。おぬしが殺してくれたゆえ、微々たる強化しかできんかったわい」

どうやら綺礼の迅速な対応は、この老人の強化を防ぐことにつながったらしい。不幸中の幸いか。散々な状況でも、多少は成果があったことに僧侶は若干の安堵を得る。

「解せんと言うならおぬしの行動のほう解せんわ。ぬしは令呪を得たことで遠坂から離反したそうではないか。なぜ敵対関係であるハズの遠坂を味方する？」

性格の悪さがにじみ出ている。間桐にしてみれば、遠坂と聖堂教会の癒着など推察済みのハズ。臓硯は解っていて訊いているのだ。

令呪を得たことで綺礼が師に牙を向いたという、表向きの話を信じる者などいない。聖杯戦争も目の前に近づいた時期に、遠坂のマスター候補が弟子を取るなどという酔狂。そこに余興以外の意味があるとすれば、門下生を戦力とする狙いしか考えられないのだ。

聖杯戦争に進んで参加する者は意外と少ない。極東の片田舎で行われる儀式を知る者はほとんどおらず、知ってはいても他家を受け入れる儀式に懐疑的な者たちもいる。そのため間近になっても魔術師が揃わないこともあり、そのときは予備の魔術師たちが協会から派遣されることになっていた。

参加者の席は余裕がある場合が多いのだ。

魔術師の技量を有し、聖杯の知識を与えられた者が冬木に滞在していれば、いずれ令呪が宿るのは必然である。弟子の参戦を時臣が狙っていたのは誰の目にも明らかだった。

御三家の一つを師とする者が、聖杯戦争のことを教えられていないはずもない。仮に、綺礼が聖杯を知らないままに参加資格を手にしたとしても、他マスターの目には遠坂が綺礼に聖杯のことを教えたとは映らない。

だから同盟関係を隠したところで、どうせすぐバレるだろうと綺礼も時臣も開き直っていた。表向き敵対していたのも、それで騙されるようなマヌケがいるなら儲けモノだと思っただからで、敵の全てを欺けると期待するような楽観はなかった。

「教会の保護を受ける身の私に、これ以上遠坂と敵対する意味はない。ひとたび袂を分かったとしても、導師が我が恩師であることに違いないのなら、その妻を敵から救い、師の心証を少しでも良くしたところで問題はあまるまい。そもそもキャスターのせいで騒ぎが大

きくなっている今、無関係な犠牲者を防ぐのは義務だろう」

間桐に遠坂と教会の結託を公言するわけにもいかないため建前を口にする。とは言え、言葉は全て真実であり虚偽の答えは一つも混じっていない。この聖職者は大事なことを隠すくらいはするが、基本的に訊かれたことは正直に回答する男なのだ。

「呵々、なるほどなるほど。璃正の息子というだけあって堅物よのじゃが受け継いだのは生真面目さだけと見える。その善人の面構え、もしやと思っておったがやはり仮面じゃな？ おぬしの芝居は臭すぎる。ワシと同様に腐った蛆虫の気配がしよるぞ綺礼」

臓硯は見ていた。既に取り返しがつかないと確信した綺礼の顔が、喜悦に歪むのを老魔術師は見ていたのだ。

綺礼の総身に殺気が宿る。老人は遠坂に敵対する存在というだけではなく、綺礼個人の敵にもなる相手だと察し、僧衣の男は黒鍵に魔力を通した。解き放たれた冷徹な殺意を、だが臓硯は、なおも悠然としてやり過ごす。

「そう殺気立つでない。ワシは今回の聖杯戦争に関しては、完全に部外者よ。家督も長男に譲った隠居爺にすぎんわ。おぬしと戦う理由はない。元代行者と事を構えるつもりなど、あろうハズもない」
さつきから喧嘩を売られているとしか思えなかったのだが。そんな本音を綺礼は飲み込んだ。

「此度の間桐参戦とて予想外の事故のようなものでな。元々、今回ワシは傍観に徹する予定じゃったが、いかんせん雁夜の奴めが参加させると五月蠅いので、仕方なしに息子にチャンスをくれてやったんじゃよ。勝者は衛宮かおぬしと決まった此度の戦に興味はない。ワシの関心は別の処よ」

臓硯の言葉を不可解と捉え、眉を顰めたのは綺礼だけだった。無表情で判り難いが、舞弥は納得したような空気を漂わせていた。

「どつという意味だ。勝者が私か衛宮とは。未だマスターは半数以上も残っている上に、私は敗者だぞ。サーヴァントなき私に聖杯を手にする資格があるものか」

「戦を知るぬしら二人に勝てる者がおるわけなからう。おぬしの手
に再び令呪が宿るか否かは、聖杯の気紛れ一つ。浮いたサーヴァン
トの一騎もいれば復帰することもあるうて。……いや、おぬしとて
知っているのではないか？ この戦い、勝者に聖杯が与えられるの
ではない。勝ち残った者が聖杯を得られるようになっていただけだ
とな」

お前の言い訳こそ浅はかだと、老魔術師はせせら笑う。老軀から
発せられる声がまとわりついてくるのを感じる。蛞蝓なめくしが体を這う感
覚に綺礼は顔をしかめた。

「……だとしても私に願いはない。願いのない私に聖杯を欲するほ
どの熱はない」

「心にもないことを言いよる。望みを持たぬ者が聖杯に選ばれると
思うてか。綺礼、おぬしは願いを持ちながら目を背けているだけ
いや、懐いた願いは、叶わぬ夢だとても諦めているだけではない
のか？」

そのニヤけ顔は髑髏のように干乾びた風貌と相まって、老人の不
気味さを引き立てていた。

「本当のことだ。私に、聖杯に託すほどの願いはない。私が望むの
は人並みの平穩、そして幸福のみ。そんなものに、聖杯が関わり合
う余地は無い」

予想外であつたのか、言葉を聞いて臆視は急に呆けた顔になる。意外な事実に黙りこんだとしか表現できぬその態度に、綺礼は少し面食らってしまう。

そして。

「呵々、呵々々々々々々々々々！ 何を言いよるかと思えば、人並みの幸福とな！ ああ、そういうことか、許せ綺礼よ。どうやらワシはとんだ思い違いをしておつたようじゃわい！！」

突如として笑いだす間桐臆視。髑髏から発せられる声はキチキチと軋るようで、まるで虫の群れが唸り鳴く音にも聞こえる。愉快な道化を見たと言わんばかりの嘲笑に、さすがの綺礼も不快を隠せない。

「願いななど無いと言つたが、ならば何故おぬしの手に令呪が渡つた？ よもや、遠坂を勝たせるために聖杯が与えた助力などと戯言は吐くまいな？」

「……時が迫つて、それでも参加者の都合が間に合わぬ場合、冬木に滞在する魔術師が自動的にマスターに選ばれる。そのために導師は私に聖杯の知識を与えたのだ。キャスターのマスターのように、聖杯を知らぬ者が令呪を授かることは稀だからな」

もはや同盟を隠す努力も放棄して黒衣の男は答える。

「ほざきよる。ぬしが参戦を表明したのは一月以上も前。参加資格を得ておらぬうちに遠坂を離反することなどあるまい。ならば、それより以前に令呪を得ておつたハズじゃ。聖杯が参加者を間に合わせたにしては早すぎてるわ」

そんなことは綺礼もわかっている。しかも綺礼が聖杯に選ばれたのは、下準備のために遠坂から離れた一月前どころか三年も昔、遠坂に弟子入りした直後の話である。目論見通りと時臣は喜んでいたが、いくらなんでもこれは性急すぎると当人は疑問に思っていた。

「いやしかし、おぬしの言葉で確信できたわ。やはり衛宮を殺せるのは綺礼、おぬししかおらぬ。彼奴の覚悟は頭一つ抜きんでておるゆえ、雁夜はおろか、遠坂の小倅にもアレを抑える度量はあるまい。止める者がいるとすれば、あやつの同類に他なるまいて」

深く皺の奥に落ち窪んだ眼差しが綺礼を射抜く。見抜いたような発言を受け、綺礼は眩暈にも似た苛立ちを覚えた。

「……言うに事欠いて、私と衛宮切嗣が同類とはな。歳をとり過ぎて耄碌したのではないか御老体。どこをどう見れば、あの男と私が似ているように見える」

理解していながら、けれど認めたくなくて、綺礼は苦虫を噛み潰した顔で臍硯に喰ってかかる。

「それはおぬしが一番わかっているのではないか？ 幸福という、人間として当たり前の願望を抱きながら、その“当たり前”には絶対に辿り着けない　ワシには、おぬしらが合わせ鏡の悪魔のように見えるがの」

まるで切嗣を理解しているかのような蟲の翁の発言に、舞弥が微妙に反応する。気に食わない言い様であったのか、僅かだが喰いくように身を乗り出すのが綺礼の視界の端に入った。

「ワシとてアインツベルンが衛宮を受け入れた時点で、次のマスタ―は彼奴と読んでおったわい。……読まれていると知っておったか

「らこそ、ああまで派手に、蛮勇に自ら動くことができるのじゃろ
な」

舞弥の疑問を察して語り始めたわけではなさそうだ。敵に塩を送
っていると言っより、老人の暇つぶしと思っていた方がいいのだろ
う。

人知を越えた怪人は、この場の敵二人を子供も同然に扱っている。

臓硯の読みは半ば以上正解だった。バトルロイヤルルールにおい
て、最も優れた戦略とされるのは「最後に残った一人とだけ戦う」
こと。しかし、みながみなソレを狙って動かなければ、儀式も進ま
ず膠着状態となってしまう。

よって効率を重視する場合、もっとも重要な役割として、敵を引
きずり出す囮役が要求される。

敵に身を晒す一番危険な役回りだ。そして、それは他の陣営から
マスターだと確信されている者が行っるのが最も効果的である。

他人に任せられない大役を自ら負い、切嗣は率先して動いていた。
アイリスフィールにセイバーを当てなかったのも、その辺りの理由
が大きい。

「当然、衛宮の経歴はワシとて把握しておる。そこから彼奴の矛盾
も読みとれたわ。外道に身を染めても他者を救う……もう、その時
の想いなんぞ思い出せぬが、ワシにも覚えがある青臭い考えじゃよ。
ついでに言えば綺礼よ。ワシは三年前からおぬしにも目をつけてお
ったぞ」

長年の任務を終えて冬木に戻ってきた段階で、綺礼は二つの立場
から間桐と面識を持っていた。教会の璃正には、その次期後継者と
して。魔術の師である時臣には、弟子として。それぞれの立場から

間桐に紹介されたのだ。

厳密には敵対の関係にある者たちだが、儀礼的な交遊は必要なものであり、魔道の名家たる間桐に挨拶をするのは義務だった。その時、応対したのは現在の当主とされる鶴野だったが、当時から既に臆視は綺礼を見ていたのだ。

「初めておぬしを知った時、すぐに遠坂の思惑は理解したわい。じやが口出しができることでもなし、傍観する以外になかった。遠坂の味方になることはわかりきっておったでな、ワシはしばらく元代行者とやらの実力を観察することにした」

覚えている。時臣に師事して修業を積んだ三年の内、何度か蟲に見られているような不快な感覚があった。なんの害意もなかったので放置していた視線は、この不気味な老人のモノだったのだ。

「経歴を見るところ、おぬしは率先して苦行に飛びこんでいる。傍目には筋金入りの修行僧としか思えん。事実、ワシもそう思っておった。じゃが、それでは人並みの幸福を望むという先の言葉と明らかに矛盾しておる。……しかし得心がいったわ。おぬしは衛宮と同じ穴のムジナ、己が許せぬ哀れな迷い子であるということがの」

少し話をしたくらいで、簡単に他人のことを理解できるはずがない。老人の語りは欺瞞だと自らに言い聞かせながらも、綺礼は老人の言葉に耳を傾けようとする自分がいることを否定できなかった。

「綺礼。おぬし、人の“愛”の基準が理解できんのであろう」

「……………」

「そして衛宮は人の“愛”を知りすぎるがために他者を殺すしかない。ふむ、どちらも難儀な道じゃのう」

どこか憐れむようなカタチに顔を歪める。好々爺めいた笑みは無理に捻り出しているのか、彼の風貌にあって異質に過ぎる。元々、そんな笑い方をするようには出来ていない顔、としか見えない。

「おぬしは行き過ぎた信仰に狂気を懐いたものと思っておったが、蓋を開けてみればこの有り様。信仰に生きるどころか、まさか軀が動いておるだけとは。いやはや、今時分、生ける屍など怪談にもならんのじゃが」

「……間桐臓硯。そんなことで私を理解した気になってもらっては困る。貴様になにが解ると言っただ」

ゆっくりと腕を動かし、黒鍵を投擲に最適な位置へと持ち上げる。綺礼は次に口を開く油断を狙って敵を討つと心に決めた。

「わからないでか。他人のため傷つかない世界を求める衛宮と、傷つくために生きる意義を求めおぬし。どこが違う？　ぬしら二人は、どちらも『死者』でしかない。差があるとすれば、自ら己を捨てる道を選んだか、初めから故障しておったかの差だけじゃろう」

言葉が終るよりも早く、予備動作すら予期させない瞬時のうちに、綺礼は手元の武器を射出させる。

もはや綺礼に躊躇はなかった。老人の不愉快な無駄話は座興にもならない。あの男と同類だなどと、そんな解りきったことに耳を傾ける余裕は彼にない。

白刃を前にしても揺らぐことのなかった臓硯の余裕は虚勢ではなかった。放たれた黒鍵に矮軀を串刺しにされた瞬間、老魔術師の輪郭はまるで泥細工のように溶け崩れ、再び山道の木陰に蟠る正体不明の影に戻ってしまった。

警戒に身を強張らせる綺礼に、何処からともなく声が届く。

『ふむ……。老婆心からの忠告であったが、少々喋りすぎてしまったようじゃな……。しかし爺のお節介ぐらい目に見てもらわねば割に合わんぞ』

次の黒鍵を構えながら、綺礼は闇の中で蠢くものに目を凝らした。刺し貫かれた臓硯の肉体が解けた不条理に、綺礼も舞弥も驚いてはいなかった。老練の魔術師ともなれば、どのような不可思議も有り得る。いちいち狼狽うろたえていては魔術師の相手など務まらない。

『己の不徳の意味を知りたくば、聖杯に訊ねてみるがよい。キャスターのごとき怨霊なんぞを招き寄せ、さらにはおぬしを惑わす聖杯の真意。いずれ追い求めていれば見えてくることじゃろっ』

ギリ、と歯を噛む音が青年の口から漏れる。

綺礼をたきつけて臓硯自身も聖杯に近づこうという姑息な算段。時臣や切嗣と戦わせ、邪魔者を消そうという小賢しい狙い。老魔術師の思惑は読んでいる。読めてはいるが、答えを持たない者にとつて、脳に直接潜り込んでくる老人の言葉は抗い難い誘惑でもあった。

『じゃが、これだけは覚えておけ。その歪みが生まれついで欠陥と言つなら、おぬしに人の道など初めから用意されてはおらぬとな』
心の臓に楔を打ち込まれた気分だった。

己の過ゆがち　それを闇として他人に肯定されたのは、彼にとって初めてのことだ。

『ではワシはもうしばらく成り行きを見守らせてもらおうか。次に会う時は衣の下に隠した醜悪さ、存分に堪能させてもらいたいもの

よ……』

何々と笑う声が夜闇に木霊する。冬の冷氣の中、嘲弄の嫌味だけを残して老魔術師の気配は去った。

残された二人はしばらく無言だった。親しげな会話をする間柄でなく、敵対する立場にある者たちなのだから当然だ。

「……アインツベルンの女。一つだけ聞かせろ」

葵を守るように立ち尽くしていた綺礼は、目を向けもせず舞弥に声をかける。人質確保の目論見も潰え、留まる必要のなくなった女が撤退しようとしているのが、綺礼には気配でわかったのだ。

しょせん切嗣の部下でしかない舞弥は、厳密にはアインツベルンに属しているわけではない。しかし綺礼からすれば、貴族の仲間入りを果たさんという切嗣と共に御三家の一角に組みする女は、立派にアインツベルンの人間だ。

「私は 私と衛宮切嗣は、貴様の眼にはどう映る？」

かすれきった、蚊の鳴くような声だった。

女に答える義理はない。無視しても構わなかったハズの質問だ。それでも声音に何か感じ入るものがあつたのか、しばらくの間を置いて舞弥は独り言のように呟いた。

「……世界を愛しながら疎んじるか、憎むからこそ慈しむのか」

言葉を残しながら舞弥は森の影の中に消えてゆく。綺礼も特に止めようとは思わない。いまさら追撃しても間に合いはしないのだし、去りゆく女を攻撃する無粋など、俯いた彼にはできそうにもなかった。

綺礼は知らない。この女が、先ほどなぜ綺礼を殺そうとしなかったのか。

人間らしい心の機微が凍結している舞弥は、切嗣の害となる者なら例え味方であっても排除する。そんな女が、どうして綺礼に手を出さなかったのか。

かつて切嗣に拾われ、以降は彼の忠実な手足となるように教育されてきた舞弥にとって、彼を助け、力となることが絶対の価値観である。逆に言ってしまうえば、舞弥は衛宮切嗣に齒向かうことができない。切嗣が世界の窓口となってしまうっている。

そう。彼女は衛宮切嗣を殺すことだけは絶対にできない。

綺礼を殺すという発想すら出てこなかった理由。それは、綺礼が殺してはならない相手に見えたからだ。

現状の不満と自身の不徳に耐えられぬ両者。世界に馴染むことのできない二人の男。懊悩に苦しむ綺礼の姿が切嗣と重なった。その事実を綺礼は知らず、舞弥自身も自覚していなかった。

「私には、貴方たちの到達点は、同じところのように見えます」

訓練された聴覚は、遠ざかる女が残した聞こえるか聞こえないかギリギリの音量を拾ってしまう。

残るのは二つの人影。立ち尽くす綺礼と、横たわる葵だけ。こんなことになったからには、頭を切り替え、葵を時臣の許まで送り届けなければならぬ。

そろそろアーチャーを連れて森に入った時臣が戦いを開始している頃だろう。

葵を抱える前に、綺礼はライトバンに近寄って、特に意味もなくガラスの無事な部分を覗きこんだ。

車のフロントガラスに映りこんだ自分の顔は堅く、今は巖の如き表情を取り戻してはいるが、葵の苦しみを見せられた時はどんな表情だったのか。綺礼は一人自問した。

悶え苦しむ葵の姿に、快楽を感じていないと言えば嘘になる。

どこかに喜ぶ自分がいたことは否定できない。もつと苦痛に歪む表情を拝みたいと、どこかに欲望が湧いてきたのは真である。

果たしてそれは、女が言うように世界を愛するためなのか。

美女の裸身に欲情するように、醜くのたうつ女に人ならぬ情欲を抱いただけではないか。

もう幾度となく自覚させられた己の醜い本性。聖杯に許しを願ったところで、人並みの感性がどんなものか本質的にわからぬ綺礼では、穢れを癒すことは絶対にできない。

そんな男が、人間らしい幸福をと夢見てしまうのは間違いなのか。

愛しながら疎んじるか、憎むからこそ慈しむのか

おぬしに人の道など初めから用意されてはお

らぬ

綺礼は拳をライトバンに叩きつける。元代行者の殴打は車を横転させ、フレームを大きく歪ませた。強く握られた手の中からは、赤い液体が筋のように流れ落ちた。

「……………私は、何だ。聖杯は私に何を望んでいるというのだ」
溢れ出る疑問に答える者は、この世のどこにもいなかった。

18 六日目・夜 - 潜む者たち - (後書き)

葵スキーナ方、ホント申し訳ございません。

葵さんを死なせるか廃人にするか悩み、結局、おじいちゃんに出張ってもらって廃人コース。

正直こししか入れるタイミングが思いつかんかった。バトル期待してた人ごめんなさい。

今回もやっぱりこじつけです。五次の臆視は言峰が人らしい幸福を望んでいると知ってたのと、「マキリやアインツベルンは切嗣と私(言峰)を同類と見ていた」という発言からこの展開。同類の意味がちよっと違う気もしましたが、相変わらず無理ない話が思いつかないんで。

言峰が吹っ切れるまでもうちよいかかります。あと、聖杯を手にするまで彼の戦闘はありません。

ちなみに。

いくら待っても葵さんが公園に現れないので、凜さんは朝方に雁夜君がおうちの近くまで送ってあげました。

幼女誘拐で捕まらなかったのは奇跡。

『約定の通り、ジル・ド・レエ罷り越してございます』

あざといほどに慇懃な仕草で腕を巡らし一礼をするキャスターの姿を、城のサロンに集結したアインツベルンの陣営 切嗣、セイバー、アイリスフィールの三人は水晶球を介して捉えていた。

アインツベルン城の現行の主であるアイリスフィールは、森の結界内で起きている状況を映像として投影することができる。その能力で森に踏み込んだ侵入者の姿を剣の主従に見せていたところ、キャスターは監視に対して双眸を向けてきたのである。

領域内に現れたキャスターは単独ではなかった。およそ十人あまりの子供を連れに伴って森の中を闊歩している。そのいずれもが年端もいかぬ幼子たち。冬木市近隣から拉致されたと思しい子供らはおぼつかない足取りで、青髭公が先導する後をふらふらと付き従っている。なんらかの魔術の影響下にあるのは明らかだった。

キャスターは用心深く結界の外側、城から二キロほど離れた位置で結界の外輪を巡るようになってうろついている。

ギリギリの境界線上だった。もう少し結界の深部に踏み込んでくれば、アイリスフィールがエリア・エフェクトの魔術トラップを発動させられるのだが、キャスターはそれを見越しているかのようだ。

しかも彼は単に結界の外側を歩いているだけではない。

境界線を見抜かれることを想定して、切嗣は深部に乗り込んで来ない相手への対策を用意していた。武器と魔術を組み合わせて造り

出した、城の主の命令に依存しない対霊体トラップを仕掛けていたのだ。が、キャスターはそれらも突破している。

仕掛けが施された、言わば地雷原とも呼べるエリアを迂回するよ
うに避け、キャスターは余裕の散策を続けている。もし森に顔を出
すような相手がいたとしたら、相当な自信家か対魔力の高い敵だと
考え、対処できるよう数年も前から徐々に設置しておいた罠。そ
のことごとくが見破られている。

監視に顔を向けてきた以上、キャスターはアインツベルンの千里
眼をも見抜いている。伝説クラスとなった魔術師は現代の魔術師ご
ときの思惑など軽く乗り越えるという実例を、アイリスフィールら
は目の当たりにしていた。

『我が麗しの聖処女ジャンヌに、今一度、お目通りを願いたい』
硬い水晶球の表面が振動し、監視先の景色で拾った音声を伝達す
る。

もちろん聖処女ジャンヌなる人物はここにはいない。やはり彼は
セイバーをジャンヌだと思い込んでいる。

キャスターはセイバーを呼んでいる。子供たちを人質に“ジャン
ヌ・ダルク”を誘っている。

彼は“ジャンヌ”に何をするつもりなのか。神を背徳に穢し、ジ
ャンヌの目を覚まさせるとのキャスターの言を夫から聞いているア
イスフィールだが、その程度の情報で狂人の奇行を推察できるほ
ど彼のことを知らなかった。

そんなアイリスフィールでも、キャスターが並大抵の思考を持つ
ていないことは身震いと共に察しがついた。怖気が走るほどの厭な
予感が、彼が碌でもないことを企んでいると伝えてくる。セイバー

の『直感』に近いスキルを持つていなくとも、ジルの狂った双眸を見れば其れ位は解るのだ。

果たしてキャスターの行動は予感の通りであった。

『……まあ、取り次ぎはごゆるりと。私も気長に待たせていただくつもりで、それなりの準備をして参りましたからね。なに、他愛もない遊戯なのですが　少々、お庭の隅をお借りいたしますよ？』

パチンと指を鳴らすと、それまで従順に付き従っていた子供たちが、まるで夢から醒めたようにたじろいだ。途方に暮れた様子で周囲を見回す子供たち。いったい自分たちがどこに連れてこられたのか、まったく把握できていないらしい。

『さあさあ坊やたち、鬼ごっこを始めますよ。ルールは簡単。この私から逃げきればいいのです。さもなくば　』
ローブの裾から手をするりと差し延ばし、手近にいた一人の子供の頭に手を載せる。

「やめろッ！！」

アイリスフィールが息を飲むのと、聞こえない届かないと知りながらセイバーが声を張り上げるのは同時だった。

監視魔術を看破したキャスターなら、もしかしたらこちらの会話をも盗み聞いているのではないか。そんなセイバーの用心とささやかな期待は、最悪の形で杞憂と証明される。

……仮に聞こえていたとしても、少女の言葉に喜びの笑顔を浮かべるだけで、凶行を改めはしなかっただろうが。

割れ砕ける頭蓋の音。飛び散る脳漿と目玉の放物線。新鮮な卵を握り潰すような作業は、悪夢の光景として子供らの脳裏に焼きつい

た。

数秒の間を空け、我に返った子供たちは何がなんだか解らないまま、悲鳴を上げて四方八方に逃げ惑う。中心に立つキャスターはさも愉快そうに哄笑しながら、血まみれの手を舌でぞろりと舐め上げた。

「さアお逃げなさい。100数えたら追いかけますよ？　ねえジャンヌ。私が全員捕まえるまでにどのぐらいかかりますかねエ？」

子供たちを出演者にした残虐なショーが、今キャスターの手で執り行われようとしていた。

策も謀略も何一つあつたものではない。ただセイバーの眼前で非道を行い、神の不条理を証明するという、それだけが目的の無意味な虐殺　否、文字通りの鬼ごっこ。アイリスフィールはジル・ド・レエというサーヴァントの異常性を垣間見た。

これ以上、アイリスフィールには看過できなかつた。ホムンクルスとして生まれた彼女だが、その魂の形は既に母である。殺されてうち捨てられた子供の、哀しいほどに小さな体躯は、ちょうど愛娘の上背と同じくらいのものであった。

「切嗣お願い。キャスターを倒して、子供たちを助けて」

マスターではない者がセイバーに命じることできないため、真摯な願いを込めて、アイリスフィールは夫に懇願した。

アイリスフィールは切嗣の哀惜を知っている。彼が何故、戦いに身を置くのか知っている。

世の非情に涙し、だからこそ世界を変えようと努力し、人間の理から逸脱しつつある者　彼ならば、きっと子供たちを救ってくれ

ると思ったのだ。

が、切嗣は無言のきり何も喋ろうとはしない。愛する妻の言葉に無反応だ。

「切嗣……？」

それが否定の沈黙であると、アイリスフィールはすぐに察することができなかつた。

「私が打って出るしかありません」

主の沈黙に應える如く、セイバーが静かに、しかし力強く言葉を漏らす。まるでアイリスフィールを気遣ったようなタイミングでの発言だと気がつく者は、この場にはいなかった。

「側面からキャスターの隙を狙います。今なら彼は子供たちに気を取られている。英霊リクジンが近づけば気がつくでしょうが、敵が戦闘態勢に入る前に斬り捨てます。初手で倒しきれない時は、いくつか罨や仕掛けをお借りすることになりますが、よろしいですね？」

下知を促して切嗣を見据える。その言葉はキャスターが許せない気持ちから出てきた、先の展開を何一つ考えていない無策無謀の類ではなく、確たる戦術を用意した上での進言である。

切嗣は答えない。今度のそれは否定ではなく、肯定を意味する沈黙だつた。

アイリスフィールの背筋にゾツと悪寒が走る。敵のおぞましさに触れた時とは質が異なる寒気だつた。

確かに、今は少女に賭ける以外にない。そう切嗣が判断したのだ。そこまではよかつた。アイリスフィールが恐怖を感じたのは、その冷たい表情だ。

「子供たちは、助けるのよ……ね？」

アイリスフィールの声音は、内心の不安を拭うように擦れていた。妻の言葉に視線を動かさずらしい切嗣の顔は、十年近く傍に在り続けた女性が今までに見たこともない貌だった。

答えなど、頭のどこかで理解していながら、ソレを認めたくなくて 受け入れられなくて。アイリスフィールは継るような気持ちで剣の主従の顔を交互に見る。

「……それは出来かねます。あの子たちは既に助からない」
口を開いたのはセイバーの方だ。

かつて多を生かすために小を切り捨てる選択を、戦場に赴くたびに肯定せざるを得なかった少女は、今また、戦の非情さを知る者としてアイリスフィールに告げた。

二人から肯定の答えを期待していた美女は、外れてほしかった自分の予想が当たってショックを受けた表情となった。

「な、なん……で？ セイバー、貴女なら、子供を護るくらい……」
可能なはずだと、先の言葉が冗談であって欲しいと望んで問い質す。

切嗣からセイバーの戦闘力と、その獅子奮迅の戦いぶりを聞き及んでいたアイリスフィールは（あくまでも事実を報告したのであって、決してセイバーの武勇伝を聞かせようなどという意図ではない）少女に多大な信頼を寄せていた。きっと彼女なら人質くらい軽く救い出すことができると考えていた。

愛する夫が太鼓判を押した戦闘能力だ。それを期待せずしてなんとする。

しかしセイバーはゆっくり首を振った。内心の悔しさと、不甲斐

ない自分に対する怒りを外に出さぬよう噛み殺しながら、もはや慣れてしまった生前からの私情を圧する態度で主の伴侶へと答える。

「たしかに魔術師相手に後れを取るつもりはありません。私の刃はキャスターの指が動くよりも速い自信があります。それに、出来得る限り私も無辜の命は拾いたい」

「だつたら！」

「ですが今回の場合、子供たちがキャスターの手に堕ちた以上、もはや戦つて救い出すという次元ではありません」

咎めるアイリスフィールの言葉を強く遮り、セイバーは真つ直ぐに主の妻の目を見て答える。そこにあるのは覚悟。本心を呑み込み、痛みを押し殺しながらも、迷いを捨てた真つ直ぐな瞳だった。

碧色の双眸が語っている。罪の全ては自分が背負うと、王の意志を示している。

敵の手から人質を奪還する程度、セイバーほどの騎士なら簡単なことではある。それが例え英霊相手であったとしても、純粋に力尽くで子供たちを助けだすくらいはワケないことだ。

それはあくまで、「奪い返すだけならば」という前提があつて生きる仮定。

「セイバーの言う通りだ。キャスターは常軌を逸しているが、それでも周到さを失っていない抜け目ないサーヴァントだ。いや、

一般的な倫理観を備えていない分、普通より余計に性質が悪い」

これまでずっと黙っていた切嗣が、妻に捕捉するように説明をする。

「そういう手合いはどう出てくる？ 当然、己の保身も忘れてはいない。盾に利用されるどころか、最悪、子供に爆弾が仕込んである

ということもあり得るんだ。……アイリ。敵の罠を庇って、こちらが手痛い想いをするなんてことは絶対にあつてはいけないんだよ」

警察関係機関から少し法を逸脱した手段で情報を取り寄せている切嗣は、キャスターが連れ歩いているのは全て誘拐された子供たちであると把握している。それがキャスターにとって生贄の類であることは、以前の会話から承知である。

子供たちが穢れた行為のために利用されるというのは、切嗣にしてみれば、はじめから解りきっていたことなのだ。

「敵の前に出向いた瞬間、召喚師であるキャスターが子供を悪魔召喚の生贄とする可能性。再び子供らの自意識を奪い手ゴマとして操る可能性。子供たち自体を魔術的なトラップに作り変えている可能性。そんな、あまり考えたくない可能性を挙げ連ねればキリがない」

同意するようにセイバーも頷く。剣の主従は戦いとなれば「最善」を選ぶために思考を働かせる。基本的には考え方の違う両者も、そのため不確定要素への警戒意識は似通ってくるもので、敵に対する意識においては未だに衝突らしい衝突をしてはいない。

切嗣は子供たちを助ける気は毛頭なかった。セイバーも既に子供たちは“失われた命”と同義だと、瞬時に冷静な判断を下しているとアイリスフィールは理解した。これは必要な犠牲だと完全に割り切って、二人はキャスター抹殺を優先させると既に決意を固めている。

つまり子供たちを見捨てる、と、彼らは言っているのだ。

アイリスフィールの顔が愕然と青ざめていく。ガクガクと膝が震

えるようにも感じられた。自分の耳を信じたくなかった。そんなことを自分の夫に語ってほしくはなかった。

信頼関係に近いもの　と女の目には映る　を、切嗣がセイバーと築きつつあることは喜ばしい。初めは召喚した英霊と切嗣が衝突してしまう不安があった。ただの使い魔として接し、道具が戯言を吐いても黙殺すると切嗣が決めていた当初に比べれば、今の彼らの関係は随分と好ましい距離感であると思う。

実際には無駄な会話を排しているだけで、本当は一寸も距離が縮まっていないのであっても、無駄に喧嘩をするような関係であるよりは余程いい。

けれど、血みどろの決断を交わすがゆえの円満だったとあつては、この状況を心から歓迎することはできなかつた。

夫の眼光は鋭く、自分の知るどんな顔とも違う。アイリスフィールは一瞬これが誰なのかを見誤つた。

九年前、初めて会った時の彼は、どこか冷たいながらも疲れたような表情だつた。愛子を腕に抱いた彼は穏やかだつた。こんなにも凍てついた表情を見たことはなかつた。

さもありません。アイリスフィールは戦場の切嗣を知らない。敵を討ち滅ぼす獵犬だつた彼を見ていない。どんな男であつたのか、本人やアインツベルンの頭首に聞いてはいても、実際に戦地での彼に接するのは今回が初めてだつたのだ。

百聞は一見に届かない。

『魔術師殺し』『非情なる暗殺者』が抱えてきた闇の本当の意味を、アイリスフィールはようやく両眼で見定める機会に遭遇したのである。

「切嗣……わかってるの？ あの子達がどのくらいの年齢か、解って言っているの？」

意識していないのに語調が強くなっているのを感じる。例え目の前の男が彼女の知らない本性だとしても、娘を愛した夫と同一人物であるならばとの想いは、無情に裏切られる。

戦場の刃として自らを研磨する彼には女と無駄口を叩く心の隙などなかった。切嗣は再びむっつりと黙ってアイリスフィールを見る。もはや彼の冷たい眼差しから目を逸らしたかった妻も負けじと見つめ返す。

「……………っ！？ アイリスフィール。水晶を！」

張り詰めていく空気を破ったのはセイバー。夫婦喧嘩に水を差すのもある意味で無粋だが、それどころではなかったのだ。

夫を睨んでいたアイリスフィールは、切嗣から視線を外す口実を得て水晶に目を落とす。

水晶が投影する視界の端には、なにか、妙に光り輝く異物が見えた。

『 ふん、下らん催しだ』

言葉が室内に反響する。

そこには黄金色の“死”が、溢れんばかりの威厳を引き連れて立っていた。

「ろくじゅうはーち、ろくじゅきゅう、なーなじゅう」

キャスターは歌でも歌っているかのような口調で、子供が数を数えるように指を折りながら時を数えていく。まるで友達との遊戯に興じる童わらわの貌だ。

事実、いま彼の心は童心に帰っている。

これから楽しい楽しい遊びを始めようとしているのに、大人の心そのままに相手をしては些か失礼だろう。幼い子供たちと対等の意識でなければ遊びも成り立つまい。

人世の倫理道徳を踏みじめるキャスターではあるが、基本的に思考は紳士である。狂っている者は狂っているなりに矜持や礼義というモノを備えているのだ。もっとも、他人には理解し難いという時点で、その気遣いが破綻していることに変わりはないのだが。

「はちじゅうーく、はちじゅしーち、はちじゅはーち、はちじゅーく」。ウフフ、もう九十まで数え終わってしまったよ？ ほおらほら、もっと急いで遠くに行かないと、すぐに捕まえてしまいますよー」

必死に逃げる子供たちの耳に遠くからの声が届くわけもない。中には転んで泣きじゃくっている子供も見えるが、それさえ今のキャスターには神を湛える讚美歌と同義。救いを希こいねがう子供の涙は甘い蜜だ。

先ずどちらに逃げた子供から追いかけようか。青髭はギョロギョロと両眼を動かして周りを見渡す。

獲物は誰もキャスターから逃げ果おせることができないでいた。幼い脚力の限界ではない。森の奥へと走って行ったハズの子供さえ、どうしてか三人に一人の割り合いで元の道に戻ってしまったている。

迷い人を更に惑わすアインツベルンの森の結界は、子供たちにしてみれば悪い方に作用していた。

子供らが一向に前に進めないのは、森の木々が複雑に迷路を形成しているだけではない。惑いの魔術で方向感覚が微妙に狂わされていて、森の外に逃げることができなかつたのだ。

どの方角に行けば森から出られるかなど、元々小さな子供が知るわけもないのだが、それでも一直線に走って逃げればどこかに辿りつけたかもしれない。だが、彼らは結界の影響でグルグルと同じところを走ってしまう。そのため、キャスターから遠ざかることが出来ないでいた。

この鬼ごっこには、最初から逃げ道が用意されていない。

鬼役の魔術師はローブの中でクスクスと笑う。口元はずっと緩みっぱなしだ。無駄な努力を重ねる子供たちを見て、憐れみながらも愛おしい思っていた。

その感情。人を殺すことを愉しむ者を鬼と定義するならば、まさしく彼は童鬼であろう。

「神よ。子羊の祈りが届いていると言うのでしたら、どうぞ遠慮はございません。私の凶行を止めて御覧なさい。まあ、今になって止めるくらいなら、もうずっと昔にやっていたでしょうけどねえ。以前は今より遥かに大勢の子供たちが犠牲になりましたから……」

聖処女を喪つてよりこのかた、ジルが重ねた悪行は人災として語るにも残虐にすぎるものだった。

彼がどんな流神と邪悪を積み重ねようと、与えられるハズの神罰はなく、気がつけば彼の手によって虚しく消えた慟哭は千を越えてしまった。

神は決して人間を罰さない。神は人々をただ玩弄するのみ。それが、ジル・ド・レエが生涯を通して得た結論である。

彼が至った境地をジャンヌに理解してもらうためには、生前に興じた所業の数々をこの場で再現せねばなるまい。悲劇もかくやという地獄を穢れなき乙女に見せつける必要がある。

彼女が来るまで数分の猶予がある。その僅かな合間に全ての準備を済ませるのだ。自分の嘆きがいかにほか示すよう、できうる限り痛ましい惨状を作り上げねば。

キヤスターはジャンヌの怒りに燃える形相を夢想し、歡喜に顔を歪めた。

最初の一人を捕まえたらどうしよう。

ただ殺すだけでは勿体無い。これがジャンヌのための饗宴であることくらい判ってはいるのだが、こんなに大勢と“遊ぶ”のは結構久しぶりのことで、待っている間に少しくらいは楽しみたい気持ちもある。

神の愛は地に堕ちれども、彼の愛は深く重い。さっきの子供は最初の一人だったからルールの説明に使ってしまったけど、本当ならもっともつと遊んであげたかった。もっと子供たちに神の無慈悲さを教えたいのだ。

圧殺、斬殺、瀟殺、絞殺。どんな殺し方だつて新鮮な恐怖を提供してくれる。今度は頭をすり潰したつていいし、喉元を噛み千切つてあたたかい血を啜るのも面白そうだ。何の罪過も穢れも持ち合わせない子供たちを屍に変え、ここに散りばめて聖なる乙女を迎えよう。

駆けつけたジャンヌはどんな表情をしてくれるだろう。潔癖な彼女のことから、自分への憤怒と子供への悲哀に身を焦がすに違いない。

楽しみだ。ああ、実に楽しみだ。

歪んだ愛情を想い人に向け、再びキャスターが下卑た忍び笑いを噛み殺す。

「では100数えたことですし、そろそろ捕まえに行きますよオ？」
どうせ助からない子供たちに大きな声で合図する。子供たちの泣き声が一層強くなる。キャスターは足取りも軽やかに、子供たちに近寄ろうとしたところでソレを聞いた。

「ずいぶんと楽しそうではないか。雑種」

よく通る声だった。

数十メートル離れた先からキャスターの耳に届いた男の声は、大きな声量というわけでもないというのに、子供たちの叫喚を抑えて森の中に響き渡る。

まるで自然の理さえ声の主に従っているかのような錯覚を覚える。声がした方を向いてみれば目を凝らすまでもなかった。夜の闇の中、歩み寄ってくる輝きは非常に目立つ。

眩いばかりの黄金が歩いて来る。

背筋に恐怖の戦慄が走る。不吉さに汗が噴き出て肌が泡立つ。首元に死神の鎌が当てられたと、キャスターはそんな白昼夢を幻想した。

なんだアレは。

あのサーヴァントはどこがおかしい。

本能が瞬時に警告をする。あのサーヴァントこそ最強、否、最悪の存在であると。

「ふん。道化芝居にしては、下らん催しだ。何をするかと期待してみれば幼子を泣かせるだけとはな。使えない雑種よ。やはり貴様は去ね、キャスター」

「な、何者です？ 我が乙女を迎える、背徳の宴を邪魔だてしようと言つのでしたら」

二の句は続かない。青髭が何事かを訴えようとしたところで、黄金の英霊の背後から“何か”が射出され、長い腕に突き刺さった。悲鳴を上げて腕を見る。そこにはダガーにも似た短剣が生えていた。

「痴れ者め。我が去ねと言つたのだ。四の五の言わず疾く自害するが礼である」

犯人はこのサーヴァントに相違ない。どんな方法での異常か知らないが、背後の空間から剣を射出させてきたのだ。

投擲は何の動作も窺わせないものだった。弓を構える素振りすらない。何のアクションも無しに彼は刃を飛ばしてきた。相当に優れた戦士でなくては、勝ち負け以前に彼と戦うことさえできないことをキャスターは理解した。

恐怖の根源であつたハズの男が悲鳴を上げたことを知り、後ろを振り向くこともできずに震えていた子供たちが背後を見る。痛みに悶えるキャスターと、悠然と立つ金色の男が彼らの目に入る。

そこに立つ黄金が救いの主であると子供心にも理解できたのである。茫然と黙っている者、ワツと嬉しい涙を流す者、キャスターがいるために黄金のサーヴァントに駆け寄る者こそいないが、彼らは様々に喜びの歓声を上げる。

子供たちを一喝しようとしたキャスターは、千里眼の視線が消えたことを感じ取って押し黙る。ジャンヌの下僕たちが解いたのではない。これは第三者が無理矢理に魔術を解呪したときの感覚だ。

暗がりからゆっくりと。優雅な……ただしどことなく疲れたような足取りで、もう一人、男の色香を漂わせる魔術師が姿を見せる。黄金のサーヴァントのマスターであることは確実だ。この場に居合わせる魔術師など、それ以外あり得ない。

男は優雅な微笑みを浮かべて、しかし脱力を隠せてはいなかった。笑顔が微妙にひきつっている。後ろを振り返りもしない黄金の英霊は気がついてはいない。「やってくれたよコイツは」とでも言わんばかりの表情だった。と言うか、顔にそう書いてある。

「王よ。もう僅かばかりお待ちくださいれば、アインツベルンの走狗たちがキャスターめを追いこんでいたことでしょう。何も今の段階で、御自ら動かずともよろしかったではありませんか」

「知ったことか。私の気はそう長い方ではない。気に食わぬ者は殺す。それだけだ」

傍若無人、という言葉がよく似合う。傍らに控える男の苦勞など彼は一切気にしていない。自分のために他人が働くなど当然だと思っっているかのような。

溜息を吐きながらも魔術師は英霊に従う姿勢を崩さない。進言はあくまでも英霊の後ろに控えて。無礼にならないよう報告をする。「監視の目は潰しました。これでもう、我が王の姿を盗み見ようと言う不届きな輩はおりません」

「余計なマネを。この我の王^{オレ}気を直視できぬ雑種どもだろうと、我^{オレ}の雄姿を仰ぎ見る権利くらいは許してやると言うのに。……まあ良い。その気遣い、お前の忠誠の証と受け取っておこう」

頭を垂れるマスターに対し、鼻を鳴らして許しを与えるサーヴァント。明らかに異常な主従関係であるのだが、聖杯戦争など眼中にないマスターはそんなことに関心を向けることはなかった。

腕の激痛が思考をクリアにしてくれた。流れ出る血に我へと返ったキャスターは、体中から発せられる警戒信号を無理やり押さえつける。ジャンヌに仕える騎士として幾多の恐怖を乗り越えた経験が、得体の知れぬ敵への畏怖を麻痺させる手伝いをした。

彼の目に入ったのは黄金色の甲冑である。豪奢で煌びやかなその鎧は、どう考えても金に飽かせて用意したとしか思えぬ代物だ。「そういうことですか……篡奪者よ。また私の邪魔をしようと言うのですね」

キャスターは思い出す。かつて彼の悪行を止めた断罪の刃を。神の許しか天罰かを期待していたジル・ド・レエの背徳を止めたのは、神の裁きを名目に掲げた略奪。彼の手中にあった富と領土を狙った人間の浅ましい悪徳であったことを。

腕に刺さった短剣を抜き、破いたローブの切れ端を使って止血をする。陰湿な黒魔術ばかり追求してきた男は治癒魔術の類を知らず、

さして高い回復力を持っているわけでもなかった。
「ならば遠慮はいたしません。私は貴殿ごときに膝を折るわけには
いかない」

本当なら麗しの乙女が到着したとき、劇的に“彼ら”を召還して
みせたかったのだが、邪魔が入ってしまったからには悠長なことを
言っていられない。しかもこの英霊はあまりにも底知れない。この
際、出し惜しみは無しだ。

キャスターの手には、いつの間にもやら一冊の分厚い装丁本があっ
た。人間の皮で作られた不気味な魔本。それこそがキャスターの所
有する宝具。

本が開かれた瞬間、英霊の戦いを見守っていた子供たちが苦悶の
悲鳴を上げた。

救い主の登場に喝采を上げていた少年らの体が二つに爆ぜ割れる。
噴き出るかと思われた赤い血飛沫ちしぶきはなく、代わりに子供の体から這
いずり出てきたのは、青黒くうねる夥しい数の触手だった。

生贄の血肉を介して異界より怪魔が出現する。人の手首と変わら
ない太さの触手を伸ばし、胴も四肢も持たない体をくねらせている。
無数の蛇を生やした巨大なオニヒトデ。霊体でもなければ、幻想
の類でもない。海に住まう生物にも似た未知なるモノが世に召喚さ
れた。

明らかにローブの魔術師が起こしている異変を、居合わせた二人
の男は止めようとしなかった。

子供たち一人一人に召喚の術式が組み込まれているとしたら止め
ても意味はなかったし。肉体の内側から出るモノを防ぐ方法など、
この世に存在していなかった。

阿鼻叫喚の地獄絵図、とはこういう光景を言うのだろう。子供たちは“生きたまま”怪物の生贄とされていく。どの子供も二つに割られては苦痛の中で絶命してゆく。死んだ状態で触媒に使われたほうが、まだ子供たちには救いがあったのではないか。

生誕は瞬きの間に。助けを求めて泣き叫ぶ猶予さえ与えられない。腹を開かれ、股を裂かれ、そこから自分ではない化け物が湧き出てくる恐怖。己の体が気色の悪い生き物に変えられる錯覚。不運にも己の内から出で来るモノを見てしまった子供は何人いたのだろう。

キャスターは魔の軍団に手で指示を出す。彼らはキャスターの号令の下、蠢きながら黄金の英霊へと向かっていく。

「我が盟友プレラーティの遺した魔書。本来ならば、貴方のような趣味の悪い成金に使う代物ではありませんがねエ。特別ですよ？悪魔の軍勢をもって貴方のお相手をして差し上げましょう」

あつと言う間に醜い化け物が二人を取り囲んだ。あまり光の差し込まない森の中で、おぞましさを増していく光景は悪い意味で調和している。勝ち誇るキャスターに反して黄金の英霊は不愉快そうに周りを見渡す。

「愚昧なる俗物よ。私は決して屈しません！！ たとえ神の使徒として神意を頂き私を罰しようとも、神威の失墜をジャンヌに証明してみせるまで私は折れぬ！！」

神を言い訳に使う人間相手に罰せられる筋合いはない。彼が用があるのは想い人が、でなければ一向に罰を与えてはくれぬ神そのものだけである。

触手の如き手足が鎌首をもたげる。マスターとサーヴァントに迫

る怪魔の群れ。普通の感性なら恐れ逃げ出しても仕方がない。

だが、彼らに怯える様子はなかった。魔術師のほうはやや驚いてはいるが、ジルを召喚士と読んで想定していたのだろう、まったく狼狽えてはいなかった。

「……………キャスターよ。貴様は一つ、やっではならぬことをしたな」

サーヴァントに至っては、恐れるどころか僅かな焦りすら感じていない。この事態は彼にとって危機的状況でもなんでもなく、兎戯の延長でしかないのだと、残念ながらキャスターには理解できなかった。

「一つは幼子を使ったことだ。いかに凡百の雑種とは言え、どのように育つか楽しみもあった。いずれ世にもがき苦悩したであろう者たちを手にかけるなど、万死に値する大罪よ」

傍らの魔術師には言葉が意外であったようで、魔物らに囲まれたのとは比べ物にならない驚きを見せていた。

キャスターはおろか傍らのマスターも知らぬ彼の一面　この英霊、実は大変な子供好きである。そんな相手を前にしてジルが行った非道は、完全に地雷を踏んだものだった。

加えてもう一つ、彼には許せぬことがある。

「最も捨て置けぬ貴様の咎は、この我を指して神の下僕とほざいたことだ。王に対する最大級の侮辱　その命をもって、我を愉しませることで償うがいい」

神という存在を何より嫌う彼の王を、神を頂く者と罵ったことは、子供たちを利用するどころの話ではない罪深き愚拳であった。

男が片手を上げる。すると、それに呼応して彼の背後の空間から

刃の切っ先が姿を晒す。そう数はないが、物理法則に逆らった事態が起こっていた。キャスターが魔を召喚する英霊ならば、黄金のサーヴァントは剣を召喚する英霊なのか。

「我にこんな醜悪なモノを向けたこと。存分に後悔しろ、雑種」

指を鳴らす音が響く。それと共に男の背後から刀剣や槍などの刃が飛び出してくる。

単純にさつきキャスターを傷つけた光景の焼き直しにはならない。放たれた刃は数本。それらが十数体もの怪魔を薙ぎ払っていく。

魔弾が一体の怪魔に突き刺さったかと思えば、それが貫通して背後の怪魔をも斃していく。片手で数えることができる程度の数の刀剣で、その何倍もの数の敵に大穴を穿つ。

悪魔の軍勢は、たった一人の暴風の前に成す術もなく残骸と化していった。

怪物の群れを従えるキャスターが異常と言うなら、白刃を配下の兵として特攻させる黄金の英霊はさらに輪をかけて異常である。マスターはしたり顔で勝利を確信している。キャスターが討伐されるのも時間の問題かと思われた。

しかし自慢の精鋭たちが脆くも死してゆくというのにキャスターに焦燥の色はなかった。下僕たちがこの程度でやられることはないと思いきや理解していたからだ。盟友の力を借りているおかげで普段通りの平静でいることができた。敵サーヴァントの脅威に震えあがった狂人は、今や恐れるものは何もないと仁王立ちだった。

死した怪魔の骸を苗床に、新たな怪魔が湧き出てくる。召喚魔術は、異界から続々と増援を呼び込み続けていた。このままでは無尽蔵に怪魔が再生する。

如何な強敵が出てこようと、も尽きぬ軍勢には勝てない。キヤスターの自信は、それを知るからこそのもだった。

おびただしい怪魔どもを呼び出し、再生せしめているのは魔道書である。本そのものが魔力炉の役割を備え、強大な魔力を生み出している。コレがある限りキヤスターが戦力負けすることはありえない。怪魔を操る魔力が尽きることもない。

総ステータスの低いジル最大の武器。かの宝具の名を『ブレラティースベル螺湮城教本』。魔物たちを召喚する呪言を唱えるのもキヤスターでなく本力だ。

術者の力量など関係がない。単体で大魔術以上の奇跡を発現させる悪魔の教本である。

怪魔が再召喚されて包囲の穴を埋めていく。飛び散った死者の血肉をもって召喚される怪魔の姿も多い。異界の生物たちは減らないどころか、このままでは際限なく増殖していく。

「ほオ……どうやら退屈しのぎ程度にはなるようだな」
多少は手ごたえがあるのかと、期待するようにサーヴァントは言う。やや冷や汗をかく魔術師の心緒など意に介さぬ余裕の顔。キヤスターはそれを強き英雄特有の傲慢だと判断した。

一度引いて体勢を立て直す必要もあるとの考えをキヤスターは持ち合わせていなかった。聖処女との邂逅を何度も邪魔され、いい加減に腹が立っているのだ。敵二人を打ち砕き、無理を押ししてもジャンヌに会いに行かなくては気が治まらない。

後講釈になるが子供たちも使ってしまった。また生贄を集めるのも手間がかかる。せめてこの惨状をジャンヌに見せたいところだ。

それまでには敵サーヴァント　おそらくアーチャーだ　を殺す必要がある。

黄金のサーヴァントはどこか格が違っていると、キャスターは英雄としての勘で見抜いていた。晩年は狂気に身を任せ、その身を黒魔術に浸したジルも、それより以前は数多の戦場を駆けた男である。それくらい見てわからないことはない。

しかしソレは英霊としての“格”の話であり、戦闘では別だとキャスターは己を鼓舞した。

アーチャーは単純な火力は高いが、単騎での純粋な力量は低いサーヴァントと見た。魔物を頑なに寄せ付けぬ戦い方からも推測できる。

刃を投げつけるのが彼の宝具の力であるなら、いずれ矢が尽きるか魔力が切れる。底知れぬ敵であろうとも必ず底はある。対して、ジルの軍勢は有限でありながら果てがない。魔本さえ守ればあとは勝手に怪魔が敵を追い詰めてくれる。それを待つて敵を倒せばいいのだ。

狂^{くさ}つてもキャスターは魔術師の英霊。窮地と思われたこの状況下にあつて、彼は狂気を懐きながらも冷静だった。無辜の民や敵をいたぶり、悲観の顔を眺めるために使われてきた頭脳は健在。病的なほどに冴えている。

「後悔するのは貴方の方ですよ。さあ、恐怖しなさい。絶望なさい！　どんな宝具をお持ちか知らないが、多少の火力で覆せる“数の差”には限度というものがある。ウッフ、屈辱的でしょう？　栄えもなければ誉れもない魍魎たちに、押し潰され、窒息して果てるのです！　英雄に取ってこれほどの恥はありますまい！」

キャスターの嘲弄が響き渡る。強力な英霊を前にして余裕綽々とまではいかないが、それでも勝利は確信している。自身は安全圏から戦闘を見守るその戦い方。救国の願いを込めて剣を執った時の誇りなど、今の彼には欠片ほどにも残っていないかった。

「数の差、か。なるほどお前は正しいことを言った。それだけは褒めておいてやろう」

アーチャーの口元が引きつる。これまで戦いらしい戦いをしてこなかった英霊は、獲物を前にして獰猛なる本性を露わにしていた。

「だが、それを凌駕する“力の差”が存在することを知っておくべきだったな」

キャスターは知らない。

この程度の有象無象の雑兵ごんべいごとき、本気を出すまでもなく蹴散らす事は彼ならば容易いと。

「一息に殲滅するのは簡単だが　よかろう。飽きるまでは相手をしてやるとするか」

気の向くままに奪い、喰らい尽くす。

黄金にあるものはただ“我”のみ。

我意の極地に立つ英霊の手には、いつの間にか先ほどまでとまた違う数本の刃が握られていた。

己の直感に頼ることをせずに敵の戦力を計ったキャスターは、果たしてアーチャーを侮あなごつたことを後悔することになる。

サロンの中に沈黙が流れていた。

セイバーは既に城を出ており、この場にはいない。

黄金のサーヴァントが現れ、何者かの手で千里眼の視界が潰された瞬間、弾けるように飛び出していったのである。

新たな狩人が現れてしまった今、敵に令呪を渡さぬために先んじてキャスターを斃すしかない。最悪、現場に到着した時点でキャスターがやられていたとしても、せめて黄金のサーヴァントがどんな力を持っているのか情報を得なければならぬ。

マスターとサーヴァントの考えが一致したのなら、意思疎通に手間をかける意味もない。セイバーは主からの指示を待つことなく弾けたように走り出し、切嗣もその判断を正しいと信じたのか特に止めることをしなかった。

切嗣は城から離れられない。

千里眼が途絶え、状況がわからずとあつては対処が遅れる。できれば現場付近へと向かうべきだが、アイリスフィールを残して城から出ることは躊躇われた。

アイリスフィールは俯いていた。少女がいなくなったことで張り詰めていた緊張が若干解け、気まずい空気を変えることができなくなっていた。

長い髪が垂れて女の表情を隠す。敵の妨害で何も映さなくなった水晶をじっと見つめ、黙って切嗣の言葉を待っている。

顔を上げて、また知らない“誰か”を見るのは嫌だった。

あんな夫を彼女は知らない。アイリスフィールにとって、衛宮切嗣という人物は優しすぎる己に押し潰されそうになっている男だ。そんな彼が、哀れなる少年少女を見捨てたことが信じられなかった。

「あり得ないとは思うが……もし城にまで敵が近付いてきたら、僕が相手をする。その時は振り返らずに避難してくれ」

切嗣が沈黙を破るものの、アイリスフィールは夫の指示に答えなかった。

アイリスフィールが今聞きたいのはそんな言葉ではない。自分を案じる優しい夫の言葉さえ、今は冷たい嘘に聞こえてしまう。

今、彼女の脳裏に焼きついているのは、さっきの冷たい切嗣の声音。

同じ娘を抱き上げた伴侶の口からだけは、あんなことを聞きたくなかったのだ。

本当にそれは勝利に必要な非情なのか納得させて欲しかった。戦術的意味合いはさっきの説明で理解できたけれど、だからと言って心で納得できるかと言えば彼女には無理だ。

謝罪をくれとは言わない。自分に謝るのは筋が違う。「あの言葉は建前で、本当は子供を見捨てるつもりはない」なんて、そんな安い誤魔化しでもいいから聞かせて欲しかった。

アイリスフィールは顔が上げられない。上げたくない。知らない顔をしている夫など見ていたくない。

今の彼女は普段が比喩物にならないくらい弱気だった。その感覚は、生命の危機が迫った者が言い知れぬ不安に陥るのに似ている。

『器』の機能で英霊を溜めていく身体は、常に熱を帯びる苦痛に

苛まれている。あと一人もサーヴァントが消えれば、彼女は英霊を抱える洪難に喘ぐことになる。ヒトの機能を失う未来が間近に迫った今、アイリスフィールは平静ではいられなかった。

覚悟はあっても現実には怖い。もう少しでも苦痛を和らげてくれる“奇跡”があればこんなに切羽詰った気持ちにはならなかったのかもしれないが、それは言っても詮無いことだ。

今は伴侶たる男の心情を読み切れるほど落ち着いてはいなかった。だがそれでも問い質さねばならない。勝利のために子供を殺した彼の選択を。妻として切嗣の真意を知らなくてはならない。本当に子供たちを救う道はなかったのかを。彼を愛した者の責任として。

「切……」

アイリスフィールは伏せていた顔を上げる。夫の名を呼ぼうとして言葉を紡げなくなり、そのままの体勢で途方に暮れた。

そこには今にも泣きだしそうな顔の切嗣がいた。

さっきまでの冷酷な顔とは正反対の、感情を露わにした表情は、やはりアイリスフィールが一度として見たことのないものだった。冷たく無慈悲な眼差しを相手にするものとはかり思っていた女は、震える男に何を言っていたかわからなくなった。

戸惑うアイリスフィールを切嗣が力を込めて抱きすくめる。胸板を通して、彼の震えが伝わってくる。力強く頼もしいハズの夫の腕は、慈母にすぎりつく子供のように頼りなかった。

「君の言う通りだアイリ……僕は、身捨てたんだ。キャスターを討つために、顔も知らない誰かを救うために、他ならぬイリヤを見捨

てたんだ」

込められた想いは悔恨。男は涙を飲んで女に嘆く。こんなことはしたくなかったと、崩れそうになる体を必死に支えている。

子供たちを切り捨てる選択。他の敵に令呪を渡す不利を防ぐために、何をおいても敵を殺すことを優先させる決断。一人の戦闘者として正しい戦術は、一人の父としては絶対に許せない非道だった。

見捨てたと言うには些か語弊がある。切嗣は子供たちが助からないことを悟り、正しい判断を下しただけ。それは生きる者を見捨てたのではなく、“死人は救えない”と正しく真理を理解しているに他ならない。非道を行ったのはキャスターであって、切嗣が己を責める必要はどこにもない。

……そんな理屈は、選択を下した当人には通用していなかった。どうあっても自責は残る。正しい決断は、正しければ正しいほど人の感情を失っていく。判断する者が人間である以上、その心には常に闇が募り続け、蝕んでいく。

幼い命を捨てたくないと願っていたのはアイリスフィールだけではなかったのだ。

捨てたくなかった。助けてあげたかった。正義の味方を志した者にとって、目の前の悲劇を看過することは耐えられないものだった。

私心を殺した男が普段は見せることのない弱み、本来なら隠し通したであろう懊悩を漏らす。

舞弥とセイバー。魔術師と戦うための手に馴染んだ短刀と、英霊と戦うための新しき長刀。マスターである彼の立場を明確化させる『剣』の二振りを欠いたことで、彼は妻子と過ごした穏やかな日々での顔を晒していた。

己の罪を愛する者に突きつけられ内情を吐露する切嗣は、老人よりも弱く、乳飲み子よりも儂い者に思える。

「アイリ、僕は……僕は、もう嫌なんだ。誰かを切らなければ誰も救えない世の中。見逃すしかない地獄と、平気で悪夢を呼び出す奴ら。そして、理想を果たすために、理想を否定することを体現するしかない、こんな自分も」

独白は嗚咽を漏らす声にも似ている。彼は生まれて初めて自分の弱さを他人に明かしていた。それは共に戦場を渡り歩いた舞弥でさえも知らない姿でもあった。

偽りの人格に頼ろうとはせず、始まりの心を保ったままに己の意志を殺した彼の強さは、同時に弱さでもある。

愛にあふれる生活を経て、一度はヒトに戻ったせいで起きた摩擦。妻子の存在は彼の足枷にはならない。足枷になっているのは、これまでの幸せな思い出の方。

外道を成すことを恐れぬ者はいない。どこかで折れてしまえば二度と元通りにはなれないリスクを負い、それでも、人の想いを抱えたままでなければ理想は果たせないと信じた男は、それゆえの苦衷を味わっている。

どんなに嘆いても、どんなに傷ついても、彼は死を運ぶ生き方をやめることはできない。

人生の大半を『正義の味方』であるために費やした彼は、他の生き方を知らない。知っていたとしても、積み重ねた罪への自責にこれまでの自分を裏切れない。

「だから……僕には聖杯が必要なんだ。全てを終わらせて、全てを取り戻さなくちゃいけないんだ」

世界を救うという願いのために。切り捨ててきた自分の理想を叶えるために。

誰よりも傷ついてきた、己自身を救うために。

幼い願いを大人になってまで持ち続けた男は、本心を覆い隠す強固な鎧を脱ぎ捨て、夢を誓ったかつての子供のまままで愛する女性に惨痛を語っていた。

彼はきつと疲れ果てていたのだ。聖杯を求めたのは、もはや外道の振る舞いに耐えられなかったから。影も力落ちも見えぬ奇跡の器に縋らねば自分を保てないほどに、彼の心は張り詰めている。

アイリスフィールは自分を責めた。

どうして一度でも彼を疑った。彼の優しさを、彼の苦しみを、どうして解ってあげられなかった。しょせん世を知らぬ身の自分には、世を憐んだ彼の痛みを完全には共感できないのか。

余裕がないのは切嗣も同じ。九年の歳月は確実に男の剣呑な輝きを鈍らせている。当たり前前の幸せを過ごし、これまで奪ってきた命に分不相応な夢だと責められ続ける日々は、決意を緩ませることはなくともその心を焦燥に駆り立てている。

今の彼には壊れてゆくアイリスフィールを慰める気力もなかったのだ。

アイリスフィールは夫を抱きしめ返した。

「ごめんなさい切嗣……ごめんなさい……」

せめて今は、気休め程度でも彼を受け止めよう。それが互いに「人でなくなる」恐怖を誤魔化す舐め合いだとしても構わない。

誰よりも悲しく、誰よりも優しい夫を、今は出来る限り抱き止める。

アイリスフィールは神に祈る。役に立てなくてもいい。どうか、こうやってほんのささやかでも夫を癒してやれる時間が、一分一秒でも長く続いてくれるよう。

森を駆けるセイバーはまさに蒼く輝く流星のようであった。

木々が遮蔽物として行く手を遮れど、意に介することなく少女は駆け抜けていく。立ち止まる暇さえない。速度は既に神速の域に達している。あと一分か二分もあれば、現場に到着することができるだろう。

眼差しは真っ直ぐに、斃すべき敵のみ見据えている。黄金の英霊は眼中になかった。後に戦う敵としての興味はもちろんあるものの、今は彼と戦うわけにもいかないのでキャスターだけを敵と認識していた。

消去法で考えるなら、現れたもう一人の英霊は恐らくアーチャー。どうやって城の主にも気づかれず森に侵入したかは不明だが、マスター間の協定がある以上は彼も下手な動きはできないとセイバーは読んでいた。

先達で、アイリスフィールに「戦えば勝てる」と断じたのは真実である。剣士の剣閃は魔術師の指より遙かに速い。反撃を許したとしても彼女の対魔力はキャスターを脅威としない。少女を斃せる者

はより卓越した白兵戦が行える者が、Aランクの対魔力を越えた火力を持つ者だけだ。

万一、セイバーのステータスが敵に劣っていたのだとか、彼女でも思いつかない不安要素が何かしらあったのなら、切嗣が止めたはずだとセイバーは信じていた。

これまで切嗣と共に戦ってきた少女は、少なくとも主の判断に戦略的間違いはないと思うくらいにはマスターを信頼している。

となると警戒しなければならぬのは敵の策と宝具だが、こればかりはキャスターと相対してみなければ対処法も思いつかず、何もしないうちからまだ見ぬ敵の策略を恐れても仕方がない。臆病の諷りを受けても慎重な対応をしていくつもりだが、やはり、現場に赴いてみなければどんな判断も下せない。

畏の中に飛び込むことは先刻承知。それでも勝利してこそ剣の英霊。どんな宝具を用意されようと、人類最強の幻想である彼女の聖剣は薙ぎ払う。魔術師がどのようなトラップを仕掛けてこようと、セイバーの速度と対魔力ステータスならば、力づくでも突破できる。

キャスターに対し、セイバーは最高の相性を有するサーヴァントである。魔術師と剣士の枠で召喚された段階で、二人の優劣は決まっている。それに今のセイバーには地の利がある。これで勝てなければ嘘だろう。

セイバーは自分の体ごと、魔術支援可能エリアにキャスターを追い込むつもりだった。

現代の魔術の一切が通用しないセイバーは、対霊体装備などものともしない。畏を起動させ、彼女もろともに攻撃したところでビクともしないのだ。戦い方しだいでは、セイバーは無傷のまま、キャ

スターに致命的なダメージを与えることも不可能ではない。

基本的には“真つ向勝負”を前提としたような能力を有するアルトリアは、だからと言って本当に真つ向勝負しかできないというワケではない。あまりに大出力であるため隠密には向かないサーヴァントであることは事実だが、戦闘ともなれば最善の戦術で最善の結果を導き出す英霊なのである。

ステータスの高さには胡坐をかいては、最優クラス『セイバー』の枠に召喚される資格はない。正面から戦っても勝てるだけの力を持ち、その上で搦め手も使うことも辞さないからこそ、最も優れた英霊という立場に座している。

こと戦いとなれば、彼女は容赦という言葉を忘れ去る。

遠慮も、躊躇も、戦場以前の場所に全て置き去りにして敵を討ち滅ぼすための剣となる。

敵は逃がさず確実に排除。基本は見敵必殺。迷いや私情は一切挟まない。

剣士として己の右に出る者はいないと自負しているセイバーだが、伝説に裏打ちされた己の力量を必要以上に過信しているわけではない。彼女だって自分より強い剣士は何人が知っている。

湖の騎士や太陽の騎士など、月の籠を受けた王より卓越した剣技を持つ者は何人かいた。

単純な力だけなら、強力な魔力放出を有する王に匹敵する者も少しはいた。

どこまでも人の裏をかき、智謀で王を攪乱する策謀家と戦ったこともある。

そんな自分と同格、ないし格上の剣士と戦っても彼女は勝利する確信がある。だからこそその剣の英霊だ。

聖剣は持ち主を守るモノ。彼女の真の強さは剣に宿っているのではない。生前に不利な戦況をひっくり返してきたのは、全て彼女自身の強さである。

星が鍛えし聖剣の強さは、類稀な名剣ゆえの切れ味ではなかった。エクスカリバー立ち塞がる敵は全て斬り捨て、障害となる者は全て排除する常勝の王の心構え。敵を零下の決意に屠る彼女の意志力があって初めて真価が発揮されるのである。

自身の実力に対する誇りと自信。敵の事情に対する無情と殺意。二つの誓いを持つからこそ彼女は最優のサーヴァントに該当した。戦えば勝てるのではない。戦う以上、勝つ以外を想定することは許されない。それが彼女が生涯無敗で在り続けた真の理由だった。

死者を弔う墓地を盾に使い、相手の隙を付き、さらには味方を使って敵を背後から討つ。そんな、騎士としては周りの非難を避け得ない手段をも用いる程度には、彼女も度重なる戦乱の無情さに揉まれている。

確実な勝利を望まれ、勝利しか許されなかった彼女だからこそその戦略である。

本来であれば決して卑怯な行為ではない。戦いにおいて、その場にあるモノを使い切るのは常道だ。けれどそんな“正攻法の汚さ”は、騎士という生き物にすれば褒めることのできる戦術ではなかった。

実際、生前の彼女が臣下の不平を買ったのは、そういう部分も大きかった。

それでも、みなに嫌われることを承知で剣を執った少女は、揺るがない瞳で血を帯びる道に行く。誓いは胸に秘めて、懺悔は押し殺して、敵となつた者を全て葬ってきた。

大衆の理想は決して汚さず、しかし自らはその実現のために穢れる道を進むと決めたのだ。

アルトリアの戦いは常に不本意な殺し合いばかりである。他人を見捨てずに済んだことなど、一度だって有るか無いか。そんな中では戦いに快樂を見出す余裕も、騎士の誉れを求める余分もありはしなかった。

民の救済がかかっている戦いで戦士の悦びを欲するほど、彼女は自分本位に生きることができなかった。

……それができていたのなら、聖杯を求めて世に迷うことはなかったかもしれないのに。

願望機の争奪戦であるこの戦いも、叶えるべき願いを持つ少女は決して怯まない。戦いの意味を履き違えるような無様はない。これが私闘ではなく主を勝たせるための戦いだと弁えている。

聖杯戦争は英霊同士の“決闘”ではなく、英霊をも道具とする魔術師たちの“戦争”だと。

個々の誇りを賭ける“決闘”ならば、騎士の王は戦いの華として清廉潔白な騎士であることはできる。敵の意を汲み、相手の誇りを尊ぶ、騎士らしい騎士であり続けることもできる。だが民の命が懸かった“戦争”となれば、彼女にそのような甘さはない。

戦いを早期に終わらせることで、より大勢の人々を戦いから遠ざけようとした少女は、より多くの犠牲を食い止めるために目の前の

犠牲を黙認する。優先順位を誤まるほど剣戟は鈍ってなどいないのだ。

容認できる範囲内ではあるが、彼女はあらゆる手を使う。その中には自らを貶めるモノもあるし、他人を見捨てるモノもある、というだけのことだ。

人間の心は捨てた。少なくとも民のために戦うと定めて生きてきた。なら、ここにある剣は正しく最善を選ばなくてはならない。

私を滅し公に奉ずる。

乱世の中で、民を第一として生きてきた者の誓い。私心に揺らぐず国のために戦いぬいた王の意志である。

ふと、前方数百メートル先に小さな人影を見つけた。逃げてきた子供だろう。年の頃は十にも満たない幼女。眠っているところをキヤスターに連れ去られたのは明白だった。アニメキャラクターがプリントされた寝巻き姿で、しかも靴下も履かない裸足なのだから。

「ヒツ……エッグ、おかあさ……ん、ヒツク……」

常人離れした聴覚が漏れる嗚咽を拾う。

また、常人を越える視力が血と泥に汚れた幼い足を捉える。素の足のまま手入れもされぬ地面を走った代償だった。そんな状態でここまで走ってこられたのは、幼いながらの生存本能の賜物である。

セイバーは知らず険しい顔となっていた。ここまで幼子を巻き込んだキヤスターに怒りを覚え、音を立てるほどに強く奥歯を噛んだ。以前、キヤスターを獲り逃した自分の咎だ。あの子供を泣かせているのは自分だと、セイバーは己をそのように責め続けた。

ライダーの介入と言う不測の事態があつたとは言え、もつと手早く彼を斬つてさえいれば、不敬を犯しても切嗣の指示より先に彼を倒していれば、こんな犠牲は出さなくて済んだかもしれないのだ。

あと100メートル強　彼女の速度なら5秒と掛らない　で子供と接触する。そこまで至つて、セイバーは子供を素通りして先に進むと決めた。

切嗣と同様の懸念はセイバーも懐いている。

子供たちは余興として使われるために用意されたのであり、これ以上の辱めを受けるハズが無いと、そんな甘い期待は最初から度外視している。

子供ら自体に何らかの罠が仕込まれている可能性を思えば、かかずらつてなどいられない。魔術師の姦計ぐらいで傷つけられる彼女ではないが、それで時間をロスしてしまえばキャスターをまた取り逃す恐れもある。

キャスターに負けることはない。戦えば勝てることを事実として知るセイバーだが、決して敵を侮つてはいない。以前対峙した時に感じた『直感』で、キャスターの得体の知れなさを読みとっていた。

敵には何か奥の手がある。　。使わせるよりも早く討てばいい話だが、そのためには子供たちが邪魔となる。悪い言い方をすれば足手纏いに構つてはいられない。最優先で守らなければならないのはマスターの安全であり、子供たちの安全ではない。

自ら無関係の者を傷つける気はないが、戦場に巻き込まれた命に意識を割く余裕もない。もし子供たちを助けるとすれば、それは助けるだけの余裕が確保されている時だけだ。

手を差し伸べるのはキャスターを倒してからでも遅くはない。今
の場合、生き残った子供がいれば監督役きやうつかいに引き渡す、というのが
妥当な落とし所だろう。魔術の残滓や呪法しゅじの印がないか調べ上げる
のも監督役に任せただ方がいい。

……本当はセイバーもすぐに子供たちを助けたい。本心を明かす
なら、恐怖に震える幼い命を見捨てるようなことを彼女は望んでは
いない。キャスターに対し義憤めいた想いがあることも否定しない。
私心を滅したとは言え、奥底の感情まで殺せるほど彼女は人外に成
り果ててはいなかった。

が、あの中に姿を偽った敵マスターが混じっていないと断言がで
きない以上は、手を抜いたり容赦をすることはできなかった。例え
率先して子供らを傷つけるつもりがなくなるとも、英霊同士が戦えば余
波で子供たちは確実に死ぬ。そう、覚悟はしているのだ。

だから躊躇ってはならない。幼い命に目を向けていては斃やられる
のは自分のほうであり、キャスターが生き残ってしまったえば更なる犠
牲者が出る可能性もある。セイバーの脳内は冷静だった。

泣いている子供まであと数メートル。ようやく走り来る孤影に気
がついた幼女は顔を上げる。

それは、ちょうどキャスターが黄金のサーヴァントに対抗するべ
く怪魔の群れを召喚したのと同じタイミングだった。

「ヒ」

たった一文字の悲鳴が、幼女の断末魔の涙となった。

子供が真つ二つに爆ぜ割れる。

目の前で起こった異変に、セイバーも足を止めざるを得ない。
驚愕に目を見開いて、変貌していく いや、生まれ落ちる悪魔の姿を見る。

ジル・ド・レエは召喚師であると、切嗣がアイリスフィールに説明しているのを聞いてはいたものの、ここで魔物が出てくるとまでは予想していなかった。召喚されたばかりの怪魔は目の前のヒトガタを獲物と見做したらしい。青黒い触手をセイバーの首目掛けて伸ばしてくる。

他の英霊と異なり、自分の生きた時代しか知らぬセイバーにとって、子供の腹から異質な化け物が這い出る光景は初めて目にするものだった。そのせいで、と言ってしまおうと言いついになるが、疾走の勢いを殺された少女はとっさの反応が遅れてしまった。

跳躍して背後に避けようとしたセイバーの足に、小さな顎あごのような吸盤が吸いついて回避を邪魔してくる。触手は瞬時に伸び広がり、ついには銀の鎧に巻きついて、万力の力で少女の両手両足を締め上げはじめた。

黄金のサーヴァントによってキャスターは全力の迎撃を行うことになったのだろう。その影響か、こちらに逃れてきた子供まで召喚の触媒とされてしまったのだ。すぐにでもキャスターの許へ向かうべき怪魔が攻撃してきたのは、セイバーという高魔力体を排除すべき障害と認識したためだ。

セイバーは無言で魔力放出を炸裂させる。その総身を押し包んでいた触手の束は、ただの一瞬も持ち堪えることなく破断し、細切れの肉片となって周囲に飛び散り消滅した。

あっけなく怪魔から逃れた少女は、先ほどまで敵の使いが蠢いて

いた場所じゃがみ込む。

地面から彼女が抱えあげたのは、乾涸び、原型も留めないほどに寸断された骸の名残だった。セイバーの籠手の中に感じる重量は、怪魔が現界すると同時に血肉を喰い貪られて、もはや人一人分も残っていない。ほんの数秒前まで泣きじゃくっていた子供がこんな結末を迎えるとは。

黙祷を捧げる時間すら、少女には許されていなかった。

木々の合間を縫って、蠢きながら再び同じケダモノたちが湧いて出てくる。仲間の血肉に感じいたのだ。早すぎる登場も、ここまで逃げてきた子供がセイバーの手の中の死体以外にいたのなら不思議ではない。

各方向に逃げた子供たちはそれぞれに怪生物召喚の贅となっっているであろう。そうして世に出た怪魔は二つの敵を目的に定め、各自がより近い所へと足を運んだのだ。

ここに立つ獅子こそが仲間の仇であると彼らも理解したようだ。遠くでは怪魔どもの主が呼んでいるハズだが、知能も何もない彼らは命令以上に本能を優先させてセイバーを取り囲んだ。

「……いいだろうキャスター。ここに彼らの弔いを誓おう」

周囲の魔物たちが集結して数を増やしてもセイバーはたじろぐことがなかった。どころか、少女の怒気と殺気は急速に膨れ上がっていく。その闘気は軍神もかくやというほどに迸り、燃え盛る双眸は先にいる悪霊への敵意を漲らせる。

人質は捨てる。たしかに、そう決断はした。だが、そんな決断を下した自分と、そんな敵を許すか許さないかは、また違う決断だ。

魔術師でも何でも無い無関係な子供を巻き込んだキャスターには、必ず償いをさせる。

それは秩序の王たる彼女の義務。

罪には罰を。背徳には正義を。悪行には代償を。どんな理由があったとしても愚かな所業は必ず咎めなければならぬ。秩序を敷く者が成さねばならない責任である。

だからこそ、かつては息子も同然の相手を捨て、真の友と思った相手さえも捨てたのだ。

「あの黄金のサーヴァントが邪魔立てしようとも関係ない……。貴方は私が斬る」

そのためには、この化け物たちが邪魔だ。

これ以上敵の生存を許してしまえば、また悪業を重ねることは必至。ならば斬る。かつては幼子であった哀れな被害者だとしても、キャスターの狼藉を止めるためなら彼女は斬って捨てる。

それが冷酷非情と言われた王の覚悟。彼の騎士が背負う重圧。乱世を終わらせ、皆が平和に暮らせる理想の国を築くために必要だった秩序の代価。

それが、奉公の極地に立つ英霊の信念である。

包囲した魔物たちがいつせいに牙を向く。敵が殺気を放ったのを合図に、怪魔の触手が雪崩を打ってセイバーへと殺到し死闘の火蓋を切って落とす。

人知れぬ場所で、怪物と英霊の戦いがもう一つ始まった。

剣を振るう少女の心にポツリと後悔の陰が差す。

あの子供は生贄などではなく、せめてヒトのまままで死なせてあげたかった。と、そんな痛みを抱えながら、白銀の剣閃は異形の敵をたたき切った。

19 六日目・夜 - 各々の戦い - (後書き)

うちのセイバーさん、なんか冷たい。

いや……だって……、せめてこのくらいじゃないと原作セイバーの過去の記憶が嘘っぱちになっちゃうし……。

五次アーチャーに共感できる「少女の闇」が、四次で消えてるとは思えないし……。

なのでセイバーはUBW同様に 敵の撃破>人質救出 にさせていただきます。
いただいています。

あと、セイバー視点だとこれが三戦目です。鶴野さんイジメは敵拠点探索の延長とかであって、「戦闘」とは数えてません。

……ってことにしないと計算ミスったせいで戦闘回数が合わないという……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3208t/>

新約FateZero

2011年11月22日00時24分発行